こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園

サキガケ　カイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園

【Ｎコード】
Ｎ５０３８Ｘ

【作者名】
サキガケ　カイ

【あらすじ】
この作品は、架空の学園を舞台に、アニメ、マンガ、ゲーム、ラノベなどのキャラが出演する学園コメディです。感想、ご意見、質問、お待ちしております！【登場作品】仮面ライダーフォーゼ、銀魂、とある、ハヤテのごとく！、けいおん！、ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！、戦国ＢＡＳＡＲＡ、三國無双、恋姫無双、リリカルなのは、インフィニット・ストラトス、マクロスＦ、フルメタル・パニック！、ガンダム、テイルズオブ、コードギアス、灼眼のシャナ、俺の妹がこんなに可愛いわけがない、ワンピース、Ｆａｔｅ、緋弾のア

リア、ブレイブルー、僕は友達が少ない、涼宮ハルヒの憂鬱、まどか☆マギカ、バカとテストと召喚獣、そらのおとしもの、ポケットモンスター、スーパーロボット大戦ＯＧ、新世紀エヴァンゲリオン、機動戦艦ナデシコ、クイズマジックアカデミー、ギャラクシーエンジェル、アルカナハート、これはゾンビですか?、ハートキャッチプリキュア、北斗の拳、スケットダンス、メタルギアソリッド

青・春・上・等（前書き）

銀時：あー、はじめにいっておくことがあります。
この物語はフィクションであり、実際の人は関係ありません。
後キャラ崩壊、設定改変があると思いますので、ご注意してお読みください…
つーかファンフィクションなんだから気にする必要ねーだろ！

青・春・上・等

古等簿(こらぼ)市にある私立黒楼(くろす)州学園。

「自由」を校風とするこの学園は、個性的な人がたくさんいること以外いたってただの学園である。

その通学路の途中にある橋の上、一人の女子生徒が、この学園に通う歌星賢吾(うたほしけんご)に何かを渡していた。

「賢吾先輩！これ読んでください！」

その封筒には「歌星賢吾様」と書いてある。ラブレターのようだ。だが…

「時間の無駄だ」

と、賢吾は言い放ち、ラブレターをポイっと放り投げ、それは川に落ちて流されてしまった。賢吾の行動に女子生徒はしょんぼりした。

その時…

「おい！！」

一連の流れを黙って見過ごすことが出来なかったのか、どこからか青年が乱入して来た！青年はリーゼント、短ラン、ボンタン、T

シャツと言ういかにも昭和の不良のようないで立ちをしている。リーゼントは賢吾に掴みかかり、眉間にしわを寄せて怒鳴った！

「捨てる奴があるか！もらった手紙は最後まで読めよ！あいつの思いはきちんと受け止めろ！断るなら読んでから断れ！それが礼儀ってモンだろうが！」

「……」

賢吾のほうはリーゼントと目線を合わせずに黙っている。するとリーゼントは賢吾を放し、女子生徒に「持ってろ！」と「友情」の２文字の入ったカバンを渡すと、なんと橋の上から飛び降りた！！

「おっしゃぁぁぁぁーーー！！！」

雄たけびを上げながら川へ飛び降りるリーゼント。しかし着地した途端、地面から激痛が伝わり「いってー！」と叫んだ。しかしそれでもリーゼントは痛みをこらえ、川辺を探り始める。この状況を見守っていた賢吾が皮肉る。

「…馬鹿の極みだな」

まったくです。

そして彼は「こんな馬鹿と関わりたくない」と思ったのか、さっさと去ってしまった。

２年Ｂ組。朝のホームルームが始まる前の教室はガヤガヤしている。そして銀髪で天パの死んだ魚のような目をした教師が教室に入ってきた。

「おいテメーら席につけー」

天パ教師に言われると生徒は自分の席に着く。

「夏休み楽しかったかー？宿題やったかー？西瓜食ったかー？海行ったかー？コミケ行ったかー？蚊何匹殺したかー？」

「楽しかったー」

「何言ってんだよ銀八（ぎんぱち）先生ー」

「土方を２０匹殺した夢なら見ましたー」

銀八…もとい坂田銀時（さかたぎんとき）が冗談を飛ばすと生徒らに突っ込まれる。

「前置きはさておき…朗報だ。今日からこの２年Ｂ組に、新しいクラスメイトが増えるぞ」

銀時の言葉に「おおー！」と言う言葉が出る。

「可愛い女の子ですかー？」

「イケメンだといいなぁー」

「マヨネーズ大好物ですかー？」

「ハイやかましいぞテメーら。ちった落ち着いてらんねえのか？まあよし」

銀時が制すると、扉の向こうの転校生に声を掛ける。

「つうわけで、入って来い転校生！」

扉からやってきたのは、なぜかズブ濡れになっているが…リーゼント、短ラン、ボンタン、Tシャツと言ういかにも昭和の不良のようないで立ちをしている青年であった。リーゼントはチョークを手に取ると、扉にでっかく自分の名前を書いた。そして彼は、

「如月弦太朗（きさらぎげんたろう）だ。オレの夢は、この学校の連中全員と友達になることだ！」

と同時に、満面の笑顔と一緒に指差しポーズを決め、「よろしくな！」と声を大にして名乗った。

弦太朗と名乗ったリーゼントは「よっ！」「よろしくぅ！」「みんなよろしく！」と生徒の掌や肩をタッチしながら教室を歩き回ると、ある女子生徒に目が止まった。

「あれ…ユウキ？」

「弦ちゃん！」

弦太朗の目に留まったのは城島（じょうしま）ユウキであった。再会を喜んだ弦太朗とユウキはお互いに握手し、握り拳でお互いの拳を打ちあった。二人の友情の証らしい。

「久しぶりだなぁ！小学校以来か？」

「そうだね！3年生くらい！」

「相変わらず夢は宇宙飛行士かぁ！」

「そう言う弦ちゃんは友達何人できたの？」

「今じゃ１０００人だぜ」

「すごーい！！」

「…おーい、転入早々何イチャイチャしてんですかー？海外ドラマのバカップルかテメーらは…感動のところ悪いが、席着け如月」

銀時に席に着くように言われた弦太朗だが、「あ、ちょっとまって」と言うと、ある人物の机に一枚の封筒を叩きつけた。封筒もなぜか水に濡れている。

「歌星賢吾さん。お前宛だ」

「わざわざ拾ってきたのか…お節介だな」

「ああ、お節介だ。友達だからな」

悪びれもしない弦太朗の態度に、賢吾は眉をひそめる。

「…君のような人間の友達になった覚えはないが？」

「女の子からもらった手紙も捨てるようなお前は気に食わねぇ…だからダチになる」

「非論理的な発言だ」

賢吾の不遜な態度に（どっちが不遜なんだよ…）弦太朗は彼の机をドンと叩き、豪語した！

「いや、スジなら通ってる。お前みたいな気に食わねぇ奴と友達にならなきゃ、とてもこの学校の連中全員と友達になんかなれないからな！」

だが賢吾はそれでも考えを改めようとしない。

「俺と君が友達になる確率は…ゼロだ」

と言って教室を後にしようとする。弦太朗が呼び止めるが、

「あー、やめとけ。歌星のヤツいつもこうなんだよ…」

銀時に止められ、賢吾に逃げられた。その後席に着いた弦太朗はというと…

「だったらなってやろうじゃんか…意地でもな」

賢吾と友達になる夢を諦めてはいなかった。

青・春・上・等（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』より

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『銀魂』より

坂田銀時、土方十四郎?、沖田総悟?

これからもよろしくお願いいたします。

感想、ご意見、お待ちしております。

転・校・初・日（前書き）

弦太朗：なぁ、フォーゼはいつ出すんだ！？

ユウキ：それは未定だって。

弦太朗：くっそー！早く「宇宙キターー！」って言いてぇー！

転・校・初・日

２年Ｂ組。転校生・如月弦太朗を迎えたＢ組担任・坂田銀時はこう言った。

「…それじゃあ如月にクラスの連中の名前覚えてもらうために自己紹介してもらうからな。あ、まずは俺、このＢ組の担任してます坂田銀時（かたぎんとき）でーす。いえーい」

銀時が生気のない自己紹介を終えた後、

「まずは新八からやってもらうぜ」

銀時に指名されたその人物は、眼鏡をかけたなんか地味そうな…

「地味そうじゃねえええええええええええええええええええ！！！！！！」

立ち上がった眼鏡をかけたなんか（略）が反応し、どこかに向かって叫んだ！隣にいた弦太朗が眼鏡をかけた（略）が心配だったのか声を掛ける。

「お、おい？大丈夫か？」

「あ、ごめん…僕は志村新八（しむらしんぱち）。よろしくね弦太朗君！」

弦太朗に挨拶した眼鏡を…

「しつけーんだよ、新八じゃあああああ！！！名前で呼べナレー

タァァァァ！！」

めが…いや新八がやはりどこかに向かって叫ぶ。銀時とチャイナっぽい服を着た少女にダメ出しされる。

「まったく、だからいつまでも地味なんだよ」

「そうアルね！一から修行しなおすね、ダメガネ」

「おいダメガネってなんだよ！あんたらジャンプ連載当時からずっと僕のことそんなふうに思ってたのかよ！」

なんか地…いやかわいそうな奴だなと弦太朗は思った。

「次は私の出番アル！私、神楽（かぐら）アルよ！よろしくな、泥水したたるズブ濡れ男！」

「おい神楽ちゃぁぁん！初対面の人にいきなり失礼だろぉぉぉ！」

新八のツッコミが飛んだが弦太朗のほうはそんなことも気にせず「おう、これからよろしく！」と挨拶した。

「オメーも少しくらい何か言えぇぇぇぇ！」

新八のツッコミが教室に響く。

次に、水色の髪をした爽やかな少年が金髪ツインテールの少女に「お嬢様、一緒に自己紹介しましょう」と声を掛けた。不思議に思った弦太朗は少年に話しかける。

「お嬢様？お前って…」

「あ、どうも。始めまして如月さん。僕は三千院家の執事をしています、綾崎ハヤテです。こちらは三千院ナギお嬢様です」

「わ…私からもよろしく頼むぞ、如月」

にこやかに挨拶するハヤテ少年と、恥ずかしがるナギ少女。

「なるほどねぇ…ま、よろしくな！（執事って、じいさんがするものかと思ってたぜ…）」

弦太朗の目線から、ハヤテの服装が執事が着ているようなスーツ姿であることを感じていた。

「次、ヅラ」

「「ヅラじゃありません桂です！」」

銀時に指名された途端、二人の男女が立ち上がり、見事にハモった。一人はピンク色の髪をした少女であり、そしてもう一人は黒髪長髪の男で、いかにもヅラを被っ…

「ヅラじゃない桂だ！」

「いいから自己紹介してください小太郎さん…」

ピンク髪の桂にダメだしされ黒髪の桂が乗り気ではないながらも立ち上がり、弦太朗に自己紹介した。

「コホン…俺は桂小太郎だ。間違っても『ヅラ』ではないように！」

ピンク髪の桂が続いて自己紹介する。

「桂ヒナギクです。ここのクラス委員長もしているの。よろしくね」

「おう、よろしくヒナギク（ヅラ）！」

「ヅラじゃない桂だ！」

「……」

ヒナギクに向けて言ったつもりの言葉に、やはりヅラが反応する。どうもヅラ…桂小太郎という男は苗字を気にしているフシがある…ヒナギクもちょっと困惑した。

「なぁ、こいつらはいいのか？」

弦太朗が後ろを指差すと、そこには教室の後ろで瞳孔の開いた黒髪の男となんか腹黒そうな茶髪の青年がドラゴンボールの1シーンのごとく殴りあっていた。呆れた銀時が「おい！」と言葉を投げかける。

二人はバトルをやめ、弦太朗に自己紹介した。

「俺は土方十四郎（ひじかたとうしろう）。夢はマヨネーズ王国を作ることだ」

「沖田総悟（おきたそうご）でさぁ。とりあえず土方の死ぬ前のツラを拝むのが夢だぜ」

「二人ともいい夢持ってんな！応援してるぜ！」

（いやそれは否定するべきだろ…）

それがクラス全員による弦太朗の天然発言への感想だった。そして土方と沖田はバトルを再開した…

次は黒髪ロングでスタイル抜群の少女が立った。ぱっと見てしっかりしていそうな彼女であったが、しかし弦太朗と目線が合った途端、突然怯えはじめた。おそらく弦太朗のそのルックスとしゃべり方の印象でそうなったのだろう。

「おいどうした。そうビビる事はねえよ…ほら」

弦太朗が手を差し伸べてきた。握手をするためだ。

しかし彼女にはこう見える。

『ヒッヒッヒ…貴様を冥土に連れて行ってくれよう…』

（い、いやだ！冥土に行きたくない！助けて…！）

これが彼女の視線である…。もう一度言うが弦太朗は握手を求めているのであって何も冥土につれて行こうなんて考えていない。彼女が呆然としていたその時…

「ほーら澪(みお)、弦太朗君が握手求めてるぞ～」

隣の席のデコ出しでカチューシャをつけた少女が二人で澪と呼ばれた黒髪の少女をけしかける。

「い、いや…なんか怖そうで…」

「大丈夫だよ！今まで放課後ティータイムでたくさん頑張ってきたから、澪ちゃんも出来る子だよ！」

「そうよ澪ちゃん。ユウキちゃんの友達ですもの、絶対仲良くなれるわ」

右の前髪にヘアピンをつけた少女とブロンドのおっとりした少女が震える澪を勇気付ける。

「ほら、元気出して澪ちゃん。弦ちゃんは心の広い人よ」

ユウキに言葉をかけられ、澪は安心した。そして差し伸べてきた弦太朗の手を掴む。

「あ、秋山(あきやま)…澪だ…よろしく、弦太朗君」

「こっちこそ！一緒にやっていこうぜ！」

弦太朗の満面の笑みに心がほっとした澪であった。

澪が笑顔になったところで、カチューシャ、ヘアピン、ブロンドが自分の名前を名乗る。

「あたしは田井中律！りっちゃんて呼んでもいいぜ！」

「平沢唯だよー。今日からよろしくね、弦ちゃん！」

「私、琴吹紬です。ムギって呼んでね」

と、紬が一息入れると、

「私たちは４人は軽音部をしているのよ…りっちゃんが部長でドラマー、私はキーボード、唯ちゃんはギターに澪ちゃんはベースなんだけど、唯ちゃんと澪ちゃんはボーカルもやるの。あと一人、後輩もギターをするの」

紬が説明すると弦太朗が大いに喜んだ。

「バンドか！楽しそうだな！お前らの演奏、いつか楽しみにしてるぜ！」

「後で後輩も紹介してあげるよ！」

唯も続けて弦太朗に呼びかけた。

「後輩か…ぞくぞくしてきたぜ！」

次の自己紹介は、銀髪で褐色の目をした、まさしく天使と呼ぶに相応しい神秘的な少女であった。

「立華奏です…よろしく、如月君」

「おう！よろしくな奏…って何食ってんだ？」

奏が食べていたのは麻婆豆腐であった。

「麻婆豆腐…食べる？」

「いや、いいぜ」

弦太朗は奏の頼みを断った。つうかホームルームで飯食うなよ…

次は紫色のボブカットで、リボンの付いたカチューシャを頭につけた少女が名乗りを上げた。

「仲村（なかむら）ゆりよ。弦太朗君、よろしくね！」

「おう、よろし…おわ！？」

突然、窓から一本の槍がガラスを破り、飛来してきた！飛んできた槍は弦太朗に向かっており、その危機を察した弦太朗は回避した！

「あぶねえな！」

槍は弦太朗の机に刺さったが、弦太朗以下みんなは退避していたため幸い怪我はなかった。弦太朗は刺さった槍を机から抜き出した。槍の穂先には布切れが巻かれており、字が汚い上に一部がかすんでいるが「ゆ●っぺは●さん！」と書かれていた。弦太朗の一瞬の危機に、ゆりとユウキが駆けつけてきた。

「大丈夫、弦太朗君！？」

「弦ちゃん怪我はない！？」

「心配すんな。怪我はねぇ」

「よかったぁ…（やっぱり●●か…後できつい灸を添えてやらないとね…）」

安堵する二人だったが、ゆりの心中は別な意味で穏やかではなかった。

服の肩になんか水色のひらひらをつけた男性が「めんどくせ…」とつぶやくと、渋々立ち上がった。

「司馬子上ってんだ。ま、忘れてくれてかまわぶ！」

司馬昭がだるそうに紹介していたところを金髪ポニーテールのしっかりした少女にボディーブローをもらい、悶絶する。彼女は司馬昭に説教した後、弦太朗に謝罪する。

「子上殿、初対面くらいまともに挨拶も出来ないわけ？これ以上子元殿に迷惑をかけないで…あ、ごめんなさい、紹介がまだだったわね。王元姫よ。よろしく、如月殿」

「お…おう」

今度は眼帯が似合う蒼い戦国武将っぽい人と、真っ赤な鉢巻が似合う紅い戦国武将っぽい人が名乗る。

「オレが奥州筆頭・伊達政宗だぜ。立派な面構えしてるじゃねえか、弦太朗。ま、Ｎｉｃｅ ｔｏ ｍｅｅｔ ｙｏｕ！」

「それがし、真田幸村（さなだゆきむら）と申す！貴殿のような武士（もののふ）に会えてうれしいでござる、弦太朗殿！」

「へぇ、最近の親御さんは息子に戦国武将の名前をつけるのが流行ってるのか…」

弦太朗が感心していると、新八は叫んだ。

「だから本物の武将だから！」

次に指名された人は、ほんわかとした雰囲気の赤茶色の女の子、凛々しい雰囲気の黒髪の女の子であった。

「始めまして。わたし、桃香（とうか）です。これからもよろしくね、弦太朗君！」

「愛紗（あいしゃ）だ。今は訳あって、桃香様の護衛をしている」

「おう！こっちこそな！（しかし、この学校の生徒、なんかどっかで聞いたような名前が多いな…タイムスリップしたのか、オレ？）」

弦太朗の心中はこう思っていた。

…ふと弦太朗の背後から声を掛けられた。

「まぁ、この学校はアニメ、マンガ、ラノベ、ゲームなどの様々な創作作品が輩が一堂に介している、いわゆるクロスオーバー作品だ

からな…驚くのも無理はあるまい」

「あまりそういった発言やめろぉぉぉぉぉ！！アンタ、『メタ』って言葉を知らんのか！後ホームルーム中に早弁とるな！奏ちゃんも！」

新八に突っ込まれた青い髪の少女は、確かにラーメンのトッピングに使われる具…メンマ（しかも壷に大量に入っている）をつまんでいた。奏もしゅんとしながら食べかけの麻婆豆腐をラップに包み、机にしまう。

「驚かせてしまってすまんな。私は星（せい）と呼んでくれ」

星はメンマの入った壷に蓋をしてカバンの中にしまうなり、名乗った。

「あーこれで以上か？じゃあ如月と仲良くやれよー」

銀時が頭をポリポリと描くと、ホームルームが終わった。

その後、弦太朗は窓に向かって大きく叫んだ。

「青春キター！」

転・校・初・日（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、城島ユウキ

『銀魂』

坂田銀時、志村新八、神楽

桂小太郎、土方十四郎、沖田総悟

『ハヤテのごとく！』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ、桂ヒナギク

『けいおん！』

平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

仲村ゆり、立華奏

『戦国ＢＡＳＡＲＡ』

伊達政宗、真田幸村

『真・三國無双シリーズ』

司馬昭、王元姫

『真・恋姫無双』

桃香、愛紗、星

先・輩・乱・入（前書き）

ハヤテ：ここからいろんな作品が出てきますよ。

ナギ：ハヤテ！私たちはちゃんと出てくるんだろうな！

ハヤテ：あの…ネタバレ発言は控えろといわれてるので…

ナギ：じゃあ作者に申告してくる！脅迫して出すように言ってくる！

ハヤテ：あっ、お嬢様！使うならＲＰＧ－７よりスティンガーのほうが…

新八：心配するのはそっちかよ！作者逃げてー！

先・輩・乱・入

転校初日の昼休み時間。

弦太朗は、ユウキ、新八、唯、澪、律、紬に呼び出された。唯は弦太朗に呼びかける。

「弦ちゃん、学食行くついでに、あずにゃんのいる教室に行こう！」

「あずにゃん？」

「唯ちゃんと同じ軽音部の後輩なんだよ」

首をかしげる弦太朗にユウキが説明する。

「おー、そういや前回『転・校・初・日』で唯が言ってたな。放課後ティータイムにも一人後輩がいるってな」

「だからその発言はやめようよ…ホームルームのとき星さんに言ったのに…」

新八が呆れたように突っ込む。

「ちなみに、放課後ティータイムのほかにも、もう一つのバンドがあるんだ」

澪が補足する。これから会いに行く「友達」に、弦太朗の心が躍り始めた。

「よーし、じゃあ行くかー！」

1年A組。

ここに、唯達の言う「後輩」がいると言う。

今は昼休みだからなのか、そんなこんなで騒がしかった。

「一夏（いちか）！今日も稽古を始めるぞ！」

「だからといって教室で竹刀を振りまわすなよ、箒（ほうき）！」

ポニーテールの大和撫子、篠ノ之（しのの）箒と彼女に振り回されている少年、織斑（おりむら）一夏が稽古（？）をしているその途端、一夏の背後から金髪縦ロールの英国淑女、セシリア・オルコットがバスケットを持って現れた。

「一夏さん！わたくしと一緒にご飯にいたしましょう！」

セシリアがバスケットからサンドイッチを取り出すと、それを一夏の口に突っ込んだ！

「ムグ！モグフゥ…」

「箒ィィッ！」

箒の背後から声が聞こえたので彼女が振り向くと、ツインテールの活発な中華娘、鳳鈴音（ファンザンイン）が飛び込んできた！鈴が箒を押し倒し、マウントポジションを取る。

「あんたいつも一夏に剣道を強要するよね！幼なじみとしてあたしが絶対に許さないわ！」

「何を言う！一夏のような惰弱な男を鍛えるためにそうさせているだけだ！」

「他にも道はあると思うけどね！」

キャットファイトの後、二人は身体の一部に『ＩＳ』を起動させ、戦闘を開始した！

ＩＳ…正式名称、インフィニット・ストラトスは女性専用の飛行型戦闘用パワードスーツであるが、このように身体の一部を展開させることも出来る。何故女性にしか扱えないのかは不明だが…この辺についてはこの作品を書く上であまり必要ないと思うので割愛する。

「やめてよ3人とも！一夏は僕のものだって言ってるんだから！」

ブロンドのフレンチ少女、シャルロット・デュノアが箒、セシリア、鈴を怒鳴った後（怒るところが違うと思うが…）、セシリアに足止めされている一夏を無理矢理引っ張り出した！

「ささ、一緒にご飯だよ！」

「ちょっシャルロットさん！抜け駆けは許しませんわよ！」

「一夏！私も連れて行け！」

乱闘に紛れ、銀髪で左目に眼帯をつけたドイツ人の少女軍人、ラウラ・ボーデヴィッヒが一夏の腕を掴んだ。

「お前は私の嫁だ！嫁であるお前が私を見捨ててどうする！？」

「だから俺は嫁じゃない！」

一夏が否定する。一夏のウェディングドレス姿かー…しかし白無垢姿でも…いやそっちの趣味はないぞ。

ラウラの介入にセシリアとシャルロットが阻む！

「そうですわ！一夏さんは私のものですのよ！」

「どうやら決着をつけなきゃいけないみたいだね！」

シャルロットの合図でセシリア、ラウラもＩＳを起動。５人によるＩＳの乱戦が始まった…

一方、青いショートヘアの少女、スバル・ナカジマは、親友であるオレンジ色のツインテールの少女、ティアナ・ランスターから補修を受けていた。

「ティアー、この問題わからないよー」

「宿題せずに魔道師の訓練ばかりしてたからそうなるじゃない。後で吉野家連れてってあげるから頑張りなさい」

「じゃあ頑張る☆」

「その意気よ、スバル。じゃあ、ここの方程式はね…」

その時ＩＳの攻撃による流れ弾が直撃！ティアナのノートが焼けてしまった…

「…殺ス！」

殺意の波動を発したティアナは銃型のデバイス『クロスミラージュ』を装備し、ＩＳによる五つ巴の戦闘に乱入した！

デバイスとは、スバルやティアナたち魔道師にとって必要な兵器である。例外もあるが、デバイスにはＡＩ…つまり人格が搭載されている。ちなみにスバルのデバイスはローラーブレード型の『マッハキャリバー』だ。基本的に魔法の補助として使用されるが…この辺についてはこの作品を書く上であまり必要ないと思うので割愛する。

「わーっ！ティア、落ち着いてよー！」

「何でこうなる！？不幸だー！」

窓際に座っていたツンツン頭の男子生徒が頭を抱え悲鳴を上げた。

その時…！

ドヒュゥゥンッ！！

「どわ！！」

いきなりツンツン頭の耳元に電撃が走った！ツンツン頭が電撃の発射元を察する前に、やはり2発目が飛んできた！

迫り来る恐怖を前に、ツンツン頭が右手をかざすと…！

なんと、2発目の電撃が消えた！窓の向こうを見ると、一人の女子中学生が怒りのままに稲妻を走らせていた。

「げ、ビリビリ！？」

「ビリビリって言うな上条当麻（かみじょうとうま）、降りなさい！この御坂美琴（みさかみこと）が今日こそケリをつけてやるんだから！」

御琴は一見この学園の中等部に通うただの女子中学生に見えるが、その実最強と評される超能力者であり、コインに電磁加速を加えて放つ「超電磁砲（レールガン）」が、彼女の通り名と共に恐れられている。しかし、彼女には、上条当麻という天敵がいた。彼が右手をかざすことによって、たとえ超電磁砲が直撃しても無効化されてしまう（異能の力を封じ込める幻想殺し（イマジンブレイカー）のこと）。なので当麻は美琴に付け狙われているのだ…もっとも、当麻に対する彼女の本心は恋愛にも似た感情が芽…

「う、うっさいわね！これ以上ベラベラしゃべらないで！」

当麻は窓の下に隠れるが…

「無視すんなゴルゥァァアアア！！」

美琴の逆鱗に触れ、超電磁砲で砲撃！当麻を守っていた壁を粉砕した！崩れかけてる壁から当麻の声が聞こえてきた。

「だからって不意打ちはよくないだろ！？」

「なによ！？その右手があるだけアンタはマシじゃない！？さっさと来なさい！さもないとビリビリ行くわよ！」

美琴との口喧嘩に負けた当麻が叫んだのは…やはり…

「不幸だぁー！」

一連の流れを、眼鏡をかけた金髪の軽そうな青年、ミハエル・ブラン（通称ミシェル）と藍色のポニーテールをした少女…

「そうだろ？なんたってアルト姫は可愛いからな！」

「姫じゃねえ！俺は男だ！」

失礼。

一連の流れを、眼鏡をかけた金髪の軽そうな青年、ミハエル・ブラン（通称ミシェル）と藍色のポニーテールをした青年、早乙女（さおとめ）アルトが呆然と眺めていた。ミシェルがアルトに話しかける。

「アルト、どう思う？一夏のヤツ」

「……あいつも大変だな。女にしか扱えないＩＳを唯一動かせるんだからな…まぁ俺は興味ないけど」

「「…じゃあ、私の事はどう思ってるわけ？」」

背後から声を掛けられたのでアルトがびっくりして振り向くと、緑色の犬耳のような髪形をした明るい少女、ランカ・リーと、金髪で気高そうな女性、シェリル・ノームが立っていた。

「アルト君、一緒に学食行こうよ！」

「こんなサービス、めったにしないんだからね！」

「あ、いや！その…ミシェル！助けてくれぇぇぇ！！」

困惑するアルトは、ランカとシェリルにつかまり、無理矢理引っ張り出されていった。だがミシェルは助けようとするどころか…

「…災難だな」

皮肉った。

弦太朗、ユウキ、新八、唯、澪、律、紬と一緒に1年A組についた。その賑やかさに澪は思わず口を漏らす。

「いつ見てもにぎやかだな、このクラスは」

律がA組について解説する。

「このA組にもいい人がたくさんいるんだぜ」

「りっちゃん、あれはどう形容したらいいのかな…」

新八が指差したのはランカとシェリルに引っ張り出されているアルトの姿だった。彼ら3人も同じ1年A組に所属している。

「だが、どっちにしても全員友達にするのが俺の夢だからな…そんじゃいきますか！」

弦太朗が扉を開けた瞬間…

「うーっす！」

「手を上げろ」

扉を開けた瞬間、黒光りする何かを握った青年に阻まれた。その眼光は鋭く、さらに左頬には傷跡がついており、なんとな〜くその手の職業をしていそうな見た目だ。

あわてた弦太朗は思わず両手を上げる。

「抵抗もせずに従う、よい判断だ。射殺されたくなければ貴様の持っているもの全てをこちらに渡せ」

どうやら彼が握っているのは拳銃のようだ。不思議に思った弦太朗は少年に質問する。

「なぁ、それモデルガンじゃ…ないよな？」

「肯定だ」

「弾は入っていたり…するよな？」

「肯定だ」

「一発もらったら、俺ダウン？」

「肯定だ」

……。

「完全に銃刀法違反じゃねえかあぁぁぁぁぁ！！」

あまりの事実に新八が絶叫した。無論、犯罪なのでよい子のみんなは、絶対に真似しちゃダメだぞ！

「もう一度警告する。直ちに貴様の所有物をこちらに…」

パシィィン！

突如強い衝撃と音によって青年の頭が叩かれた！ハリセンを持った青い髪の少女が現れ、彼を引っ張り出した。

「こら宗介！あんた初対面しかも先輩の方に向かってなんてことするのよ！」

「だが千鳥、こうでもせねば君は危うくこの男に襲われるところだ

ったぞ。俺が調べたところによるとこういう外見の人物は闘争本能が凄まじいと…」

パシィィン！

「だからって人を見かけで判断するのがおかしいのよ！大体、ただ挨拶しに来ただけなのに他人を脅迫して拳銃を向ける馬鹿はこの学校中探してもあんたくらいよ！まったく、まだ戦争ボケが抜け切れてないわけ？戦場で活躍してるアーム・スレイブって奴も学園生活ではまったく役に立たないの！」

アーム・スレイブというのは、戦場で活躍しているロボット兵器のひとつだ。今やモビルスーツとかバルキリーとかスーパーロボットとか活躍しているようだが…この辺についてはこの作品を書く上であまり必要ないと思うので割愛する。

というわけで説教しながらハリセンで何度も宗介を叩きつける千鳥。気が済んだのか、千鳥が代わって謝罪する。

「ごめんなさい！先輩たちが転校生の友達を紹介しようって時にこの馬鹿、空気を読まずに…」

「気にしなくていいよかなめちゃん」

ユウキに言われ、かなめの表情が笑顔になる。そして弦太朗の手を握った。

「あ、どうもすみません！あなたが如月弦太朗先輩ですね！私、千鳥かなめって言います！んでこっちのうずくまってる馬鹿は相良（さがら）宗介で、さっきのあれはいつものことなので気にしないでください！」

「気にしてねえよ。なんたってオレはこの学校の連中と友達になるんだからな！教室はいっていいか？」

「どうぞー！（え、まさかこの宗介までも？！）」

こうして弦太朗一行は1年A組の教室に入った。

「たのもー！」

弦太朗がやってきたのでISを展開していた少女たちも、デバイスを装備し戦闘していたスバルとティアナも、超電磁砲を幻想殺しで防いでいた当麻も、この状況を見守っていたミシェルも彼のほうに視線を向けた。

「如月弦太朗だ。オレの夢は、この学校の連中全員と友達になることだ！」

と同時に満面の笑顔と一緒に指差しポーズを決め、名乗った。

「あずにゃん、ユイにゃん、連れてきたよー」

小柄でツインテールの少女、あずにゃんこと中野梓（なかのあずさ）と、小悪魔っぽく八重歯が可愛いピンクの少女、ユイが出迎えていた。

彼女たちが唯たちの言う後輩である。梓はもともと小学生のときからギターをやっており、唯たちに憧れ入部。放課後ティータイム

通称ＨＴＴを結成した。ユイはＨＴＴとは別のバンド、Ｇｉｒｌｓ Ｄｅａｄ Ｍｏｎｓｔｅｒ、通称ガルデモのメンバーで、そこのボーカルである岩沢まさみに憧れ入部したんだとか。

なお、この学園には音楽活動や芸能活動が盛んで、ランカ・リー、シェリル・ノームにいたっては芸能界デビューまでしており、逆に人気ロックバンド・Ｆｉｒｅ Ｂｏｍｂｅｒがこの学園にゲストで来校したこともあるというが…この辺についてはこの作品を書く上であまり必要ないと思うので割愛する。

唯が彼女たちの前に弦太朗を連れてきた。

が…

「ゆ、唯先輩…！まさか…！」

「ヤンキーを連れてきたんですか！」

突如梓とユイの顔が恐怖に包まれた。まぁ弦太朗の見た目はどう見てもアレだから…

「ヤンキーじゃねえ！リーゼント（これ）は俺のアイデンティティなんだ！」

弦太朗が弁明するまで2分はかかった…

「弦太朗先輩がそう言うのなら私も友達になりますよ！」

「私もＯＫです♪これからも友達作りに励んでください！」

「友達になってくれてうれしいぜ！」

梓とユイが賛成してくれたので、気分は上々だ。ユウキ以下５名も同じく。

「よかったね、弦ちゃん」

弦太朗は窓に向かうと…大きく深呼吸し、思いっきり大きな声で叫んだ！

「青春、キ」

バチバチバチ…

ドヒュゥゥゥンッ！！

チュドォォォォン！！！

…次の瞬間、美琴が放った超電磁砲が弦太朗に直撃した！そして大爆発！喰らった弦太朗は真っ黒になり、自慢のリーゼントがアフロになってしまった…弦太朗はそのまま仰向けにゆっくり倒れる。

まだ物語が始まったばかりの上、主人公（？）を死なすわけにはいかないので、幸い命に別状はないということにしたが、それでも物凄い威力だったのでみんなが心配して弦太朗を見取る。

ユウキ、唯「弦ちゃん！」

澪、律「弦太朗！」

紬「弦太朗君！」

梓、ユイ「弦太朗先輩！」

「青春じゃなくて電気キタァァァァァァァ！！」

これが超電磁砲を浴びた弦太朗に対しての新八の感想である。

数分後、美琴が駆けつけ、黒焦げアフロな弦太朗を見取った。

「ごめんなさい！ねえ、ちょっと大丈夫！？」

「は…ははは…。すげえな…あんな遠くから俺を撃ち落とすなんて、あんた今までで最高の友達だぜ」

「言ってることはよくわかりませんけど…そういうことにしときます」

奇妙なことを言う弦太朗の無事（？）にほっとする美琴。そして次の矛先は当麻に向けられた…

「え、御坂さん…まさか…」

「上条、覚悟ォォォォォォォォォォォォ！！！！」

「不幸だァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

上条当麻の受難はまだまだ続く…

先・輩・乱・入（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、城島ユウキ
『けいおん！』
平沢唯、秋山澪、田井中率、琴吹紬、中野梓
『銀魂』
志村新八
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
ユイ
『とあるシリーズ』
上条当麻、御坂美琴
『魔法少女リリカルなのは』
スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター
『インフィニット・ストラトス』
織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、
シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ
『マクロスＦ』
早乙女アルト、ランカ・リー、シェリル・ノーム、ミハエル・ブラン
『フルメタル・パニック！ふもっふ』
相良宗介、千鳥かなめ
『ハヤテのごとく！』
綾崎ハヤテ、三千院ナギ

ナギ：結局私たち前座かよ！

ハヤテ：ならこれがありますよ！このマンティス人形で…

新八：前書きに出れただけでいいじゃん！作者出番出してあげてー！

強・敵・出・現（前書き）

美琴：この回でこの学園を束ねる校長と理事長が出てくるわよ。

黒子：でもわたくしは、やっぱりお姉さまが一番ですわ～♪

美琴：ちょっと！まだ初出演回も決まってないのよ！

黒子：この黒子をさしおいてあの男がお姉さまとセットで
　初出演を飾るなんて…許せませんわ！（シュンッ）

美琴：だからって作者へ抗議しようとするなァァァ！テレポートで
！

強・敵・出・現

前回、1年A組と友達になった！

弦太朗、ユウキ、新八、唯、澪、律、紬、梓、ユイの9人は学食に向かおうとしたが、1年A組の人たちが歓迎してくれた。なぜなら…

「こんにちは」

「ここにいらしてましたか」

「おお、噂の転校生も一緒とはな」

やってきたのは大きな重箱を持ってきた茶髪の女性と金髪に赤い瞳の女性、そしてハヤテとナギであった。

「なのはさんにフェイトさん！」

スバルが声を上げる！彼女たちとは知り合いらしい。フェイトと呼ばれた金髪の女性は弦太朗に話しかける。

「あなたね？全校のみんなと友達になるって言ったあの」

「おう！如月弦太朗だ！オレの夢はこの学校の連中全員、友達になることだ！」

弦太朗の夢になのはがくすくすと笑った。

「面白い人ね…私は高町なのは。なのはって呼んでいいよ。こっちは、フェイト・テスタロッタちゃん」

「よろしくね、弦太朗」

「おうよ、よろしくな！なのはさんにフェイトさん！」

皆の机を合わせ、なのはが重箱を広げると、ユウキが首をかしげる。

「でも、なのはさんとフェイトさんがいるって事は…」

「私たちが呼んだんです！噂の転校生がここに来るって！」

ティアナが説明した。ティアナとスバルは、なのはとフェイトの後輩なのだ。さらに、1年B組にもなのはたちと同じく親しい仲がいるようだが…それは後ほど。

「さあ、始めましょう。弦太朗の歓迎会よ」

フェイトの一言で歓迎会はスタートした。

かくして、昼休みがどれくらいかかったのかは突っ込んではいけない。

そんな折、弦太朗が、

「ちょっと賢吾探しに行ってくる！」

と言ってA組の教室から出た。なのはが「あ、待って弦太朗君！」

と呼び止めようとするが、さっさと行ってしまった。なのはが心配するや、ユウキが説明した。

「彼、とても友達思いなんですよ…」

弦太朗が向かった先は保健室だった。賢吾が朝のホームルームを抜け出し、その上で午前の授業をサボタージュしたのだ。休み時間の合間を縫って探そうと思ったのだが、まだ転校初日なのでユウキに「今はこの学校を知ったほうがいいよ！」と言われ、断念した。

「おい賢吾！」

保健室に入り、ベッドの隣のカーテンを開けたが…

「…いねえか」

すぐさま保健室を出た。

次に寄ったのは学園食堂だ。生徒や先生たちが美味そうな料理に舌鼓を打っている。コックたちの作る料理の匂いに弦太朗も思わずつられてしまう。だがいずれにせよ賢吾の姿が見当たらなかったのでこの場を後にした。

賢吾の手がかりを得るために向かったのは体育館だ。昼休みと言うことか、館内にはたくさんの生徒たちが遊んでいる。しかし、どこを見渡しても賢吾の姿は見つからなかった。

今度は売店だ。とは言ってもスーパーやコンビニのみならず、書店、CDショップ、ゲームショップ、レンタルショップ、果てにはア●メイトやらとら●あなやらがそろっており、ショッピングモールと化している。でも、やっぱり賢吾はいなかったので売店から去った。

次の弦太朗の足が着いた先はアミューズメントパークだ。ゲームセンター・ボーリング・カラオケ・ダーツ・ビリヤード・ライブハウス・スポーツジムなどがある、学生にとっては夢のような場所である…だがそれだけあまりにも広すぎるのでスルーした。

今度はグラウンドにたどり着いた。普通に広すぎるのでそのまま去った。

とうとう賢吾の捜索に疲れた弦太朗はカフェテラスに立ち寄った。カフェテラスには様々な人たちが集まっていた。弦太朗は空いている席を求めて歩き回った。

筋肉馬鹿たちが筋肉を見せ合っているところを「おうおう、鍛えてるねえ！」と声を掛けたり、

不良どもに「よっ！」と声掛けして逆に「んだテメェはぁ！」と怒鳴られたり、

ギャルに声を掛けて「何あいつ、超古いんですけど～」と愚痴られたり、

『絶対合格』の鉢巻をつけたガリ勉たちに「勉強頑張れよ！」と声を掛けてみたり…

「結局賢吾は見つからなかったか…」

ため息をついた弦太朗は、ちょうど空いていた『真っ赤』な椅子に座った。

…しかし次の瞬間、生徒たちがざわめき始めた。

「おい、座っちまったぞ…」

「あの方の椅子に…」

「なんて礼儀知らずだ…」

ざわざわ…

「何だよ！オレの顔になんかついてんのか！？」

その時、缶ビールを片手に持っていた、まるでダメそうな雰囲気を持つサングラスのおっさんに声を掛けられた。

「お～いどこ座ってんだよ転校生～！」

「赤い椅子だよ！」

当たり前のように言い放ち、まるでダメなおっさんを突き放す。その時、たまたまカフェにいたユウキ、ハヤテ、ナギが弦太朗の姿を見かけるなり、彼の元へ急行した！

「ちょっと、ダメだよ弦ちゃん！早くそこどいて！」

「あ？」

ぽかんとする弦太朗を前に、ナギが説明する。

「ここはな、グループによって座ってる席が決まってるんだ。あっちは不良、あっちはガリ勉、あっちは遊び人、あっちはコギャル、あっちはオタク、あっちは筋肉、んであっちがマダオだ！」

「バカじゃねえの！？そんなの聞いた事ねえよ！」

「そう言うあんたも、そこに突っ立ってたらまずいんじゃないの？」

先ほどのまるでダメなおっさんが言ってきた。

「さあ、行きますよ弦太郎さん！」

ハヤテが赤い椅子から弦太朗をどかそうとする。

…その時、恐れていたことが起こった…！

現れたのは、一人の女。

赤紫色の髪をしており、切れ長の鋭い目。金色の装飾がなされた、袖のない衣装とマントを身に纏っている。そして『いる』だけで圧倒的な覇気と存在感があった。

「す、すっげぇ～美人だ…！あの女も捨てたもんじゃねえな…（恍惚）」

「あの人、この学校の理事長だから…ほらいこいこいこ！！」

弦太朗は女の艶姿に興奮気味だったのでユウキが赤い椅子から弦太朗をどかそうとする。

理事長だという女は赤い椅子まで足を運ぶ。そして彼女は赤い椅子に座っていた弦太朗とユウキにこう言った。

「俗物どもが、何故こんな席に座っている？」

「ごめんなさい！」

理事長の尊大な振る舞いの前には、ユウキもハヤテも頭が上がらない。

「俗物？」

「そうだ、お前の事は転入前から聞いていたが…まさしく俗物の仲の俗物だ」

彼女は毒づくように弦太朗を言葉でなじる。

「フッ…オレは男の中の、男。そういうことか」

（…恥を知れ、俗物）

弦太朗の臭いセリフを聞いた理事長の感想だった。

その時、弦太朗の背後から何者かによって掴まれ、そしていきなり投げ飛ばされてしまった！３人が弦太朗の元に駆けつける。

「弦ちゃん！大丈夫？」

投げた人物は、金髪で長身、高貴な顔立ちをした、赤ずくめのスーツと言う浮いているにも程があるファッションセンスを持った男性であった。そして彼はこう言った。

「認めたくないものだな。自分自身の若さゆえの過ちというものを」

理事長が赤い男に声を掛けてきた。

「シャア、遅いぞ。貴様がもたもたしているおかげであの俗物に『

校長の証』を座られたぞ」

「ふっ、理事長らしくないぞハマーン」

しばらく倒れていた弦太朗はむくりと起き上がり、ヤンキー座りになってシャアと名乗る校長に口を叩いた。

「何しやがんだこの野郎！」

「フ…騒ぐことはない…驕りという名の重力に縛られた『凡愚』を粛清しただけだ」

弦太朗をあざけるシャアに対し弦太朗は…

「凡愚だと？冗談じゃねえ！オレ様は『俗物』だ！」

「バカ！似たような意味だよ！」

「え？」

ぞく-ぶつ【俗物】　世間的な名誉や利益などに心を奪われている、つまらない人物。「―根性」

ぼん-ぐ【凡愚】　平凡でおろかなこと。また、その人。「―の身」

かっこよく言ったつもりなのにユウキにツッコミされる弦太朗であった…

「馬鹿にしやがって…オレは凡愚じゃねえ！オレは如月弦太朗だ！」

その時、背後から凄まじい物音が聞こえた。その音にが振り向くと…顔が一斉に青ざめた。

彼等の目の前に、『怪物』があわられたのだ。その姿は、体中に星座のような刻印が刻まれており、その存在感から放たれる禍々しさは尋常ではなかった。怪物はテラスのテーブルや備品を破壊しながら室内に侵入する！

生徒たちが悲鳴をあげ逃げ回る中、シャアとハマーンは平然とその場を後にしようとした。だが弦太朗が「待て！」と呼び止める。シャアが振り向くと…

「弦太朗君。転入前から君はよき志を持っているようだが、その志を扱いきれまい。やがてその絆は、君の期待を裏切る要因を生むかも知れん」

「何だと！？」

弦太朗が言い返そうとするが、シャアとハマーンの姿はもうすでになかった。

「お嬢様、弦太郎さん、ユウキさん！下がっててください！」

「ハヤテ！死ぬ気か！？」

「大丈夫ですよお嬢様…僕は死にません」

ハヤテが懐からマグナムを取り出す。そしてマグナムを構え、怪物に発砲した！だが銃弾は通用せず、マグナムの弾が切れた。

「あれも校長の手先…なわけねえよな」

「違うよ！あれは…」

「まあいいや。よくわかんねえけど、下がってろ。すぐに追い払ってやらぁ！」

と弦太朗がユウキとナギを後方に退かせた後、近くにあったデッキブラシを拾い、怪物に挑んだ！

「弦太郎さん無茶です！」

「無茶かどうかはやってみなきゃわかんねーだろ！」

ハヤテの制止も聞かず、ブラシを振りかざした！

「先手必勝だこの野郎！」

弦太朗がデッキブラシを怪物に振りかざすが、やはり怪物には通用せずブラシの柄が折れてしまった。そして怪物はパンチで弦太朗を吹き飛ばした！弦太朗はテラスの中庭まで大きく吹っ飛ばされた。

「うわぁぁ〜！」

「弦ちゃん！」

「弦太朗！」

「弦太郎さん！」

よもや万事休すか。

…その時、怪物の目の前を巨大な何かが遮った！それは手足にタイヤがついている、黄色と黒のツートンカラーで作業用マシンをイメージさせる巨大ロボット『パワーダイザー』だった。

「大丈夫かユウキ？」

パワーダイザーに乗っていたのは、ホームルームから抜け出していた歌星賢吾であった。

「うん！」

「おい！私たちにも言ってくれ！」

ナギたちが何か言っているが、そこはスルーする賢吾。

「見て！あの『ゾディアーツ』、オリオン座よ！」

「わかっている…さがってろお前ら！」

怪物の名はゾディアーツというらしい。確かにユウキの言うとおり、体中にはオリオン座をモチーフとした星座が組まれていた。賢吾がパワーダイザーを走らせると、オリオン座のゾディアーツを殴り続ける。効き目があったようで、そのサイズ差も相まって殴られながらひるみ続ける。

「はぁ…！はぁ…！」

しかしコックピット内の賢吾にも疲労がたまっているようで、動かしているたびに汗をたらし、苦悶の表情を浮かべながらパワーダイザーの操縦桿を握る。

ふと、ハヤテとナギが観戦中にあることに気づいた。ナギがハヤテの耳を貸し、耳元で囁き始める。

（なぁハヤテ。この作品って、クロスオーバーだよな？）

（そうですよ？この回からしばらくはフォーゼメインですが）

（私たち空気か！）

さすがに勝ち目はないと悟ったのか、ゾディアーツは逃亡した。

クロス学園の倉庫の一角に、パワーダイザーを格納させた賢吾とユウキ。だが賢吾は心身ともにボロボロになっており、地面に跪いた。あわててユウキが抱きかかえる。

「賢吾君！」

「…まだ倒していない。パワーダイザーじゃその場しのぎだ」

二人が向かったのは、立ち入り禁止の廃部室だった。賢吾が室内のロッカーを開けると、突然ロッカーの内部が光りだした！しかし慣れている様子で、二人はロッカーのなかに入っていく。ロッカーの中の世界は無限大ともいえる空間であり、二人は空間の中を歩いていく。

廃部室のロッカーの先には、自動ドア、コンピュータなどがそろった施設であり、二人だけが知る秘密基地『ラビットハッチ』であった。賢吾が自動ドアを開け、ラビットハッチの一室に入ると、内部のコンピュータを動かし始めた。ユウキが制止する。

「まって！『フォーゼ』は止めよう！」

「ヤツを倒すにはこれを使うしかない」

どうやら、ゾディアーツを倒すには『フォーゼ』という手段が関わっているらしい。賢吾は棚から持ち運びのスイッチを数個持ち、一風変わったバックルに備わった４つのスロットにこれを挿し込む。

「でも賢吾君の体力が持たない！ダイザーの操縦だって限界だったじゃない！？」

「だがやるしかないんだ…！」

賢吾が悲壮の覚悟でバックルを握り、外へ出ようとした時…

「おわぁ～！うわぁ～！」

賢吾とユウキの目の前にあったのは、無重力状態でふわふわ遊ばれている弦太朗の姿だった！

「…弦ちゃん！」

「何だここ、妙にふわふわすんな！」

呆れた賢吾はすぐさま壁のレバーを引き、無重力状態を停止させた。重力制御によって弦太朗は床にゆっくり降りる。あたりを見渡した弦太朗の感想は…

「なんか…秘密基地みたいでかっこいいな！」

「…後をつけたのか？」

「まさかお前があのゴリラを操縦してたとはな…」

ゴリラではありません。パワーダイザーです。

次に弦太朗が目を付けたのは…賢吾が保持していた４つのスイッチが入ったバックルだった。すぐさま彼の手からバックルを奪うと、興味津々にバックルを眺める。

「話は聞いた。これならあの化け物を倒せるんだろ？」

「貴様！それは俺の持ち物…」

奪われたバックルを無理矢理返そうとする賢吾だったが…

「うっ！」

「賢吾君！」

いきなりふらついてしまう。

「ほらみろ。今のお前じゃ無理だ！」

「だが君にも無理だ」

「やってみなきゃわかんねえだろ…ここはオレに任せろ」

弦太朗がそう言うと、バックルを手にラビットハッチの外へ出た。ユウキもしばらくとどまっていたが、弦太朗の後に続く。

ラビットハッチには、賢吾一人が残された。彼は拳を床に叩きつけて叫び、嘆いた。

「く…何故俺はこんな体で生まれたァ！？」

強・敵・出・現（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『ハヤテのごとく』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ

『けいおん！』

平沢唯、秋山澪、田井中率、琴吹紬、中野梓

『銀魂』

志村新八、マダオ

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

ユイ

『魔法少女リリカルなのは』

高町なのは、フェイト・テスタロッサ

スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター

『ガンダムシリーズ』

シャア・アズナブル、ハマーン・カーン

弦太朗：次回でフォーゼに変身できるぜ！

賢吾：この小説でもお前にフォーゼを譲るのか…

（ゾディアーツによって破壊されたカフェテラスを、一人で掃除するマダオ）

マダオ：結局こうなるのかと思ったよ…とほほ…

宇・宙・変・身（前書き）

フェイト：弦太朗、ついにフォーゼに変身するのね。
どんな展開を見せてくれるのかしら？

なのは：ゾディアーツの正体とか事件の黒幕も気になるよね♪
それでは、魔法少女リリカル…

フェイト：ちょっとなのは！？いつもの癖でてるんじゃない！？

なのは：あ、あはは。ごめん…それでは、
こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園、始まります…

宇・宙・変・身

古びて今は放棄されている教室内では、三白眼の青年がいた。彼は、片手にある何かを握っており、それをまじまじと見つめていた。

――――――それは、目玉のような外見を持つ、不気味なスイッチだった。

青年はぶつぶつと呟く。

「…あの男め、気安くあいつに声を掛けやがって…次は絶対に仕留めてやる……！」

青年がスイッチを持って教室の外へ出ようとしたところ、

「…それは何？一体何を考えているの？」

銀髪の少女に声をかけられた。

「お前確かあいつの同じクラスの…！ちょうどいい、奴への見せしめに始末してやる！」

少女に見つかった彼はスイッチを押す。

「フハハハハ！力がみなぎるわぁぁぁ！！」

彼がスイッチを入れた瞬間、青年の身体をまがまがしいオーラが包む。そして、不気味な怪物に姿を変えた…！古代ギリシャの戦士の姿をした真っ赤で大柄な体格の表面には、星座を思わせる刻印が

ある。

「仕方ない。気が乗らないけど……『ガードスキル・ハンドソニック』」

銀髪の少女…立華奏が何かを呟くと、右手に刀身を出現させた。

「終わらせる…」

奏が手首の刀を構えると、怪物(ゾディアーツ)に向かって前進した！ゾディアーツは手にした棍棒を振るい、奏の刀と切り結ぶ。

「如月君に何か恨みでもあるの？」

『お前には関係ねえ！とっとと潰されるがいい！』

奏とゾディアーツの戦いは校内の中庭に及んだ。

大勢の生徒が逃げ惑うなか、ゾディアーツが棍棒を振り回したところを奏の刀が切り払い、彼女が隙を突いて急所めがけて刀を突き出したところをゾディアーツが手にしたシールドに防がれると言う攻防一体の戦闘が繰り広げられていた。

しかし奮戦及ばず、振るったゾディアーツの得物が奏のわき腹を殴打し、奏はその場に吹き飛ばされる！そしてゾディアーツは奏の首を掴み、締め付けはじめた…！

「ぐっ！うぅぅ…」

『これで終わりだな！成仏されるがいい！』

…しかし、ある男の参上によって奏の危機は逃れた。

「てめえオレのダチに何しやがる！」

そこには、ラビットハッチからバックルを持ち出してきた弦太朗の姿があった。

「如月君？逃げて…」

しゃがれた声で弦太朗の名を呼ぶ奏。するとゾディアーツが話しかけてきた。

『お前が如月弦太朗か？』

「あ？」

『だから…お前が如月弦太朗かと聞いている！』

「おうそうだ！この学校の連中全員と友達になるのが夢の男だ！」

『とぼけるな！つまらん戯言で俺の大切な女を汚しやがって！』

「大切な奴？何言ってるのかさっぱりわかんねーよ！」

『…お前は知らんだろうがな、お前はゆりっぺに声をかけられた瞬間、一本の槍が飛んできたのを覚えているだろう？あれは俺がやったのだ！』

「ゆりっぺだって！？」

弦太朗はホームルームで出会った仲村ゆりのことを思い出していた。どうやら彼は、ゆりに大変心酔しているらしい。

『如月弦太朗…貴様だけは許さない！！』

「へっ！これはこっちのセリフだぜ！」

そういって弦太朗はバックルを構えるが…？

「ようし！……あ、あれ？やっべー！使い方聞くの忘れた！」

「如月君、何してるの！あっ」

ゾディアーツに拘束されていた奏が放り投げられ、そのまま地面に叩きつけられる。迫り来るゾディアーツを前に弦太朗、なす術なしか！？

するとそこに、ラビットハッチから弦太朗をおってユウキも駆けつけてきた。

「そのフォーゼドライバーを腰に巻きつけるの！こう！」

ユウキが弦太朗からバックルを無理矢理奪うと、無理矢理彼の腰

につけた！そしてユウキが笑顔で熱くこう言う。

「そしたらスイッチ入れて！そうすればあなたに『宇宙のパワー』がみなぎるの。『変身』よ、弦ちゃん！」

「う、宇宙のパワー？」

「そう！その後変身って言ってレバーを入れて！」

そういってユウキはフォーゼドライバーの４つのスイッチを無理矢理ＯＮにする。彼女が遠くに離れると、弦太朗にアドバイスする。困惑する弦太朗にユウキは「いいから早く！」と叫ぶ。

「お、おう！！よくわかんねえけど、なんかよくわかった！！」

……３……

……２……

……１……

――――――変身！！

その瞬間、弦太朗の姿が変貌した！

スペースシャトルのような配色に、ロケットを思わせる頭部とオレンジ色の目。両肘と両膝に○×△□のマークがあり、背中にはバーニアがある。宇宙飛行士のような姿をしたヒーローだ！

「な、なんだかわかんねえけど……宇宙キタァァァァァァ！！」

「そう、それが『フォーゼ』よ！早くあの化け物をやっつけちゃって！」

「なるほど、フォーゼね…」

弦太朗（フォーゼ）が納得すると、ゾディアーツの前に拳を向ける。

「タイマン張らせてもらうぜ！！」

まずフォーゼが先手必勝とばかりにゾディアーツに殴りかかる。数度殴られたゾディアーツだが今度はシールドでフォーゼを押し出し、今度は棍棒で倒れたフォーゼを殴りつける。見かねたユウキが叫ぶ。

「左側のオレンジのスイッチ押して！！」

「え、これか？」

フォーゼがオレンジのスイッチを入れると、電子音が鳴り、右手がロケットモジュールに変わった！

「お！？おぉぉロケットぉー！」

右手のロケットがジェット噴射し、慌てふためいてマウント状態から脱出するフォーゼ。それはゾディアーツに当たり、大きくよろめいた。その後暴れるように噴射し、ゾディアーツを殴り続け、やがてゾディアーツもフォーゼを両手で捕らえた。だがロケットの推進力によって二人は上空に飛ばされてしまった…

今度は学園の駐車場に吹き飛ばされたフォーゼとゾディアーツ。

さすがに精神的にやばいのでフォーゼがロケットスイッチを戻すと、同時にロケットもはずされた。「うぇ～気持ちわり」と酔っ払いながらも戦闘を続行する。

「なんか武器はねえのかよ！？」

次の打開策を練るフォーゼ。今度はロケットの隣の青いスイッチを押す。その瞬間、電子音と共に右足にランチャーモジュールが搭載された。

「おお～！おわ！」

だがランチャーから暴発したかのようにミサイルが乱射され、近くの車に命中！車数台が破壊された…

ジリリン！ジリリン！

「な、なんだ？」

右側の黒いスイッチのアラームが鳴り出したのでそのスイッチを触ると、左手にレーダーモジュールが装備された。モニターには賢吾の姿が映し出されていた。

『レーダーもなしにランチャーとは…学校ごと破壊するつもりか？…今お前が持っているレーダーでターゲットを特定しろ』

「お、おう、わかった」

その後敵に吹っ飛ばされたフォーゼだったが、バーニア噴射で何とか態勢を整える。そして賢吾に言われたとおりにレーダーのキーボードを入力し、ゾディアーツに向ける。その後モニターにロックオン表示が出る。

「ロックオン！喰らえ！」

ランチャーモジュールからミサイルを連射し、今度はちゃんとゾディアーツに命中する。爆発の衝撃でゾディアーツが倒れた。

『よし、接近戦だ。右足のスイッチを交換しろ』

賢吾からそういわれると、ランチャースイッチを取り出し、別の水色のスイッチを挿入し、プルトップ式のスイッチを上げる。すると、右足がチェーンソーモジュールに変わった！

「お、カッコいいじゃん…いっくぜぇぇ！」

フォーゼがゾディアーツに接近すると、チェーンソーが起動。蹴るたびに回転する刃で敵を切り裂く！そして敵がひるんだうちにバ

ーニア噴射とムーンサルトで身体を回転させ、その勢いによる攻撃で敵を切った！

「おっしゃぁー！」

だがゾディアーツの星座の刻印からビームを乱射し、それはフォーゼに当たった！フォーゼは大きく吹っ飛んでしまう。立ち上がったその隙を見たゾディアーツが再びビームを撃ったが、それは回避される。

「何度も同じ手喰らうかよ！」

フォーゼがチェーンソースイッチをＯＦＦにし、今度はロケットスイッチをＯＮにし、再び右手がロケットに変わる。ロケットに振り回されつつも、上空に飛び立つフォーゼ。

「こいつはなんだ！？」

フォーゼが目を付けたものは、レーダーの隣の黄色いスイッチだ。黄色いスイッチのダイヤルを回すと、今度はフォーゼの左足にドリルモジュールが付けられた！

「おおっ、いいんじゃない？よしっ、こいつでとどめだ！！」

『おい待て如月！』

「ったく、うるせえな！」

賢吾が通信で割り込んできたので、レーダーのスイッチを切る。そしてフォーゼドライバーのレバーを回しすと、『ＬＩＭＩＴ　Ｂ

ＲＥＡＫ』の音声が発生。ゾディアーツに狙いを定める。

「喰らえ！ロケットドリルキィーック！！」

フォーゼが叫ぶと、上空からロケットの噴射で超加速！足のドリルによってゾディアーツを貫いた！

着地後、ドリルが地面にえぐり込み、「うおあぁ～！」と叫びながら回転するが、しばらくして止まった。

ゾディアーツが倒され、スイッチが転がった。

戦いが終わったときにはユウキ、奏が駐車場に駆けつけた。ユウキはそこら辺に転がっていた不気味なスイッチを押した。

「やったね弦ちゃん！」

「助かったわ、如月君」

「おう！」

フォーゼとユウキは拳を打ちあう友情の証を行う。そして二人でガッツポーズをとった。

「イェイ！！」

ちょうど賢吾もパワーダイザーに乗り込んで現れたところであった。

「如月弦太朗…！」

「よう賢吾、やったぜ！ま、オレ様にかかればこんなもんだぜ…うわぁ！」

「名前で呼ぶな！！」

「うわぁ～」

「え…ちょっと！？」

賢吾はパワーダイザーの腕でフォーゼを掴み、振り回した。ユウキは困惑し、奏は微かながらも微笑みをこぼした。

「う…ここは…？」

廃屋となった教室の廊下で青年が目覚めた。彼の近くには仲村ゆりがいた。

「…気が済んだ、野田（のだ）君？」

「そうだ…俺はゆりっぺのためにだけに…如月弦太朗を」

「馬鹿言ってんじゃないわよ！」

パシィン！！

突如野田の頬を叩くゆり。

「聞いたわよ。あんた化け物になって学校騒がしたんですって？せっかくうちのクラスに転校生が来たからって挨拶があれだって？あんた頭悪すぎ、どうしようもない馬鹿ね！」

「えー！そんなー！」

がっかりする野田。彼はゆりに心底惚れており、ゆりに友達になろうと言った弦太朗に対して暴力で宣戦布告。弦太朗にゆりを奪われたくないとばかりに、挙句の果てにゾディアーツになって大暴れしたのであった。

「ほら、あんたに会いたい人がいるわよ」

野田の目の前に現れたのは弦太朗であった。野田は土下座をし、弦太朗に謝る。

「す、すまなかった！！」

だが弦太朗は怒ろうともせずこういった。

「お前がしでかしたことが悪いと思ったんなら、気にはしねえよ。お前はゆりの言うとおり、確かにどうしようもねえ馬鹿だよ。だがオレはそんなとこ、嫌いじゃねえぜ。次ダチ作るときは、普通に挨拶すればいい…オレがお前のダチになってやるよ」

彼の言葉に、野田はゆりに抱きついて涙を流した。

「うぉー！ゆりっぺ～」

「ちょ、気持ち悪いわね！近寄るな！！」

一方、校長のシャア・アズナブルは、理事長のハマーン・カーンと対話していた。

「聞くがいい、シャア。あの小僧がこの学園で暴れまわったらしい。転入早々、随分とやらかしたな」

「ふ。やはりな…彼にスイッチを渡して正解だったよ。あの野田と言う男、実に使いやすい男だった」

「さっきは絆だの志だの下らんことだと抜かしていた分際で」

「あれは道化だよ…それにしても如月弦太朗、実に興味深い男だ」

シャアは不敵に笑った。

宇・宙・変・身（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
立華奏、仲村ゆり、野田
『ガンダムシリーズ』
シャア・アズナブル、ハマーン・カーン

桂：俺の出番は！？

銀時：しかたねえだろ。ここんとこフォーゼがメインだし。

桂：ならば俺達もライダーになろう！ついてくるのだ、銀時！

桂：テンション、フォルテッシモ～♪

銀時：キバっていくぜ！

銀時：はっ？！ゆ、夢か…

放・課・時・間（前書き）

唯：いいな～ユウキちゃんに賢吾君。私もフォーゼが動くところ見たかったなぁ～

律：だったらこうしようぜ！ロケットドリル頭ぐりぐり～！

（ぐりぐりぐり…）

澪：わあ！律！やめろ！クレヨンしんちゃんのみさえママか！

（ぐりぐりぐり…）

梓：ちょっと唯先輩も、どさくさに紛れてやめてくださいよ！

紬：うふふ…女の子同士のスキンシップは素晴らしいわね（惚）

放・課・時・間

午後の2年B組の教室では銀時が担当する国語の授業が行われていた。

「ったく、いつまであの3人サボってんのかよ」

銀時が気にしていたのは弦太朗、賢吾、ユウキの3人の行方であった。昼休みのあと、5時間目は彼の授業であったが始まったときはすでに3人はいなかった。念のため、奏とゆりに捜索に出させたが、いつまでたっても帰ってこない。

その時、チャイムが鳴ったのと同時に5人が教室に戻ってきた。

「おいおせーよオメーら。もう授業とっくに終わってんだよ」

賢吾、ユウキ、奏、ゆり「すみませんでした」

銀時に怒られる5人。そして銀時はさらに弦太朗を叱った。

「如月、いくら全校の奴らとダチになりたいからって冒険しすぎだぞ。気持ちはわかるが、そんなんできたら1日で赤緑からブラック・ホワイトのポケモン646種類全部覚えられるよコノヤロー。俺だってほしいんだもん」

「すんませんっス」

「つうわけで如月、後で話がある。放課後職員室に来い」

職員室に呼び出された弦太朗は銀時から話を受けていた。

「お前は今日からうちの学生寮に住むことになる」

「学生寮？」

「ああ、そうだ。今日お前の部屋に荷物を届けてやった。鍵については寮長が」

「今日からそこに住むのか？おっしゃ、楽しい学園生活の始まりだぜ！」

何かを決心した弦太朗は猛ダッシュで一気に職員室から出て行った。

銀時が一言。

「人の話を最後まで聞けェェェェェェェ！！！」

放課後、たくさんの人たちが下校している。部活に向かう者もいれば、すぐさま帰宅する者もいる。その中、ただ一人学生寮を目指す弦太朗であったが…。

「広すぎてわからねえええええええ！！」

そう、この学園は大草原のごとく広い。まず、学校としては弦太朗が通う高等部、中等部、小等部に分かれ、大学や幼稚園までである。学ぶ学科も普通学科、農業、工業、商業、芸術、スポーツなどが学ばれている。グラウンドと体育館は東京ドーム数個分の広さはある。部活においても運動部と文化部合わせて１００を軽く超えるほど存在する。弦太朗も行ったことがある、学園が運用する学食やカフェに至ってはメニューも規模もそこらの居酒屋に匹敵する。購買部が運営する売店は扱う品物が多いデパート形式である。敷地内には劇場・映画館・図書館、生徒専用のゲームセンター・スポーツクラブ・カラオケボックス・ライブハウス・ボーリング場など様々な施設がある。

おまけにあまりの昂りに、銀時から学生寮の場所も聞いていない。自業自得ですな。

「弦ちゃん、一体なにがあったの？」

「おーい、どうしたんだこんなところで叫んで？」

突如、遠くから声をかけられた。弦太朗が振り向くと、ユウキと長い金髪で純朴な感じの青年がいた。腰には鞘に納めた剣を差している。

「ユウキ！それとあんた誰だ？」

「俺は2年B組のスタン・エルロン。よろしくな！」

「B組？」

B組と聞いて、弦太朗がスタンが同じクラスだと知る。だがここで弦太朗とユウキに疑問が…

「あれ、スタン君自己紹介しなかったっけ？弦ちゃんと同じクラスだってこと」

「ああそうか！お前、俺が転校してからずっと寝てたんだよな。だから『転・校・初・日』に出れなかったんだな！」

「そうそう、昨日もよく眠れたし、今朝もいつも通り妹に起こしてもらって学校で眠くなって…って俺の初出演がこの話ってあんまりだなおい！一人だけ風邪引いて欠席みたいでひどすぎるだろ！！お前等俺のこと空気扱いしてたのか！？」

スタンが激しく突っ込みを入れる。ユウキが弦太朗に声をかける。

「それはそうと、弦ちゃんは学生寮に行くの？」

「おう、そうだ」

「だったら、俺たちが案内してやるぜ。妹と一緒に暮らしてるからな！…あ、弦太朗にユウキちゃん、待ってくれ」

…ふと、スタンの腰から声が聞こえた。スタンは腰に差している剣を取り出し、それに耳を傾ける。

『スタン、何をボケッとしてる。早く寮に行くぞ』

「わかってるけどさ、ディムロス…この人、困ってるようだし、ほっとけないよ」

『何を言う。お前この間「ほっとけないから」と言って徹夜でバイトの手伝いして眠れず、次の日には昼休み終了までに寝坊して単位を取られたということを忘れたのか？』

「覚えてるって…でも今度は失敗しないからさ」

『フン、勝手にしろ』

「へいへい」

スタンがディムロスと呼ばれた剣を再び腰に差す。

「おい、大丈夫か？なんか独り言をしゃべってたみてえだが…」

「ん？ああ、大丈夫。こっちのことだから気にしないでくれな」

ディムロスの声は弦太朗にはまったく聞こえなかったようだ。剣に向かって話をする人間は当然いない。こいつ危ない奴だなと思った瞬間であった…しかも出会い頭「おーい、どうしたんだこんなところで叫んで？」と弦太朗に言ったスタンが剣を相手に会話するのは説得力に乏しい。そこでユウキが弦太朗の耳を貸す。

（スタン君の剣について触れないであげて）

（ん？ああ）

「さ、行こうぜ。寮まで案内してやるよ」

弦太朗はユウキとスタンに案内されるまま学生寮に着いた。しかしその建物は１５階建て、しかも３棟という大きなものであり、まるでマンションのような佇まいだ。弦太朗が驚愕する。

「すっげえな！近くで見るとでけえ！」

「大きいでしょ～」

「みんなここで暮らしてんのか？」

「ああ、年齢ごとに３棟に分けているんだぜ」

突如、『夢であるように』の着メロが流れ始めた。

「あ、俺か」

スタンが取り出したのは、やはりディムロスだった。スタンはディムロスの鍔の宝石を押すと、まるで携帯電話のように耳を傾ける。

「もしもし、リリス？」

『あ、お兄ちゃん。今、寮？』

「ああ。そっち部活は終わったか？」

『うん、今日は早めに切り上げたよ。今はあたしの部屋』

「そうか…今日うちのクラスに転校生が来てな…今これから住む寮の案内をしてあげたんだぜ」

『よかったね、お兄ちゃんに新しい友達ができて。いつかあたしにも紹介してよ』

「はいはい、わかったよ」

通話（？）を終えると、ディムロスを腰に差す。剣型の携帯電話など聞いたことがない。やっぱりこいつ危ない。

「弦太朗、これから俺は自分の部屋に向かうけど、せっかくだからお前の部屋の荷物、片付けるの手伝うよ！アドレスを教えるから後で呼んでくれ！」

「私も後でスタン君と一緒に行くからね！」

「おう、悪いなユウキ、スタン！」

スタンと一時別れた弦太朗は思った。自分の部屋に行くための鍵が必要だろう。鍵はおそらく寮長が預かっているはずだ。まず寮長に会いに行こうと考えた。

寮長室に着いた弦太朗はドアをノックし、寮長室に入った。

「失礼しやーす。鍵取りに来たんだけど…ヌォ！！」

弦太朗が見た光景は、まさしく散乱した部屋であった！お菓子の袋やパックは散らかったままで、ラノベやマンガが読み漁られてお

り、おまけにゴミ袋がパンパンに溜まっている！なぜか宅配ピザ（しかもピザハ●トである）の箱が数ケースがきれいに重なっているが…

「汚ぇ部屋だな…本当に寮長がいるのか？」

弦太朗が次に目をやったのは、やはりピザを食べながら寝転がってプ●ステ3でゲームをやっている、黄緑色の長い髪に黄金色の瞳をした女だ。数本のベルトが付けられた白い服をまとい、どことなくミステリアスな雰囲気を醸し出す女は、弦太朗の気配に気づくと振り向いた。

「…ん？何だお前」

「オレか？オレは如月弦太朗！夢はでっかくこの学校連中と友達になることだ！あんたが寮長か？」

「違うぞ。C・C（シーツー）・だ、如月弦太朗。いや……フォーゼ」

女はそう名乗ると、弦太朗がその呼び方を不思議に思う。フォーゼに変身してゾディアーツと戦って数時間も経ってないのに、C・C・が弦太朗のことを知っていた。

「え…なんでオレのこと知ってるの！？」

「私は何でも知っているからな…」

「よくわからん」

しかし不思議な人間だと弦太朗は思った。その時…

「C．C．！あれほど部屋を汚すなと何度も言ったはずだ！」

突然声が聞こえてきたので弦太朗が振り向くと、黒い髪をした高貴な感じの青年が立っていた。

「さぁ、知らんな」

「知らんで済まされるか！…ん？お前は誰だ？」

C．C．を怒っている青年が、弦太朗に気づく。

「如月弦太朗だ。いつかこの学園の連中と友達になる男だ」

「なるほど…お前が噂の転校生か。俺はルルーシュ・ランペルージ。高等部3年にして寮長だ」

「寮長！あんたが！？」

「信じられないだろうが本当だ。しかし今回はやけにシスコンキャラが二人も初出演を飾るな」

今のC．C．の発言が気に入らなかったのか、ルルーシュが彼女を黙らせる。

「ピザ女は黙っていろ。如月と言ったな。部屋の鍵は俺が持っている、ほら」

そう言うと、ルルーシュはポケットから鍵を取り出した。

「ありがとな！」

もう用はなくなったので弦太朗は寮長室から出ることにした。扉を閉めた時、ルルーシュの声が聞こえてきた。

「C．C．！さっさと部屋を片付けろ！」

「嫌だ、断る」

「そんなこと言うならピザを食わせんぞ！」

「何だと！口の利き方に気をつけてもらうぞ！グランドクロス！！」

「なにを～！牙連蒼破刃（ガレンソウハジン）！！」

意味不明なバトルが始まったが、弦太朗はスルーした。

鍵を開けてドアを開けると、そこには新世界が広がっていた！

ピカピカの床に清潔な白い壁。冷蔵庫、エアコン、洗濯機が完備されている。現在部屋には弦太朗の私物が入ったダンボールが置かれているが、結構広く、二人一緒に暮らせそうだ。

これが今日から住む自分の部屋なのか。

ピンポーン！

インターホンがなり、弦太朗が振り向くと、聞き覚えのある青年

の声が聞こえた。
「弦太朗、手伝いに来たぜ。お邪魔していいか？」
「（あの声はスタンだ。手伝いに来てくれたのか）おう、今開けるぜ」
弦太朗が扉を開けると、ユウキ、スタンと、見慣れない3人が弦太朗の部屋に入ってきた。
「おじゃましまーす！弦ちゃん、どう、新生活は？」
「なっかなかいいんじゃない！？」
「そう…よかった」
ユウキの表情が笑顔になった。
「大変そうだと聞いたから、人手を増やしてきたぜ。ほら」
スタンに呼ばれると、茶髪のやや二枚目な青年、天然気味な金髪少女、銀髪の理知的な少年が弦太朗の部屋にやってきた。
「俺はロイド・アーヴィングだ！よろしくな弦太朗！」
「コレット・ブルーネルだよ。これからもよろしくね！」
「僕はジーニアス・セイジ。あえてうれしいよ！」
3人の内、ロイドとコレットは弦太朗やスタンたちと同じ2年B

組である。弦太朗がジーニアスをじろじろ見るなり、こうつぶやいた。

「ん？小学生が混じってるのか？」

「し、失礼だな！僕はこれでも飛び級してるんだよ！高等部の１年A組に！」

「１２歳は小学６年生よ」

「う…」

ユウキに突っ込まれ、ちょっと顔を赤らめるジーニアス（１２）。ロイドが仕切る。

「さぁ、片付けをするか！早くしないと、夜寝ようにも寝られないぜ！」

「おおぉー！」

弦太朗、ユウキ、スタン、ロイド、コレット、ジーニアスが作業を開始してから1時間後。片付けは順調に進み、夜7時になる頃には全ての荷物が片付いた。その後、ユウキとジーニアスが手製の料理を振舞ってくれた。

「みんなお疲れ様。ほら、ごはんよ」

「お、サンキュー」

ユウキの手料理を受け取るロイド。

「ほら、僕のも」

「いつも悪いね、ジーニアス」

スタンさ皿によそったジーニアスの手料理はとてもおいしそうだ。弦太朗が彼の料理を食べると…

「う、美味えじゃねえか！」

「でしょ？」

「小学生扱いして悪かったな」

「いや、気にしてないって」

「コレットちゃん、お茶持ってきてくれないか？」

スタンがコレットに頼むと「わかったよ」と言って冷たい麦茶を持ってくるが…

何もないところでつまづいてしまい…？

「きゃぁ！！」

がしゃーん！！

「……」

麦茶は弦太朗の頭にかかった…リーゼントがびしょ濡れだ…

ユウキ「だっ、大丈夫弦ちゃん！？」

ロイド、スタン「大丈夫か弦太朗！」

ジーニアス「怪我してない、弦太朗！？」

「へっ、これぐらい怪我の内にはいんねえさ…」

「あうう…ごめんなさい、弦太朗君！」

コレットがひたすらに謝る。だが昔から彼女のことを知っているロイドとジーニアスは…

「そんなに気にするなよ、コレット」

「ま、コレットらしいけどね…」

こうして、楽しい転校初日が過ぎていくのでした――――――

放・課・時・間（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『テイルズオブデスティニー』

スタン・エルロン、ディムロス、リリス・エルロン

『テイルズオブシンフォニア』

ロイド・アーヴィング、コレット・ブルーネル、ジーニアス・セイジ

『コードギアス　反逆のルルーシュ』

ルルーシュ・ランペルージ、C．C．

『銀魂』

坂田銀時

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

仲村ゆり、立華奏

ルルーシュ：ルルーシュ・ランペルージが命じる！この部屋を片付けろ！

C．C．：……馬鹿かお前、ギアスは私に通用しないと言ったはず…

セシリア：どうしてわたくしが

ルルーシュ先輩の部屋を片付けなくてはいけませんのー！？

伝・説・神・話（前書き）

司馬昭：今回のアバンタイトルは俺らがやんのかよ…
　めんどくせ。

王元姫：子上殿。如月殿や坂田先生みたいに何か言えばいいから。

司馬昭：何か一言言えばいいんだな…よし！

　元姫を見てると、俺が元気になるぞー！

王元姫：……お仕置きよ。

司馬昭：ま、待て！こればっかりは許してくれ～！

伝・説・神・話

朝。

人通りのない路地裏ではちょっとしたいさかいが起こっていた。

「ちょっと！しつこいわよ！」

「そうです！やめてください！」

活発そうな黒髪ストレートの佐天涙子（さてん るいこ）と、花畑の髪飾りをした初春飾利（はる かざり）。中等部に通う中学一年生で、二人は親友同士である。

現在二人は朝の通学途中、人気のない路地裏にて街のチンピラに絡まれていた。無論、彼女たちは拒否している。

「いいじゃんかよ～、少しぐらい付き合ってくれたってよ～」

「俺らが君たちに夢見させてあげようって言うんだぜ！」

しかしチンピラたちは全然引き下がらない。

「いい加減にしてください！」

「しつこい男は嫌われるわよ！」

とうとう二人が逆上した。ふと、そこに…

「そこの嬢ちゃんの言うとおりだ」

佐天と初春の目の前には、一人の高校生の姿があった。彼は、リーゼント、Ｔシャツ、短ラン、ボンタンと言う古臭い容姿をしていた。チンピラの一人がリーゼントを睨みつける。

「なんだてめえは！？何しに来たんだコラァ！」

だがリーゼントはこう返答した。

「そいつらはオレの友達だ。友達に手を出す奴は許しちゃおけねえ」

「「はぁ！？」」

彼の返答にすっとんきょうな声を上げたのは佐天と初春のほうだった。彼女たちには、会ったこともないのに「オレの友達だ」とか変なことを言うリーゼントの友人になった覚えはまったくない。

（ねえ初春。あたしたちこんなのと友達になったことなんてないよ）

（そうですか、佐天さん？私にはあまり悪そうな人には見えませんが…）

二人が話していると、チンピラが一気呵成にリーゼントに襲い掛かった！

「野郎ども、やっちまえ！」

チンピラどもとリーゼントの戦いは１０分に及んだ…

「「助けてくれて、ありがとうございます！」」

初春と佐天が、先ほどの喧嘩に勝利したリーゼント、如月弦太朗に感謝する。しかし佐天がある疑問を抱く。

「でも、どうしてあたしたちを友達と決めつけたんです？」

「この学校の連中全員と友達になることがオレの夢だからな。見捨てる事はできねえ」

弦太朗が初春たちの制服をちょん、と触る。それは自分たちが通う黒楼州学園の校章であった。弦太朗はこの校章を視認し、友達だといっていたのだ。しかし、逆にこれがつけられていなかったら今頃初春たちはチンピラに捕まっていた。

「これからお前らとオレはダチだ、よろしくな！」

「「はい！よろしくお願いします！」」

３人は握手の後、友情の証である拳の打ち合いをした。しかし弦太朗の表情にはある焦りが見えていた…

「やっべえぇぇぇぇ！！早く学校に行かねえと遅刻しちまう！！」

通学路を走っているとき、幸村、ロイドの2人と出くわした。

「ロイドに幸村じゃねえか。どうした、お前等！」

「昨日早寝したから、朝で二度寝しちまったよ」

「それがし、鍛錬のしすぎで夜中4時に就寝したのでござる！」

要は寝坊だった。ロイドはともかく、幸村の場合はやりすぎである。

弦太朗、ロイド、幸村が校門にたどり着いたのは始業時間ギリギリであった。彼等の前に、サスペンダーを身につけている、アン●ールズの田中にそっくりな教師が待ち構えていた。彼は弦太朗の服装に目を付ける。

「おい、制服はどうした？」

「ああ、こないだ転校してきたばっかりッスから」

「転校？あ～お前か、校長先生に歯向かったという生徒は」

弦太朗の言い分に、彼はこの間の出来事を思い出していた。しかし思えば、弦太朗にとっては転校初日で、ユウキと再会した日でもあり、賢吾をはじめ、ハヤテ、唯らと出会った日でもあり、そして初めてフォーゼとしてゾディアーツと戦った日でもある。

3人はアン●ールズ田中にこっぴどく怒られた後、教室に入った。

今日の授業が終わったあと、弦太朗はB組の副担任に呼び出された。

彼女はリフィル・セイジ。ジーニアスの姉で、弟と同じく銀髪でスタイル抜群なお姉さん。クールで大人っぽく、頼りになる理想的な女性である。こんな形での登場なのは、別に後付け設定であったり、たまたま出すのを忘れたわけではない！

「何ですって？もう一度言って御覧なさい…！」

い、いえ…なんでもありません…（汗）

「誰と話してんスか、先生」

「あ…いいえ、なんでもないわ」

取り乱したリフィルがコホンと咳き込むと、話すべきことを弦太朗に話した。

「部活っすか！？」

「そう。弦太朗君はここに来て数日経つでしょう？ここは個人の自由や個性を尊重する校風だから別に入らなくてもあまり支障はないけれど、これからの将来のためにもあなたには部活に入ってもらいたいの」

「ってことは、俺が所属する部活が決まるまで見学しろってことっスか？」

「そう言うことになるわね。私や坂田先生に相談してもいいから、部活が決まったら生徒会に届出を出して」

そういったリフィルが弦太朗に差し出したのは一枚のプリント。それには『入部届』と書いてあった。

「しっかしどこにするか迷っちまうね～」

どこの部活に入ろうか迷っている弦太朗。いろいろな部活を見学してきたが、自分にあった部活が見つからない。

【剣道部】

ここには、２－Ｂの志村新八、桂ヒナギク、伊達政宗、１－Ａの篠ノ之箒が所属している。

まずはここだと弦太朗が入部した途端…いきなり黒髪の少女・シャナと箒が襲いかかってきた！

「あぶね！」

あわてて避ける弦太朗。そして、二人を制止しようとする少年が弦太朗の元を訪れた。

「すみませんでした！…シャナ！箒！なんてことすんだよ！」
「うるさいうるさいうるさい！こいつ道場破りよ、悠二！」
「当然だ！不埒者は成敗せねばならん！そのリーゼントがそうだ！」
道場破りだの不埒ものだの言われた弦太朗が逆ギレする。
「おい、いくらダチだからって言って悪いことがあるぞ！」
「「ダ…ダチじゃない！（照）」」
そこは何故か間をおいて否定するシャナと箒。どうやらツンデレな様子…
「「誰がツンデレだ！（照）」」
その時、頬に傷のついた、ヤクザのような剣道部の顧問である片倉小十郎が政宗に怒鳴りつけた。理由は竹刀を両手の指の間に3本ずつはさむと言う無茶な持ち方をし、それで稽古をしたからであった。
「政宗様！稽古中は六爪流はやめろとあれほど言いましたのに！」
「やれやれ小十郎。いつもの小言は聞き飽きたぜ」
だが教諭である小十郎の政宗に対する態度がおかしい。
「片倉先生の一族は政宗君の一族に代々使える家系なんですって。私も最初は驚いたけれど」

すると弦太朗の元におしとやかな女性、志村妙(たえ)がやってきた。新八の姉だと言うので、この人はなんかまともそうだ。

「新ちゃんの知り合いなのね…私は志村妙。新ちゃんの姉よ」

「おう、よろしくな！」

その時、床が突然開き（！？）、ゴリラのような面構えをした男の生首が出てきた！

「そこの君ぃ！お妙さんに気安く話しかけるとはいい度胸だ！この近藤勲(こんどういさお)の目が黒いうちにはお妙さんに近づく奴に」

「何勝手に入ってるのお前…ゴリラはとっととルワンダあたりに強制送還してもらえばどう？」

にこやかに、そして不気味に笑みを浮かべる妙が持っていたのは…薙刀だった。彼女は薙刀を近藤の首に向ける。

「え！？お妙さん…冗談やめてくださいよ…」

「妙先輩のストーカーよ、討伐して！」

「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！」

ヒナギクの合図と共に変質者を始末するシャナと箒。最近の女は恐ろしいものだと痛感した…

【ラグビー部】

ここは、２－Ｂの真田幸村が所属している。

数人の部員がグループを組んで練習していた。そんな最中、弦太朗の視界に入ったのは…！

「この馬鹿者がぁぁぁぁぁぁ！！」

毛皮の兜を纏った男が幸村を殴り飛ばした！その飛距離はなんと１２０メートル、飛びすぎだ！幸村は壁にぶつかって大きく飛ばされる。

「この馬鹿者が！驕りと慢心は己の最大の敵！心得よ！」

無駄に暑苦しいこのおじさんは武田信玄（たけだしんげん）。幸村にとっては教師と生徒の枠を超えた師弟関係にある。

ふと、立ち上がった幸村が信玄（お館様と呼ぶ）の名を呼ぶと…

「お、お館様！」

「幸村！」

「お館様ぁ！」

「幸村ぁ！」

「お館様ぁぁ！」

…なんか疲れたので帰ろうと思う。

【軽音部】

唯達と親しい弦太朗は、音楽室に足を運んだ。

…ドアに近づくと、ギターやドラムなどの演奏が弾けるようになっていく。

弦太朗は演奏の邪魔にならないよう静かに扉を開けた。中では女の子達が楽器を持って演奏をしていた。

そのうち、ギターを弾いている茶髪のショートカットの女性が歌っていた。彼女の歌声はとても良く、聴き入ってしまった。

しばらく弦太朗は、彼女の歌を最後まで聴き続けた。曲が終わり、彼女達は弾くのを止めたが、どうやら弦太朗の存在に気づいた様子だ。その人物、ユイが話しかける。

「あ！弦太朗先輩、見てたんですか！？」

「おう、なかなかよかったぜ」

「えへへ…どうも、弦ちゃん♪いらっしゃ～い！」

唯に言われ、音楽室に入る弦太朗。みんなから歓迎される弦太朗だが、一人、見慣れない少女がいた。先ほどの茶髪の女性だ。

「さっきの演奏、とても最高だったぜ」

「ありがとう。君がユイから聞いた転校生か…ガルデモのボーカルを務める岩沢（いわさわ）まさみだ。よろしくたのむ」

岩沢が弦太朗に挨拶し、握手する。そして彼女がついでにガルデモのメンバーを紹介する。

「ほかのメンバーも紹介しておくな。リードギターのひさ子に、ドラムの入江に、ベースの関根だ」

「「「「よろしくおねがいします！」」」」

「よければ、ご一緒にどうぞ」

上機嫌な弦太朗に、紬があるものが注がれたティーカップを薦めた。弦太朗がそれを手に取り、飲む。

「…紅茶じゃねえか」

「ええ、これは最高級の茶葉を使った紅茶で、一杯1万はするわ」

「ぶっ！！！」

いきなり紅茶を噴き出してしまう弦太朗。あまりの値段に、目玉も飛び出そうだった。

「お、お前等、こんなもんガブガブ飲んでんのか？！」

唯「そうだよ～」

澪、岩沢「まあな」

律「そうだぜ！」

梓、ユイ「そうですよ！」

やや困惑する弦太朗を前に、やはり紬があるものを薦めた。

「紅茶と入部届けよ」

「お、おう、ありがとな。ムギ」

…というのが現状である。弦太朗はとりあえず中庭を散歩をしてみた。

そこには、不良とおぼしきグループが集まっていた。だが、そのグループの中、ただ一人『妙』な奴を見かけた。

まず全身真っ赤な格好で、怪物のようないで立ちをしている。頭に角が二本生えており、その形相も凶悪と言っていいほどの強面で体色とあいまって恐ろしい印象を受ける。人間離れしているその姿は（ていうか誰がどう見ても人間には見えない）、まさしく赤鬼と呼ぶに相応しい人物であった。

本来、常識ある人間なら関わらないべきだが、もともと型破りな弦太朗にとっては屁でもない。その赤鬼のいるグループに聞いてみることに…

「よう、お前らなんの部活やってんだい？」

次の瞬間、赤鬼の仲間と思われる不良がこちらを睨みつけてきた！

「あぁーん！？何ウチの総長に眼つけてんだコラァ！！」

「てめえ、俺らを誰だと思ってやがる！」

そのうち、不良の一人が赤鬼に指差して言った。

「この方はなぁ！この学園の『四天王』の一角に君臨されておられる方なのだ！」

「このお方の名前を言ってみろぉ！」

いきなり質問される弦太朗。この学園の四天王だなんて聞いた事がない。

「名前？…赤鬼じゃねえのか？」

なんとなく思いついた言葉で答えを言ったが…

…それは、赤鬼の逆鱗に触れる事態となった。

「な…！ふざけやがって！俺様は赤鬼じゃねえ！！テメーらやっちまえ！！」

赤鬼が激昂すると、周りの不良十数人を呼び寄せた！やがて事態は弦太朗ＶＳ不良十数人のケンカという展開となった。

「俺はただ何かやってるのかって聞いただけなのに、何でケンカに発展するんだよ～！」

それはもともとあなたが悪い。

しかしそれでも、１対多数という状況であるにもかかわらず、弦太朗は次々と不良をなぎ倒していく。その姿に赤鬼も思わず見入ってしまう。そしてこんな言葉を投げかけた。

「噂どおりに普通に強ぇかと思ったらテメー、こないだ入ったばっかりの転入生か…気に入ったぜ！特別にこの俺様が相手をしてやらあ！！」

赤鬼が立ち上がると、弦太朗の前に歩み寄る。

そしてこの人物のファンなら誰もが知ってるあのセリフと決めポーズで名乗りを上げた！！

「俺、参上！！」

そう、奴こそこの学園最強とされる四天王の一人、モモタロスなのだ！

「てめえが勝ったら、この俺様をダチにしてやってもいいぜぇ！！」

「おもしれえ！お前を倒さねえと、この学校の連中友達になれねえからな！！」

そういって弦太朗はフォーゼドライバーを腰につける。そして…！

……3……

……2……

……1……

――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

フォーゼが背伸びし、大きく叫ぶ！！

「テメーが例のバケモンを倒したって言う奴か！相手にとって不足はねぇ！」

モモタロスが得物の大刀・モモタロスォードを抜く。

「俺は最初から最後までクライマックスだぜ！」

「如月弦太朗！タイマン張らせてもらうぜ！」

こうして、フォーゼＶＳモモタロスの戦いが、ついに幕を開ける

のだった…！

伝・説・神・話（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗

『とあるシリーズ』

初春飾利、佐天涙子

『テイルズオブシンフォニア』

ロイド・アーヴィング、リフィル・セイジ

『戦国ＢＡＳＡＲＡ』

伊達政宗、真田幸村、片倉小十郎、武田信玄

『銀魂』

志村新八、志村妙、近藤勲

『ハヤテのごとく！』

桂ヒナギク

『灼眼のシャナ』

シャナ、坂井悠二

『インフィニット・ストラトス』

篠ノ之箒

『けいおん！』

平沢唯、秋山澪、田井中率、琴吹紬、中野梓

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

ユイ、岩沢まさみ、ひさ子、入江、関根

『仮面ライダー電王』

モモタロス

スタン：ｚｚｚ…

リリス：おにいちゃん！いつまで寝てるの？

今回出番がなかったからって、寝るのはあんまりよ！

スタン：ＺＺＺ…

リリス：しょうがない…ならルーティさんから見よう見まねで覚えた、

「ブラッディ・ローズ」を…

（ガバッ）

スタン：や、やめてくれ！そんなの喰らったら俺、永眠だよ…

因・果・応・報（前書き）

ゆり：弦太朗君ことフォーゼとモモタロス先輩のバトル！
　仮面ライダーのキャラクターによるドリームマッチよ！

奏：…食べる？

（モモタロスに激辛麻婆豆腐を薦める奏）

モモタロス：なんだこりゃ（パクッ）

モモタロス：きゃあああああああああああ！！
　なんてモン食わせるんだてめえ！！

奏：ごめんなさい。苦手だったのね…

因・果・応・報

前回、転校したばかりでどの部活に所属するべきか悩んでいた如月弦太朗は、学園に君臨する「四天王」の一人と名乗るモモタロスと出会う。しかし弦太朗がモモタロスを赤鬼呼ばわりしたことが原因で彼を怒らせ、不良と戦う羽目になってしまう。だが十数人の不良を逆に返り討ちにする弦太朗を見て、モモタロスは「俺に勝ったらダチにしてもいい」と宣言し、弦太朗に宣戦布告する。そして弦太朗も「お前を倒さなきゃ全校生徒と友達になれない」とタンカを切り、フォーゼに変身するのであった。

「俺、参上！」

「宇宙キタァーーー！」

モモタロスが自慢の大刀「モモタロスォード」を構えると、フォーゼに向かって振りかざした！だがフォーゼは横に側転し、モモタロスの一撃をかわす。その隙にフォーゼはランチャースイッチをONにし、ランチャーモジュールを展開させる。

そしてモモタロスに至近距離からのミサイル爆撃を浴びせた！遠くに吹っ飛ばされるモモタロス。

「ヘッ！さすがこないだのバケモンを倒した奴、そこらの不良どもとは違うってか…面白くなってきたぜ！」

「よし、もう一発だ！」

フォーゼが再びランチャーを構える。だがミサイル発射寸前、モモタロスがモモタロスォードを投げつけた！大刀はミサイルに直撃し、誘爆によってフォーゼが爆発に巻き込まれた！

「おわぁ～！」

うつぶせに倒れるフォーゼ。ちょうどモモタロスォードが爆風によってモモタロスの元に戻ってきたので、再び大刀を手に取る。

「行くぜ行くぜ行くぜ～！」

モモタロスが上空にジャンプし、急降下してフォーゼに止めを刺そうとしたその瞬間、逆にフォーゼから高速の体当たりを食らう！

「うお！何が起こってやがった！？」

実は、フォーゼは倒れている途中、ランチャースイッチをＯＦＦにし、ロケットスイッチをＯＮにすることで、あらかじめ右手をロケットモジュールに変えていたのだ。ロケット噴射によってモモタロスに突進。その為モモタロスの奇襲は失敗に終わったのである。

「へへっ、デカいロケットにはこういう使い方もあるんだぜ！」

得意げにアストロスイッチのいいところを語るフォーゼ。だがモモタロスの気概も負けてはいなかった。

「思ったよりやるみてえだな…だがここからが本当のクライマック

スだぜ！」

フォーゼとモモタロスが戦っている最中、遠くからゴスロリの衣装を纏った黒髪に赤い瞳の少女が見守っていた。

彼女の名は、五更瑠璃（ごこうるり）。通称、黒猫（くろねこ）。

中等部に通っているが、見かけに反してオタク趣味であり、今回のこの行動を取っていたのも、フォーゼがゾディアーツを倒したと言う話が黒猫の耳に伝わり、一目見ようと高等部にやってきたからであった。

「ふうん…あの赤いの…さすがは４０年前より代々、悪しき魔の手から世界を救った伝説の勇者たちの眷属ってとこかしら」

一般人にしてみればわけのわからないことを言う黒猫。しかし彼女は本気である。

「でも、私の目的はあの噂の白いの…腕力だけが取り得の赤いのにはそろそろ見納めね」

黒猫はくすくす薄ら笑いを浮かべながら戦いを見守り続けた。

フォーゼとモモタロスはまだ戦いを続けていた。お互い体力を消耗しているものの、まだ完全に決着がついたわけではない。

「そろそろ片をつけるぜ！」

モモタロスがモモタロスォードを構えなおすと、気合を入れる。

「行くぜぇ！俺の必殺技、番長スペシャァァールッ！！！」

モモタロスがフォーゼに向かった大ジャンプした！そのとき…！

「おわ！！」

二人の間にいきなり変わったバイクに乗った賢吾が乱入してきた！賢吾の登場にあわせ、不時着しずっこけるモモタロス。

「こんなところで何油を売っている！」

「何しやがんだこの野郎！」

賢吾は戦いを邪魔されて激怒したモモタロスを無視し、フォーゼに向かって叱った。

「おい如月！そんな下らんことに勝手にフォーゼドライバーを使うな！」

「だけどこないだお前にも言ったろう、お前には無理だってな」

「おい無視すんな！聞いてんのか！？」

スルーされて激怒しているモモタロスを無視し、賢吾はあることをフォーゼに伝える。

「そんなことよりも如月、お前に呼び出しがかかっているぞ」

「呼び出し？」

「おい、今朝のことを知らないのか？」

そういって賢吾はフォーゼに手紙を渡す。その内容は…

二人の女子中学生を拉致した。一人で来い。
さもなくば、二人の命の保障はない。

学園の外れにある廃工場。

そこには、数十人のチンピラが集まっていた。彼等の中心には、氷のように冷めた面をした男が居座っていた。そして天井には、チンピラの一人によって二人の女子中学生がロープで吊るされていた。

「元就(もとなり)さん、こんな風でいいすかね！？」

「我が手間暇かけて作り上げた『日輪財団』に泥を塗った罪は重いのだ。それ以上の報いを彼奴に与えねば我の気は治まらぬ」

毛利元就と呼ばれた男が縛られた中学生を見上げる。

「離してください！！」

中学生の一人が怒鳴るが、元就は聞く耳持たない。

「籠の中のおうむめ、うるさいぞ。殺されたくなかったらその口をふさぐことだ」

その時、弦太朗が自転車を駆って廃工場を訪れた。

「毛利さんよ、来てやったぜ！！」

「一人で参ったか。今朝は我が舎弟が世話になったようでなによりぞ」

その時、弦太朗はあるものに目を付けた。

それは元就の手のものによって天井に縛られた、今朝チンピラに絡まれ、自分の手で救出された初春と佐天だった。

「「弦太朗先輩！！」」

「初春に佐天！？てめえ、何しやがった！」

「文字通りの意味よ。そなたが我が日輪財団の看板を汚したその結果ぞ」

初春と佐天を捕縛した理由は、弦太朗に対する報復であった。元就が「やれ！」と命じると、数十人のチンピラが懐から何かを取り出した。それは奇妙な形をしたＵＳＢメモリであった。彼らはメモリのボタンを押すと…

『ＭＡＳＱＵＥＲＡＤＥ』

という音声が鳴り出した。そして彼らはそのメモリを自分の肌に差し込んだ。

その瞬間、彼らの顔が変化した！彼らの顔が黒地に骨髄のような覆面を被った姿に変貌したのだ。不気味な覆面のチンピラが木刀や鉄パイプを振るい、一斉に弦太朗に襲い掛かる！

「こいつ等もゾディアーツか？！にしちゃ、ちっとおかしいな」

弦太朗も応戦する。覆面チンピラが長い鉄パイプを突いてきたのでこれを掴むと、チンピラごと投げ飛ばす！

「なんだよ、バケモンになってもたいしたことねえじゃんか」

だが背後からチンピラが弦太朗めがけて木刀で叩いた！その場にうずくまる弦太朗に、初春と佐天が叫ぶ！

「先輩！」

だが弦太朗はもうろうとした意識の中、元就を睨みつける。

「くだらねえな…たった一人を相手に、大人数でリンチしようと考えてんのかオレには理解できねえ…」

「しもべなど、しょせん捨て駒よ！」

そういって元就は、チンピラが持っているものと同じ形状のメモリを取り出す。そして自分の肌にメモリを挿入した。

『ＺＯＮＥ』

次の瞬間、元就はピラミッドのような化け物に変身した！

「てめえもバケモンだったのか！手足もねえくせに、叩き潰してやる！」

弦太朗はすぐさま懐からフォーゼドライバーを取り出そうとしたが…

「あ…フォーゼドライバーがねえ！賢吾に返したままだった！」

モモタロスと戦っていたあのとき、賢吾に返していたことを忘れていた！

「仕方ねえ、ステゴロ再開とするか！」

そういって弦太朗は覆面チンピラに殴りかかった！だが…

「な…消えた！？」

なんとチンピラの姿が消えてしまったのだ！いや、それだけではない。周りを見渡すと、数十人のチンピラの姿が消えていた。

「どうなってんだ一体…？」

弦太朗が周りをきょろきょろとしている間…

なんと次のチンピラの攻撃が弦太朗を襲った！そして時間差で現れたチンピラに袋叩きにされ、ついに弦太朗は倒れてしまった…

「おい、これ普通に卑怯じゃねえか…？」

弦太朗はその場に倒れ、目を閉じる…

怪物から変身を解いた元就はメモリを手にしていた。そして倒れたままの弦太朗に近づき、あざける。

「我に勝利しようなどという幻を見たか。貴様の失策は、何も知らずに我に牙を剥いた事よ」

初春と佐天は涙を流し、恩人の名を叫んだ…

「「先輩!?せんぱぁぁーい!!」」

弦太朗が倒れてから1時間は経ったのだろうか。

いつの間にか廃工場に来ていた黒猫が、大の字になって気を失っていた彼の元を訪れた。そして彼女はこうつぶやいた。

「まだよ…あなたはまだ死んではならない」

黒猫が近くにあった鉄パイプや木箱などを弦太朗の周りに置き始めると、今度はろうそくを取り出し、火を灯した後、やはり彼の周

りに置き始める。そして自分の懐からハンカチを取り出し、弦太朗の顔にそれをかぶせた。

…何かの儀式でもするのだろうか？黒猫が弦太朗の前にひざまずき、

「生死を司る神よ。この者に今一度の生を…」

という電波な言葉をつぶやきながら祈るような行動をした。それを数分続けた後、そして彼女が弦太朗の懐から携帯電話を取り出すと、誰かに通話し始めた…

因・果・応・報（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾
『仮面ライダー電王』
モモタロス
『とあるシリーズ』
初春飾利、佐天涙子
『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』
黒猫
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
毛利元就

黒猫：作者、私の出番って、これだけ？
次の回までに出さないと呪いをかけるわよ？

桐乃：そんなことよりもあたしの出番出しなさいよ！
この邪気眼がこの作品じゃ先出しってどういうこと！？

黒猫：……今何か聞こえたかしら？

紅・白・合・戦（前書き）

翔太郎：よう、読者のみんな。本編には出てきてねえけど、
『仮面ライダーW』よりハードボイルド探偵・左翔太郎だ。

フィリップ：同じく『W』よりフィリップ。翔太郎の相棒だ。
…翔太郎。ここでもカッコつけたがるなんて、相変わらず半熟だね。

翔太郎：るせえ！

亜樹子：そうそう…私は鳴海探偵事務所の所長、鳴海亜樹子よ！
ていうか本編に出てないなんて私、聞いてない！

竜：照井竜だ。確かに俺達は出てきていないが、
何故フォーゼがドーパントの相手をしている？

亜樹子：えーっとそれはね竜君。道具を使って化け物に変身するのって、
ゾディアーツと似てるっしょ！あと作者がWが好きだから！

フィリップ：ほう、興味深い…ゾクゾクするねぇ。

翔太郎：は、ははは…おっと、時間みてえだな。俺たちは楽屋に戻るか…
『こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園』始まるぜ！

紅・白・合・戦

前回、モモタロスを「ダチ」にするため、それをかけてバトルしていた弦太朗であったが、賢吾に呼び出され、自分が今朝助けた初春と佐天が捕まっているという事実を知る。学年を超えた「ダチ」を助けるため、弦太朗は一人初春・佐天誘拐の主犯である「日輪財団」の党首・元就のもとを訪れる。そこで元就配下のチンピラと戦うことになるが、賢吾にフォーゼドライバーを返却したことを忘れた上に、元就がゾーン・ドーパントに変身し、その特殊能力によって弦太朗は敗北してしまった。その後、フォーゼのことが気になっていた黒猫が、気を失っていた弦太朗の元に訪れた。

翌日、如月弦太朗は学園の保健室のベッドに横たわっていた。そして彼は目覚める。

「こ、ここは…」

「気がつきました?」

弦太朗が視界に入ったのは、金髪のおっとりした、優しげな美人であった。

「私はこの学園で保険医を務めているシャマルです」

「ハッ…そうだ、初春と佐天は…いてぇ！」

ベッドから降りようとするが、体に激痛が走る。シャマルは彼が心配で止めようとする。彼女はこの仕事をしている以上、これ以上他人が傷つくのが嫌な女性だ。その為弦太朗に無理をするなと諭される。

「その体では無理よ、如月くん。ここは絶対安静にしなさい。あなたはあの時倒れていたところを、２－Ｂの皆さんに助けられたの」

「といっても、誰かさんからの電話で呼び出されてお前をここに運んだわけだがよ」

といってあわられたのは銀時であった。そして銀時のほかにもユウキをはじめとする２－Ｂの生徒が弦太朗の元にやってきた。

「しかしテメーも無茶すんなぁ…中学生までダチにして、その上捕まった中学生を助けにいこうなんてよ」

「弦ちゃん、いくら友達思いだからといって危ないよ！あと少しで手遅れだったんだから」

ユウキも弦太朗を強く咎める。小学生以来の仲だったから、弦太朗の性格のことも彼女はよく知っているのである。

「そうか、弦ちゃん天使になるのか。南無阿弥陀仏ー」

「勝手に殺すなぁぁぁぁ！この話のキーキャラに向かって不謹慎だ

ろぉぉぉぉ！！」

新八のほうは手を合わせてお経を説く神楽を咎めていた。いいコンビだ。

そんな時、ロイドがあることを提案した。

「なぁ、日輪財団に殴りこみにいかねえか？」

「あ、俺も賛成」

「どうして殴りこみに行くんだ？危ないぞ！」

「そうだ。チンピラはともかく、あの元就って奴、結構油断ならないという話だ」

スタンは賛成するが、澪と愛紗は納得が行かず、ロイドを追及する。

「けどよ、ダチをこんなにした奴は絶対ゆるさねえ。ダチを助けねえと男が廃るぜ！」

「頑張ってね、ロイド、スタン君♪」

スタンも弦太朗の危機に憤慨していた。二人を応援するコレット。

「如月君、後は任せて。あのときの恩をまだ返していない」

奏も弦太朗に諭す。彼女はオリオンゾディアーツの件の際、弦太朗に助けられたからだ。

「私たちは今から弦太朗を助けるんだ。ヅラ、足引っ張るなよ」
ナギの辛辣な単語に桂は立ち上がった。
「ヅラじゃない桂だ！」
「でもヒナギクさんと苗字被るじゃないですか」
「そうそう」
ハヤテとヒナギクにも突っ込まれ、桂は自分の相棒であるエリザベスにしがみつく。
「エリザベスゥゥゥ！俺はクラスのみんなに嫌われてしまった！どうすればいいんだっ」
するとエリザベスはプラカードを取り出した。プラカードにはこう書かれていた。
『大丈夫ですよ桂さん。この作品が何かの事情で連載終了にならない限り、絶対桂さんにも出番が回りますよ』
「本当か！おおおお、やっぱりエリザベスは最高だぁぁぁぁ！」
『いえいえ』
この二人は放っておこうと思う。
「はぁー、めんどくせー」

風向きが日輪財団へ殴りこむ方向が強まっていく中、司馬昭は面倒くさそうにため息をついた。

「子上殿、転校してきたばかりとはいえ、友人を助けに行こうとか思わないの？」

「いつから如月と俺は友人になったんだよ」

「だったらこうしてあげる（ぐにゅ）」

「うお！元姫、それは…わ、わかったよ！やりゃあいいんだろ！？」

渋る司馬昭に呆れた元姫がある行動を取った…なんと司馬昭の下半身の●●を握りつぶした！さすがに司馬昭も焦り、しぶしぶ従う。彼女の行いに、愛紗も顔を赤らめた。

「な…どこを触っているんだ、元姫殿！（照）」

ちなみに元姫がどこを触ったのかはお察しください。

皆が日輪財団への殴りこみについて話し合っている中、御坂美琴が保健室にやってきた。

「あたしも暴れさせてもらっていいかしら？」

「あんた中等部の…」

「ええ、あの二人はあたしの友達よ。助けてくれてありがとうって

言いたいところだけど……まだ言えない。初春さんや佐天さん、そしてあんたをボコボコにした代償、あいつに払ってもらわないとね。借りはあとで返しておくわ」

その時、美琴の背後から、突然ツインテールでどこか卑しい雰囲気を持つ中学生が彼女に抱きついてきた！

「そのときはお姉さま、この白井黒子（しらい くろこ）が全身全霊をもってお守りいたしますわ～！」

「うわ、何すんのよ黒子！テレポートで背後からくっつくなぁー！」

美琴がしがみつく黒子を離そうとするが…二人の関係は良好なようだ。

「如月ー、その前に土方殺していいかー？」

「おい今なんつった？場合によっちゃ地獄見せるぞ」

こちらの沖田と土方の関係は相変わらずお世辞にもいえなさそうだ。

「あらま、転校早々たくさん友達作りやがって…だが嫌いじゃねえぜ如月。担任として俺も暴れさせてもらうわ。ッたく、男なのに惚れちまったじゃねーか」

銀時も弦太朗の尻拭いに参戦する。そう、この男は後々弦太朗と夜中二人で…

「何邪なこと考えてんだナレータァァ！惚れたってのはそう言う意味じゃねーぞ！」

「如月君、転校して間もないのにもうこんなに…慕われているのね。私の心配は要らないということかしら？」

「へへ、ありがとなお前等」

２－Ｂの心意気に、安心した弦太朗であった。

その放課後、体が癒えてきた弦太朗はラビットハッチにいた。賢吾とユウキからゾディアーツやドーパントについて聞かされていたため、その手がかりを求めてここに来たのだ。話は初春と佐天を助けたその日の昼休みにさかのぼる…

賢吾「ゾディアーツというのはアストロスイッチで宇宙空間に存在するコズミックエナジーを引き出し、マテリアライズさせることで変化する。ドーパントは地球の記憶を模したガイアメモリでドーピングすることでその能力を再現させる。いずれも風紀委員（ジャッジメント）が対応しているが…」

弦太朗「お、お前…カタカナばっかり使えばいいと思ってんだろ！」

ユウキ「つまり！ゾディアーツはスイッチ、ドーパントはメモリを使うことで変身するの。使えばとんでもないパワーが得られるってわけ。奴等を倒すにはそのスイッチをＯＦＦにしたり、ガイアメモ

リを破壊するしかないの！」

弦太朗「わかった…要はスイッチやメモリを持った野郎を見つけりゃいいって事だな？」

賢吾「君がやろうというのか？」

弦太朗「ああそうだ。お前にも認めさせてやるよ、このオレのやり方をな！」

と言うわけで、弦太朗はここにやってきたのだ。ラビットハッチは見慣れないものがたくさんあるため、好奇心に駆られて本を読み漁ったり、辺りを見回したりした後、いろいろな装置をいじりまくる。そして弦太朗があるボタンを押したとき、基地のハッチが開いた。

そして弦太朗は、驚愕の光景を目にする！

ハッチの向こうには、広大な宇宙空間が広がっていた…

「なんだこれ…まさか…嘘だろ…？いや、そんなことがあるはずねえ」

あまりの絶景に、思わず心を奪われ涙を流してしまう。弦太朗はあわてて涙を拭く。

ちょうどその頃、ユウキがラビットハッチに入ってきた。彼女は基地内で弦太朗を目撃する。

「げ、弦ちゃん！体大丈夫なの！て言うかあんた何勝手に入ってんの？」

「オ…オレはただ、怪物の手がかりを探していてな…どうしても賢吾に負けたくねえんだ。男の意地だ！」

ユウキが「呆れた…」とため息をつく。さらに弦太朗はユウキに質問する。

「でも、どうして外に宇宙が見えるんだ？」

「ここは月。月面基地『ラビットハッチ』よ！コズミックエナジーでこの月面基地と学校をつないでくれてるの」

「へえ。やっぱここは宇宙なんだ…」

弦太朗は目を輝かせながら、再び外の宇宙を見た。そしてユウキは語る。

「ねえ、フォーゼの使い方、どうして私が教えたと思う？弦ちゃんなら賢吾君を助けてくれるって思ったからだよ。小学校の時、いつも自分のことより友達のことに一生懸命だった。あの弦ちゃんならってね…」

学園管轄内のオフロード用のサーキット場では賢吾がスペースシャトルのような形をしたフォーゼ専用バイク『マシンマッシグラー』

を駆っていた。虚弱体質でフォーゼになれない賢吾は、せめてマッシグラーだけでも乗りこなして見せると、必死に走らせていたのだ。だが突然サーキット場に自転車に乗ってきた弦太朗が乱入してきた！

「うおぉぉぉぉ～～！待ってくれ賢吾～！」

弦太朗の自転車はマッシグラーに追いついていた。

「オレの負けだ！この事件を解決するにはオレじゃ無理だ！」

「フン、結局俺に認めさせることは出来なかったようだな！」

自転車、しかも凸凹だらけで舗装されていないオフロードを走っているにもかかわらず、スーパーバイクであるマッシグラーと対等に渡り合う弦太朗の脚力に、賢吾は驚きの色を隠せなかった。

しかし弦太朗の自転車はコース上から脱線！近くの障害物にぶつかり、弦太朗はコース外に飛ばされてしまった！

うつぶせに倒れる弦太朗に、賢吾は言葉を投げかける。

「無茶するからだ。わかったらもう俺に近寄るな」

その時ユウキがやってきた。彼女が見守る中、弦太朗は賢吾を説得する。

「お前の代わりは務まらねえが…お前を助ける事は出来る！知ってしまったんだよ…お前の背負っている重荷のことを…」

「まさか…！お前あそこに！？…貴様！」

賢吾がマッシグラーから降りると、弦太朗の胸倉を掴み、彼を睨んだ。

「今のままで、お前のやりたい事ができるのか？頼む…オレにしか出来ないことをやらせてくれ！！」

しばしの沈黙の後、賢吾は呆れたように弦太朗を放した。そして弦太朗の携帯の着メロが鳴ったのでそれを手に取り、電話をする。

「……なんだって？ちょっと待ってろ！今すぐ行く！」

弦太朗は携帯を切ると、賢吾とユウキに話した。

「…初春と佐天の居場所がわかった。２－Ｂの連中もそこにいる。オレちょっと行ってくる！」

「あ、弦ちゃん！ちょっと待って！」

弦太朗とユウキがある場所に向かって走り続ける。そして賢吾はただ一人残された…

とある廃工場の近く。

「うおぉぉぉ～！！！」

弦太朗とユウキがそこまで走っていた。そこには頭に薔薇を載せた、ゴスロリ衣装で黒髪赤目の女子中学生が待っていた。

「あいつらはどこなんだ?!」

「ちょちょちょ!落ち着いて!!」

ゴスロリに掴みかかったのであわててユウキが制止する。

「あなたが電話くれたの?」

「そ、そう。あなた…面白いから」

ゴスロリが薄ら笑いを浮かべながら弦太朗を指差す。ゴスロリの言動に普通に退いた。

その時賢吾がフォーゼドライバーを持ってやってきた。

「賢吾」

「これを使え。ただし、名前で呼ぶな」

「細かい男だ…行くぜ!!」

そういって弦太朗はフォーゼドライバーを腰につける。そして…!

……3……

……2……

……1……

――――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

フォーゼに変身した弦太朗が背伸びし、大きく叫ぶ！そして廃工場に向かって突進していった。

後ろからフォーゼの変身シーンを、赤鬼のような姿をした人物が見ていた。彼は得物の大刀を抜き、こうつぶやいた。

「ヘッ、俺様にも活躍させろってんだ」

廃工場では２－Ｂが日輪財団と対峙していた。天井には初春と佐天が吊るされていた。彼女が叫ぶ。

「「御坂さん！白井さん！」」

美琴と黒子が財団を仕切る元就に向かって叫ぶ。

「弦太郎さんの仇を取りに来たわよ！観念したらどう？」

「さあ、初春と佐天さんを解放なさいませ！お姉様は怒らせると怖いですわよ！」

だが元就は何食わぬ顔で応じない。

「それは出来ぬ相談だな…やれ！」

元就の命令と共にチンピラ数十人一斉がガイアメモリを取り出し、それを自分の肌に挿入した。

『ＭＡＳＱＵＥＲＡＤＥ』

その瞬間、黒地に骨髄のような覆面を被ったマスカレイド・ドーパントに変貌した！マスカレイドたちが木刀や鉄パイプを振るい、一斉に美琴たちに襲い掛かる！

「先手必勝ネ！ほぁっちゃぁぁぁぁ！！」

神楽がまず先制攻撃として助走をつけてから飛び蹴りをかまし、マスカレイドを吹っ飛ばした！

「ガードスキル、ハンドソニック」

奏が手甲から刀身を出現させると、マスカレイドに向かって突進。マスカレイド数人を切り捨てた。切られたマスカレイドは爆発した。

「ＤＥＡＴＨ　ＢＩＴＥ！」

「大車輪！！」

六刀を構えた政宗と、二振りの槍を握った幸村がそれぞれの得物を振るい、敵を上空へと打ち上げる！

「もらったぁー！！」

愛紗が二人が打ち上げた敵に向かって大ジャンプ！青龍堰月刀による一閃で蹴散らした！

「死ね土方ァァァァァ！！」

「グバッ！総悟、殺す！！」

「なにやっとんじゃお前らぁぁぁぁ！やる気あんのかぁぁぁ！！」

沖田の放ったバズーカが土方に誤爆！土方と沖田がケンカを始めたので新八が突っ込む。

「うらららぁ！！」

「お嬢様には指一本触れさせません！！」

二人がどこからそんなものを持ち出してきたのか、ゆりはショットガン、ハヤテはマシンガンを連射し、マスカレイドを一掃する！ナギはそんな二人を応援していた。

「ゆりー！ハヤテー！いいぞ！その調子だハヤテー！」

「お前どんだけハヤテ好きなんだよ！！」

銀時のツッコミが響く。

「虎牙烈斬(コガレツザン)！！」

ロイドが二刀を構え、マスカレイドを切り裂く！だが一体が倒されても数がぞろぞろと集まり、一向に減らない。スタンが手にする剣『ディムロス』が状況を皮肉る。

『さすがはチンピラ、数だけはある。いくら切り崩しても数が減らんな』

「だったら片っ端からやっつけてやる！断空剣(ダンクウケン)！！」

スタンがディムロスを構えると、まるで竜巻のように振り回した！竜巻は周囲のマスカレイドを巻き込み、粉砕してゆく。

「さあ、ビリビリ行くわよ！！」

美琴はコインを弾き、電磁加速によってレールガンを発射した！

だが、レールガンが直撃する瞬間、数人のマスカレイドが消えてしまった！そのためレールガンはかわされ、木箱の山を破壊した。

「何！？どこへ消えたの…？」

「わたくしと同じテレポートが使えるのかしら…？そんなドーパントなんて聞いたことありませんの…」

すると美琴と黒子が戸惑っているうちに瞬時に数十人のマスカレイドが美琴たちに襲い掛かってきた！そのまま袋叩きにされる２－Ｂ。

「うわぁぁぁぁぁ！！！」

初春と佐天が絶望を目にし、叫んだ…

「間に合ったか！？」

そんな時、フォーゼたちが廃工場にやってきた。そこには数十人のマスカレイド相手に苦戦している２－Ｂと、元就が変身したピラミッド状のドーパント・ゾーンがいた。

『いまさら援軍か、無駄な足掻きだ』

「気をつけてくださいまし！そのドーパント、結構出来ますの！」

黒子がフォーゼに向かって叫ぶ。ドーパントという言葉にピンと来たフォーゼは賢吾にあることを持ちかける。

「怪物についてはお前がよく知ってんだろ！？作戦をお前が立ててくれ！そしたらオレがそれをやる！」

賢吾はしばし考えた後、「…わかった」と返答。ハンバーガー型メカ『バガミール』にカメラスイッチを挿入し、それを起動させる。するとバガミールが偵察モードに変形した。

「作戦を考えている間、持ちこたえておけよ！」

戦況を見守っていたユウキが「…よし！」と小さくガッツポーズ

を取った。

その時…

「待てやこの野郎！！この俺様を差し置いてドンパチとは黙ってられねえな！」

すると廃工場の入り口からモモタロスが現れた！フォーゼが突然の援軍に驚く。

「よう『坊主』！お前のクラスが大ピンチだって言うから来てやったぜ！」

「オレは坊主じゃねえ、フォーゼだ！しかしモモタロス…よく来てくれたな！」

「へッ、まあな…」

そして、電王ファンなら知っているあのポーズで名乗りを上げた！

「俺、参上！」

『赤鬼の分際で…さっさと退治されるがいい』

「な…なんだとぉ！？おいピラミッド野郎！今日はこのシーンのた

めに出番とイライラを溜めてきたんだ。ここからは徹底的にクライマックスだからな！！」

ゾーンに挑発され、激昂したモモタロスが大刀を持って暴れ始めた！モモタロスによってマスカレイドが蹴散らされていく。

「あのドーパントの能力がわかったぞ」

しばらく戦闘を続けていると、賢吾がゾーンの解析を完了した。ゾーン・ドーパントは、空間をねじ曲げる能力を持ち、特殊なフィールドを展開し座標指定をすることで、ターゲットを一瞬で遠くに移転させられる。ゾーンはこの能力で、大人数で動くマスカレイドをまるで将棋やチェスのように動かしていた。

「そうか…よし行くぜ！」

そういってフォーゼがランチャーとレーダーのスイッチをＯＮにし、両方を出現させる。レーダーを構えると、ミサイルランチャーをモモタロスに向けて発射した！

「ちょ、ちょおい！何狙ってん」

次の瞬間、ミサイルがゾーンの能力でモモタロスを襲撃したマスカレイドに命中！マスカレイドは四散した。

「おい、あぶねえな！何考えてんだよ坊主！」

「悪い悪い！こうでもしねえと、あのピラミッドには勝てねえからな！」

『ま、まさか…！？計算してないぞ？』

フォーゼの突拍子もない戦法で焦り始めるゾーン。そしてフォーゼとモモタロスは背中を合わせる。

「オレと一緒に戦おうぜ、モモンガ！」

「俺はモモンガじゃねえ！モモタロスだ！」

マスカレイドを倒し続けるフォーゼとモモタロス。そして残るはゾーンのみとなった。

「モモタロス！オレを持ち上げてくれ！！」

フォーゼがそう言うとロケットスイッチをＯＮにする。

「そしてあのピラミッド野郎に向けて投げ飛ばしてくれ！！」

「お、おう、わかったぜ！！」

モモタロスはロケットモジュールを装備したフォーゼをゾーンに向けて投げ飛ばした！そしてフォーゼはドリルスイッチをＯＮにし、ドリルモジュールに換装した！ロケット推進によってゾーンに向かって猛進していく！

フォーゼ＆モモタロス「俺たちの必殺技、宇宙上等バージョン！！」

そしてドリルに貫かれたゾーンは撃破され、メモリブレイクされた！ガイアメモリは破壊され、元就はボロボロになった。

「もう一度…日輪を見たかった…」

一方、美琴と黒子は初春と佐天を救出した。佐天が詫びるが、美琴はそんなことも気にしていない。

「すみません御坂さん、白井さん。あたしたちのために…」

「いいって事よ。あたしたちはもともと友達なんだから」

しかし黒子が疑問を浮かべる。

「ですが、あのフォーゼと言うのは一体何者なのですの？」

「そうですね…私のほうで調べてみます」

「頼みましたわよ、初春」

日輪財団に勝利した弦太朗はモモタロスと会っていた。

「ヘッ、前々からすげえ思ってた奴だったが…なかなかにクライマックスなヤツだよ、てめえは！」

「おう、お前ともダチになるからな！」

こうしてモモタロスと弦太朗は友情の証として拳を打ち合った…

その後、先ほどのゴスロリ・黒猫に呼び出された。

「あなた…仮面ライダーね？」

「仮面ライダー？」

黒猫が言うには、４０年前から悪しき魔の手からこの世界を救った伝説の勇者には代々「仮面ライダー」と名付けられる慣わしがあるという。

「仮面ライダー…なんかいい響きだな」

弦太朗は一人満足そうな笑顔を浮かべていた。

ラビットハッチに戻った弦太朗、賢吾、ユウキ。

「ドライバーは君に預ける。それと…」

フォーゼドライバーを弦太朗に渡す賢吾であったが、賢吾はあるものを指差す。

「なんだあれは？」

ラビットハッチの天井には、大きな旗があった。フォーゼの顔が描かれてあり、フォーゼの顔の下にはＫＲＣ（Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅｒ　Ｃｌｕｂ）の文字があり、『つかむぜ、宇宙！！仮面ライダー部』と言うキャッチコピーがされていた。

「見てわかんねえか？仮面ライダー部だ！この学園を悪の組織から守ろうって部活だ！お前も入れ！」

「私は部員１号！」

この仮面ライダー部は黒猫からの伝説を聞いた弦太朗とユウキが大変気に入り、部活として設立したものだった。

だが賢吾の内心は穏やかなものではなかった…

「如月…やっぱりフォーゼドライバーを返せ！！」

あわてて逃げ始める弦太朗を追っかけまわす賢吾。ユウキが笑顔で見守っていた。

こうして仮面ライダー部の活動が始まったのだ！

紅・白・合・戦（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『仮面ライダー電王』

モモタロス

『とあるシリーズ』

御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子

『銀魂』

坂田銀時、志村新八、神楽

桂小太郎、エリザベス、土方十四郎、沖田総悟

『ハヤテのごとく！』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ、桂ヒナギク

『けいおん！』

秋山澪

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

仲村ゆり、立華奏

『戦国ＢＡＳＡＲＡ』

伊達政宗、真田幸村、毛利元就

『真・三國無双シリーズ』

司馬昭、王元姫

『真・恋姫無双』

愛紗

『魔法少女リリカルなのは』

シャマル

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』

黒猫

映司：みんな、元気かい？俺は『仮面ライダーＯＯＯ』より、火野映司。

アンク：アンクだ。メダルどころか、人物一人も出てこない
　俺らが何故この作品の宣伝をせねばならん…

映司：それは、フォーゼとモモタロスがここで共演したからに決まってるでしょ！

アンク：だったらオーズも出すように作者に申告しておけ！
　映司！このメダルを使え！！

映司：こ、このメダルは…？なにかわからないけど、変身！

　ギャバン！
　シャリバン！
　シャイダー！
　宇宙刑事～、ギャリダァ～♪

映司：ちょっとこのコンボはないって！

アンク：オーメダルの中の人ネタだ！

後藤：…と言うわけで、ここまでがフォーゼ編だ。だが、この作品はまだ続くし、
　またフォーゼやほかのキャラが活躍したりバトルしたりするかも知れん。

比奈：読者の皆さま、これからも応援よろしくお願いします。
　私、泉比奈と後藤慎太郎さんがお送りいたしました！

設定資料（１１／２８更新）（前書き）

生徒、教職員名簿とテーマ曲一覧です。

キャラや作品が増える、または変わり次第、ここに追加・変更しておきます。

そのキャラが名簿にあるのに本編に登場しない場合、ご了承ください＾＾；

設定資料（11／28更新）

オープニングテーマ：「Ｓｗｉｔｃｈ　Ｏｎ！」　仮面ライダーフォーゼＯＰ
　弦太朗、賢吾、ユウキ以外の人物は出す予定はないので、フォーゼＯＰで美羽、隼、友子、ＪＫのところを、好きなキャラで脳内変換して楽しんでもらって結構です。

２年Ｂ組
　担任：坂田銀時『銀魂』
　副担任：リフィル・セイジ『テイルズオブシンフォニア』
　学級長：桂ヒナギク『ハヤテのごとく！』
『仮面ライダーフォーゼ』
　如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『銀魂』
　志村新八、神楽、桂小太郎、エリザベス、土方十四郎、沖田総悟
『ハヤテのごとく！』
　綾崎ハヤテ、三千院ナギ、桂ヒナギク、愛沢咲夜
『けいおん！』
　平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬、真鍋和
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
　仲村ゆり、立華奏、音無結弦、日向秀樹
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
　伊達政宗、真田幸村
『テイルズオブデスティニー』
　スタン・エルロン
『テイルズオブシンフォニア』
　ロイド・アーヴィング、コレット・ブルーネル
『真・三國無双シリーズ』

司馬昭、王元姫
『真・恋姫無双』
桃香、愛紗、星

2年A組
担任：西村宗一（鉄人）『バカとテストと召喚獣』
副担：山中さわ子『けいおん！』
学級長：坂本雄二『バカとテストと召喚獣』
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
岩沢まさみ、野田
『緋弾のアリア』
神埼・Ｈ・アリア、遠山キンジ、峰理子、星伽白雪、レキ
『真・三國無双シリーズ』
関平、星彩
『僕は友達が少ない』
羽瀬川小鷹、三日月夜空、柏崎星奈
『バカとテストと召喚獣』
吉井明久、姫路瑞希、島田美波、木下秀吉、
坂本雄二、土屋康太（ムッツリーニ）、霧島翔子
『涼宮ハルヒの憂鬱』
朝比奈みくる
『フルメタル・パニック！』
美樹原蓮

2年C組
副担任：ニコ・ロビン『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』
『テイルズオブジアビス』
ルーク・フォン・ファブレ、ティア・グランツ、ナタリア・Ｌ・Ｋ・ランバルディア
『テイルズオブレジェンディア』

セネル・クーリッジ
『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』
モンキー・Ｄ・ルフィ、ロロノア・ゾロ、ナミ、ウソップ、サンジ
『スケットダンス』
ボッスン、ヒメコ、スイッチ
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
長宗我部元親、前田慶次、猿飛佐助
『ＦＡＴＥ』
セイバー、衛宮士郎
『無限のフロンティア　スーパーロボット大戦ＯＧサーガ』
アレディ・ナアシュ、ネージュ・ハウゼン

1年Ａ組
担当：織斑千冬『インフィニット・ストラトス』
委員長：セシリア・オルコット『インフィニット・ストラトス』
『けいおん！』
中野梓
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
ユイ
『とあるシリーズ』
上条当麻、土御門元春、固法美偉
『テイルズオブシンフォニア』
ジーニアス・セイジ
『魔法少女リリカルなのは』
スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター
『インフィニット・ストラトス』
織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、
シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ
『マクロスＦ』
早乙女アルト、ランカ・リー、シェリル・ノーム

ミハエル・ブラン、ルカ・アンジェローニ
『フルメタル・パニック！ふもっふ』
相良宗介、千鳥かなめ

1年B組
担当：ローエン・J・イルベルト『テイルズオブエクシリア』
『涼宮ハルヒの憂鬱』
キョン、涼宮ハルヒ、長門有希、古泉一樹
『灼眼のシャナ』
シャナ、坂井悠二
『真・恋姫無双』
恋
『テイルズオブエクシリア』
ジュード・マティス、レイア・ロランド
『テイルズオブヴェスペリア』
リタ・モルディオ

1年C組
『銀魂』
山崎退
『新機動戦記ガンダムW』
ヒイロ・ユイ、トロワ・バートン
『真・三國無双シリーズ』
関索

3年A組
担任：ジェイド・カーティス『テイルズオブジアビス』
『銀魂』
近藤勲、志村妙
『BLAZBLUE』

シシガミ＝バング
『フルメタル・パニック！』
クルツ・ウェーバー
『無限のフロンティア　スーパーロボット大戦ＯＧサーガ』
ハーケン・ブロウニング、楠舞神夜

３年Ｂ組
委員長：フレン・シーフォ『テイルズオブヴェスペリア』
『仮面ライダーディケイド』
門矢士
『仮面ライダーＷ』
左翔太郎、フィリップ、鳴海亜樹子、照井竜
『魔法少女リリカルなのは』
高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやて、ヴィータ、シグナム
『テイルズオブヴェスペリア』
ユーリ・ローウェル、フレン・シーフォ、エステル
『テイルズオブエクシリア』
ミラ＝マクスウェル
『テイルズオブデスティニー２』
バルバトス・ゲーティア、ロニ・デュナミス

３年Ｃ組
委員長：司馬師『真・三国無双シリーズ』
『仮面ライダー電王』
モモタロス
『テイルズオブヴェスペリア』
ジュディス
『コードギアス　反逆のルルーシュ』
ルルーシュ・ランペルージ（学生寮寮長）

『真・三国無双シリーズ』
司馬師、周泰
『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ』
キラ・ヤマト、ラクス・クライン（理事兼任）
『機動戦士ガンダム００　セカンドシーズン』
刹那・Ｆ・セイエイ

中等部
『とあるシリーズ』
御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子
『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』
高坂桐乃、黒猫
『テイルズオブデスティニー』
リリス・エルロン
『テイルズオブシンフォニア』
プレセア・コンバティール
『魔法少女まどか☆マギカ』
鹿目まどか、暁美ほむら
『そらのおとしもの』
桜井智樹、美月そはら、守形英四郎、五月田根美香子
『真・恋姫無双』
朱里、雛里
『新世紀エヴァンゲリオン』
綾波レイ
『ギャラクシーエンジェル』
ヴァニラ・Ｈ
『ポケットモンスター』
タケシ
『ハートキャッチプリキュア』
花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき

初等部
『ポケットモンスター』
サトシ、ピカチュウ（特別許可）
『魔法少女リリカルなのは』
エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ、ヴィヴィオ
『機動戦艦ナデシコ』
ホシノルリ
『アルカナハート』
リーゼロッテ・アッヒェンバッハ

教職員
『銀魂』
坂田銀時　国語担当
『テイルズオブシンフォニア』
リフィル・セイジ　歴史担当
ゼロス・ワイルダー　恋仲冷遇部顧問
『テイルズオブジアビス』
ジェイド・カーティス　化学担当
『インフィニット・ストラトス』
織斑千冬　数学担当
『けいおん！』
山中さわ子　音楽担当、軽音楽部顧問
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
片倉小十郎　剣道部顧問
武田信玄　体育担当、ラグビー部顧問
上杉謙信
まつ
『とあるシリーズ』
月詠小萌　公民担当

『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』
トニー・トニー・チョッパー　養護教諭
『魔法少女リリカルなのは』
シャマル　養護教諭
『バカとテストと召喚獣』
西村宗一（鉄人）　補修担当
『スーパーロボット大戦　オリジナルジェネレーション』
レーツェル・ファインシュメッカー　家庭科担当、料理部顧問
『真・三國無双シリーズ』
諸葛亮　生徒の相談役

風紀委員
局長：近藤勲『銀魂』
副長：土方十四郎『銀魂』
沖田総悟、山崎退、照井竜、御坂美琴、白井黒子、固法美偉、
綾崎ハヤテ、桂ヒナギク、高町なのは、フェイト・テスタロッサ、
八神はやて
スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、ヴィータ、シグナム
ルーク・フォン・ファブレ、ティア・グランツ、ユーリ・ローウ
エル、フレン・シーフォ
神埼・Ｈ・アリア、遠山キンジ、峰理子、星伽白雪、レキ
相良宗介、仲村ゆり、立華奏、愛紗、篠ノ之箒、ラウラ・ボーデ
ヴィッヒ

生徒会
生徒会顧問：アムロ・レイ『機動戦士ガンダム　逆襲のシャア』
高等部
生徒会長：門矢士『仮面ライダーディケイド』
真鍋和『けいおん！』
桂ヒナギク『ハヤテのごとく！』

美樹原蓮『フルメタルパニック！』
中等部
生徒会長：五月田根美香子『そらのおとしもの』

学園のトップ
高等部校長：シャア・アズナブル『機動戦士ガンダム　逆襲のシャア』
初等部校長：世紀末覇者　ラオウ『北斗の拳』
理事長：ハマーン・カーン『機動戦士Ｚガンダム』
理事団：ラクス・クライン『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ』
教頭：不明

その他（外部出演、ゾディアーツ、ドーパント含む）
『仮面ライダー電王』
ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、デネブ、ジーク
『仮面ライダーディケイド』
海東大樹
『仮面ライダーＯＯＯ』
火野映司、アンク、泉比奈、後藤慎太郎
『銀魂』
長谷川泰三
『とあるシリーズ』
インデックス
『コードギアス　反逆のルルーシュ』
Ｃ．Ｃ．
『マクロスＦ』
オズマ・リー、グレイス・オコナー
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
毛利元就、今川義元

『魔法少女まどか☆マギカ』
キュゥべえ
『そらのおとしもの』
イカロス、ニンフ、アストレア
『これはゾンビですか？』
ユークリウッド・ヘルサイズ
『仮面ライダーシリーズ』
仮面ライダースーパー1、仮面ライダーストロンガー
仮面ライダーシザース（龍騎）、仮面ライダーゾルダ（龍騎）
仮面ライダーイクサ（キバ）
『モンスターハンターシリーズ』
リオレウス、ティガレックス、ナルガクルガ、ラギアクルス、ジンオウガ

満・腹・絶・倒（前書き）

家康：この学園の連中と友達になること…
　弦太朗はすごい目標を持っているのだな！

幸村：おう！弦太朗殿はまこと立派な漢の鏡でござる！

三成：フン、下らん！家康ほどではないが、無性に斬滅したくなる！

元就：我もあの男の性で散々に扱われた…万死に等しい！

政宗：アンタも人のこと言えねえな、石田三成！

慶次：その髪型があいつに似てるぜ！！

三成：…ヤツと一緒にするな！！

元親：はっはっは！いつか俺らも、この作品に呼ばれる日が来るといいもんだ！

満・腹・絶・倒

飲食の欲、好色の欲、睡眠の欲、名誉の欲、金品の欲、強さの欲、好奇の欲…

人間には、捨てられないものがある。それは「欲」である。

この学園の昼休みはどのような食事を摂ってもよい。

まずは、弁当だ。

親や恋人が真心込めて作り上げた弁当を平らげた者に、初めて親や恋人からの愛情を知ることができるであろう。

だが、そんなものよりももっと破壊力があるのは「片思い」への弁当だ。もじもじしながら片思いしてる人が「これ、食べてください」などと言ってされている人に弁当を手渡し、それで食べてもらったらその片思いしてる人はやはり幸せだ。

次に、買い食いだ。

売店で少ない出費と姑息な頭脳を駆使し、パンとか弁当とかおにぎりとかカップ麺とかお菓子とかジュースとかを買い、それで腹を満たす。

また当たり前のようかもしれないが、学園管轄の売店は２４時間営業ではないので、売れ残りで割引されているものが売っていたら隙あらばその手に掴み取り、レジへ運んでいくのだ。

このことから、生徒たちの金銭状況を物語っていることが伺える。

そして、学食だ。

この学園には当たり前のように学食がある。

学生のためにセルフサービスによって人件費が削減され、食材を安く仕入れることで比較的ボリュームのある飲食物を提供できる。つまり「味と安さと早さと満腹感のバランスのとれた食事」を取ることができるのだ。

また、ここでは中庭のあるカフェテラスもあり（転校編でいったん破壊されたが、何故かこの時点で元に戻っている）、いずれも安い割にはメニューは豊富で、その数は居酒屋にも匹敵する。

ここ、学食ではある中等部の生徒が考案したと言う『マーボーカレー』なるものが人気だ。その値段は６００円。このマーボーカレーを、３人の生徒が食していた。ちなみにいずれも３－Ｂ組である。マーボーカレーを口に含ませた兄貴肌の黒髪の青年・ユーリがこう言う。

「ンナァ、ヒイタカ、ウウェン、エフフェル。アオウォウォタロフガウィネンノフェンコーヘートホガグニウァイアッタッテヨ（んなぁ、聞いたか、フレン、エステル。あのモモタロスが2年の転校生と互角にやりあったってよ）」

「ユーリ、食べながらしゃべるのは善くないよ…」

真面目な金髪の青年でユーリの幼馴染であるフレンが彼に注意する。

「でも、その転校生、この学校の人たちと全員友達になるって噂があるのですが、何か壮大なロマンですよね！わたし、尊敬してしまいます」

穏やかで天然なピンク髪の女子生徒、エステルが目を輝かせながらその転校生（しかも後輩）に思いを馳せる。彼女はいわゆる箱入

り娘で、その影響か思い込みの激しいロマンティストになってしまっている。

「あら、こんなところにいたのね」

3人のもとに尖った耳に後頭部に奇妙なものをつけた青髪の女子生徒、ジュディスがやってきた。持ってきたのは、やはりマーボーカレーである。

「ジュディ。お前確か、モモタロスと同じクラスだよな。あいつに関して何か変化はなかったのか？」

ユーリに呼びかけられるジュディス。彼女は3人とは別のクラスであった。

「そうね…以前、2－Bが中等部の生徒を助けるために日輪財団に殴りこみに行ったのを覚えてる？あの時、モモタロスも殴りこみに行ったそうよ。うふふ、私も行けばよかったかしら…」

ジュディスが見せる本性に若干引く3人。ジュディスはスタイル抜群の美人で普段こそ落ち着いているが、マイペースで好戦的であり、彼女の美貌に惹かれてナンパした男たちを何度も返り討ちにしているという噂が後を立たないらしい。

「2－Bって、確か噂の転校生のいるところです？」

ジュディスの報告にエステルが口を出す。しかも頭の中はやはりロマン溢れている。まぁユーリ達はそんなに悪い人間ではないといっているが。

「そういえば、転校生見たことあるんだ。ほら、２－Ｂの生徒と一緒に」

フレンが指差すと…

銀髪天然パーマの死んだ目の教師と、眼鏡をかけたなんか地味そうな生徒、オレンジっぽい髪のチャイナ娘、そしてリーゼントという昭和の不良のような青年が席に座っていた。

「あ～！いつまで俺らはこんなもん食い続けなきゃいけないんだ？」

銀時は教師と言う立場でありながら教え子の新八、神楽、弦太朗の４人で食事を取っていた。銀時はたぬきうどん（２００円）、新八はカレー（２００円）、神楽は玉子丼（２００円）を食べていた。

銀時、新八、神楽は一応住居は持っていて同居しているのだが、その経済状況は火の車である。そのため、うどん→カレー→玉子丼→うどん→…とローテーションを組んで食べているのだ。しかもこの３つのメニューはこの学食で最も低い値段で提供されている。

その様子を眺めていた弦太朗は銀時を「銀さん」と呼び、こういった。

「銀さん、いい加減飽きねえか？毎回うどんとカレーと玉子丼じゃ」

「そう言う弦ちゃんはいいアル。ちゃんと私らのモンよりマシなもん食ってるネ」

神楽に言われた弦太朗が口にしていたのは、カツ丼（３５０円）

であった。

「カフェテラスにでも行けばいいじゃん。あそこは１００円でいい食いモンそろってるぜ。ハンバーガーとかホットドッグとかよ」

「嫌だ！ハンバーガー２個で２００円も取られたくねえよ！どこのマク●ナルドだよ！」

銀時がかたくなに拒絶する。カレーを食べていた新八が呆れてため息を吐く。

「銀さん、もうあきらめましょう。ハンバーガー２個でもおなかが満たされないでしょうし」

その時、新八の言葉を遮るかのように大きな声が響いた。

「いやいやいや！今カフェテラスはすっげえとこやってるよ！」

弦太朗たちの前に現れたのは、派手なちょんまげに派手な髪飾りをしており、肩に猿を乗せたいかにも傾奇者という感じの青年だ。

「俺は人呼んで学園の風来坊・前田慶次（まえだけいじ）ってんだ！ＫＧと書いてＫＧ（けいじ）って呼んでくれ！んでこっちの猿は夢吉な」

傾奇者は両手をクロスさせ、左右の指でそれぞれ「Ｋ」と「Ｇ」の文字を作って自己紹介した。

「…なんか胡散臭そうですね」

「そうアル、こういうのは関わらないほうが身のためネ」

「うん、あれだよ。『かまってちゃん』って言うんだっけ？」

「待て待て！俺をそんな風に見ないでくれ！」

無視しようとする万屋メンバーを制止する。慶次はカフェテラスに関する情報を仕入れていた。

「今、ここの学園のカフェじゃ、大食い大会が開かれているんだぜ！」

「へえ！面白そうだな！」

「やめとけ、こういう奴は関わるとろくな事がねえぞ」

好奇心旺盛な弦太朗を諌め、無視する銀時以下２人。だが次の慶次の言葉が、万屋メンバーの心を突き動かした…

「この大会で優勝すれば、賞金５万が手に入るよ！！」

「うおおおおおおおおおお！！！絶対優勝して金もらうぞおおおおおお！！」

銀時「後は頼んだ！弦太朗！」

新八「後はお願いね！弦太朗君！」

神楽「後は任せるネ！弦ちゃん！」

金に対する執念に魂を燃やした3人は、うどんとカレーと玉子丼を残して弦太朗に差し出し、猛ダッシュでカフェテラスへ急行した！物欲に目が眩んだ3人を見送った弦太朗はため息を吐く。

「ろくなことになんねえって言ったのは銀さんだってのに…大丈夫なのかね」

一方、慶次からの情報を聞いたユーリ達は…

「大食いねぇ…オレはごめんだな」

「僕はもうマーボーカレーで限界だよ…」

「私も今ダイエット中だから…」

ユーリ、フレン、ジュディスが大食い大会に興味がわかない中…

「やってみたいです！」

エステルが立ち上がり、カフェテラスに足を運ぼうとした！

「待てよエステル！大丈夫なのかよ？」

ユーリが必死に止めようとしたが…

「わたし、大食い大会出てみたかったんです。テレビチャ●ピオンで見ていましたから♪」

エステルの天然発言に3人はコケた。

『胃袋のでけえヤツ、出て来いやー！月一回のカフェテラス名物、大食い大会が今月もやってまいりました！ルールは簡単！出された食べ物をガツガツ食って食って食いまくるだけ！！勝者には賞金5万円が授与されます！』

ハイテンションにマイクを握り、意気揚々に叫ぶ高田●彦にそっくりな司会者の号令のもと、カフェテラスで大食い大会が開催された。観客の歓声がカフェでこだまする。

『まずはエントリーナンバー1！2ーCのモンキー・D・ルフィ！！』

まず最初に現れたのは、麦わら帽子を被った無邪気な少年だった。

「おーっし！大食い王に、俺はなる！」

同じクラスである、タラコ唇で鼻の長いウソップがルフィに激励する。

「ルフィ！負けんじゃねえぞぉ！」

「絶対勝つからな！期待しとけよ！」

『エントリーナンバー2！2ーCのセイバー！』

2番目の出場者は、青い騎士装束を纏った金髪の少女であった。

「この戦いに勝利すれば、賞金はもらえるのですね？」

『もちろん！5万手に入りますよ！』

（…これでぬいぐるみがいっぱい買える…！）

セイバーは、凛々しい見かけによらず趣味がアレだった。彼女の友人である衛宮士郎（えみやしろう）が声をかけると、彼女が笑顔で答える。

「頑張れセイバー！俺が応援してるぞー！」

「任せてください、シロウ」

『エントリーナンバー3！3ーCの司馬（しばし）師！』

端整にして高貴な顔立ちをし、仮面をつけた青年が天に指を指した。

「頂点に立つのはこの私、司馬子元（しげん）だ！」

「兄上…何やってんです…」

ギャラリーの中には弟の司馬昭がいた。司馬師が声高々に名乗る。

「昭か。この戦いで頂点を目指す兄の姿を見ておけ」

『エントリーナンバー４！１－Ｂ、恋（れん）！』

そう呼ばれた、二本の大きなアホ毛が立っているぼんやりとした女の子がホットドッグを貪り食っていた。

『ちょっと待ったー！食べるのはまだ早すぎるよー！？』

「……まだなの？」

『いいから早く試合に戻りなさい！』

『エントリーナンバー５！何故か飛び入り参加のインデックス！』

「えへへーよろしくねー♪」

白い修道服を着た小柄なシスターが笑顔を浮かべていた。

「イ、インデックス？！あれほどオレの部屋にいろって言ったのに！」

当麻もギャラリーにいた。彼はインデックスの保護者らしい。

「だってとうまが学校へ連れてってくれないんだもん！だからこの大会でとうまを見返してやるもん！」

「不幸だぁー！」

インデックスがすね始める。あきらめてください、当麻君。

『エントリーナンバー６！３－Ｂのエステリーゼ・シデス・ヒュラッセイン！！』

エステルがやってきた。

「この大会に出てみたかったんです♪応援、よろしくお願いします！」

彼女について心配するフレンを、ユーリが諌める。

「本当に大丈夫かな」

「エステルはああ見えて一生懸命だからな。言い出したら聞かねえよ」

『エントリーナンバー７！１－Ａのスバル・ナカジマ！！』

スバルが鉢巻を締め、臨戦態勢に入る。ギャラリーには彼女の親友であるティアナもいた。

「あんた弁当食べたばっかりでしょう？太るわよ」

「食事があたしの趣味だからね…それに、こういうみんなで和気あいあいに食べるのが好きなんだ！」

「金の亡者どもと競い合う大会のどこが和気あいあいなのよ…」

スバルの発言に、ティアナが呆れて突っ込んだ。

『面倒なので一気に行くぜぇ、エントリーナンバー８、９、１０！２－Ｂの志村新八、神楽、そして２－Ｂの担任、坂田銀時ィィィ！！』

「「「俺（私）たちはオマケつきかぁぁぁぁぁぁ！！！」」」

３人のツッコミがカフェに轟いた。

『これより始めます。食べるものは肉まん！制限時間は１５分！それでは用意…始めッ！！』

参加者１０人が一斉に蒸籠の中の肉まんを手に取り、喰らいはじめた！！

スバルが最初の肉まんを蒸篭から取り出すと、それを嵐のごとく

口に入れ始める！

「ガブガブガブガブ…！おかわり！」

『おお、いい食いっぷりですねぇスバルさん！』

「優勝したら、ガブガブ…新型のカメラを買うんです！モグモグ…」

「やっぱり金が目的じゃない…」

スバルと司会者のやり取りに、やはりティアナが突っ込んだ…

司馬師が肉まんを食べていると、突然手が止まった。すると眉をひそめてこう言った。

「…安上がりだろうな、肉まんの具の処理が稚拙だ。包む前に具材を炒めたな？生のまま包んでこそ割ったときに肉汁が出ておいしいものだ。それになんでも肉にすればいいというのも間違いだ。キャベツや白菜を入れてシャキシャキ感を…」

『ちょっと、大食い大会ですよ！？』

「何を言っている！私は肉まんを食うためにこの大会に出てやったのだ！この頃カフェテリアに肉まんがメニューにないからイライラが溜まっていたのだ。肉まんが食えるというから今日この日のために腹を空かせてやったというのに、周りの凡愚どもは肉まんに対する情熱と愛情と言うものが…」

「兄上…やはりこのために大会に…」

司会者に逆切れし、肉まんについて説教する司馬師。司馬昭は兄の変わった趣味に呆れた。

一方、ルフィとセイバーは隣同士で肉まんをガツガツ食いまくっていた！

「おめえ、可愛いくせによく食うな！」

「あなたこそ、なかなかやりますね！」

そして彼らのセコンドであるウソップと士郎も必死に応援していた。

「フレー、フレー！セイバー！」

「負けるな負けるな！ルフィ！」

だが…

ぱくぱくぱく

「これ、すっごくおいしいよ！とうまー、たべるー？」

インデックスも山のように詰まれた肉まんを平らげてしまう。

（ああ…なんか癒される…ぬいぐるみみたい…）

彼女たちのその姿を見たセイバーは何故か恍惚の表情になっていた。

エステルのほうも肉まんの美味さに、恍惚の表情を浮かべていた。

「これが中国の肉まんです？初めて食べますけど、なんだかとってもおいしいです！」

「うむ、やはりお前もわかっているな。この柔肌のごとき白き皮…そして肉汁香る褐色の誘惑。肉まんこそファストフードの中でも最大の芸術だ…」

エステルの感想に司馬師が口を割り込んできた。どうやらこの男は肉まんに対して一種の信仰に近いものを持っているようだ。その時…

「肉まんを憎まん！…いまいちですよね」

声が聞こえたが、あえて聞かなかったことにした。

一方万屋サイドでは…

銀時「うおォおおおおおおおおおおおお！！」

新八「でやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

神楽「ぬぅるぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

賞金５万のために執念を燃やし、肉まんを次々と喰らい続けた！
それは怒涛のごとき続いたが…

「オウェー、もう限界だ…」

「ワタシも腹いっぱいアル…」

新八と神楽のお腹に限界が溜まっていた…。まぁ地味な新八はともかく、大食漢の神楽も撃沈したのだが…

『おおーーーーっと！！すごい勢いで食べている選手がいます！！』

スバル「え！？本当！？」

司馬師「ほう…」

恋「…？」

エステル「誰です？」

セイバー「なんと…強敵か…」

ルフィ「面白そうだな！」

インデックス「すごいすごい～！」

「ガロオアアアアアアア！！！」

『エントリーナンバー１０！２－Ｂの坂田銀時先生ッ！！』

なんと銀時が肉まんをまるでハイエナのように貪り食っていた！！銀時の金に対する執念の熱い炎は、いまだに燃え続けていた…！あまりの闘争心に、ほかの競技者は…

スバル「すごい…敵わないや…」

司馬師「なんとも恐ろしい執念だな」

恋「…恋の負け」

エステル「わたしもさすがにここまでは…」

セイバー「勝ち目がないな…棄権するか」

ルフィ「あっちゃー、おれもう無理だな…」

インデックス「がんばれ～！」

全員が棄権を決め、銀時を賞賛した。

『あぁーっと！続々と選手がリタイアしたぁー！なんと残ったのは銀時先生のみ！』

勝者は、坂田銀時であった。司会者も彼を賞賛し、ギャラリーからも拍手が響いた。

『感動です！その大食いに打ち込むその姿はまるで…まるで…』

『まるで…玉…？』

……ギャラリーの目に映ったのは、賞金に対する執念のあまり、今もなお肉まんを喰らい続ける、太りまくった銀時であった。銀時が気づいたときは、肉まんの食いすぎで肥大しすぎた腹の贅肉のせいで、足元すらも見えない状態であった。

「何じゃこりゃァァァァーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

「ギャァーーーーーーーーーー！！化け物ォォォォォォォォ！！！」

自業自得。勝利と金に執念を燃やした結果がこれである。

「な…何でこんなことに…ああ！服がぁぁぁ！！」

膨らみすぎた贅肉のせいで服がはちきれ、裸になる。やがて体のバランスが崩れ、銀時は転がり始めた！

「助けてぇぇーーー！！」

銀時が助けを求めるが、当然近寄るどころか逃げ惑うばかり。

「ひえええええーーーーーーーーーー！！」

「来るなぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！」

「やめろぉぉぉぉーーーーーーーーーー！！」

その後いつ絶えることなく、巨大な贅肉ダルマと化した銀時は、スマートボールのごとく転がり続け、カフェテラスを破壊しまくったのであった…

満・腹・絶・倒（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗

『銀魂』
坂田銀時、志村新八、神楽

『テイルズオブヴェスペリア』
ユーリ・ローウェル、フレン・シーフォ、エステル、ジュディス

『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』
モンキー・Ｄ・ルフィ、ウソップ

『Ｆａｔｅ』
セイバー、衛宮士郎

『とあるシリーズ』
インデックス、上条当麻

『真・恋姫無双』
恋

『魔法少女リリカルなのは』
スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター

『真・三国無双シリーズ』
司馬師、司馬昭

『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
前田慶次

（銀時によって破壊されたカフェテラスを一人で掃除するマダオ）

マダオ：俺ってこの前こんなことしてたような…。

捜・査・任・務（前書き）

近藤：よっしゃぁぁぁぁ！！ついに俺様の出番だぜ！！
　お妙さん！みててくださいよ！

妙：まぁ近藤さん、頑張ってくださいね（棒）
　この話の終盤にアンタは地獄見るけどね…ククク

沖田：そんなことより土方のご臨終シーンまだですかー？

土方：おい総悟…ちょっと表でろ…

捜・査・任・務

この学園は、自由を校風としている。
生徒のアイデンティティを尊重し、個性を伸ばすことで、学園のアピールにつながっている。
だが、それが災いしていじめや格差差別による不登校、生徒によるサボタージュや教職員への反抗、逆に生徒への体罰やセクハラ、校内の備品の破壊などの問題が表面化してしまっているのも事実だ。
おまけにそういう校風なので、ガイアメモリなどの犯罪も予想される。
そのためこの学園には、このような事態に備え、対応するための組織が存在する。

風紀委員（ジャッジメント）。
この学園のために編成された、学園管轄の治安維持機関である。

風紀委員の会議室では、彼らを束ねる局長・ゴリ…いや近藤勲が仕切っていた。近藤は声を高々に皆を呼ぶ。

「えー、君たち諸君には、調べてもらいたいことがある。グランツ君」

右目にブロンドの前髪で隠したクールな少女、ティア・グランツが「はい」と答えると、あるものを取り出した。

それは、真っ赤な体色の怪物と、白と黒（モノトーン）の配色のした超人を写した2枚の写真であった。超人のほうは写真がぼやけているため、はっきりと写っていない。

「先日発生した、怪物による校内破壊事件ですが、現在この怪物についての詳細はわかっていません。ドーパントではないかと推測されますが、その証拠となるガイアメモリが発見されていません。事件後、その正体は、我が学園の高等部に通う生徒だと判明しました。
しかしこの超人が怪物を倒したという報告もありました。ですが、この超人を目撃した例はほとんどありません。さらに超人の正体もなお、未だに判明されていません。そのため、我々はこの超人についての捜査を行いたいと思います」

ティアが今回の業務を言い伝える。皆、その超人については何も知らないようだ。

彼女の報告後、土方が言う。

「目撃したヤツによると、あれは『フォーゼ』というらしい。フォーゼについては、俺達はまだはっきりとした情報がつかめてねえ。だが…」

土方が少し間をとった後、みんながガヤガヤと騒ぎ始めた。

「ほんとにいるのかよ…」

「日曜8時の特撮じゃあるまいし…」

「何で土方じゃなくて怪物が死ぬのかなー」

私語が出始めたので土方が怒鳴る。

「うるせえ！…あくまでも噂の域をでねえが、ヤツについて情報が3つも確認された」

1．フォーゼはいくつかの武器を所有している。
2．フォーゼのサポート兵器が存在する。
3．フォーゼの敵対勢力はドーパントではないとされる。
4．フォーゼをバックアップするための組織や施設がある。

「俺達はフォーゼの正体を探るため、４つのグループに分けて捜査する」

風紀委員は、フォーゼの正体や行動を直接調査するグループ、フォーゼのサポート兵器が本当にあるかどうかを探索するグループ、フォーゼの敵対勢力について偵察するグループ、フォーゼを支援していると思われる組織や施設に潜入するグループに分かれた。

メンバーは以下の通りである。

1．フォーゼの正体や行動を直接調査するグループ
神埼・Ｈ・アリア
遠山キンジ
峰理子
ルーク・フォン・ファブレ
ティア・グランツ
相良宗介

2．フォーゼのサポート兵器が本当にあるかどうかを探索するグループ
ユーリ・ローウェル
フレン・シーフォ
高町なのは
フェイト・テスタロッサ
ヴィータ
シグナム

3．フォーゼの敵対勢力について偵察するグループ
御坂美琴
白井黒子
初春飾利
綾崎ハヤテ
桂ヒナギク
関羽愛紗
篠ノ之箒
ラウラ・ボーデヴィッヒ

4．フォーゼを支援していると思われる組織や施設に潜入するグループ
近藤勲
土方十四郎
沖田総悟
山崎退
仲村ゆり

【1．フォーゼの正体や行動を直接調査するグループ】

ある荒地。

一人の超人が、十数人の戦闘員を相手に奮戦していた。超人は肉弾戦で敵をなぎ倒していく。

身体は黒と銀色のツートンカラーで、赤い複眼をしている。赤いマフラーを身につけていた。

そのとき超人はベルトのスイッチを押すと、銀色の両手を緑色の両手に変化させた。そして右腕から光熱の火炎を放射し、戦闘員の群れを焼き払った！

戦いの後、超人は変身を解く。その姿は空手着の青年であった。

フォーゼ直接調査グループでは、この超人の戦いを遠くから見守っていた。

「いやぁすっげーな…」

「アイツで間違いないのか？」

赤髪短髪の青年、ルーク・フォン・ファブレが感心している隣、双眼鏡で彼の動きを見ていた遠山（とおやま）キンジがティアに質問する。

「確かにそうね…モノトーンの配色に、武器を使っている」

確かに噂には違いないようだ。

キンジ、アリア、理子らは武装探偵…通称武偵(ぶてい)である。武偵とは、凶悪化する犯罪に対抗するために新設された国家資格であり、武偵の資格は風紀委員にとって強力な戦力の一つでもある。

だがピンクのツインテールに小学生のような体型の神埼(かんざき)・H・アリアとロリ顔巨乳の峰理子(みねりこ)が手柄をめぐってケンカを始めた！普段は仲がいい二人なのだが、フォーゼという手柄が二人を焦らしたのだろう。

「だー我慢できない！フォーゼ捕まえるついでにキンジももらうわよ！」

「だったら勝負だよ！フォーゼもキー君もりこりんのものだから！」

「おい待てアリア、理子ー！」

キンジの制止も聞かず、二人は暴走！前進し、空手着の男に武器を突きつけた！！

「「動くな！！」」

フォーゼ（？）は二人の罵声の後、静かに手を上げた。アリアの拳銃と理子のナイフは彼の顔に近寄る。

「…獲物を前に舌なめずり。三流のすることだな」

宗介が二人の行動を毒舌で返した。いくら二人が武偵とはいえ、戦場育ちの傭兵である彼からしてみればツンデレなアリアと馬鹿キャラの理子の相性は…

「だ、誰がツンデレよ！！（照）」
「理子は馬鹿じゃないもん！！（怒）」
「君たち、私に何の用ですか！？」
武器を突きつけられたフォーゼ（？）は二人に怒鳴る。
「あんたフォーゼでしょ！あんたを捕まえてあたしの手柄にするの！」
「何言ってるの！理子がフォーゼを捕まえてキー君と一緒に理子ルートへ直行よ！」
「フォーゼ？知りませんね…人違いじゃないですか？」
フォーゼ（？）は相当困惑した。
「誤魔化しても無駄よ！その白黒カラーに赤い目！武器を使うところ！」
「あんたが絶対絶対フォーゼだから！」
「…だから、人違いだって言ってるじゃないですか！！」
フォーゼ（？）ではなくなった空手着はついにキレてしまい、アリアを投げ飛ばした！
「きゃあ！この、やったわね！」
アリアが逆切れしたのでついにアリア＆理子ＶＳフォーゼじゃな

い男のバトルが始まった！

状況を見守っていたキンジ、ルーク、ティア、宗介の４人は歯がゆく感じていた。その時ルークの手がキンジの手をつかんだ！

「おわ！ルーク、何を…」

「きゃあ！何をするのキンジ！」

「違う、俺じゃない！」

キンジの手は、ティアの豊満な胸を触りまくっていた！

「頼むキンジ！お前しかいねえんだ！」

犯人はルークであった。この後、ルークはティアにボコボコにされる。

「フ…こうなったらやるしかないぜ…」

ルークの断末魔を背に受け、前より目つきの鋭くなったキンジは戦場に出た！

「やめときな！女の子相手にムキになるもんじゃねえぜ！」

アリア&理子ＶＳフォーゼじゃない男のバトルが続いている最中、ヒステリアモードになったキンジが３人の前に現れた！ヒステリアモードとは、キンジが性的興奮になると目つきが鋭くなり、強くなるほか、女の子に対してキザになってしまうのだ！大人気ないと思

ったようで、空手着の男は戦うのをやめた。

アリアと理子にフォーゼと誤解された空手着の男は仮面ライダースーパー1と名乗った。モノトーンカラーで武器を使うという証拠からいきなり攻撃されたスーパー1は、二人から謝罪されると、そのままどこかへ去っていった。

フォーゼの正体および行動の直接調査は失敗に終わった。

【2．フォーゼのサポート兵器が本当にあるかどうかを探索するグループ】

フォーゼのサポート兵器を探るために工学部の部室へやってきた。工学部の部室といってもいろいろな機械があり、格納庫とも言ってもいいほどのレベルであった。

「だが、本当にフォーゼのサポートメカとやらが存在するのだろうか？」

ピンクのポニーテールの男勝りな女性、シグナムがつぶやいた。

「あるかどうかわかんねえからこそここを調査するんだろうが」

ウサギの帽子がトレードマークの赤い三つ編みの勝気な小さな少女、ヴィータが言った。二人はなのはやフェイトの顔見知りである。

「ねえみんな、あれ何かしら？」

フェイトが指を指すと、そこには、蜘蛛のような巨大な６脚ロボットがあった。

「おう、これが気に入ったのかい！？」

声が聞こえたので上を見上げると、左目に眼帯をはめた銀髪の男がロボットの上に乗っていた。

「オレは長宗我部元親（ちょうそかべもとちか）！工学部部長にして鬼のメカニックマンよ！」

すると背後から上半身裸のむさ苦しい男の集まりがたちあがり、元親の名を叫んだ！

「アニキー！！」

どうやら彼らは工学部の部員らしい。

「なあ、ここに変わったカラクリというものはねえか？」

ユーリの質問に、元親は「フフン♪」と上機嫌に鼻を鳴らすと、「野郎ども！ついて来な！」とユーリたちを案内した。

「あたしは野郎じゃねーし」

ヴィータががっくりと肩を落とした。まあその口調から野郎と呼ばれるのも無理はなかろう。

その先には、２メートル以上はある鎧武者のようなロボットが数

体も並べられていた。

「これがオレ様の自信作！ある男から特許をもらって作った、『量産型・本多忠勝（ほんだただかつ）』だ！こいつぁオリジナルと違って、中に乗り込むことが出来るぜ」

「へえ、乗り込むのか。面白ぇな。いつも通学に使っている自転車には飽きたしな」

「待て、私たちは遊びに来たんじゃないんだぞ」

シグナムがユーリを咎めようとするが…

フレン「ユーリ、楽しいよこれ！」

ユーリ「気に入ったぜこれ、貸してくれよ！」

元親「おうよ！」

ユーリとフレンが仕事そっちのけで量産型・本多忠勝に乗り込み、外で遊んでいた。

「あ～あ、どうしようもねえなこりゃ」

「あ、あはは…」

ヴィータがため息をつき、なのはは苦笑いをした。

フォーゼのサポートメカの探索はあっさりと頓挫した。

【3．フォーゼの敵対勢力について偵察するグループ】

フォーゼと敵対する勢力について調査していたハヤテたち。

「僕は向こうのほうを探してきますね！」

ハヤテは一人、向こうに向かった。

ハヤテがいなくなったその頃、草むらの影に身を伏せていた男がいた。くるりとした眉毛をした金髪の男は、女の群れに下心を丸出しにする。

（あのクソガキがいなくなった。これはチャンスだぜ…くふふ）

男の眼差しは、まるで獲物を狙うようなハゲワシのそれであった。

「むぅ、この辺りに敵はいないようだな」

「うん、こっちにもいないよ！」

何故か一緒に来た桃花と一緒に箒が目を凝らしてみるが、どこも怪しいものは見当たらない。その時…

「う～いはるっ！」

「きゃあ！！」

その時、背後から初春のスカートがめくられた！

「さ、佐天さん！何するんですか！」

犯行の主は佐天涙子だった。彼女は朝の挨拶代わりに初春のスカートをめくるというちょっと危ない一面があるのだ。

「いいですわね佐天さん。私もお姉さまのスカートをめくりたいですわ～」

黒子がそう言ってきたので、美琴が無言で黒子の頭を拳骨で叩く。

「そのうち、本物の痴漢にあわなきゃいいけどね」

ヒナギクが冗談を言ったそのときだった。

「ひゃぁっ！？」

突然愛紗の身に異変が起こった！その直後に寒気を感じてしまう。

「どうしたの！？愛紗ちゃん！」

「何かあったのだ？愛紗」

不思議に思った桃花とラウラが愛紗に聞くと…

「……誰かに尻を触られた…」

しかし箒は愛紗の言うことをいまだに信じられない。

「錯覚ではありませんか？そんなことがあるはず……」

箒がそういった瞬間、いつの間にか変な男に胸を揉まれていた。

「いゃあーーーッ！！！」

箒が絶叫した！！

その後、美琴、初春、佐天、ヒナギク、桃花、愛紗、箒、ラウラは、次々と尻や胸を揉まれるわスカートをめくられるわで散々な目に遭った。男のほうもすばしっこく、女たちの身体を触りまくっていく！一方黒子のほうは…

「ああっお姉さま！身体を触られるお姿がステキですのっ」

黒子がそう言ってきたので、美琴が無言で黒子の頭を拳骨で叩く。

「あいつ…ぶっとばす！！」

美琴がついに激昂！！ポケットから取り出したコインを弾き、これを飛ばした！

美琴のレールガンの直撃を受けたのは、くるりとした眉毛をした金髪の男であった。ヒナギクが叫ぶ。

「あ、あんたは…学園の抱かれたくない四天王の一人、サンジ！」

黒子「お姉さまの仇ですの！」

初春「いいかげんにしてください！」

佐天「あたしの友達に手を出すな！」

桃花「絶対絶対許しません！」

愛紗「許すまじ…覚悟しろ！」

箒「天誅ゥゥゥ！！」

ラウラ「貴様を殺す！」

美琴はレールガンを放ち、黒子は太ももに忍ばせた針をテレポートさせ、初春と佐天はそこらの鉄パイプを広い、ヒナギクは竹刀を振るい、桃花は自分の剣を振り回し、愛紗は青龍堰月刀を振りかざし、箒とラウラはＩＳを起動させ、一斉にサンジを痛めつけた！

「ぎゃあああああああああああああ！！！」

「みなさん！どうかいたしましたか！？」

ハヤテが来たときには、怒りと恥じらいの表情をむき出しにして痴漢魔を退治した女性陣の姿があった。

ヒナギクらが討ち取ったのは、フォーゼの敵ではなく女の敵だった。

【4．フォーゼを支援していると思われる組織や施設に潜入するグループ】

近藤たちは、フォーゼはあるものを通じて秘密基地に入場しているという極秘裏の情報を入手し、ある廃部室に向かった。先導は山崎退（ざきさがる）というあんぱんが…

「あんぱんって言うなよ！せめてミントンって言えよ！」

近藤たちは、フォーゼはあるものを通じて秘密基地に入場しているという極秘裏の情報を入手し、ある廃部室に向かった。先導は山崎退が務めた。

「フォーゼ逮捕してついでに土方も絞首刑だ」

「じゃあ総悟は引きずり回しの上火炙りの刑な」

「しっ！うるさいわよ二人とも！」

相変わらず土方と沖田の仲は悪いので、その都度ゆりが仲裁する。

５人の目の前にあるのは何の変哲もないロッカーだった。だがこんなロッカーでも近藤は自信満々に豪語した。

「このロッカーの中に、フォーゼがいるという噂がある！俺達はここから秘密基地に潜入する！」

めちゃくちゃなことを言う彼に、ゆりが苦言した。

「先輩、本当にロッカーの中に秘密基地があるんですか？」

「あるとも！お妙さんがそう言ってる！！」

…その時、『ゴリラはロッカーで生き埋めにされてるのがお似合いよ…』という女の声の幻聴が近藤の耳に入った。その瞬間、何故か彼はうずくまっておびえ始めた。

「近藤さん、さっさと行こうぜ。出ないとまともにレポートも書けねえだろが」

「そうですぜ近藤さん。早く行かないと土方が天に召されちまいますぜ」

「おめーは黙ってろ」

「ほら、早く行かないと禁断症状で『アンパン食べたくなる病気』が発病しちゃいますよ」

「『あんぱん食べたくなる病気』って何よ」

山崎が室内のロッカーを開けると、突然ロッカーの内部が光りだ

した！5人はロッカーのなかに入っていく。ロッカーの中の世界は無限大ともいえる空間であり、5人は空間の中を歩いていく。

近藤「うおーすげー」

山崎「本当にこんなところがあったなんて…」

沖田「この空間荒んでるぜぃ。土方の心を表現してんのか」

土方「じゃあここは沖田の頭の歪みを表現してんのか」

ゆり「やめなさい二人とも」

廃部室のロッカーの先は、のどかな緑の風景だった。目の前には森があり、近くには川の流れる音が聞こえる。奇妙な光景に土方が驚愕した。

「ほ、本当にこんなところにフォーゼがいるのか…？」

するとそのとき、女の人が近藤たちの前にやってきた。

『助けてー！』

「え…？」

すると女の人が近藤にしがみつき、懇願した。

『助けてください！村が…村が魔物に襲われてるんです！』

「は？村？魔物？襲われる…？」

首を傾げる近藤だが、女の人は続けて言った。

『お願いします！一緒に来てください！』

『魔物だー！』

『助けてくれー！』

女の人についていった近藤たちがたどり着くと、村では、たくさんの村人が逃げ惑っていた。

『あれが魔物です！退治してください！』

女の人が指差したのは……

ブヒ

豚だった。

「魔物って…これのことかしら…？」

『ひぃぃー！恐ろしやー！』

ただの豚のために悲鳴を上げる女。ゆりが首をかしげるのも無理はない。

「ったく…豚は屠殺場に行け！！」

沖田がブヒブヒ鳴きまくる豚を蹴り飛ばした！その時、どこからか妙な音声が聞こえた。

チャラララーン
まものをたおした！

パラパラッパッパー
おきたは　レベルがあがった！
ちからが　2あがった　すばやさが　3あがった

「はぁ？」

わけのわからない状況に追い込まれる沖田たち。そんな時、沖田たちの前に長老と思われるおじいさんがやってきた。

『ありがとうございます、旅の方。村は救われました。お礼に村の宝、勇者の剣を差し上げます』

長老が沖田に剣を渡すが、もちろん沖田が文句を言う。

「何言ってんだこのジジイは…」

すると、沖田に異変が起きた…

「やった！ついに勇者の剣『ブレイバーソードＲＸ』を手に入れたぞ！」

突然人が変わったかのように剣を持って喜び始めた！

「そ、総悟…お前何を言って」

近藤が言いかけた途端…

「なぁーに、冒険者として当然のことをしたまでです！」

近藤、土方、ゆりが突然人が変わったかのように村人に挨拶し始めた！

「み、皆さん何言ってんですか！…ん！？」

山崎はある異変に気づいた…。そう、空を見上げると、空から催眠ガスを噴出し、近藤たちを洗脳させたのだ！山崎はガスを吸い込まないためにポケットからハンカチを取り出し、鼻と口元に巻いた。

「じゃあこの村人たちも催眠ガスで…ちょっとすみません！」

『ここはハジマールの村です』

「ちょっ…聞こえてんの！？」

『ここはハジマールの村です』

「だめだこいつら！話が通じねえええええええええ！！」

村人たちは、ロボットだった。

「みなさん、こんな馬鹿なことしてないで帰りましょうよ！」

山崎が説得しようとするが…

勇者・近藤「悪の魔王を倒すのだ！」

戦士・土方「とらわれの姫をお助けせねば！」

魔法使い・沖田「世界に光をもたらすぞ！」

僧侶・ゆり「さあ、冒険の始まりよ！」

山崎「話がめっちゃ進んでるぅぅぅぅぅ！！！」

そこには冒険者の格好をした近藤一行がいた。

近藤「いざ行かん！！」

山崎「おいちょっと待てぇぇぇ！！！」

近藤一行が向かったのは繁華街だった。ここには、酔っ払いのメタボ体型のおやじ達がたむろしていた。

魔法使い・沖田「ここが魔王の城へ繋がる洞窟か…」

戦士・土方「どこもかしこも魔物（おやじ）ばかりだ…」

山崎「ここのどこが洞窟だよ…魔物のほうまで手抜きなのか…」

ふと、僧侶・ゆりが何かを指差した。どう見ても裏地にあるポリバケツである。

僧侶・ゆり「あ、宝箱よ！開けてみて！」

勇者・近藤「おお！『聖なる秘薬』を手に入れたぞ！！」

だが勇者近藤が手にしているのはハエのたかった生ゴミの袋だった…

山崎「汚ぇぇぇ！！今お前が触ってんの残飯だよ！」

戦士・土方「やったな！これで傷を癒せる！！」

洞窟（繁華街）を抜けた近藤たちが魔王の城の城門へやってくると、宇宙人らしきヤツが現れた。

「フォッフォッフォ…我輩が魔王様の一の家来である！」

「バルタン星人がおるゥゥゥゥ！！俺は帰ります！」

山崎が帰ろうとすると、突然近藤たちに阻まれた！

勇者・近藤「何を言ってるんだ！？勇者として恥ずかしくないのか！？」

山崎「勇者じゃない！！」

戦士・土方「共に魔王を倒すと誓ったじゃないか！」

山崎「誓ってない！！」

「フォッフォッフォ、さあ愚かな人間どもよ、かかってきなさい」

バルタン星人が高笑いをあげると、近藤たちと戦闘を開始する。

「ファイガ！」

「ヒャダルコ！」

「ケアル！」

「ギガデイン！」

「もうやだここはぁぁぁぁ！！」

その後風紀委員の仕事を忘れた近藤たちは、１週間は行方不明になっていたという…

その後…妙は職員室に呼び出された。彼女の担任である、眼鏡をかけた物静かな男性、ジェイド・カーティスが妙と対面していた。

「志村さん、あなた近藤さんたちと仲良かったですよね」

内容は近藤たちの行方だった。

「いいえ、全然」

「あの日からずっと学校休んでるんですよ。何をしているかご存知ありませんか？」

「まったく知りません」

捜・査・任・務（後書き）

キャストの皆さま

『銀魂』

近藤勲、土方十四郎、沖田総悟、山崎退、志村妙

『緋弾のアリア』

神埼・Ｈ・アリア、遠山キンジ、峰理子

『フルメタル・パニック！』

相良宗介

『テイルズオブジアビス』

ルーク・フォン・ファブレ、ティア・グランツ、ジェイド・カーティス

『テイルズオブヴェスペリア』

ユーリ・ローウェル、フレン・シーフォ

『魔法少女リリカルなのは』

高町なのは、フェイト・テスタロッサ、ヴィータ、シグナム

『とあるシリーズ』

御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子

『ハヤテのごとく！』

綾崎ハヤテ、桂ヒナギク

『真・恋姫無双』

桃花、愛紗

『インフィニット・ストラトス』

篠ノ之箒、ラウラ・ボーデヴィッヒ

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

仲村ゆり

『戦国ＢＡＳＡＲＡ』

長宗我部元親、本多忠勝

『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』

サンジ
『特別出演』
仮面ライダースーパー1
バルタン星人

フェイト：何なのこのオチ…特に美琴や近藤さんたち…

ヴィータ：なのはー！作者を捕まえたぞ！

なのは：少し…頭冷やそっか？

熱・血・修・行（前書き）

かなめ：今回は幸村先輩が大活躍！
　ほかにも、新キャラも登場するわよ！

テッサ：さらにこの回は、私たちの原作「フルメタル・パニック！」の
　あるエピソードを基に脚色しています♪
　興味がありましたらぜひ、本編と見比べてくださいね！

宗介：音読を要求する！さもなくば射殺する！

（パシィン！）

宗介：千鳥。

かなめ：コラ宗介！読者の皆さまに銃を向けるな！
　まったく、いつまでも戦争ボケが抜け切れてないんだから！

熱・血・修・行

昼休み、２－Ｂの教室に、２－Ｃのセイバーとルフィがやってきた。

「弦太朗に神楽、学食に行きましょう」

「おれ腹ペコで待ちきれねえぞ！」

弦太朗の友人関係は隣のクラスにも轟いていた。ルフィたちからしてみれば幸村も連れて行きたいところだったが…

「幸村はどうした？」

「みての通りだよ」

弦太朗が指さすと、幸村の机にはなぜか花を差した花瓶と大福が供えられていた。そして神楽が焼香を焚き…

「オイィィィ！勝手に殺すなァァァ！」

新八お馴染みのツッコミが光る！

「えー、一度はやっみたかったのに酷いアル」

「酷いのはお前の思考だァァァァ！やってみたくてもそれはねえだろォォォォ！」

欠席している人の席に花瓶を置くのは正真正銘「いじめ」です。

絶対にやめましょう！

「ああ、真田幸村なら虎のおっさんに連れて行かれたぜ」

「虎のおっさん？」

政宗の言葉にルフィが首を傾げたので、ユウキが説明する。

「武田先生のことよ。ほら幸村君、ラグビー部に入ってて、その顧問の武田先生に気に入られてるの。何でも、幸村君の休日はほとんど武田先生との鍛錬に回されてるんだって」

「だけどよ今日の銀さん、なんかやつれていたな」

ルフィがある疑問を抱く。それに対して壷の中のメンマを貪っている星が答えた。

「先生はあの事件の後、まともに歩けない状態になってな…。武田先生が直々に坂田先生を鍛えなおしたわけだ。そしてその結果、急速な減量に成功したのだが…代償としてミイラのような状態になってしまったのだ」

「つうかアンタの昼飯はそれだけか？」

政宗が指差したのはメンマの壷だった。

「そうだが…これをひとつでも食わない日があると発狂状態になるからな…」

「なんかテレ朝の黄金●説の企画を思い出すな…」

くだらない話は後にして…セイバーがユウキに聞き出した。

「その幸村はどちらにいかれましたか？」

「ラグビー部の合宿だよ。練習試合があるらしいの」

とある孤島。

真田幸村は来たるラグビー部の練習試合のため、この名もない島に身を置いていた。強化合宿と言うことで、いつもより気合を入れてきた幸村は、やがて来たる練習試合のために臨んでいた。

そんな中、隣にいた緑のバンダナを巻いた青年が話しかけてきた。

「幸村殿、調子はどうだ？」

幸村に話しかけてきたのは、２－Ａの生徒で同じくラグビー部の部員である関平（かんぺい）であった。幸村は豪語する。

「無論！心の準備も万全でござる！」

「そうか…すまないな、いらない事を聞いてしまったようだ」

両者がお互いの覚悟を決めると、黒髪のおとなしそうな１－Ｂのジュード・マティスが声をかけた。

「あの先輩、そろそろ武田先…いや、お館様が来るよ」

すると高台から顔以外はどこかで見たことがあるような、ひょっとこの仮面をつけた男が現れた！

「よくぞ参ったのう！ワシがこの武田道場のぬしである火男（ひょっとこ）仮面じゃ！」

「待て！どう見ても武田先生だろぉぉぉぉぉぉ！！」

その姿に関平が唖然とし、叫んだ。だがそのツッコミが仇となった。

高台から火男仮面が飛び上がり、関平に向かってドロップキックをかました！！

「この馬鹿者がぁぁぁぁ！！！お館様と呼べぇぇぇぇぇぇい！！！」

「ぶふぉぉぁあ！！」

そして何故か愛弟子の幸村にもアッパーカットを繰り出した！

「ぐはぁお！！」

遠くに吹っ飛ばされる関平と上空に吹っ飛ばされる幸村であった。火男仮面の正体、武田信玄が仮面を投げ捨て、再び高台へジャンプすると、こう叫んだ。

「たとえワシの正体がばれていても、ラグビー部内ではワシのことをお館様と呼べぃ！」

「「「押忍！お館様！」」」

「だったらあのお面の意味がないじゃないか…」

銀髪で褐色肌の２－Ｃのセネル・クーリッジが突っ込んだ。だがこの強化合宿がラグビー部にとって苦難の連続である事は誰も知る由もなかった…

ラグビー部の合宿は、日曜日の午後の練習試合に備えて金、土の２日間やる。

朝は６時に起きて朝食を終えた後、基礎特訓をする。昼食の後、午後は信玄が自分で用意したハードなメニューが待っている。そして１８時に特訓をおえた後、夕食と入浴の時間がある。むろん学業を怠らせないので、その後は各教師から宿題としてテキストとプリントを配らせる。当然、やらなかったら信玄から鉄拳制裁が入るので夜も気が抜けないのだ。

そして２４時、つまり午前０時に就寝させ、２日目が終わった後

は夜の宿題はやらずに、学園へ帰るという形だ。もちろん試合当日の午前は試合に備えての練習である。
当然休息が十分に出来ていなければトレーニングに支障を来たす為、食事を含めた休憩時間は1時間ずつにしているが…信玄のことなので何かやらかすのではないかと部員達は不安を残していた。

【合宿一日目】

「では、これより合宿を始める！」

信玄の号令でラグビー部はトレーニングを始めた。まずは筋トレ、ランニング、フィットネスなどの基礎的なものから、スクラム、タッチ、タックルなどのラグビーの練習を行う。午前はそういうトレーニングをやる。

「基礎特訓はここまでじゃ！じゃが、ここからハードになるので用心せい！」

ラグビーは体をぶつけあってひとつのボールを奪い合い、得点を入れるために相手側のゴールにボールをタッチさせなくてはならない。そのため走力、体力、持久力などの激しい運動量が求められる。力と力のぶつかり合いに耐えられる体をつくるためには、非常にハードな練習が必要なのだ。信玄はこのために2日間のトレーニングメニューを考案したのである。

「では、初日の午後の特訓を行う！」

そう言った信玄が明後日の方向に向かって指笛を吹く。

すると上空からドラゴンが孤島に飛来し、海上から海竜が浮上し、森から巨大なモンスターが出現した！

空飛ぶ火竜、リオレウス。

獰猛な轟竜、ティガレックス。

漆黒の迅竜、ナルガクルガ。

稲妻の海竜、ラギアクルス。

青緑の雷狼竜、ジンオウガ。

「さあ、このモンスターたちを素手で倒してみせい！！」

「出来るかァァァァァァァァ！！！！つーか、どこから連れて来たんだァァァ！！」

部員から当然のツッコミが轟く！

「ワシのコネじゃ！」

部員が「ふざけんなぁぁぁ！」と叫び、一目散に逃げ出した。だがモンスターたちはラグビー部に狙いを定め、その巨体を向けた！

「食われるー！！」

森の中では部員の一人がティガレックスとナルガクルガに追われていた。しかしただの人間と怪物（しかも2頭）とでは持久力に圧倒的な差があり、やがて部員は丸太に足をつまづかせて転倒した！捕まりかけたその時、関平があるものを持って現れた！

「大丈夫か！？拙者が今助ける！」

関平が持っていたのはどこから拾ってきたのか、猛獣捕獲用のモンスターボールだった。関平がティガレックスとナルガクルガにボールを投げつけると…？

『ガァ？』

ボールはぱっくりと展開し、2頭はモンスターボールの中に収まった。

「よし！ティガレックスとナルガクルガ、ゲットだぜ！」

だが、突然信玄が上空から現れ、関平にとび蹴りした！！

「馬鹿者！これは特訓！道具に頼るなど言語道断！ジュードを見よ！」

「殺劇(サツゲキ)！はあああああぁぁッ！舞荒拳(ブコウケン)！！」

ジュードが飛び上がり、ジンオウガに拳の乱舞を食らわせる！！効果は抜群なようで、ジンオウガはそのまま倒れ伏してしまった。早速後輩に（武力で）追い抜かれる関平であった。

孤島にそびえ立つ岩山の山頂では部員たちがリオレウスに襲われていた！幸い、隠れるための洞穴を数ヶ所見つけたのでその一箇所に隠れたが、リオレウスがその残りの洞穴を破壊していくため、喰われるのも時間の問題であった。

「これ、本当にトレーニングなのか？！」

「こんなのに勝てるわけがねーよ！」

「ここはもう逃げるしか…」

部員の一人が洞穴から出て様子を見ようとした瞬間…

「翁蛇絞追撃(オウジャコウツイゲキ)！！」

セネルがリオレウスの首を掴み、自分の背後に叩きつけ、折り返して前方に投げつけた！気絶したリオレウスは明後日の方向に飛んで行った…

「トレーニングなんだろ？これくらい楽勝だ」

セネルの発言にほかの部員達は普通に引いていた。

浜辺では幸村とラギアクルスとの一騎打ちが行われていた！

ラギアクルスはまず長い尻尾を振り回した！尻尾は幸村に直撃する！

「ぐお！なんのぉ～！」

遠くに吹っ飛ばされたが、体力はまだまだ持つ。幸村は受身を取り態勢を立て直すと、そのままラギアクルスのほうへ猛進していった！だがラギアクルスは水中へいったん退き潜り込む！

「逃すかぁー！」

幸村も海を潜ってラギアクルスを追う！ラギアクルスは体全体を蓄電させると、接近する幸村を近寄らせないとばかりに口から電気ブレスを吐き出した！しかし幸村は電気ブレスを回避し…

「うおおおお！烈火！！」

ラギアクルスの腹部を拳の連打で殴りつけた！！怒涛の連撃にラギアクルスはついに力尽き、海底に溺れていった…

こうして、1日目の特訓は終わった…

【合宿2日目】

「これより午後の特訓を行う！今回の特訓は、これじゃ！」

孤島の中の広大な荒地に部員を集めた信玄が明後日の方向に指差すと…

プロペラで飛び、側面には何かの発射するような装置を持ったもの…

攻撃ヘリだった。それも4機はある。

「待たんかィィィィィィい！！！」

「試合とは常に己自身との勝負じゃ！疾きこと風の如く。爆撃を避けつつ、ボールをゴールにタッチせよ！」

「だからって攻撃ヘリはねえだろおおおおお！！」

こうして、部員VS攻撃ヘリとの戦いが始まった。ルールはいたって簡単、普通のラグビーのようにゴールにタッチすればいいのだが…

攻撃ヘリがそうさせてくれない。ボールを持った部員がタッチし

ようとするたび機銃掃射やロケット弾砲撃によって排除されていった。

「ぐわぁぁぁぁぁぁ！！」

「ぎゃあああああ！！」

ただしこの回はギャグ中心のため死亡描写はありませんのでご安心ください。

攻撃ヘリの射撃は容赦がなく、瞬く間に部員は全滅してしまった…

ふと、遠くから信玄の雄叫びが聞こえてくる…

『気合、気合じゃあああ！！』

すると一人のラグビー部がゆっくりと立ち上がった…そして倒れたラグビー部員を叱咤激励した。

「皆のもの…！こんなところであきらめるのでござるか…？」

その熱い漢とは、顔に十字状の傷が刻まれたラグビー部の部長・獅子神萬駆（シシガミ＝バング）であった！

「花園に行きたくないのでござるかっ！！根性があったらどんな苦難にも勝てるでござるよ！」

ちなみに、ラグビー経験者やラグビーを知っている方はご存知と思うが、花園とは高校ラグビーの全国大会のことである。そして部員たちはバングのことを「部長」とか「先輩」とかではなく、親しみをこめて「バング殿」と呼んでいる。

「う…ウォオオオオオオ！バング殿ォォォォォォォォ！！花園ォォォォォォォ！！」

バングの激励に、絶望の淵から立ち上がった部員達は、再び闘志の炎を燃やした！

「うおおおおおお！！！みなぎるわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

幸村も絶叫した！！

上空からボールが投げ出されると、それはジュードの手に渡った！攻撃ヘリが機銃を撃ってきたが…

ジュードの脚力は先ほどとは打って変わって凄まじく、残像を発しながら機銃の弾を避けた！！

「うおおおおお！！！鳳墜拳（ホウツイケン）！！！」

ヘリに接近したジュードが思いっきりジャンプし、炎を纏った拳を振り下ろしてヘリを地面に叩きつけた！そして関平にボールを渡す。

「関平先輩、行くよ！！」

「わかった！ジュード殿！」

ジュードからからボールをタッチした関平は、攻撃ヘリに向けてボールを投げた！！

「行けぇぇぇ！烈風破山砲（れっぷうはざんほう）！！」

放たれたボールに灼熱のオーラが纏い、攻撃ヘリに直撃すると、ヘリはなんとボールに貫通され、墜落した！！！アリエナイ。

オーラを纏ったボールはセネルがキャッチ！だが、やはりここで攻撃ヘリが迫ってくる！セネルは高くジャンプし、炎を纏いつつキックを放った！

「鳳凰天駆（ホウオウテンク）！！」

喰らった攻撃ヘリは真っ二つに両断され、爆発した！そしてセネルが幸村にボールを渡した！

「幸村、頼んだ！」

「おう、セネル殿！」

ゴールまで後一歩であった。だがその終着点を阻むかのように最

後の攻撃ヘリがロケット弾を連射してきた！

「なんのぉ！！ロケット弾など、気合で避ける！！！！！」

ロケット弾の嵐を文字通りに回避した後、大ジャンプした！！

「必・殺！千両花火！！」

幸村の放った炎のパンチが攻撃ヘリを木っ端微塵に粉砕した！！

そして幸村はボールを、ゴールにタッチさせた！！

「トラァーイ！！！」

ついに、特訓は終了した。

「うおおお！拙者たちは、ついにやったでござるぅぅぅぅ！！」

ラグビー部総員が涙したバングを胴上げをした。

一方、ラグビー部の特訓を、信玄と共に傍観していた人物がいた。

白装束を纏った麗人、上杉謙信（うえすぎけんしん）。この学園の教師であり、信玄とは旧知の仲に当たる。

「せいがでますね、かいのとら。わたくしも、あなたのともとして、はながたかいものです」

「うむ！ここまではるばる来て鍛えなおした甲斐があったわい！」

弟子の成長に満足した信玄は高笑いをあげた。

こうして、2日目の合宿は終わったのである。

【試合当日】

合宿から帰ってきたラグビー部の成長を見るために、その練習風景を見ていた人たちがいた。

「関平たちがどれほどの実力を身につけたのか、ここで確かめる」

「兄上の試合が楽しみで仕方がありません、星彩（せいさい）殿！」

関平の恋人である星彩と関平の弟である関索（かんさく）がラグビー部の成長に期待を寄せていた。

「みて、あそこでお兄ちゃんたちが頑張ってるよ！」

「おお、確かに気合入ってるね！」

頭に花の髪飾りをした金髪碧眼のセネルの義妹、シャーリィ・フェンネスと、茶髪でヘアバンドをした活発なジュードの幼馴染、レイア・ロランドがその方向を向くと、ラグビー場には、あの地獄の特訓を終えた４人の若き勇者の姿があった…

セネル「おいそこサボるな！！花園に行きたくはないのか！！」

ジュード「やる気のない奴は出てって！真剣勝負の場なんだよここは！！」

ドライなセネルと大人しいジュードが部活に積極的になったのを見たバング部長は…

「うおおお！（涙）感動した！！人間、やれば出来るでござるぅぅぅぅ！」

バングが涙を流して絶叫している。今の彼の格好は、ラグビー部全員が着ているラガーシャツではなく、ふんどし（しかも相撲のまわしのようなヤツ）である。

「俺様が思うんだけど、旦那達の様子がなんかおかしくない？」

幸村の友人である、茶髪にヘッドギアをつけた猿飛佐助（さるとびさすけ）がある異変に気づいたかのような発言をしたが、

「そうか？私にはあまりわからないのだがな」

ジュードの友人である、金髪の上に妙に大きな触角のような緑色の髪をしたミラ＝マクスウェルは佐助の一言に疑問を感じない。

だが、そんな佐助の心配が的中したかのようなことが起こった。

部員の一人がふんどし姿のバングに声をかけた。

「あの、部長…あの４人、部活に積極的なのはいいんですが、なんか極端というか…二言目には花園花園って…」

部員が指差すと、そこには部員を集めた４人がいた。

関平「これから拙者たちはお前たちを殴る！憎くて殴るんじゃない！お前たちの成長のためだ！」

幸村「そうでござる！これもすべてお館様と花園のため！！」

そういって関平たちは部員を一人ずつ殴る。かつての真面目な青年たちの面影は、もうどこにもなかった…

シャーリィ「お兄ちゃん…」

レイア「ジュード…」

関索「兄上…」

佐助「旦那…」

４人の変貌ぶりに、彼らを知る人たちは驚愕と唖然の色を隠せなかった。

「何を申すか！花園結構ではござらんか！おぬしらもあの４人を見習うでござる！」

「…あの部長、結構天然が入ってるな」

「そうね」

バングのキャラクターにミラと星彩が突っ込んだ。

そして、午後の試合が始まった。相手は５０年以上の伝統を持ち、花園の常連にして優勝候補とされる強豪、辛子山（からしやま）高校。辛子山のキャプテンがふんどし姿のバングにガンを飛ばす。

「おめぇら黒楼州学園の生徒は問題児や変質者ばっかりなんだってなぁ？この俺様達が直々に教育してやるからなあ！しかもおめぇよ、なんだその格好は？何かの罰ゲームか？それとも『黒楼州学園は変態が通う学校です』ってアピールか？」

どうやら辛子山は正々堂々と試合をするつもりはなく、本気でバング達を潰そうと思っているようだ。強豪ゆえの自信であろうか。

ベンチでは関索達が見守っていた。

「兄上、大丈夫なのでしょうか」

「正直勝てる見込みはないに等しい。でも、あの先生のことだから何とかなると思う」

星彩が自分のチームに向かって毒を吐く。しかし心の中では絶対に勝つという強い祈りが込められていた。

「何、あいつ！？ジュードたちに向かって感じ悪いわね」

「お兄ちゃんは問題児なんかじゃないもん！」

ジュードたちが馬鹿にされたのか、レイアとシャーリィが憤慨する。

「本当に大丈夫なのだろうか。胸騒ぎがして仕方がない」

「旦那たちはお館様にみっちり鍛えられたらしいからな。大変なことが起こらないといいんだけどねぇ」

ミラと佐助が心配しているのは、幸村達のほうだった。

試合開始のホイッスルが鳴った！

先攻の辛子山がボールを蹴ったが、これはすぐにジュードが捕まえる！

「させるか！」

辛子山の選手がジュードにタックルし、彼にしがみついた！タックルされた彼は関平にボールを投げ渡す。

「ごめん、任せて！」

「承った！」

だがジュードにタックルした辛子山の選手に異変が起こった…

「なぁ…！か、体が熱い！！」

なんと選手の体が火照り始めた！そればかりではない！

「ギ、ギャアアア！！ヒヒヒ、火がぁー！」

どうなってしまったのだろうか、ジュードの体に触れた途端、選手の服に引火した！！燃え続ける火を消そうとグラウンド内を前転する選手。鎮火した頃には、彼のラガーシャツは黒焦げだった。

「やらせん！」

辛子山の一人が関平にタックルをし、その上でボールを奪う。しかしこのボールにも異変があった！

「熱！ななななんだこれは！？」

辛子山の一人がボールから手を離す！ラグビーボールが高温となっていたのだ！その隙にセネルにボールを奪い取られた！だがセネルのほうは苦しい顔ひとつせずボールを持って走っていた。

「あいつ！！何であんなもんを平気で触れるんだよ！？」

「どけぇぇ！」

セネルがラグビーボールを蹴ると、その放物線に高熱が走った！その辺にいた辛子山たちはあまりの熱に服を引火させた！蹴られたボールは、辛子山の一人に直撃し、その瞬間灼熱の炎に包まれ燃え始めた！！

「ひえええええ！熱いよー！！」

衝撃の反動で幸村がボールをキャッチ！ボールを抱え込んだ幸村はそのまま走り続ける！その姿は、まるで火の玉そのものであり、タックルしようとした辛子山の選手は、かわいそうに、幸村の熱い闘志によって火ダルマにされてしまったのだ…

そして幸村がバングにボールをパスする！！

「バング殿ォォォォォォ！！後は貴殿にお頼みいたしましたぞォォォォォォォ！！」

「おう幸村殿ォォォォォォ！拙者に任せるでござるぅぅぅぅ！！」

ボールを受け取ったバングが一歩一歩踏み込むたび、フィールドの足跡が彼の熱気によって焼かれていた…

そしてバングは、敵陣に向かって大ジャンプした！！

「ぬぅぅぅぅん！！トラァァァァイッッッ！！！！」

バングがゴールのボールを叩きつけた途端、相手のゴールが突然大きな炎に包まれた！！

そしてその熱気によってフィールド上に熱がまとわり、辛子山の選手の体が発火し炎上した！！

「ギャアアアア！！！目が！目がぁぁぁ！！」

「あああっ、火、火、火が！母さァァァん！！」

「汚物は消毒だぁぁぁ！！（？）」

やがてフィールド全体に火が回ったことでスタジアムに火災が発生し、炎に焼かれた辛子山の選手たちの阿鼻叫喚がスタジアム内にこだました…

一方、ベンチの佐助たちはというと…

佐助「あちゃー、やっちまったよ…」

関索「兄上が…変わってしまった…」

レイア「これって…ラグビーなのかな？」

ミラ「心が熱くなると、本当に火が出るのか…すごいものだな」

シャーリィ「それ、少し違うと思いますよ…」

星彩「正直、重い…」

十人十色の思いを馳せていた。

辛子山高校のラグビー部は知らなかった。信玄とバングの特訓によって、幸村達ラグビー部全員が、燃え盛る炎「そのもの」と化していたのだ。辛子山の選手たちは彼らの熱き凄絶な戦いに、戦慄し、恐怖した。

当日大火傷を負って病院に搬送され、後日退院した辛子山高校のラグビー部員はこう語る。

「ありえねえよ、黒楼州のラグビー部は弱小だって聞いてたのに！ボールに触ったらなんか熱いし、あいつに触ったらなんか火が出るしよ！しかも一人だけふんどし締めた野郎がいてよ！アチチ、火傷がまだ残るっつの！馬鹿じゃねえの、マジで」

かくして、辛子山高校と黒楼州学園の練習試合は、信玄率いる黒楼州学園側の圧勝と言う形で幕を閉じたが、「辛子山の悪夢」とまで言われる悲惨な試合となってしまった。そして高校ラグビー界では、黒楼州学園の名は「地獄の代名詞」と形容され、後世に語り継がれることとなった。

多数の負傷者を出した辛子山高校側は、以後敗戦のショックから立ち直れず、以後長期に渡って成績不振が続いた。そして辛子山高校のラグビー部は廃部となり、その５０年の伝統に終止符を打ったのである。

熱・血・修・行（後書き）

キャストの皆さま

『戦国ＢＡＳＡＲＡ』

真田幸村、武田信玄、猿飛佐助、上杉謙信、伊達政宗

『真・三國無双シリーズ』

関平、星彩、関索

『テイルズオブエクシリア』

ジュード・マティス、ミラ＝マクスウェル、レイア・ロランド

『テイルズオブレジェンディア』

セネル・クーリッジ、シャーリィ・フェンネス

『ＢＬＡＺＢＬＵＥ』

シシガミ＝バング

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、城島ユウキ

『銀魂』

志村新八、神楽

『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』

モンキー・Ｄ・ルフィ

『Ｆａｔｅ』

セイバー

『真・恋姫無双』

星

『モンスターハンターシリーズ』

リオレウス、ティガレックス、ナルガクルガ、ラギアクルス、ジンオウガ

作者：皆さまにお知らせです。この短編を１、２話ほど掲載した後、『フォーゼ』のエピソードを基にした長編を出したいと思います。

これからも応援よろしくお願いします！

弦太朗：応援よろしくぅ！

地・獄・試・練（前書き）

ミラ：今回は今までと打って変わって少しシリアスな話だ（ヒックゥ）。
だが…（ヒック）、少々ギャグも入っているので（うい～）
楽しんで（うぅ～い）読んでくれ（ウヒックゥ！）。

ジュード：ちょっとミラ！？酔ってるよ！？

ミラ：酒は二十歳以上になってから飲めると聞いたが？
媒介している肉体も二十歳なのだしな（うぃっく）。

ジュード：この作品ではミラは学生でしょ！お酒は収録後にやって！

レイア：ていうかこの作品て、映画撮影やってたんだ…

地・獄・試・練

古等簿市内にあるお堂。

このお堂には、閻魔が祀ってある。つまり閻魔堂と呼ばれるところなのだ。

閻魔についてはご存知の方もいるのだろうが、仏教・ヒンドゥー教における地獄の王、死者の裁判官で、死者が生前犯した罪を裁く。

呼び方はヤマラージャ、ヤマとも。音訳は閻魔羅闍、意訳は閻魔大王とも。

日本仏教においては地蔵菩薩と同一の存在と解され、地蔵菩薩の化身ともされている。閻魔に関する日本の文化財に関しては、京都の宝積寺には、地獄の法廷を再現した鎌倉時代の木像があり、重要文化財に指定されている。閻魔堂としては、同じく京都の引接寺が著名だ。

だがこの閻魔堂に勝手に侵入した不届き者がいた。彼は泥棒であった。

「なんか金目のものはねえかなー」

泥棒が辺りを見回す。だがここは閻魔を祀るお堂。金目のものなど存在しない。ふと、閻魔の右手に持つ細長い板に目をつけた。公家が持っている、笏と言うものだ。

「妙にでけぇな。象牙か？」

泥棒は閻魔の右手から笏を取り出した。何の素材なのか笏を叩い

てみる。

「金になるかどうか知らんが、とにかくもらっていくか！」

上機嫌になり、笏を盗み、閻魔堂から抜け出す泥棒。

だが泥棒には、当然の報いが待っていた……

閻魔堂からなにやら地響きのような声が鳴り響いた……

『ぬぁぁぁぁぁ……よくも余の笏をぉぉぉぉぉ……』

泥棒は笏を手に、閻魔堂へ続く階段を下りていく。だが盗みを働いた彼に、閻魔の報いを受けることになった。

「う、うわーーーーー！」

突然何もないところで泥棒が転倒！階段からズッこけ、そのままドタドタと転がっていった！手にしていた笏は持ち主の元を離れ、そのままどこかへ飛んで行った…

黒楼州学園の闘技場。

東京ドームほどの広さはあるここは、グラウンド、体育館などの体育会系の施設となっており、武道に秀でた者たちが集まるため、彼らを招いて校内武闘大会なんてものを開催したりしている。

そこでは、ＩＳを駆る５人の少女たちが一人の男をめぐって闘技場で乱戦していた！

「いつまで一夏に剣をやらせるつもり！バッカじゃない、ほんと！」

「私はただ、一夏のような軟弱な男が許せないだけだ！」

鈴のＩＳ「甲龍（シェンロン）」と箒のＩＳ「紅椿（アカツバキ）」が剣戟を交えた後、鍔迫り合いに迫る！

「一夏さんはわたくしのものですわ！あなたたちに絶対取らせはいたしません！」

「わがまま言うのはやめてよ！僕が絶対一夏をものにするんだから！」

「一夏は私の嫁だ！夫婦円満の生活をお前たちに邪魔させん！」

セシリアのＩＳ「ブルー・ティアーズ」、シャルロットのＩＳ「ラファール・リヴァイヴ・カスタム？」、ラウラのＩＳ「シュベルツェア・レーゲン」がそれぞれの銃と砲を構え、撃ち合う！

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの5人は、一夏に惚れている。5人ともその思いを隠してはいるが、比較的仲はいいものの、このような乱戦のおかげでバレているのだ。もっとも、一夏本人が鈍感なので彼女たちの争いは日を追うごとに泥沼と化しているが。

…それにしてもうらやましいぞ一夏、誰でもいいから俺にも分けてくれよ。

「また相変わらず馬鹿をやっているのか、あの5人は」

5人の乱闘を傍観しながらつぶやいたのは黒のスーツがビシッと似合い、見るからに出来る女といった風貌の織斑千冬（おりむら ちふゆ）。織斑一夏の姉で、一夏達1－Aの担任である。

「千冬姉、何とかしてくれよ」

その時、千冬が手にしたクリップボードで一夏の頭をボカっと叩いた。

「先生と呼べ、織斑」

「……はい」

「では私は仕事に戻るぞ、織斑」

公私をわきまえているようで、弟のことを苗字で呼ぶ千冬。だが千冬は突然急用を思い出したようで闘技場から後にした。

「ったく、千冬姉。学校でも一夏って呼んでもいいのに」

叩かれた頭をポリポリと掻く一夏であった。

その時、ふと上空からあるものが落ちてきた。一夏が音のしたほうへ振り向くと、一本の棒切れが落ちていた。だが一夏は無視し、教室へ戻った。

戦闘後、ＩＳをオフにした５人。

「一夏、戻ったみたいだね」

「…続きは放課後にいたしましょう」

ＩＳ用のスーツから制服に着替えたシャルロットがあたりを見渡すが、一夏はさっさと教室に戻ったようだ。セシリアの号令で一行が教室に戻ろうとしたその時、鈴がなぜかそのへんにあった棒切れに目をつけた。

「おっ、いいもんがあるじゃない♪」

鈴が棒切れを拾い上げると、背後から棒切れでセシリアの頭を叩いた！

「セシリア、覚悟！」

バコッ！

「痛い！何するんですの！？」

「へっへ～ん！先手必勝ってね！」

箒「鈴、それをよこせ！」

シャルロット「僕にも貸して！」

ラウラ「それをもらう！」

やがて鈴が拾い上げた棒切れを巡って５人は生身で争い始めた！

箒が奪っては鈴の頭を叩き、ラウラが奪っては箒の背中を叩き、シャルロットが奪ってはラウラの尻を叩き、セシリアが奪ってはシャルロットの胸を叩き…と、やはり戦い足りないのか、５人が棒切れを奪っては叩き、奪っては叩き…の連戦が繰り広げられた！

「次はあたしのターンね！」

そして鈴の手に戻り、叩こうとした瞬間…！

「うッ…！？」

突然鈴の体に異変が起きた！そして棒切れを落とし、そのまま倒れた。

「鈴さん…？何を倒れていらっしゃいますの？…あぁんッ！」

セシリアが鈴を見取ろうとするが、セシリアもまた鈴と同じように倒れた！

「冗談はやめてもらいたいものだな…ぐッ！」

次にラウラが倒れた！

「ねえ、どうしたのみんな…ううっ！」

ラウラに続いてシャルロットも倒れ、残るは箒一人となってしまった。

「おい皆…しっかりしろ！あぁっ！」

最後に箒が倒れた…

『フフフ…主らは余の笏を勝手に使った。後で地獄に連れて行ってやろう…』

最後に残された棒切れは、なんとまるで倒れた箒たちを嘲笑うかのように浮遊し、どこかへ飛んでいった。

しばらく経った後、ボランティアとしてゴミ拾いのためにリヤカーを押していたジュードとレイアが倒れた5人をたまたま見かけた。二人は5人を看取った。

「ねえ、大丈夫！？呼吸が止まっている…目もうつろだ」

「うそ！この子達って隣のクラスの箒たちじゃない！？」

「…とにかく、保健室に運ばないと！」

「わたしも手伝うね、ジュード！」

二人で箒たちをリヤカーに載せ、保健室に急行した。

『午前１０時頃、古等簿市の闇魔堂にて祀られていた闇魔像から笏が盗み出される事件がありました。盗み出した犯人は階段から転倒し、全治１ヶ月の重傷を負いました。病院に搬送された犯人は「金のために盗んだが、その後祟りを受けた」と供述しています。笏については現在も行方を掴めておりません』

職員室でテレビのワイドショーを見ていた、眼鏡をかけた山中（やまなか）さわ子、ピンク髪の小学生のような体型の月詠小萌（つくよみこもえ）（こう見えても大卒の成人である…）、銀時、千冬、リフィル、ジェイドは苦々しい気持ちになっていた。

「あー、嫌になっちゃいますよね、こういうニュースは」

「全くです。最近の若者は自分の利益しか考えられない」

さわ子と千冬はこのニュースについて眉にシワを寄せていた。

「でも、いろいろ無茶が出来ると言う特権があるから若者は大好きです！歳をとってからだと、体が言うことを聞きませんからね！」

「その通り、若いってのはいいものですよね。自分の死すら恐れないのですから。死んでからだともう遅いですけどね」

小萌の言葉に続くジェイドの辛辣な毒舌に、若干引く教師陣。

「セイジ先生はどう思ってんですか？」

銀時がリフィルに聞くと、

「ふっふっふ…闇魔の祟りか。これは一度闇魔堂に入って調べてみなくてはな…」

（なんかこの人危ねぇぇぇぇぇぇぇ）

オカルトマニアのリフィルの態度に若干引く教師陣だった。

一方保健室では、ジュードたちに救出された箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラがベッドに横たわっていた。心配で保健室に来た一夏が見守るなか、小さな子供のようなトナカイ、チョッパーがシャマルと共を容態を看ていた。

「ダメだ。打つ手無しだ。おれたちじゃ到底歯が立たないよ」

チョッパーのいうとおり、5人の目は生気も光もなく、そして顔はまるで死人のように虚ろだった。命に別状ないが、まるで魂を抜かれたかのようであった。

「何とかならないんですか？」

「残念だけど、おれたちではただ見守ることしか出来ない…」

チョッパーはただ虚しくも事実を伝えることしかできなかった…

（クソ！俺はなんて馬鹿なんだ！あのとき教室に戻らずにいれば…！）

帰り道、一夏は自分のせいで箒たちを危険な目に遭わせたことを後悔していた。

そして一夏の前にある男が現れた！幻覚なのだろうか、しかし一夏にはそれがはっきりと見えた。

『余は地獄の閻魔よ。織斑一夏、主の過ちが5人の思い人を苦しめた！』

彼は閻魔だった。

『篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒを助けたいなら、今日が終わる夜更けの0時まで余の笏を返せ。さもなくば、明日、きゃつらは絶望に苦しみ、やがて地獄に墜ちるであろう…！』

閻魔はこう告げたあと、一夏の前から消えた。

「じゃあ、あの笏を探さなくては。でもどうやって…あ、あれか！？」

まさか闘技場に落ちた棒切れが笏なのかもしれない！一夏はそう思い、すぐに駆け出した。

闘技場に辿りつき、あちらこちらを探し回ってみた。

だが棒切れと思しきものは見当たらなかった。一夏は近くの人に聞いてみると…

「笏？なんだそれ、知らないなぁ。でも、2年に情報通の奴がいたからそいつに聞けばいいんじゃないの？」

一夏は、この学園の傾奇者であり、情報通である前田慶次に問い合わせてみることにした。

「前田先輩、あの」

「んー、あんた1年の五人娘に追っかけられてる鬼姉の弟さんかい」

「鬼姉の弟はやめてください…」

「五人も追っかけられてるなんてそういう男はそうそういないよ！そいつは恋ってヤツだ。早く彼女たちの気持ちに気づいてやりな！いやーそれにしても困ったもんだよ。似たような身内を持った俺としては似た者同士…」

慶次がおしゃべりすぎてこちらの言い分を聞かせてくれない。やがて彼が話していると、彼の背後から女性の姿が…

「慶次！」

「うんうん、俺を見つけるたびすぐガミガミ…そのうち心も老けて…」

「慶次！」

「こういう口うるさい身内がいて困るよ。少しは煮干とか牛乳とかでカルシウム摂取を…」

「慶次！」

慶次が振り向くと…いきなり女に服をつかまれた！

「私はまだまだ若いつもりです！それとカルシウムもちゃんと摂ってます！」

「げ、まつ姉ちゃん！」

「また放課後の補修をサボるとは！今日こそ反省していただきますよ！」

慶次の前の前に現れたのは、慶次の叔母であり、この学園で教師を務めるまつであった。まつは慶次の服をつかんだまま、どこかへ連れ去っていった。結局笏について聞き出すことは出来なかった。そして一夏は改めて口の利き方に気をつけようと思ったのだった。

時刻はもう１０時を回っているのだろうか…一夏は不貞腐れていた。

笏が一向に見つからず、さらに手がかりすらも見つからない。だがなんとしてでも笏を闇魔の元へと返さなければ、箒たちは地獄に堕ちることになるのも時間の問題だ。

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ。彼女たちとはもう会えなくなってしまうのだろうか…？

ふと、一夏はある光景を目にした。

路地裏で、青い髪に褐色肌の粗暴な感じの男が寝ていた。何かの棒切れを持って眠っている。

「ア…アレは…！」

男が手に持っているのは、なんと一夏が闘技場で見かけた笏だった！だが運悪くその持ち主は一夏ら生徒にとってもっとも恐れられている存在であった。

「持っているのはあのバルバトス先輩じゃないか…」

バルバトス・ゲーティア。モモタロスらと並ぶ、黒楼州学園の四

天王の一人である。高校生にしてはいささか老け顔ではあるが…数多の名だたる暴走族やヤクザをたった一人で潰してきたことから、四天王に君臨していた。一説によると、彼と対峙したチンピラが釘バットを取り出してきたところ、「アイテムなど使ってんじゃねえ！」とか言って一瞬で病院送りにしたんだとか。

「取ろうとしたら殺される…！だがやるしかない！」

一夏は恐る恐る手を差し伸べ、バルバトスの握る笏を取ろうとする。だが、不幸にも彼は目は目覚めてしまった！

「俺に吸収（？）されたい奴は誰だあぁぁぁぁぁ！！」

奇妙な夢を見ていたらしいが、まあそんなことはさておき…

いきなりバルバトスは笏を振るい、一夏に殴りかかってきた！一夏は自分のＩＳ「白式（びゃくしき）」を起動させようとするが…？

「ＩＳ（アイエス）など使ってんじゃねえええええ！！」

バルバトスからアッパーカットを喰らった！一夏はそのまま転倒、土下座をして謝った！

「うううううわぁー！！ごめんなさいごめんなさい！！その棒切れください！」

「やかましいわ！せっかくいい夢を見ていたというのに、貴様ぁ～！」

やはりこの男に言葉は通用せず、一夏の謝罪も説得も徒労に終わった。バルバトスは一夏に手をかざす。

「燃やし尽くしてやる！灼熱のバーンストライク！！」

一夏は目を閉じ、死を覚悟した瞬間であった…

「あれ？俺、生きてる…？」

一夏が目を開くと、そこには右手をかざした当麻の姿があった。彼のイマジンブレイカーが、バルバトスの技を防いだようだ。さらにその左手には、バルバトスから奪ったのだろう、笏が握られていた！

「…上条！」

「織斑！事情はマティスやロランドから聞いた！ここはオレに任せて先に行け！篠ノ之たちを救えるのはあんただけだ！」

当麻は一夏に笏を渡すと、閻魔堂に行くように促す。だが一夏はそんなクラスメイトが心配だった。

「だけど上条…」

「なにやってんだよ！？時間がない！早く行かねえと手遅れになる！オレの事はいい！行けぇー！！」

一夏はしばらく渋っていたが、やがて笏を握り締め、覚悟を決めた。

「……わかった。死ぬなよ！！」

一夏は当麻を心配ながら、閻魔堂へと走り始めた！その背後では、当麻がバルバトスにタンカを切っていた。

「てめえケンカが強ぇからっていつまでも上にいるなよ？『一匹の虫にも五分の魂』って言葉があってな…オレみたいなヤツにも気をつけろってことだ」

「小僧…この俺様に楯突いた罰は重いぞ！！」

「てめえの幻想、オレがぶち壊す！！」

そして、当麻とバルバトスが激突した！

「うおおおお！」

「ぶるぁぁ～！」

その夜、保健室では…

箒「うううっぅう…一夏…！」

セシリア「ハァ…ハァ……一夏さん…」

鈴「一夏…うぁぁぁぁぁぁ！」

シャルロット「一夏ァ…アアア、一夏ァ…」

ラウラ「ゥゥゥ！…一夏…ハァァ…！」

閻魔の祟りによって前にも増しておどろおどろしいうなり声を上げた。顔には汗が伝い、顔も青ざめている。時を追うごとに、死へのカウントダウンが迫っていた。その様子は、今にも死神が彼女たちを地獄に送ろうとしている様でもあった…

やがて一夏は閻魔堂へ続く階段の手前にたどり着いた。もう何時間走り続けたのだろうか？彼の体に相当な疲れが溜まっていた。

屋外の時計に目をやると、時刻はもう１１時半をさしていた。

「あと…３０分か…！いそがねえと箒たちが…」

すると、一夏の耳にある声が聞こえていた。

一夏！なんてだらしない男だ。私と一緒に稽古しろ！

一夏さ～ん！わたくしと一緒にお昼ご飯にいたしますわ！

一夏ー、あたしの酢豚、食べてくれるよね？

一夏のえっち…でも、僕はそんな一夏が好きだよ♪

一夏は…私の嫁だ！い、異論も反論も認めん！

彼女たちがいたから、一夏は頑張れた。だから、死なせるわけには行かない！

一夏は体に鞭を打ち、体を走らせた！！

一夏はとうとう閻魔堂の手前まで登ってきた。体に痛みが走り、歩けるのが限界であった。一夏は閻魔堂の戸を開けた。
そして手に持った笏を、閻魔像の右手に戻した。
「閻魔大王…これでいいんだろ…？箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、あいつらを元に戻してくれ……」
そして一夏は崩れるように倒れた…
そのとき、一夏の携帯電話がポケットからポロリと出てきた。携帯に刻まれた時刻は、一日を迎えるまで後一分と言うところであった…
「箒…また俺と稽古してほしいんだろ？セシリア…今度はマシなサンドイッチ作れよ…、鈴、お前の作った酢豚、食いたくなってきたな…、シャル、昔と比べていい女になってきたよ…、ラウラ、嫁、嫁って、そんなに結婚してえのかよ…」
一夏は、５人の少女を思い浮かべながら、ゆっくりと目を閉じた…

１時間後、閻魔堂に一人の女性がやってきた。彼女はある目的を持ってここに着たが、倒れていた一夏を見ると、呆れたようにつぶやいた。

「ここの調査に来たら、思わぬ発見ね。ほんとしょうがないわね…学校で眠っている彼女たちと再会させてあげましょう」

女性は一夏をおんぶし、閻魔堂を後にした。

「昔、ジーニアスにこうやっておんぶしてやった事があったかしら…」

階段をゆっくりと下りながら、同僚のことを思い出す。

「織斑先生、あなたは立派な弟を持ってうらやましいです…」

翌日。１－Ａでは…

「一夏！今日も剣道の特訓だ！」

「教室で竹刀を振りまわすなよ、やめろって！」

いつもの通り箒と一夏が稽古（？）をしているその途端、一夏の背後からセシリアがバスケットを持って現れた。

「一夏さん！今日もサンドイッチ作ってきましたわ！」

セシリアがバスケットからサンドイッチを取り出すと、それを一夏の口に突っ込んだ！

「ムグ！モグフゥ…」

「箒ィィッ！」

箒の背後から声が聞こえたので彼女が振り向くと、鈴が飛び込んできた！鈴が箒を押し倒し、マウントポジションを取る。

「やっぱり剣道させようとしてんだね！幼なじみとしてあたしが絶対に許さないわ！」

「何を言う！今の男には剣術も必要だ！」

「必要ないと思うけどね！」

キャットファイトの後、二人は身体の一部にＩＳを起動させ、戦闘を開始した！

「やめてよ３人とも！一夏は僕のものだよ、絶対に渡さない！」

シャルロットが箒、セシリア、鈴を怒鳴った後（怒るところが違うと思うが…）、セシリアに足止めされている一夏を無理矢理引っ張り出した！

「ささ、一緒にご飯だよ！」

「ちょっシャルロットさん！抜け駆けは許しませんわよ！」

「一夏！私も連れて行け！」

乱闘に紛れ、ラウラが一夏の腕を掴んだ。

「お前は私の嫁、すなわち一心同体だ！さあ行くぞ！」

「だから俺は嫁じゃない！」

「そうはいきませんわ！一夏さんはわたくしがもらいますわ！」

「今日こそ一夏が誰のものなのか決着をつけさせてもらうよ！」

シャルロットの合図でセシリア、ラウラもＩＳを起動。５人によるＩＳの乱戦が始まった…

ワイワイガヤガヤ。

いつもと変わらぬ光景を、ほっぺたに絆創膏を貼った当麻が呟いた。

「無事でよかったもんだぜ。やっぱ、普通の日常が一番ってね」

地・獄・試・練（後書き）

キャストの皆さま
『インフィニット・ストラトス』
織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、
シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、織斑千冬
『とあるシリーズ』
上条当麻、月詠小萌
『テイルズオブエクシリア』
ジュード・マティス、レイア・ロランド
『テイルズオブシンフォニア』
リフィル・セイジ
『テイルズオブジアビス』
ジェイド・カーティス
『けいおん！』
山中さわ子
『銀魂』
坂田銀時
『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』
トニー・トニー・チョッパー
『魔法少女リリカルなのは』
シャマル
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
前田慶次、まつ
『テイルズオブデスティニー２』
バルバトス・ゲーティア

作者：皆さまにお知らせです。
前回、フォーゼのあるエピソードを元にした長編をやるというこ

とで、
次回、『ヒロインズフェスタ』編に突入しようと思います！
現在、自分なりの脚色も加えて推敲しながら執筆中ですので、
これからも応援よろしくお願いします！

ユウキ：今回から質問とか受け付けようと思います！
その内容を面白おかしくやっていきたいのでどしどし応募してください！

賢吾：感想、意見も待っているぞ。

残・念・美・女（前書き）

アルト：今回からヒロインズフェスタ編が始まるな！

ミシェル：読めばわかると思うが、この話は
仮面ライダーフォーゼのあるエピソードを基に脚色しているぜ。

ルカ：えーと、作者さんによると、エンディングはある人が
歌っているからこの話にしたということです。
あ、そろそろヒロインズフェスタ編、始まりますよ！

シェリル：あたしの歌を聞けぇー！

ランカ：抱きしめて！銀河の果てまで！

残・念・美・女

本日の仮面ライダー部の活動は人気のない空き地で始まった。そこには賢吾、ユウキ、そしてフォーゼに変身した弦太朗の姿があった。

「フォーゼのアストロスイッチは全部で４０個残されてあった。だが使えるのは数えるほどしかない。後は順番に調整して、使用可能にしなければならない」

そういって賢吾が取り出したのは「１０」と書かれた黄色のスイッチだった。

「ナンバー１０、エレキスイッチだ。実戦で使えるかどうか試してみてくれ」

「おう」

賢吾からエレキスイッチを渡されるフォーゼ。そんな彼をユウキが心配する。

「いきなり使って大丈夫？」

「ビビるなユウキ！これも大事な仮面ライダー部の活動だ！」

「そんな部活はないと言ってるんだがな…」

やはり呆れる賢吾。

「お前にできないことをオレがやる！見てろよ賢吾！」

「名前で呼ぶな…」と呆れる賢吾をよそに、フォーゼはロケットスイッチをエレキスイッチに換装する。そしてエレキスイッチをＯＮにすると…

なんとフォーゼの姿が変わった！輝く金色に青い複眼は、稲妻を想起させる。右手にはロッドを持っていた。

「こいつが電気エネルギーを含有している『エレキステイツ』だ。その『ビリーザロッド』をコンセントに差し込め」

そういわれたフォーゼがロッドの柄から伸びるコード先端のプラグを、鍔のコンセントに差し込んだが…

「○$×♪△※□∞☆♂∀♀＆！！！」

なんとフォーゼに電流が逆流し、感電してしまったのだ！この状況を見ていたユウキは顔をそっぽに向ける。一方賢吾は…

「このスイッチは使えんな…調整しても無駄だ」

フォーゼは感電した後、そのまま倒れた。空き地から去っていく賢吾の言葉に、「無駄！？」と返しながらも、エレキスイッチをＯＦＦにした。

その後変身を解いた弦太朗は感電の影響かいつものリーゼントからアフロに近い髪型になっていた。彼は頭をポリポリ掻き始める。

ユウキが笑いながら心配する。

「う～まだめまいがする…肩がほぐれたけど」

「うふふ、もう大丈夫？」

「大丈夫だって！めまいは心の格闘だ！」

「よかった。わけのわからないこと言うから、いつもの弦ちゃんだ！」

こうして二人は空き地を後にした。

弦太朗とユウキはキャンパスを歩いていると、ある人物に目が留まった。その人物とは、金髪碧眼で青い蝶の髪飾りをしたスタイル抜群な少女だった。彼女は、何故かバナナを食べている男たちと一緒にしていた…いや、従えていると見るべきか？取り巻きの男がこう言った。

「星奈（せな）さま、これからどうしますか？」

「このまえの映画のブルーレイをお持ちいたしました」

星奈と呼ばれた少女が掲示板の前に止まると…

「いかがされましたか？星奈様」

バナナを食べ終えた取り巻きの一人が星奈の様子を伺った。

このやり取りを見ていた弦太朗は星奈の金髪巨乳に思わず心を奪われてしまう。

「うほぉ～、きれいなお嬢様じゃねえか～。特にあのおっぱい（恍惚）」

「うわ…」

一方、ユウキが嫌な反応をして引いたので弦太朗が聞くと…

「あの子は２－Ａの柏崎（かしわざき）星奈さん。この学園の理事の娘で容姿端麗、成績優秀、頭脳明晰、運動神経も良い…とまではいいんだけど自分の見てくれや優秀さに全然謙虚さを見せないうえに、あのように男子生徒を侍らしているというイヤ～な女よ。弦ちゃんも奴隷にされたくなかったら関わらないほうがいいよ！」

ちなみにこの学園は複数の理事によって管理されているので、星奈は理事の娘とはいってもあの理事長のハマーン・カーンの娘ではない。

「けどよ、あいつが見てるのはなんだ？」

そういって弦太朗は星奈の見ている張り紙に注目する。

「ヒロインズフェスタね！」

ユウキの言うことに思わず弦太朗が「ヒロインズフェスタ？」とオウム返しに聞いたのでユウキが説明する。

「この学園の伝統行事の一つで、半年に一度、生徒全員の投票でそれぞれ高等、中等、小等部門で黒楼州学園の1番の女子生徒を決めるの！第1次審査はパフォーマンスを披露して、第2次審査はスピーチ、この2つの審査で得点を合わせてナンバー1が決まるの！まぁ、今回も作品の特性上個性的な女子生徒がたくさんいるんだけどね」

「そっかー、この学園もいろいろあるんだなぁ」

ふと、星奈のもとに数人の男が何かを持ってやって来た。持っているのは花束やら手紙やら箱やら。

「星奈様、これを受け取ってください…」

星奈の取り巻きの一人が彼らのプレゼントを受け取る。その様子を見た弦太朗は、真っ先に彼女の元へ走った。

「あ、ダメよ弦ちゃん！奴隷にされるよ！」

ユウキの制止も振り切り、星奈の前に姿を現した。

「あんたへのプレゼントだろ？ちゃんと自分の手で受け取れよ」

「おい、星奈様になんてことを言うんだ」

星奈をかばうように取り巻きが言う。そして星奈も弦太朗に言った。

「転校してきたばかりの奴隷候補の一人があたしに何用かしら？」

星奈の挑発的な態度も受けずに、弦太朗は指差してこう言い放った。

「奴隷じゃねえ！オレは如月弦太朗、この学園の連中全員と友達になる男だ！」

しかし当然のごとく取り巻きたちは弦太朗の言い分を馬鹿にするかのように笑い出す。

「星奈様に向かって何言ってんだコイツは」

「頭になんか沸いてんじゃねえのか？」

しかし弦太朗も下がろうとしない。

「そうかな？不可能を可能にするのがこのオレだ、あんたともすぐ友達になる」

「あはは、馬鹿馬鹿しい。あんたの言葉を借りれば、あたしはこの学園の男を奴隷にする女よ」

「それは無理だな。オレは最後まであきらめねえ男…おわ！！」

ズル

弦太朗が歩み寄った瞬間、そこらにあったバナナの皮を踏んでしまい、ずっこけた！「いって～」と漏らす弦太朗を笑う取り巻きたち。そして星奈も弦太朗を馬鹿にした。

「さ、こんな馬鹿の相手はせずに先に行こうかしら。ついて来なさ

い」

「はい、星奈様」

星奈と取り巻きが去ると、今度は彼の元にピンクのグラデーションがかかった金髪のスタイル抜群の女性がやってきた。

「学園連中と友達になろうだなんて随分と図太い神経の持ち主ね」

彼女は、１－Ａのシェリル・ノームであった。起き上がった弦太朗がシェリルの名を呼ぶ。

「でも私と友達になれるかしら？あの柏崎みたいに」

「どういうことだ？」

「私はシェリル、『銀河の妖精』と呼ばれたトップシンガーよ。言っておくけど、私結構しぶといわよ？その程度の積極性じゃたぶん落ちないかしらね」

シェリル・ノームは１７歳にしてその美貌と美声から絶大な人気を博し、「銀河の妖精」と称される。リリースされた楽曲は常にオリコンチャートの上位に位置しており、１７週連続１位の記録を持つ、「この世に生まれてシェリルの歌を聞かない日はない」とまで言われる大人気歌手だ。もちろん、ヒロインズフェスタの出場も決まっており、優勝候補の一人とされる。

もちろん弦太朗のようなヤンキー風情では友達になるのは無理だとシェリルは断言する。しかし弦太朗はシェリルがそんな人間であることを承知しながらも、彼女にタンカを切った！

「じゃあ賭けだ！ヒロインズフェスタであんたが負けたら、オレと友達になれ！」

「いいわよ？その代わりあんたが負けたら、二度と私の前に姿を見せないで頂戴」

「わかった…上等じゃねえか」

二人の表情はまさに自信満々だった。シェリルが去った後、ユウキが飛び込んできた。

「あ～もう大丈夫あんな約束をして！？」

ヒロインズフェスタに立候補したシェリルは、上記の通り、星奈と違って老若男女問わず人気者で、芸能界にも進出しているトップシンガーだ。弦太朗はそんな彼女に博打を吹っかけてきたのである。普通に考えると勝てるわけがない。

「やってみなくちゃわかんねえさ」

弦太朗の表情は、揺るがぬものだった。そしてその右手には、エレキスイッチが握られていた。

１－Ａの教室では、早乙女アルトが窓の向こうにある空をボーっ

と眺めていた。すると背後からランカ・リーに声をかけられる。

「どうしたのっ、アルトくん」

「ランカ…」

突然声をかけられたのでハッと冷めたかのように振り向く。アルトは手にした紙切れをランカに見せる。

「なぁランカ、これ…出て見たくないか？」

それは、ヒロインズフェスタのチラシであった。

「え…？出てみたいけれど…シェリルさんと比べると、私なんかじゃ正直…ほら、デビューしたばっかだし」

だがそんなランカの緊張を払拭するようアルトが慰める。

「何言ってんだよ。お前シェリルに憧れてデビューしたんだろ？お前ならきっとやれるぜ」

「え、そう…？ありがとう、アルト君！」

いつもの活発さを取り戻したランカはアルトに感謝し、教室を後にした。

ランカ・リーは歌が好きで、数ヶ月前、シェリルとの出会いをきっかけにアイドルを志していた。兄の反対を押し切って芸能プロダクションに入り、映画出演をきっかけにデビュー。わずか数ヶ月で

「超時空シンデレラ」と呼ばれるスーパーアイドルになっている。

それでは、ランカデビュー前のシーンをごらん頂きたい…

〜〜〜〜〜〜

数ヶ月前、まだランカが黒楼州学園に転校する前。ランカは隣町の幕呂守（マクロス）という街にあるお嬢様学校に在籍していた。ちなみに兄は古等簿市の警察に就いていた。

グレーの髪に日焼け肌に無精ひげが生えた、兄にしては妹と全然似てないオズマ・リー（27）は、妹がテレビに映っているのをみて、あるプリント片手に激怒した。

「どういうことだこれは！？なんの断りもなく『ミス・幕呂守』に出るなんて…見ろ、おかげで退学処分だ！俺がお前をあの学校に入れるのにどれだけ苦労したと思ってるんだ！」

ランカが街のミスコンに参加したことで、学校を退学にされたのだ。しかしランカとしては、歌手になりたいという夢があり、自分の意思でミスコンに出たのだった。

「黙ったわけじゃないもん！私、歌手になりたいの！」

「寝言も大概にしろ！お前みたいな引っ込み思案が歌手なんかできっこない！」

だがこのオズマの言葉が、兄弟仲に亀裂が入った！

「……！うぅ〜、お兄ちゃんの馬鹿ー！」

目に涙が溜まったランカが激昂し、そこらにあったものをオズマに投げつけたのだ！

「うわっ、ちょっと待てランカー！」

「馬鹿ー！」

こうしてランカは泣き出しながら家出してしまったのだ。

妹を泣かせてしまったオズマは携帯電話（何故か印籠の形をしている…）を取り出し職場の部下を呼びつけ、ランカを探すよう言いつけた。

「いいか、上司の命令だ！絶対にランカを探し出せよ！」

そう言って電話を切った。完全な職権乱用である…

黒楼州学園の教諭である、栗色の髪をした大人の女性キャサリン・グラス（通称キャシー）が話しかけてきた。

「…ランカさん、どうかしたの？」

「ちょっと、な…」

家出をしたランカは公園で一人不貞腐れていたが、黒楼州学園の生徒であるミシェルに見つかった。彼はランカを元気付けるためソフトクリームを奢ってあげた。

「これ食べたら帰ろう。キャシー先生が言ってたよ、オズマさんが心配してたって」

「やだ！お兄ちゃん、いつまでも私を子ども扱いするし！お兄ちゃん仕事で忙しいし、私、みんなに歌を届けたいの！」

いつまでも渋るランカにため息をつくミシェル。そして、こう言った。

「…甘えるのもいい加減にしようね？オズマさんがどんな気持ちで君のために働いているか、知ろうともしないでよく言うよね？ランカちゃん、そんなに歌いたいなら今ここで歌える？誰も君を見ようともしてないこの場所で…」

そんなミシェルの苦言で目が覚めたランカは、勇気を振り絞って人前で歌い始めた。そして才能があったのか大勢の人が集まった。兄と仲直りした後、彼女の才能が芸能プロダクションの目に留まり、兄の許しをもらってデビュー。超時空シンデレラと呼ばれたランカは、オズマの知己であるキャシーの紹介で、芸能に積極的な黒楼州学園に編入し、今に至る…

～～～～～～

同刻、図書館では一人の青年が本を読んでいた。

羽瀬川（はせがわ）小鷹（こだか）。イギリス人とのハーフのため黄土色っぽい髪の色が特徴的だ。高等部の２－Ａに転校したばかりではあるが、その髪の色のために髪を染め損なったヤンキーと誤解され、それが原因でク

ラスから浮いてしまっている。

やがて席を立つと、周りの生徒や司書が彼の振る舞いにビビった。小鷹が読んでいた本を棚にしまうと、図書館を出た。それにしても小鷹のズボンはひざ下のところまで捲くっており、なんかダサい。

「今日さーあのお店に行ってみない？」

「あ～あたしも誘おうと思っててー」

図書館の前では、二人の女子生徒が歩いていた。しかし図書館から出た小鷹が彼女の目の前に現れると…

「あ……ヒィ！ごめんなさい！」

小鷹を見るたび逃亡した！だが慣れているのか、小鷹はそのまま進んでいった。

自分の教室に戻ると、閉まったままのドアに手をかける。しかし、ドアの向こうから少女の声が聞こえてきた…

「あっははは、からかうなよ～」

（…なんだ、誰の声だ？）

突然の声に思わず手が止まり、様子を伺う小鷹。携帯で話してるのかと思った彼はそっとドアを開けてみる…

すると、思わぬ光景を目撃した！

なんと黒髪ロングに髪の先端にリボンを数束つけた中性的な少女が、笑いながら誰かと話している！

（あいつ、同じクラスの三日月夜空（みかづきよぞら）…？だが俺の知っている三日月は誰かと笑って話すようなヤツじゃない。いつもいつも不機嫌そうな顔して不機嫌そうなオーラを放っていて、誰かと一緒になったというところを見たことがない…）

そんな夜空の驚きの光景を目にする小鷹。だが、それよりも気になることがひとつだけあった。

（いや、それより、あいつは携帯を手にしてなかった！どういうことだ…誰と話しているんだ？そもそも相手はいるのか…？）

さらに様子を伺うと…？

なんと、夜空がただ一人、どこかにむかってペラペラとしゃべっている！

夕暮れの教室で一人、見えざるものと語る少女…なんとな～くシュールだ。

そして小鷹は何を思ったのか、ドアを開けた！

「そういえば、あの時ともちゃんが……ッ！！」

小鷹がドアを開けたとき、夜空は独り言（？）をやめ、すぐいつもの不機嫌そうな顔に戻った。そして彼は教室に入る。

「……なんだ？」

夜空が不機嫌そうに聞いてきたので小鷹があわてて答える。

「そ、その…幽霊とか見えたりするのか？」

「ハァ？幽霊なんかいるわけないだろ」

「けど、さっきまで誰かと話して…」

小鷹の言葉に心をグサリと刺されたのか、夜空の顔が真っ赤になる。

「み、見てたのか！？」

……。

「わ、私は友達と話していただけだ！エア友達（ともちゃん）と！！」

エア友達ってなんだよ……

翌日、やがて小鷹と同じく友達のいない夜空は友達を作るためにある部活を創部した。

夜空「隣人部（りんじんぶ）だ！同じ学園に通う仲間という隣人となる友誼を深めるべく、誠心誠意、臨機応変、切磋琢磨する部活動だ。この学園は作品のジャンル上、大らかだからな。この作品の作者を脅迫すれば、

たいていの事は誤魔化せる。友達がいないという蔑みの目を回避するべく、うわべだけの友達を作りつつ、小鷹の言う本当の友達を探すことがこの部活動の目的だ」

小鷹「その発想はなかった…まあ頑張れ（つうかやって悪いことがあるだろ…メタ発言とか作者脅迫とか）」

夜空「何を他人事みたいに言ってる、部員なのに。昨日お前が先に帰ってしまったから、小鷹の入部届けも一緒に出してやった。感謝するんだな」

小鷹「するかァァァ！！」

というわけで小鷹も夜空に無理やり入部させられることになる。部室がなかったのだが、幸い学園のキャンパスに空きのプレハブ小屋があったので借りた。そんな時、一人の人物が隣人部に入ってきた。

「早くも新入部員が現れたようだな」

「え！？まだ始まったばかりだぞ！」

驚愕する小鷹をよそに夜空が立ち上がり、ドアを開ける。ノックの主は金髪碧眼で青い蝶の髪飾りをしたスタイル抜群な少女だった。

「隣人部ってのはここね？入部したいんだけ」

バタン！！！

何故か夜空は戸を閉め、鍵を閉めた！

「え！？よ、夜空！！」

「さて…活動を始めるか…」

「いや待て！今の入部希望者っぽかったぞ！女の子同士だし、夜空にぴったりじゃ…」

「ハハハ、いやはや何をおかしなことを言ってるんだろうな、この黄土色ヤンキーは…同性の親友ならもうここにいるのになぁ～、ともちゃん♪」

夜空と小鷹が言い争っているうちにノックがまた鳴った。うるさいので夜空は鍵を開ける。

「ちょっと、なんで閉めんのよ！？あたしはただ入部したいだけな」

「リア充は死ね！！」

バタァン！！！

夜空は激昂し、再び戸を閉め、鍵を閉めた！！

さっきの発言からそうだと気になった小鷹が夜空に声をかける。

「…もしかして知り合いなのか？」

「知り合いではない！同じクラスの柏崎星奈…この学園の理事の一人の娘だ。いつも男子にちやほやされている、お嬢様気取りのいけ

好かない小娘だ…ったく、男は金髪巨乳と知ればデレデレと鼻の下を伸ばす…！あんなリア充、死ねばいいのに！！！」

どうやら夜空は星奈のことを敵視しているようだ。詳しくは上記のユウキのセリフにて。

小鷹がダンダンと鳴る音に気づいたので、音の鳴ったほうを向くと、星奈が涙目になりながらプレハブの窓を叩いていた。かわいそうなので小鷹が窓を開けてあげると、星奈がプレハブの外から這い上がってきた！

「何で意地悪すんのよ！？このあたしが入部してあげようって言うのに！！」

「冷やかしならお断りだ」

夜空が窓を閉めようとしたので星奈も泣きながら必死に抵抗する！

「冷やかしじゃないわよ！ポスター見て友達募集って書いてあったんだから！」

「あたしも友達が欲しいのよ！！！」

「リア充は死ねぇッ！！！」

ボコォ！！

星奈のことを知っていたため、夜空はなおも泣きながら必死に抵抗する星奈にアッパーカットを決めた！！魂の叫びも空しく、星奈は遠くに吹っ飛ばされていった…

「おい、いくら嫌だからといってやりすぎだろ…」

小鷹による、星奈を殴った夜空への感想であった…

哀愁漂う夕刻の河川敷。

星奈は、体育座りで土手に座り込み泣きじゃくっていた。

「ぐすっ…あたしも友達欲しいのに。あの意地悪女…」

「困っていることがあるようね、学園理事の娘、柏崎星奈さん」

その時、背後から自分の名前を呼ばれ、思わず振り向く。涙で赤くなった目を見開くと、眼鏡をかけ、スーツを着た青紫の髪の女が

いた。

「あなたは、誰…なの？」

「友達がほしいのなら…私が協力してあげる…」

彼女は髪を片手でかきあげると、懐からあるものを取り出し、星奈に見せ付ける。

それは、奇妙な形をしたメモリと、目玉のように不気味なスイッチであった……

残・念・美・女（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『マクロスF』
早乙女アルト、ランカ・リー、シェリル・ノーム
ミハエル・ブラン、オズマ・リー、キャサリン・グラス
『僕は友達が少ない』
羽瀬川小鷹、三日月夜空、柏崎星奈

小鷹：俺達『はがない』メンバーもヒロインズフェスタ編の
メインキャラとして組まれるみたいだぞ。

星奈：へぇ～！あたしの美貌で作者を下僕にする時が来たのね！

夜空：私はともかくお前じゃありえないけどな、肉。

星奈：ふ、ふ～ん…貧乳が粋がってんじゃないわよ、夜空…

夜空：じゃあお前ら巨乳を撲滅すれば私たちが優位に立つな。

星奈：じゃあさっきもらったメモリとスイッチであんたを葬るわよ！

夜空：リア充は死ね！

小鷹：やれやれ…まあ、これから応援よろしくな！

友・情・真・意（前書き）

梓：あ、あずにゃんです…

ユイ：ユイにゃんです☆

梓&ユイ：二人そろって…

あずにゃんユイにゃん☆

ユイ：みなさん、よろしくです☆

梓：よ、よろしくにゃぁ～

友・情・真・意

前回、柏崎星奈と出会った弦太朗であったが、弦太朗が「この学園の連中全員と友達になる」という宣言に対し、星奈が「この学園の男全員を奴隷にする」と言い返す。今度はシェリル・ノームに出会い、弦太朗は「シェリルがヒロインズフェスタで優勝できなかったらお前と友達になる」と宣言、するとシェリルも「弦太朗が負けたら二度と自分の前に姿を見せるな」と挑発。

性格の悪すぎる完璧キャラ・星奈と銀河の妖精と呼ばれる歌姫・シェリル…二人の厄介な相手とタンカを切ったことに心配するユウキをよそに、弦太朗のほうは「やってみなくちゃわかんねえさ」と自信満々だった。

一方、三日月夜空は友達作りのための隣人部を設立。そんな中、友達が欲しいという星奈が入部するが、その美貌と性格からあっさり夜空に拒絶されてしまう。そんな折、泣きじゃくっていた星奈のもとにある女が現れ、願いを叶えてあげようとばかりにある取り引きをした…

「どうしたらシェリルに勝てるんだァァァァァ！！」

弦太朗はある悩みを抱えていた。シェリルへの対抗策がなかなか思いつかないのだ。このままだと…

⇒シェリルが優勝する⇒シェリルの前に姿を見せない＝学園の連中全員と友達になれない

「このままではオレの夢が頓挫してしまう！ヒロインズフェスタ編が中途半端に終わっちまう！」

憤った弦太朗はある場所へ向かった…

弦太朗は体育館の裏に踏み入れた。そこでは不良どもがたむろしていた。

「よ、教えてくれ。ヒロインズフェスタのことなんだけどさ」

だが展開はなぜか弦太朗ＶＳ不良数人のケンカに発展した！

「オレはただ情報が欲しいだけだってのに、何でケンカになってんだよ！」

そういえば弦太朗さん、前にもこういうシーン、ありませんでしたか？確か赤鬼が初登場する回で。

しかし、やはり１対多数という状況であるにもかかわらず、弦太朗は次々と不良をなぎ倒していく。そして最後の不良を仕留め、彼の胸倉を掴んだ。

「この学園の事は…あいつに聞け…！」

最後の不良は何かに指差した後、ガックリと気を失った。不良の指先には、この学園の風来坊にして情報通と名乗る前田慶次がいた。ちなみに風来坊といわれる所以は、いろんなところに顔が広く、普段の素行の悪さゆえの留年が原因である。

「よう！最近、いろんな友達と恋してるリーゼント！噂は聞いてるぜ！」

慶次が弦太朗に近寄ると、なんと懐から小猿の夢吉が現れ、弦太朗に飛びついた！

「おわ！なんだこのエテ公は！」

「失礼だな、夢吉だよ。…んで、ヒロインズフェスタだっけ？」

弦太朗は夢吉を慶次に返すと、慶次に情報提供を依頼した。

「シェリル・ノームを負かす奴はいるか？」

「シェリルちゃんて、あの銀河の妖精のシェリルちゃんか？へっへへ。任せときなって、まだデビューしたばかりのヤツもいるけど、今年はとんでもない番狂わせがたくさんいるからな！」

だが慶次は自慢げにしゃべりだすと、何かを示すように掌を差し出した。

「等価交換（ギブ&テイク）でいこう。俺はあんたに情報をやる。あんたは俺に何をくれる？」

対して弦太朗は、得意げに口元を緩ませると、腕を組んだ。

「…友情！」

「へっへ、面白いねえ！あいよ！毎度ありぃ！」

ある学級への潜入捜査を開始した二人は、指鉄砲を構え、まるでスパイ映画のようによそよそと行動していた。余談だが、そのいかにも怪しすぎる行動は、仮面ライダーフォーゼ第3話で弦太朗とJKが美羽に対抗する相手を探すかのようであった。

二人が目指していた場所に着くと、そこには「音楽室」と書かれた看板があった。

「ここだぜ、弦太朗。シェリルちゃんの対抗馬の『ふたつ』だ」

ふたつという言葉を利いて、弦太朗はすぐにわかった。音楽室にいる二つの対抗馬はあいつらしかいない。

慶次が気づかれないように扉を開けると、そこには放課後ティータイム(HT)の演奏を、GirlsDead(ガルデモ)Monsterが見守っていた。だが弦太朗はある疑問を抱き、慶次に小声で話す。

(おい、ヒロインズフェスタで入賞されるのは一人じゃねえのか?)

(勘違いしなさんな。ヒロインズフェスタに出場するのは梓ちゃんとユイちゃんだ。『あずにゃんユイにゃん』のデュエットで出場するんだとよ。まぁ作者は「ネタが尽きたからこういうことにした」って言う裏話も散見されてんだけどな…んじゃ、いきますかな!)

(おい慶次!せめて演奏が終わってから…)

「やぁやぁ皆さんがた精が出ますなぁ!!」

弦太朗の制止を無視し、空気を読まない慶次は音楽室の扉を開けた！しかし当然のごとくＨＴＴとガルデモから反感の牙を剥かれる。

「三味線弾きに和太鼓叩き！いやはや青春に恋してますなぁ！！」

「テメェェェェェ！！せっかくあずにゃんたちが練習してるのを真面目にみてたのに何空気読まずに入ってきてんだよ！テメー軽音なめてんのか！？三味線ペケンペケン鳴らして和太鼓ドンドン叩くのが軽音だと思ってんのかコラァ！風来坊だからって調子こいてんじゃねえぞ！」

ガルデモのユイがいきなり激昂し慶次に掴みかかった！そして背後に回ると抱きかかえそのまま後ろに慶次を叩きつけた！ジャーマンスープレックスだ！！

「私たちの練習を邪魔しないでください！私たちもヒロインズフェスタのために…頑張ってんです！！」

ユイに連携してＨＴＴの梓が倒れた慶次の腕を自分の両脚で挟んで固定し、小さな体を震わせて腕ひしぎ十字固めを極めた！！

「ひぃぇ～～！悪かった！頼むから放してくれ～！」

やがて慶次を叩き潰した２人が弦太朗の存在に気づくと、頭をぺこりとさげた。

「「あ、ごめんなさい弦太朗先輩！お恥ずかしいところを見られてしまいました！！」」

「お、おう…（可愛い子かと思っていたのに、裏の顔があったのか

…？）」

ユイと梓のキャラクターに戦慄する弦太朗だった。

ラビットハッチ内部。ユウキはあるプラモデルを組み立てて愛でていた。

「んー、この『ＭＳＮ－０２ジオング』はステキだ！いかにも宇宙用モビルスーツというデザインがたまらない～。この脚部の計算されたハート型のブースター…かわいい～！『ＲＧＭ－７９［Ｇ］ジム』『ＭＳ－０６Ｊザク』などの足つきにはない魅力…まさしく『足なんて飾り、偉い人にはわからない』って感じ♪」

彼女の奇妙な嗜好はよしとして…弦太朗がラビットハッチにやってきた。

「オレにはお前のほうが…可愛く見えるぜ！」

カッコよく指差す弦太朗。振り向いたユウキが皮肉る。

「…ついに壊れたか、まさかフォーゼの副作用？」

「いや…お前は十分に可愛いよ…」

弦太朗はそういって手先でカメラを作り、ユウキを指カメラで囲む。そして弦太朗は続けてとんでもない事を言った。

「だからヒロインズフェスタに出ろ！」

「…へ！？いや無理無理無理無理！」

あわてて拒否するユウキ。だが弦太朗は説得を続ける。

「いやお前ならできる！オレのピンチを救ってくれるのはお前しかいない…お前だって仮面ライダー部の一員だろうが！」

「いやライダー関係ないし…」

その時、ラビットハッチの入り口から賢吾が出てきた。

「ヒロインズフェスタは頼んだぞ、ユウキ」

「はい！？」

「中野梓やユイ、ランカ・リー以外にも2人ほど女子生徒が2日前から欠席している。友人たちによると、『姿の見えない』怪物に襲われたらしい。見えないゾディアーツに襲われているのは、おそらく…フェスタの候補者だ」

そう言って賢吾がバガミールにカメラスイッチを差し込む。出現したモニターには多くの女子生徒が映されていた。

「残された最有力候補者はシェリル・ノーム、ランカ・リー、柏崎

星奈、中野梓、ユイ、その他諸々だ」

「シェリルに星奈って、あいつか」

弦太朗は先日の二人を思い出す。続けて賢吾が言う。

「そして…城島ユウキ」

「わ、私はやだってば～！」

当然ユウキは頬を膨らませ、気も乗らない。ゾディアーツに襲われたら元も子もない。

「俺と如月は外側から、君は内側から出場者の様子を見てほしい。これ以上ゾディアーツによる被害を出したくはない…」

「頼むぞ！これも仮面ライダー部の活動だ！」

「やだってばやだ～！」

二人の説得にもやはりユウキは子供みたいに駄々をこねる。だが弦太朗はあるもので彼女を釣る。

「そんなに渋るならこっちにも考えがある…仮面ライダー部の活動に協力してくれたら、宇宙好きなお前のために『ＲＢ－７９ボール』のガンプラを買ってやるよ！」

「え…ほんと？じゃあがんばる！」

早速やる気を出すユウキであった…

本校のすぐ近くにあるアミューズメントパーク内にあるビリヤード場。

シェリル・ノームは、キューを片手にビリヤード台に立っていた。彼女はキューを構えると、９個に集められたカラーボールに向けて白い手球を突いた。彼女に突かれた手球はカラーボールに命中し、そのうち９番の字が書かれたボールが台のポケットという穴に入った。

「ナインボール、ゲットよ」

すると背後からパチパチという拍手が鳴った。青紫の髪の女性で、眼鏡をかけ、スーツを着たシェリルのマネージャー、グレイス・オコナーであった。

「さすがね、シェリル」

「私はシェリルよ、あまり褒めちぎらないで欲しいわね」

どうやらシェリルはグレイスのことが苦手なようだ。グレイスは紙袋を手にしており、そこから何かを取り出した。

「シェリル、ファンからのプレゼントよ…」

そのプレゼントとは、「ＬＯＶＥ」と書かれたペンダントであった。

「なによ、こんなちゃちなペンダントで私が喜ぶとでも思ってんの？」

だがシェリルはこれに眉をひそめ、なんとゴミ箱に投げ捨てた！

「字が汚くて読めないわ。鶏でも読めそうな手紙ね」

手紙を渡されたときも読まずにバリバリと破いて捨てたり…

「不味そうね…素人が作りそうな食べ物だわ」

クッキーやらチョコを渡されると口にせずに投げ捨てたり…

「何これ！悪趣味にも程があるわよ！」

手描きのシェリルのイラスト数十枚を気味悪がって丸めて捨てたり…

「今度はＤＶＤ！？本当に気持ち悪いわね！」

シェリルの写真が保存されているというＤＶＤにはパッケージごとキューで叩き割ったり…

彼女に渡されたプレゼントに悪態を吐いていった。

「私の欲しい物を考えないプレゼントはただの自己満足…ほんとに馬鹿みたい」

そしてある人物のことを思い起こしていた…

「如月弦太朗…わかったように口利いて、私の気持ちも知らないくせに…」

ふと、二人のやり取りをとある少女が傍観していた。手には奇妙なスイッチを持っている。

グレイスはその視線に気づくと、言葉を発せず彼女に向けて微笑んだ。その笑顔は、どこか不気味さを感じさせるものであった…

小鷹と夜空はある人物を求めてそこらを歩いていた。夜空はその人物についてひそかに情報を集めていた。彼女はこういう。

「今からお前にいい奴を紹介してやろう」

「…お前のことだからろくでもないヤツじゃねえの？」

「…なんか言ったか？」

やがて夜空たちが見かけたのは、リーゼントの頭にTシャツ、短ラン、ボンタンと言う時代遅れの格好をした男であった。何かしているようで、辺りを見回している。

「こいつだ」

「やっぱりろくでもないヤツじゃないか」

「何を言ってる。私は見たんだぞ、あいつの姿を。気になってしょうがなかったからな」

夜空がリーゼントに声をかける。

「おい！そこのお前」

「あ？オレか？」

リーゼントが振り向くと、夜空は彼にこんなことを言った。

「お前如月弦太朗といったな。隣人部に入れ！」

（そんな唐突に…？）

小鷹が呆れて突っ込んだ。さらに夜空は弦太朗に言葉を投げかける。

「隣人部というのはな、同じ学園に通う仲間という隣人となる友誼を深めるべく友達を作りまくる部活のことだ！お前は全校生徒と友達になるとか抜かしていたな。そんなお前に最適の部活だ！さあ、入るがいい！」

そういって夜空は入部届けを取り出す。だが弦太朗はこう返した。

「何を言ってるのか知らねえが…部活ならもう間に合ってるぜ」

「なに？」

弦太朗は胸を張って声を上げて語った。

「仮面ライダー部だ！怪物からこの学園を守る部活だ！そんなにオレとダチになりてえなら入部届け代わりにダチになってやるよ！」

弦太朗がハッハッハと高笑いしたので、さすがの夜空も調子を狂わされた。だが弦太朗は先ほどの態度を一変させ、眉をあげた…

「だがな、お前。あの手この手使ってダチを作ってて楽しいのか？相手にとって見れば不愉快な手を使ってでもダチが欲しいのか？」

「そ、それは…！」

夜空は突然の弦太朗の言葉に戸惑う。だが弦太朗はこめかみを指差し、続けていった。

「悪いこと言っちまうが、オレはそんなの認めねえ。いいかあんた。本物のダチ作りってのは『ここ』じゃなくて…」

その指が今度は自分の胸をチョイチョイとつつく。

「『ここ』だよ。母ちゃんから教わらなかったのか？『ダチ』ってのはよ、『金』で買えねえし、『力』で奪えねえんだ。もしそれで出来たダチなら…絶対ニセモノだ」

そして弦太朗の手が平手になると、自分の胸をパンと叩いた！

「本当にダチ欲しいんなら、心をデカくさせて見やがれ！お前にもあるんだろ！？生まれたときから持ってる、手前にしかねえ『心』ってもんが…」

「なに能書き垂れてんだ、行くぞ如月」

「あ、賢吾！今いいところだったのに…」

すると背後から別の生徒に襟を掴まれ、そのまま引きずられた…

「ま、オレと会った時点でお前らはダチ確定だがな！考えとけよ！」

弦太朗は手を振って去っていき、夜空と小鷹は残された。小鷹から苦言をもらう。

「夜空……変なこと言うけど、俺はあのリーゼントの言い分は正しいと思うぜ？」

「…心で、か……」

一人憂える夜空の背を、吹きぬく寂しい風が触れた……

友・情・真・意（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『僕は友達が少ない』
三日月夜空、羽瀬川小鷹
『マクロスＦ』
シェリル・ノーム、グレイス・オコナー
『けいおん！』
中野梓
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
ユイ
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
前田慶次

シェリル：次回、ヒロインズフェスタが始まるわよ！

ランカ：皆様、楽しみにしていてくださいね！

●●●：ちょっと待ったぁー！

ランカ：わわ！誰ですか、あなたは！

●●●：このあたしを差し置いてヒロインズフェスタ編を押し通そうだなんて、
作者は見る目がまったく無いわね！
次回からは、（作者を脅迫して）新作品参戦よ！
あたしが大活躍するんで、読まないと死刑だから！

シェリル：へえ、何の作品が出てくるのかしら？

●●：それは…禁則事項。

姫・様・選・挙（前書き）

夜空：ついにヒロインズフェスタが始まるぞ。

星奈：あたしの活躍、じっくりと見てなさいね！

夜空：おい肉。お前が目立つと私の影が薄くなる。

梓：あの、そろそろ始まりますよ？静かにしてください！

星奈：なんですって！だいたい夜空、あんたはねえ！

ユイ：うるせぇつってんだろ！そろそろ始まるから席つけや！

…お待たせいたしました！「姫・様・選・挙」上映、スタートです☆

ランカ：抱きしめて！銀河の果てまで！

シェリル：あたしの歌を聴けぇぇぇ！

姫・様・選・挙

前回、星奈とシェリルにタンカを切った弦太朗はどうすれば二人と友達になれるかあの手この手で考えていた。そんな時、ヒロインズフェスタを妨害するゾディアーツが出てきたという情報が仮面ライダー部の耳に届いた。真相を確かめるため、弦太朗と賢吾はユウキをおとりに使い、フェスタに出場させる。

一方夜空は弦太朗を隣人部に招き入れるため彼に接近するが、逆に弦太朗に「ダチは心で作れ」と問い詰められてしまうのであった。

そして、ヒロインズフェスタが始まろうとしていた…！

舞台は体育館。

黒楼州学園伝統のイベントと言うことで、全校生徒２０００人が集まっていた。

銀時、新八、神楽ら万屋メンバーはパイプ椅子に座り、ポテトチップを食べながら体育館の隅っこからフェスタを見ようとしていた。

「あ～かったりー、水着のねーちゃん出てこねーのかよ。ミスコンなんだからもちっと手の込んだことしろよなー」

「そうアル。私女子プロがいいアル。女どもが血ダルマになりながら醜く争うのが好きね」

銀時が先生らしからぬ発言をした。神楽も同様に少女らしからぬ

発言をした。新八がため息をつく。

「銀さんに神楽ちゃん…ヒロインズフェスタ編、一応シリアスシーンもある予定ですからもうちょっと真面目にしてくださいよ…」

風紀委員のほうでも先日起こった女子生徒襲撃事件もあって、高町なのはとフェイト・テスタロッサがヒロインズフェスタの警備に当たっていた。そこに関西弁を話す茶髪短髪でおっとりした雰囲気の女性、八神(やがみ)はやてがやってきた。

「なのはちゃん。フェイトちゃん！」

「はやてじゃない！あなたもここの警備に？」

「せや、なんたってヒロインズフェスタやからね。ヴィータやシグナムに言われてなぁ」

「うん、先日の事件が事実なら何か起きるかも知れないからね」

なのは、フェイト、はやてはいずれ来るであろう事件に備えていた。

二人の男がマイクを持って体育館の舞台に上がる。ふたりは黒楼州学園で教諭を勤めている赤い髪のチャラ男ゼロス・ワイルダーと眼鏡をかけたジェイド・カーティスであった。

「レディース&ジェントルメン！今年もやってまいりました『ヒロインズフェスタ』！」

「黒楼州学園の中で一番の女子生徒…すなわち真のヒロインを決める大会です」

「司会は私、ゼロス・ワイルダーとぉ！」

「ジェイド・カーティスがお送りいたします」

ゼロスとジェイドの司会進行に拍手の喝采が上がる最中、遠くにいる賢吾はスイッチをカチカチ押しながら舞台を見守っていた。

「では皆さまお待たせいたしましたぁー！お待ちかねのパフォーマンスタイムです！」

「それでは最初のエントリーナンバー1、2－Bの城島ユウキさんの『はやぶさ君』です！」

二人がいったん舞台から下がると、人工衛星のコスプレをしたユウキが舞台裏から登場した！

「やあ！ボクははやぶさ君だよ☆広ーい宇宙めがけて出発だ！」

ユウキは奇妙な衣装を身に纏いながら笑顔で振舞う。

「イオンエンジン、展開☆」

ユウキが叫ぶと、衣装の後ろから紙ふぶきや紙テープが噴出した！

「ボークの名前ははやぶさくーん☆」

そしてわけのわからない歌を歌い出すユウキ。あまりの出来に、観客からの反応は微妙なものだった…

「不気味だ…アレは……」

遠くから見守っていた賢吾も唖然とした。ユウキに内部から犯人を炙り出すよう言いつけてきたが、彼女の振る舞いから、とてもそうには見えなかった。

「頑張れユウキ…今のお前はイケてるぞ…（感涙）」

舞台裏にいた弦太朗に限ってはユウキのパフォーマンスは受けたようで、その勇姿に感涙し、ガッツポーズを取っていた。

梓「アレのどこがイケてるんですか…」

ユイ「アホですね」

ランカ「でも、ユウキさんのこと応援してますよ…？」

ユウキと仲がよい梓やユイも顔を真っ青にし、ランカもうまい言葉が見つからない。

「悪いけど、ステージに立てるほどの器じゃないわね」

「まったくよね。馬鹿面してるのはわかってたけど、まさしく純度１００％の馬鹿ね」

「なんだと！？」

ついにはシェリルと星奈がユウキを馬鹿にしたので、弦太朗は激昂した。

「地球だ！よ～し、サンプルカプセル分離！」

ユウキはポケットからピンポン玉を取り出すと、それを口に含み、それを吐き飛ばした！それを何発か繰り返すので、ついにギャラリーからは怒りや呆れを通り越して失望の色が見え始め、ついにはブーイングを起こす者が現れた。

「ここはもう燃え尽きるけど、星になるから大丈夫！さよなら地球、ありがとうみんなー！」

ブーイングの嵐を背に受けながらユウキは退場した。その表情は、あまりいいものとは言えなかった。

「なんなのあいつら、はやぶさ君の魅力なんて誰もわかってくれない！」

「ユウキ、頑張った…感動した…！」

「そうですよユウキ先輩…なんも先輩のせいじゃないです…」

涙ぐみながらユウキを慰める弦太朗、梓、ユイに対し…

「ハン、しょせん普通の人なんてその程度よ！」

なんと見たこともない女子生徒が口を割り込んできたのだ！彼女は黒髪に黄色のカチューシャをつけており、いかにも傲慢そうな目つきをしていた。

「なんだお前！見かけねえ顔だな」

「へぇーあんた、この涼宮（すずみや）ハルヒ様にむかってそんな口を利くとはいい度胸じゃない？ま、今回は顔合わせということだし、ほかのメンバーも紹介しとくわね」

ハルヒの後ろにいたのは、本を読んでいる寡黙な銀髪ショートの少女、おどおどした茶髪ロングの少女、常に（胡散臭い）微笑みを絶やさず飄々とした青年、なんとなく苦労してそうな雰囲気を感じさせる青年だった。

「長門（ながと）有希（ゆき）…」

「あ、朝比奈（あさひな）みくるですぅ！よ、よろしくお願いします…」

「どうもはじめまして、私は古泉（こいずみ）一樹（いつき）と申します」

「あー、皆俺のことをそう呼んでるんですが…俺は」

しかし苦労性の青年の名乗りをハルヒが邪魔をする。

「キョンはキョンよ、名乗りなさい！名乗らないと死刑よ！」

「あーはいはい、そう名乗ればいいんでしょ…」

しぶしぶ従うキョン。ハルヒはこの４人をかき集めて豪語する。

「私たちは『ＳＯＳ団』、ずばり『世界を大いに盛り上げる為の涼宮ハルヒの団』のメンバーなのよ！」

「なるほどな…オレは如月弦太朗！この学園の連中全員と」

弦太朗が名乗ろうとすると、いきなり古泉がハルヒにこう言った。

「涼宮さん、次のパフォーマンスで呼ばれてますよ」

「そう…じゃあまた会う日までね！さあいくわよ、有希、みくるちゃん、古泉君、キョン！」

そういってハルヒたちは舞台表に出た。

【ＳＯＳ団のパフォーマンスは、涼宮ハルヒの憂鬱のエンディング「ハレ晴レユカイ」です。ｙｏｕｔｕｂｅなどでお楽しみください。】

「ふぅん。あの小娘たち、奴隷候補にしてはやるじゃない」

星奈はＳＯＳ団を鼻で笑う。そうこうしている間にもランカに出番が回った。

「ランカ！頑張れよ！」

「アルトくん、見ててね！」

アルトからの後押しをもらい、一人舞台に立つランカ。

「抱きしめて！銀河の果てまで！！」

【ランカ・リーのパフォーマンスはマクロスＦの劇中歌「星間飛行」です。ｙｏｕｔｕｂｅなどでお楽しみください。】

次のエントリーナンバーにユイと梓が回ってきた。

唯「頑張ってね～あずにゃん！」

岩沢「ユイ！ベストを尽くせよ！」

先輩に応援される二人。

「あずにゃん、一緒に頑張りましょう☆」

「ユイこそ。あたしたちのライブを始めるよ！」

【あずにゃんユイにゃんのパフォーマンスはそれぞれ梓のキャラクターソング「Ｏｖｅｒ　ｔｈｅ　Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ」とユイのキャラクターソング「一番の宝物」です。ｙｏｕｔｕｂｅなどでお楽しみください。】

次はシェリルに出番が回ってきた。シェリルは弦太朗を嘲笑う。

「見てなさい、銀河の妖精のパフォーマンスを…叩き潰してあげるから…」

「シェリルさん…」

「シェリル…」

ランカやアルトが心配する中、シェリルは舞台表に出た。そしてマイクを握り、叫びだした！

「あたしの歌を聴けぇぇぇッ！！」

【シェリル・ノームのパフォーマンスはマクロスFの劇中歌「射手座☆午後九時ｄｏｎ'ｔ ｂｅ ｌａｔｅ」です。ｙｏｕｔｕｂｅなどでお楽しみください。】

「次はあたしの番ね！」

「やれやれ、まだ懲りてないのか、肉の分際で」

ギャラリーの前にいた夜空が状況を皮肉る。

「誰が肉よ！あんたごときじゃあたしに勝てないってことを証明させてあげるわ！」

そういった星奈がマイクを力強く握ると、大声でシャウトした！

「あたしの歌を聴きなさい、奴隷ども！」

【柏崎星奈のパフォーマンスは伊藤かな恵さんの「ここから」です。ｙｏｕｔｕｂｅなどでお楽しみください。】

「口だけじゃない、か」

「やるじゃねえか…」

「芸能界出身だなんて反則じゃん！」

賢吾、弦太朗、ユウキが彼女たちのパフォーマンスを見て歯をかみ締める。仮面ライダー部としての仕事をしているとはいえ、彼女たちのパフォーマンスは、何にも代えがたいものであり、心を奪われていった。

…しかし、信じられない事態が起こった！

星奈がパフォーマンスを終えた後、いきなり星奈が苦しみだし倒れてしまったのだ！

「出たか！？」

この緊急事態に賢吾が叫び、弦太朗は行動を開始する！だが星奈は首を押さえたままどこかへ飛んでいった！

「どこへ行った！？」

すると…！

「うっ！！」

「そっちか！？」

突然ギャラリーにいた夜空が何者かに殴られたのだ！弦太朗がすぐ夜空の元へ駆けつける！

「大丈夫か！？」

「お前さっきの…！」

「礼は気にすんな！」

そして弦太朗は舞台裏へ駆け出し、部屋にあった黒板から黒板消しを二個取り出すと、それを思い切りパンパンと叩いた！

叩いた衝撃でチョークの粉があたりに散布され……

なんと何もないところからカメレオンのような化け物が姿を現した！！

その緑の体には、星座が刻まれていた。奴はゾディアーツだった！

銀時「ねえ何あれ！なんか仮面ライダーに出てきそうな怪物が出たんですけどー！」

新八「当たり前でしょォォ！この話はフォーゼの話がネタですから！」

神楽「新八ー、こいつに餌やっていいかー？」

新八「今緊急事態なのにゾディアーツにポテトチップあげるなァァァァ！！」

はやて「やっぱり怪物が出てきおったね！」

フェイト「生徒の証言に似てるわね…！姿を消すところが！」

なのは「とにかくみんなを避難させよう！」

そしてカメレオンはシェリルをつかみ出すと、いきなり暴れだした！

アルト「シェリル！」

ランカ「シェリルさん！」

弦太朗は背後からカメレオンにキックをかました！先ほどの攻撃でカメレオンはシェリルを解放し、そのままジャンプ、観客の元へ飛んだ！カメレオンの暴走に生徒と教職員たちは一目散に逃げ出した！

「待て！！」

弦太朗は逃亡するカメレオンを追撃した！

カメレオン・ゾディアーツは弦太朗から逃げ出し外へ出たが、そこになのは、フェイト、はやてが待ち構えていた。

「そこまでよ、化け物！」

「ここからは私たちが相手になるわ！」

「そろそろお縄に頂戴したほうがええで」

３人は手に持ったデバイスを取り出し、手を挙げた。その瞬間、光が３人を包み込み、服装をバリアジャケットに換装した！３人はそれぞれの得物を構え、カメレオンに臨戦した！

「お願い、レイジングハート！」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ！』

なのはが杖型のデバイス・レイジングハートを構えると、カメレオンに向けて光の弾を連射した！しかしカメレオンはそれをひょいとジャンプして交わす！

だが上空からフェイトが奇襲を仕掛けてきた！

「行くよ、バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ！』

ポールウェポン型のデバイス・バルディッシュが鎌状に変化し、これをカメレオンに斬りつける！斬られると察知したカメレオンは近くの壁に三角飛びすることで回避したが…

「隙ありや！」

はやては『夜天の書』と騎士杖シュベルトクロイツを振るい、周りの小さな粒子を生み出してカメレオンに攻撃、命中した！

「さて、そろそろ年貢の納め時やで」

「ドーパント退治も楽じゃないわね…けど！」

「行くよ！フェイトちゃん、はやてちゃん」

３人がカメレオンに止めを刺そうとしたその時…フェイトの様子がおかしくなった。

「ど、どうしたのフェイトちゃん！きゃあ！」

突然フェイトがなのはに斬りつけ、さらにはやてにまでその手にかけようとしたのだ！

「うわわ！どないしたんやフェイトちゃん！？」

「私じゃないわ！体が勝手に動くの！」

するとフェイトは攻撃の手を緩めた。そして彼女たちの背後から顔中に針が刺さったような痛々しい化け物が現れたのだ！

『どうだ、自分の味方に殺されかける気分は？』

「ドーパント！？じゃあ私を操ったのも！」

『私に質問するな。このまま葬ってくれる』

こうしてなのは、フェイト、はやてＶＳゾディアーツ、ドーパントとの戦いが幕を開けた！

その時…

「待てー！！」

彼女たちの戦いに弦太朗が乱入してきた！

「って、なのはにフェイトじゃねえか！それにあんた…」

「あ、弦太朗君！？」

「弦太朗、近寄らないで！危ないわ！」

「そや！一般人を巻き込む事はでけへん！」

だがなのはたちの制止も聞かずに弦太朗はフォーゼドライバーを構えた！

「…そうかな？オレもかく言う、仮面ライダー部なんでね！」

……3……

……2……

……1……

――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

フォーゼに変身した弦太朗が敵陣に向かって突っ走る！

なのは「弦太朗君が、あのフォーゼ…？」
フェイト「私もあの正体、初めてみた」
はやて「なのはちゃんたちの知り合いがフォーゼやったなんて！」
カメレオンはトリッキーな身のこなしで学園のあちらこちらをまるでアスレチックのように動き回った。カメレオンはヒット＆アウェイの要領でフォーゼに近寄りながら攻撃していく。
そしてカメレオンは強靭な舌を使って近くの木の枝に巻きつき、移動した！
「この、逃げるな！」
フォーゼもカメレオンの後を追う！
「チョコマカにはチョコマカだ！」
そういってフォーゼはホッピングスイッチを換装、左足がホッピングモジュールになった！換装した瞬間、ぴょんぴょんと跳ねまくる！そして体のバランスを整えながら、ホッピングでカメレオンを蹴った！
「おりゃぁー！」
次のフォーゼのホッピングキックでカメレオンは遠くに吹っ飛ばされた！
フォーゼの戦闘を見ていたなのはたちは感心していた。

なのは「すごい…怪物を圧倒している」

フェイト「私たちだけでは正直勝てなかったかも…」

はやて「仮面ライダー…なかなかかっこよさそうやね」

だがこの戦況を遠くで見ていたものがいた。奴は囁くようなポーズを取ると、吹き出しを作り出した。そして吹き出しにある言葉を吹き込んだ…

『あの魔法少女3人がお前の敵だ！』

「ハッ…弦太朗避けて！」

だがフェイトの叫びも空しく吹き出しはフォーゼに命中してしまった！フォーゼはフェイトたちに振り向くと、いきなりホッピングで跳ねながら迫ってきた！

「おわっなんだ！体が勝手に動くぞ！」

「弦太朗君、それはドーパントの仕業なの！」

「なんかわからへんけど、そのドーパントの攻撃は味方を同士討ちにさせるんや！」

「だったらそのドーピングだかドーナッツとやらも片付けてやるぜ！…って体が言うこと聞かねェェェェ！」

「「「キャァァァァァ！！」」」

なのはたちがフォーゼに追われ始めた！このままでは同士討ちに発展するのも時間の問題だ。フォーゼに追われている間、フェイトとはやてはある提案を立てる。

「なのは…私たちが時間を稼ぐから、あなたはあのドーパントを撃って！」

「奴を討てば、弦太朗さんを元に戻せるかもしれへん！」

「フェイトちゃん、はやてちゃん…わかったよ！」

「マジか！？頼むぜ、そろそろ左足が痛くなってきたー！」

3人に後押しされ、なのはは長距離からドーパントにレイジングハートを向けた。レイジングハートはなのはにこう告げる。

『Ａ　ｆｉｒｉｎｇ　ｌｏｃｋ　ｉｓ　ｃａｎｃｅｌｌｅｄ．（ファイアリングロック、解除します）』

「ＯＫ…。ディバイィン……バスタァァー！！」

レイジングハートの先端から巨大なビームが放出された！ドーパントは一息にビームに飲み込まれ、爆発した！

「ふう…これでメモリブレイクしたはず…」
なのはが爆心地に向かって走り、あたりを探してみる。そしてあるものを手に入れたが…
「え…これって…メモリじゃない！？」
なのはが手にしたのは、破損したガイアメモリではなく…
煙草のケースだった。
なのははため息を吐いた。
「はぁー…今度、学園で煙草の取締りさせよう…特に土方さんやサンジさんには」

「カッコつけるのはいいからそれよりも助けてくれー！」

「それはこっちのセリフや！」

「助けて、なのはー！」

「あ。あははは…ごめんね、今助けるから！」

フォーゼがフェイトたちを追いかけ回しているうちにゾディアーツは逃亡した！

ゾディアーツの出現により、一度は中止寸前に追い込まれていたヒロインズフェスタだったが、幸い怪我人はいなかったということもあって再開する運びとなった。ギャラリーがガヤガヤ騒いでいるなか、司会者のゼロスとジェイドが舞台に立つ。

「あー、みなさん大変お待たせいたしました…」

「いろいろなことがありましたが、ヒロインズフェスタを再開しようと思います」

…すると体育館の巨大モニターの電源が入った。
画面には、シェリルと、紙袋を持った女がいた。

『シェリル、ファンからのプレゼントよ…』
『なによ、こんなちゃちなペンダントで私が喜ぶとでも思ってんの？』
バタン！
『字が汚くて読めないわ。鶏でも読めそうな手紙ね』
バリバリ…
『不味そうね…素人が作りそうな食べ物だわ』
ガサッ
『何これ！悪趣味にも程があるわよ！』
グシャグシャ…ぽい
『今度はＤＶＤ！？本当に気持ち悪いわね！』
バキィン！
『私の欲しい物を考えないプレゼントはただの自己満足…ほんとに馬鹿みたい』

「あ、あたしの手紙！」
「それ俺の作ったペンダント！」
「ぼくちんお手製のＤＶＤがぁ！」

それは、シェリルがファンからもらったプレゼントに悪態を吐き、捨てていくところであった。彼女の内面にあった真実に、ギャラリ

ーはシェリルにブーイングと疑惑の目を向けた。
「待ってみんな！これは違うの！私は…」
「何が銀河の妖精だよ！馬鹿にしやがって」
「もうお前の歌なんか聴かねえからな！」
「シェリル・ノームはたった今死んだわ！」
観衆はシェリルの弁明も許さない。長きに渡って勝ち取った人気と誇りは、目の前の現実によってあっさりと崩されてしまった…

「……シェリル」
「シェリルさん……」
アルトとランカは、目の前でシェリルが中傷されるのをただ黙って見守るしかなかった…

なのは、フェイト、はやて、そしてフォーゼが裏口から体育館に戻ると、フォーゼがあるものを目撃した。
「なんだ？」
「あれは…シェリルさんじゃない！？」

フェイトが指差すと、そこにはあのシェリル・ノームが生徒からブーイングを受けているという光景があった。

「でも、なんでこんなことになったんや？」

「そうね。これは一体どういうことなの…？」

今フォーゼたちにできることは、目の前で起こっている現実を受け止めるだけだった…

体育館の裏では、女二人組の姿があった。片方の女はこう言う。

「さあ、明日いよいよあなたの願いは叶うわ。ずっと欲しかったんでしょう？」

「とりあえず礼を言うわね。あなたのおかげでこの学園の生徒どころか、教師どもも奴隷に出来そうだわ」

もう片方の女が不敵な笑みを浮かべると、戸惑うシェリルの姿を満足そうに眺めていた……

姫・様・選・挙（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『マクロスＦ』

早乙女アルト、シェリル・ノーム、ランカ・リー、グレイス・オコナー

『僕は友達が少ない』

三日月夜空、柏崎星奈

『魔法少女リリカルなのは』

高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやて

『けいおん！』

中野梓、平沢唯

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

ユイ、岩沢まさみ

『銀魂』

坂田銀時、志村新八、神楽

『テイルズオブシンフォニア』

ゼロス・ワイルダー

『テイルズオブジアビス』

ジェイド・カーティス

『涼宮ハルヒの憂鬱』

キョン、涼宮ハルヒ、朝比奈みくる、長門有希、古泉一樹

キョン：いつもいつも思うのだがハルヒは何であんなに自由奔放で傲岸不遜で傍若無人で唯我独尊なんだろう。最初会ったときには「ただの人間には興味ありません。未来人、宇宙人、超能力者は私のところに来なさい」とかいってみんなを唖然とさせたよな。ていう

かそういえばこの世界ではどこかのアニメやマンガやラノベやゲームのキャラクターが出てきている。目の錯覚なのだろうか…変な奴に変身するし、魔法とか超能力とか使う奴が出てくるし…まさか異世界という奴なのだろうか？ってことは、俺死んだの！？…え、クロスオーバーだから「涼宮ハルヒの憂鬱」が参戦？そうですか。まあこれからも応援よろしくってことで…

虚・空・歌・姫（前書き）

翔太郎：よ、左翔太郎だ。今回はヒロインズフェスタ編のクライマックスだ。

フィリップ：怪物の正体…作者が下手に伏線はりまくってるけど、ゾクゾクするねえ。

亜樹子：え！？ここでも私の出番なし！？私聞いてない！

竜：……所長、いつか俺達にも出番が回るはずだ。ヒロインズフェスタ編、スタートだ。振り切るぜ！

翔太郎：いいのか始め方がこんなグダグダで…

虚・空・歌・姫

前回、ヒロインズフェスタで出場者の動向を探ることになった仮面ライダー部。何事もなくフェスタは進んでいくも、出場者が襲撃を受けたことで犯人の出現が察知され、弦太朗の機転でその正体を暴く。そして風紀委員のなのは、フェイト、はやての3人がゾディアーツを食い止め、やがて戦闘中に弦太朗もフォーゼとして参戦。だがゾディアーツの味方と思われるドーパントの出現によりゾディアーツを取り逃がしてしまった。そして体育館に戻った4人が見たものとは、何かの一因でブーイングを受けたシェリルの姿であった…

シェリルの本性に失望した観衆は、興醒めだとばかりに手にしていたシェリルの顔写真入り団扇を投げ捨てる者、シェリルのポスターを剥がして破く者、ヒロインズフェスタのパンフレットを踏みつける者と続々と出、体育館から去っていった。

「なんだよ、結局なんにも意味ねーじゃねーか」

「まったく後味の悪いイベントですよ…」

「帰って特命係長只野仁の再放送でも見るネ」

銀時ら万屋メンバーもヒロインズフェスタを見限り、その場を後にした。

アルト、ランカ、ユウキ、梓、ユイ、なのは、フェイト、はやては、絶望に打ちひしがれるシェリルを沈痛な面持ちで見届けていた…

変身を解いた弦太朗も、人ごみを掻き分けながらシェリルの元へ駆けつけ、彼女の横顔を見続ける。そして、彼女を慰めるように声をかけた…

「……大丈夫か？」

「そんな目で見ないでくれる！？」

「オ、オレはただ…」

シェリルは同情するような目で慰める弦太朗に逆上し、そのまま体育館を後にした…

その日の放課後の２－Ｂ…

賢吾とユウキはヒロインズフェスタの中間結果発表のプリントをまじまじと見つめていた。その内容は…

柏崎星奈、１８６３票
ランカ・リー、４１票
中野梓、３５票
ユイ、３１票
涼宮ハルヒ、２５票
城島ユウキ、３票

シェリル・ノーム、2票

「はやぶさ君の良さが何でわかんないかな～？オマケに柏崎さんのは何故か露骨に票多いし」

「君はよくやったよ…ユウキ」

妙に星奈の票数が多いと気になりつつ、自分のパフォーマンスは完璧だと誇っていながらも、惨敗したユウキを賢吾が慰める。そして二人が席に着くと、話の本題に移った。

「とにかく、狙いはシェリル・ノームだということがはっきりした」

「ゾディアーツの正体は、シェリルさんに恨みを持ったやつってことね」

「ならば出場者のうちの誰かが怪しいと思うが…」

そう言った賢吾はバガミールを取り出した。

「あ～～なんかすっきりしねぇなぁ！」

弦太朗がついに我慢の限界を超えたので席から立ち、教室を出た。するとその時、弦太朗の前に早乙女アルトが現れた。

「如月先輩、少しいいですか？」

グランドでアルトに足を押さえてもらいながら上体起こし（腹筋のこと）をしていた弦太朗はアルトに聞いた。

「お前、シェリルの知り合いなんだってな。どうしてオレに？」

「…そうですね、長くなると思いますが、話しておきます。

俺とシェリルが出会ったのは数ヶ月前です。最初あいつに会った途端、俺にいたずらばっかりしてて、有名人の癖に生意気だなと正直思いました。でも俺があるきっかけでランカと出会って、そのランカが歌手になりたいと言い出したところ、シェリルはランカを応援してました。そしてランカがデビューしたことを聞いたあいつの顔は、今でも忘れられなかったんです。

そして俺は見たんです。あいつが人の見えないところで努力してたことを…俺なんかとは大違いだと、気づかされました。俺の家は歌舞伎の名門だったんですが、厳しい修行に耐えきれず、自由を求めた結果、父と大喧嘩の末に勘当されました。以後、二度と実家には近づかないと誓ったんですが…そういうところでは、シェリルには敵わないですね…

そして数週間前、あなたが転校してくる前にシェリルはこの学園に来ました。本来なら3年のクラスに配属される予定だったんですが、俺と一緒のクラスがいいって言い出しましてね…あいつらしいとか、なんと言うか」

「そうか…」

だが、弦太朗はある言葉を思いだした瞬間、運動をやめた。

「努力…か。あいつが…」

本校のすぐ近くにあるアミューズメントパーク内にあるボウリング場。

ここを貸し切っているシェリル・ノームは、たった一人でボールを片手にレーンに立っていた。シェリルがボールを投げると、ボールが１０本のピンを倒し、ストライクとなる。その後シェリルがボールラックから次々とボールを取り、彼女の投げたボールが連続でストライクとなる。

だが、次の彼女の一投は、ピン一本を残してしまう。

（そんな…私はシェリルよ。失敗なんかするわけないわ）

その時、焦りから彼女に冷や汗が流れた。

「よっ！！」

そんな中、弦太朗が掛け声と共に彼女の前にやってきた。しかしシェリルは連投をしていたので驚きのあまり持っていたボールから手を離した！ボールは弦太朗の足に命中した！

「ギャァ～～～～！痛って～～～～～！」

「如月…あなた！？」

「大丈夫！痛みは心の栄養だ！」

するとシェリルはボールラックからひとつのボールを取り出し、弦太朗に転がした。そして彼女はこう言った。

「こんなサービス、滅多にしないんだから！…あなたが勝ったからわざわざ私を笑いにきたのね？」

だが弦太朗はその言葉を受け入れると…

「オレが勝った？まだ終わってねえだろ！」

力任せにボールを投げつける。ボールはガターにはまり、そのままピンデッキの中に消える。

「…私は辞退するわ。ヒロインズフェスタは諦めた」

「馬鹿野郎ぉー！！」

シェリルの言葉に憤慨した弦太朗はまたもや力任せにボールを投げた！今度はストライクとなった。

「鼻っ柱が折れたあんたの姿なんか見たくない！あんたは銀河の妖精らしく、そしてトップシンガーらしく、堂々としてなきゃいけないんだ！今まであんたの歌で人を幸せに出来たのは、他でもないあんただ！」

「でも見たでしょう？あの点数差を逆転できるわけが…」

「やってみなくちゃわからねえだろ！」

「何言ってるの！あなたが負ければ二度と私の前に…」

「んなこた関係ねえ！！」

しばらくの沈黙の後、弦太朗は言葉をつむぐ。

「あんたが本気で歌手続けてんなら…オレはそれを本気で応援する。あんな姑息な罠に負けずに、最後のスピーチでガツンと決めてやれ！！」

シェリルは恐る恐る弦太朗に聞いた。

「本気で言ってるの…？」

「オレはいつだって本気だ…ダチだからな！」

…ふと、遠くから泣き声が聞こえてきた。

「うわあああん！…なんであたしはあんなことを…」

泣き声の主は星奈であった。大粒の涙を流している星奈が身を隠していたソファーから立ち上がる。弦太朗が見かけたのは、彼女の持っているスイッチであった。

「星奈…お前がそのスイッチを…」

「あたしだって、友達が欲しかったの…でもあんたの話を聞いて、あたしはいつまでこんなことしてればいいのって…ぐすっ」

「…ゾディアーツの正体がわかったぞ」

ボウリング場にバガミールを持った賢吾が現れた。

「柏崎星奈、お前だ。出場者の誰かが怪しいからお前を尾行したんだ。あの時お前があることをして楽屋に逃げ込んだときにそうだと思ったからな。自分が襲われないように『やられたフリ』をな。そのスイッチ、どこで手に入れた？」

星奈は自分の身に起こったことを明かし始める。

「…もらったのよ、ある人に。あたしには奴隷がいても、友達ができないから隣人部って部活に入ろうとしたんだけど拒否されて、一人泣いてたところである人に声をかけられて…友達作りのためにこれを使えって。確か…オコナーだったような」

するとシェリルがある単語に反応する。

「オコナーですって？」

「知っているのか？シェリル・ノーム」

「グレイス・オコナー、私のマネージャーよ。なのに私がフェスタに出ていても姿を見せないから怪しいと思っていたけれど」

その話を聞いた弦太朗は…

「だからって、そんな妙なスイッチなんか使うんじゃねえ！それでこそダチができなくなっちまうぞ！」

弦太朗に指摘された星奈の手が突然震えた。だが、どこから出て

きたのか、突如別の女が阻み、星奈の胸倉を掴んだ！

「フン、うまく行くと思ったが、存外使えない小娘ね」

「い、いやぁ！やめて！助けて！」

星奈の悲痛の叫びも聞かず、女は星奈の持っているスイッチを無理矢理押した！

そしてカメレオン・ゾディアーツが出現し、それにあわせて星奈の体が不気味な繭に包まれた！

ゾディアーツから発されるどす黒いオーラからシェリルをかばう弦太朗！だが防ぎきれず、弦太朗は吹っ飛ばされた！

「グレイス、謀ったのね！？」

「あなたの事をずっと見てたけど、思ったよりも有効的に利用できそうね。とっととゾディアーツの餌食になりなさい」

グレイスに命令されたゾディアーツは強靭な舌でシェリルを滅多打ちにした！シェリルは倒れ、彼女の体に醜いあざが出来た…

「うふふ…その体じゃヒロインズフェスタには出れないみたいね」

「…この野郎！」

グレイスがプロデュースしているシェリルを痛めつけたことに激

昂した弦太朗は、ゾディアーツを止めるためフォーゼドライバーを構え、腰につけた！

……3……

……2……

……1……

――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

「このガキ、頭にウジ虫が沸いているのかしら…殺せ！」

ゾディアーツがグレイスに命令されると、フォーゼに襲いかかって来た！その間、グレイスは逃亡した！

賢吾が気絶しているシェリルと星奈を集めると、フォーゼに指示を飛ばす。

「俺がこいつ等を病院に連れて行く！君はゾディアーツを追え！」

「おう！頼んだぞ！」

ゾディアーツはぴょんぴょん跳ね、それをフォーゼがマッシグラーで追撃していた！

「うぉぉぉぉぉぉっ！」

フォーゼはマッシグラーを起こすと、車体をジャンプさせ、飛び掛ってくるゾディアーツに体当たりした！ゾディアーツはそのまま吹っ飛ばされる！

着地したマッシグラーを旋回させ、今度は突進を敢行！ゾディアーツは長い舌を武器にフォーゼを攻撃するが、それをすべてかわした！

「おらぁ！」

そしてフォーゼがマッシグラーから飛び降りると、それを質量兵器にしてゾディアーツに突貫、大ダメージを与えた！

「ようし、こいつでとどめだ！」

なおも逃げようとするゾディアーツに対し、ロケットスイッチをＯＮ！飛翔にあわせてドリルスイッチもＯＮにした！フォーゼはサマーソルトの要領で空中を一回転した後、左足のドリルをゾディアーツに向けた！そしてロケット推進で加速し…！

「ライダーロケットドリルキック！！うぉぉぉぉーーー！！」

ロケット推進の運動エネルギーも相まってドリルの威力は倍増！ゾディアーツは貫かれ、爆発した！！フォーゼはゾディアーツから排出されたスイッチを手に入れると、それをＯＦＦにした。

シェリルが眠っている病室の前には、弦太朗と星奈がベンチに座っていた。星奈は泣きじゃくりながら自分の行いを後悔した。

「あたしっ…グスッ、ただ友達が欲しいだけなのに…シェリルを傷つけちゃった…なんで…えっぐ」

「泣くんじゃねえよ、お前は悪くねえ。お前はお前だろ。ほら、お前のダチになるからな」

そういって弦太朗は星奈に手を差し伸べた。

「え、ほんと？」

「本当だ」

やがて星奈は弦太朗の言葉で泣き止み、流した涙を拭いた。

「…嘘ついたら、絶対許さないから…」

そして弦太朗と星奈は友情の証として拳を打ち合った。二人は病室に入ると、賢吾、ユウキがシェリルと面会していた。シェリルの容態は、人工呼吸器をつけねばならないほどひどいものだった。

「これで事件の黒幕はグレイス・オコナーとなった…奴はヒロインズフェスタに現れるはずだ」

「みんなに呼びかけて、フェスタを中止させようよ！」

「ダメだ！それは…ダメだ」

駄々をこねるユウキをよそに、弦太朗は昏睡中のシェリルを見守っていた…

翌日、ヒロインズフェスタの決勝戦が始まろうとしていた。

万屋メンバーと桂小太郎がまたもやパイプ椅子に座り、チョコフレークを食べながら体育館の隅っこからフェスタを見ようとしていた。

「何で中止にしねーかなー。いくら校長の意図だからといって、俺としてはやってらんねーよ」

「そうアルよ。私早く帰って海猿の再放送でも見たいアル」

「まったくだ」

新八の隣にいた桂も銀時や神楽の意見に乗り、何かを持ちながら言い出した。

「最近、婦女暴行事件が多くなってるからな。俺達がしっかりやらなければ、か弱い乙女が可愛そうだ」

「何言ってんだよ！思いっきり楽しもうっていう気満々じゃねえかぁぁぁ！しかも学校なのに何で掛け蕎麦持ち込んでんだよ！」

新八が桂に突っ込んだ！桂が持っていたのはビデオカメラと掛け

蕎麦だった…

「…新八君。細かい事は気にするな」

「あんたフェスタ楽しむ気だよね！どう考えてもやる気満々だよね！？」

ゼロスとジェイドがマイクを持って体育館の舞台に上がった。舞台には、ランカ、ユウキ、梓、ユイが立っていた。

「はいはいみなさん！おまたせしましたヒロインズフェスタ！」

「黒楼州学園の高等部門、いよいよ最終選考のスピーチとなりました」

「司会は私、ゼロス・ワイルダーとぉ！」

「ジェイド・カーティスがお送りいたします」

ゼロスとジェイドの司会進行に拍手の喝采が上がる。

「では参りましょうか。トップバッターは、シェリル・ノームさんです」

しかしジェイドがこう言った途端、シェリルの姿がいない。

「……おや、いませんね？いかがされたのでしょうか？」

その時、一人の生徒が叫んだ。

「シェリルは来ない！フェスタから逃げたんだ！」

彼に呼応して他の生徒もシェリルを糾弾した。

「そうだ、奴は傲慢で高飛車な卑怯者だ！」

「あたしたちの気持ちも考えない悪女よ！」

シェリルのことを散々に叩く生徒たち。

「…シェリル」

「シェリルさん…」

彼女のことをよく知っていたアルトやランカは子の現実を見て、心を痛めていた。

…その時背後から、どこかで聞き覚えのある声がした…

「……誰が逃げたですって？」

生徒一同が振り向くと……

そこには、頭に包帯を巻き、松葉杖をついていたシェリル・ノームの姿があった…

「スピーチをしに来たわ。さあ、そこをどいて」

しかし生徒全員が彼女の言葉に耳を傾けるはずもなくただ散々に彼女を叩く。

だが彼女はそのブーイングの波に負けず、松葉杖を振り下ろし、床を叩いた！その轟音に生徒たちは震えた。シェリルは不自由な足を松葉杖で歩かせながらこう語った。

「…確かに私には嫌いな人がいる。私の気持ちも考えずにプレゼントばかりあげる連中がね。汚い字の手紙に、手抜きのペンダント、不味そうなクッキー、私の写真を詰め込んだＤＶＤ…そう言うのは応援とはいえない。そいつ等は私を応援してる自分に陶酔してるだけの自己満足の塊よ。私はそう言う人を馬鹿にしてた。だってそういう人は輝いてないじゃない？

私はね、物心ついた頃から親の顔も知らずに育ってきた。だからたった一人で、残飯をあさり、物を奪う毎日を送っていた。そのときね、電器屋のテレビである歌手の映像を見たの。あれが目に焼きついて、今でも忘れられなくて、その時から歌手の道を選んだ。それから苦労して、どん底から這い上がった。いつか自分が輝ける日を夢見ながらね…

みんなが自分のために輝こうと努力する…そのなかで銀河のように輝ける女性、それがヒロインって奴よ。私はそのための努力ならいかなる手段も惜しまない。みんな必死になって努力して、正々堂々としてその座を手に入れるの」

やがてシェリルの足がステージ前にいた弦太朗の前に止まると、握手し、そして拳を打ち合った！シェリルが弦太朗を『友』として認め、絆を深めた瞬間であった…

再びシェリルが足を動かすと、ステージに上った。

「たとえ怪我をしていようと、他人が馬鹿にしようと、私はシェリル。私は今までも、これからも銀河の妖精よ！」

シェリルが話し終えると、弦太朗から拍手が贈られた。そんなシェリルの本心や過去、彼女の信念に心打たれた生徒たちも、弦太朗に続いて拍手のエールを鳴らした。

その時、体育館裏で星奈はグレイスに問い詰められていた。

「さあ、柏崎星奈。今度はこのメモリを使うのよ？」

「嫌よ！あたしは二度とそんなものには頼らない！」

グレイスがガイアメモリを渡そうとするが、かたくなに拒絶する。するとグレイスが星奈の首を掴んだ！

「お前…殺すぞ！」

「ぁぅ！」

グレイスは星奈の首を締め付けながらメモリを差し込もうとする。

しかしその時、背後から少女の声が鳴り響いた！

「おい！そいつは私の獲物だ！」

「夜空！？」

なんと目の前に現れたのは、腕組をした三日月夜空であった。彼女はこう言った。

「そいつが友人を欲しがっていてな…まだ死にたくないんだとさ。さあ、そいつを渡してもらおうか、『くそババア』？」

夜空は得意の毒舌でグレイスを挑発した。

「…くそババア？くそババアだとぉ！？」

激昂したグレイスは星奈を突き飛ばし、メモリを使おうとするが、賢吾に阻まれる！

「グレイス・オコナー、観念してもらうぞ」

賢吾は星奈の証言とバガミールでグレイスの所業を言い当てた。友達が欲しいと嘆く星奈の弱みをつけこんだグレイスは、この学園の生徒であり、フェスタの出場者の優勝候補であるシェリルのマネージャーという立場を利用して星奈にゾディアーツスイッチを渡した。星奈にはゾディアーツとして出場者を襲うよう言いつけさせ、そして自分はドーパントとしてヒロインズフェスタに潜入し、特殊能力によって生徒に嘘を吹き込ませ、生徒のほとんどが星奈に投票するということにいたったのだ。それが昨日なのはたちが戦ったドーパントなのである。星奈に汚れ仕事をさせ、自分は楽をするとい

う汚いやり口である。

「ふん、ようやく気づいたかしら、お馬鹿さんね」

「だったらメモリを使うのはよせ！人間に戻れなくなるぞ！」

だがグレイスが賢吾を突き飛ばし、メモリを自分の体に挿入した！

『ＬＩＡＲ』

グレイスの体が禍々しく変化し、顔中に針が刺さったような痛々しいライアー・ドーパントに変貌した！ドーパントは自分を挑発した夜空を抱きかかえ、どこかへ逃亡した！

「待てぇ～～～～！」

その時賢吾の要請を受け弦太朗もドーパントを追跡した！賢吾も体を起こした後、ドーパントの後を追う！

「夜空（あいつ）…なんであたしのことを…」

星奈が気になることをつぶやいた後、フォーゼらの後を追った。

体育館ではシェリル・ノームとランカ・リーが立っていた。

「スピーチの前に、ひとつ歌おうかしら？ランカちゃん」

「え…？わかりました！」

その時、観衆から拍手とエールが鳴り響いた！二人は自分のマイクを握り、歌い始めた！

「「あたしたちの歌を聴けぇぇぇ！」」

【ここからのバトル中のＢＧＭはマクロスＦの劇中歌「ライオン」をお奨めいたします。ｙｏｕｔｕｂｅなどでお楽しみください。】

夜空を連れ去ったドーパントを追って弦太朗たちは学園の外れまで追撃した。

「夜空を返せ！」

弦太朗はフォーゼドライバーを構え、腰につけた！

……３……

……２……

……１……

――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

フォーゼが先制攻撃を開始した！だがドーパントが夜空を突き出してはフォーゼに攻撃をやめさせ、フォーゼが攻撃しようとしては

夜空を盾にするという卑劣な戦法を使った。

「お前卑怯だぞ！」

「落ち着け如月！」

そしてドーパントは夜空を橋の上に突き出した。彼女を突き落とそうと考えていた！

『動かないで…こいつを死なせたくなかったら変身を解きなさい…』

「なんだと！？」

しかし夜空はこの危機的状況に陥っても余裕であった。

「嘘つき（ライアー）か…確かにお前にはお似合いだな。影でこそこそシナリオを立てて、人を利用して騙し取るそういう奴だよお前は…」

『黙って！』

「おい…」

フォーゼが呼びかけようとするが、夜空は笑顔のまま彼に振り向いた。彼女のアイコンタクトだと考えた賢吾はフォーゼに助言をする。

「ナンバー5だ」

「…ああ」

その手には、『5』のスイッチが握られていた。

『従わないようね…ならば死ねぇぇぇ！！』

とうとうドーパントが夜空を突き落とした！

だがその瞬間、フォーゼは『5』のスイッチに換装し、右手からマジックハンドを展開した！マジックハンドは夜空を掴み取り、フォーゼの元に返した！

『き、貴様ァ！』

「オレの嘘にびびったか？嘘つき野郎！」

フォーゼの奇策により、怒りを思えるドーパント。だがフォーゼは夜空を心配する。

「しかし…無茶するぜ」

「お姫様を助けられないと、ナイト失格だ。合格だ、ナイト君？」

「ナイトじゃねーし」

そんなわけでフォーゼと夜空は友情の証として拳を打ち合う。

『私をはめるなんて…殺す！殺してやる！！』

激昂したドーパントはフォーゼに襲い掛かった！

「仮面ライダーフォーゼ、タイマン張らせてもらうぜ！」

フォーゼとドーパントは激突した！数度か殴り合い、取っ組み合いの末、二人は橋の下に落ちた！フォーゼはドーパントを投げ飛ばし、あるスイッチを手にした！それはエレキスイッチであった。橋の上にいた賢吾が叫ぶ。

「使えるのか！？」

「ああ、コツはつかんだ！」

フォーゼがエレキに換装した瞬間、金色のエレキステイツに変身した！

「世の中にはな、無駄なもんなんかねえ！癖のある奴は、ねじくれてひん曲がった部分も含めて受け入れる！！」

フォーゼはそういってビリーザロッドにコンセントを差し込む！ロッドの先端に電撃が走った！

「このパワー、痺れるぜぇぇ！！」

フォーゼはロッドを振るい、ドーパントを打ちまくった！ドーパントに体に通電され、大ダメージを与えることが出来た。あまりの猛攻に、ドーパントは吹き出し攻撃をする余裕もない。さらに夜空を奪還されたことでドーパントは終始劣勢であった。

「（まさかエレキを使いこなせるようになるとは…）ソケットを差し替えろ！」

フォーゼの勇姿に驚愕した賢吾の指示により、３箇所あるロッドの別のソケットにコンセントを差し込む。そしてフォーゼがロッドを振りかざすと、エネルギー弾が発射され、ドーパントに命中した！
さらにもう一方のソケットに差し込み、振るうと、電磁ネットが発生、ドーパントを捕縛した！

「よし…リミットブレイクだ！エレキスイッチをロッドに！」

「おう、任せろ！」

そういわれてロッドの柄にスイッチを挿入することで『ＬＩＭＩＴ　ＢＲＥＡＫ』の音声が発生。ドーパントに狙いを定める、走り抜けた！

「喰らえ！ライダー１００億ボルトブレェェェクッ！！」

ビリーザロッドに大気中の電気を集め、すれ違いざまに斬り付けると共に強力な電撃を放った。ガイアメモリは破壊され、グレイスはボロボロの状態になって倒れた…

「やったぜ！」

フォーゼは賢吾と夜空に向かって、サムズアップを決めた。

ラビットハッチ内。

賢吾とユウキがフェスタの結果発表のプリントを見つめていた。
「結局シェリルさんが優勝かー。私なんてスピーチも聴いてもらえなかった…」
すると入り口のほうから聞きなれない女の声が聞こえてきた。
シェリル「ロッカーの中にあるなんて随分と変わった部室ね」
星奈「へえー、ここが仮面ライダー部ってとこなのね」
夜空「まぁ、あのプレハブ小屋よりはマシだな」
小鷹「つうか俺の出番がこの回終了一歩前かよ！」
なんと、弦太朗がシェリル、小鷹、夜空、星奈をつれてきたのだ！賢吾が彼らに指を指す。
「おい如月…どうして彼らをここに…」
「学園のトップたるもの、この学園の秘密を知る義務があるものよ…」
シェリルが得意げに言う。弦太朗が賢吾に謝る。
「すまん賢吾！賭けに負けたから、ダチになる代わりにここの秘密を教えろって…」
するとその時、夜空がこんなことを言い出した！

「賢吾とかいったな、ここに空き部屋があるか？」
「そうだが…どうするつもりだ？」
「ちょうどいい…あそこを私たち隣人部の部室にする！」
賢吾、小鷹「おい、なんて勝手な事を言い出すんだ…」
ダブルに呆れる小鷹と賢吾。そして夜空は星奈に続けて言う。
「そして肉、お前を隣人部として入部を認めよう。ただし、今日から私の奴隷だがな」
「な…！なんですってぇ！？あの時あたしを助けたって言うからありがとうって言いたかったのに！」
「…なんのことかな。リア充に持ち合わせる情けは持ってないがな」
夜空と星奈がケンカを始めたので賢吾はハッチから出ようとし、弦太朗にこういった。
「…如月、この責任は取れよ」
こうしてハッチから出た。そして弦太朗は二人の様子を見て…
「ダメだ…オレ気分悪くなってきた…」

虚・空・歌・姫（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『マクロスＦ』

早乙女アルト、シェリル・ノーム、ランカ・リー、グレイス・オコナー

『僕は友達が少ない』

羽瀬川小鷹、三日月夜空、柏崎星奈

『魔法少女リリカルなのは』

高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやて

『けいおん！』

中野梓

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

ユイ

『銀魂』

坂田銀時、志村新八、神楽、桂小太郎

『テイルズオブシンフォニア』

ゼロス・ワイルダー

『テイルズオブジアビス』

ジェイド・カーティス

後藤：…と言うわけで、ここまでがヒロインズフェスタ編だ。

比奈：読者の皆さま、これからも応援よろしくお願いします。

私たち仮面ライダーオーズ組がお送りいたしました！

アンク：おい作者！俺の出番をくれ！！

さもないとアイス一生分お前のへそくりで買うぞ！

映司：アンク！俺が奢るから暴れるなって！

…すみませんでした！では、また短編でー！

憂・鬱・少・女（前書き）

プロデューサー：如月弦太朗

脚本：三日月夜空

撮影：セシリア・オルコット

照明：王元姫

美術：ルルーシュ・ランペルージ

録音：上条当麻

道具：ウソップ

メイク：シャマル

音楽：立華奏

編集：ジェイド・カーティス

アクション指導：伊達政宗

番組宣伝：坂田銀時

企画協力：ゼロス・ワイルダー

衣装協力：山中さわ子、ＨＴＴ衣装

ロケ協力：宇宙要塞ア・バオア・クー

製作協力：ハマーン・カーン、ネオジオン製作所

雑用：キョン

超・監督：涼宮ハルヒ

憂・鬱・少・女

如月弦太朗は、生徒会室に呼ばれていた。生徒会室では、一人の眼鏡っ娘と、その奥にいる茶髪の青年が弦太朗と話をしていた。茶髪の青年である生徒会の顧問、アムロ・レイはこういう。

「よく来たな、如月君。まあ、楽にしてくれ」

弦太朗がアムロに言われてソファに座る。眼鏡っ娘の方、弦太朗と同じ２－Ｂの生徒で、平沢唯とは幼馴染に当たる真鍋和（まなべのどか）はこう言った。

「今日如月君を呼んだのはある団体について調べてもらいたいのよ…」

「団体？」

「ほら、あなたも知っているでしょう？ヒロインズフェスタに出た…」

「え～なんだっけ…？ソース団！」

「そうそう、トンカツにもエビフライにも合う…じゃなくて、ＳＯＳ団よ（汗）」

和のツッコミが冴え渡るなか、アムロはＳＯＳ団について話した。

「ＳＯＳ団というのは、何でも『宇宙人、未来人、超能力者、異世界人などの人間を集めて何かして遊ぶ』という問題児の集まりでな

…1－Bの涼宮ハルヒが団長をやってるんだ。そのソース…じゃなくてSOS団の素行に、俺達も手を焼いている。だから君に任せてもらいたいんだ」

「なるほどね…そう言うことなら任せとけ！」

アムロの悩みを聞いた弦太朗は快く引き受けた。

「君にしか出来ないことだ、信じているよ」

弦太朗が生徒会室から出た後、和が心配する。

「いいんでしょうか？先生。まさかひょっとして、ニュータイプの勘では」

「教師としての勘だよ。なんというか、如月君は昔の俺に似ていてな…」

昔、アムロは保猥吐屁酢（ほわいとべえす）高校という不良校のトップとして君臨し、痔怨（じおん）工業高校という不良校のあるトップと何度かケンカをしたことがある。二人は両方の高校から、アムロは「白い悪魔」、痔怨のほうは「赤い彗星」と呼ばれ、恐れられていた。後に「一年戦争」と呼ばれる高校同士の抗争は、二人を語る上で欠かせない伝説として語られている…

アムロは、その昔の自分の姿に、弦太朗を重ねていたのだ。だが、アムロがその話をした瞬間、うつむいた。和が心配する。

「あ、先生…大丈夫でしょうか？」

「…気にするな。大丈夫だよ」

そのとき、生徒会室から金髪の男が姿を現した。

「シャア！」

アムロが敵意を向ける。その男は、校長のシャア・アズナブルであった。アムロとシャアは口喧嘩を始めた！

「何故貴様がここに来た！」

「私はお前と違って、生徒の面倒だけを見ているわけにはいかん」

「なんだと！？俺と一緒に戦った男が、なんでここの校長を！」

「学園の治安を汚す連中は学園を汚染しているだけの、奢りという重力に魂を縛られている人々だ。世界は、人間のエゴ全部は飲み込めやしない！」

「人間の知恵はそんなもんだって乗り越えられる！」

「…ならば、今すぐ生徒どもすべてに英知を授けてみせろ！」

「貴様を殺ってからそうさせてもらう！」

こうしてアムロとシャアのケンカが始まった！和のほうはいつもアムロの下にいるためか、この光景は慣れているようで、生徒会の仕事に取りかかったが、やがてうるさく感じたのか、彼女は彼らを叱責した！

「先生たちみっともないですよ？まだ一年戦争のことが忘れられないんですか？」

「「……すみません」」

和に土下座して謝るアムロ（２９）とシャア（３３）。もう三十路に近いんだから大人になろうよ…

「ここが問題の団体か」

弦太朗はＳＯＳ団の部室に足を運んだ。ドアには珍妙なエンブレムが貼ってある。だが中から声が聞こえたので耳を傾ける。

「あ～ん涼宮さ～ん、やめてくださぁい！」

「何言ってるのよみくるちゃん！本番はここからよ！」

ハルヒとみくるの声が聞こえた。やり取りからしていやらしいことをしている可能性が強い。

「うほっ、学校でなんてことやってんだよ…なかなか青春してんじゃねえか…（恍惚）」

弦太朗はドアの向こうの誘惑に負け、恍惚の表情になりながらドアをノックした。

「あ、入ってきていいわよー！」

ハルヒにそう言われたのでドアを開けると…？

ハルヒとみくると長門の格好が大変なことになっていた！

ハイレグレオタードと兎の耳を模したヘアバンド、カフス、襟型のチョーカー、蝶ネクタイの組み合わせ。下半身にはタイツとハイヒールを履いていた。

つまり、ハルヒとみくると長門はバニーガールの格好をしていたのだ！黒バニーのハルヒが赤バニーのみくるに馬乗りになっており、白バニーの長門が二人の状況を見守るかのように本を読んでいた。

その姿を見た弦太朗は…

「お、お、お～！ももも萌え～（恍惚）」

やはり顔を真っ赤にし、性的興奮に陥っていた。どおりでアムロが問題児だと気にかけていたわけだ。

「なぁ、こいつら普段こんな格好してんのか？」

弦太朗がキョンに聞き出すと、

「そんなわけないじゃないですか…でもコイツのおかげでいろんな衣装があるんですけどね、ウェイトレスとかメイドとか」

ハルヒがみくるから降りると、弦太朗に近寄ってきた。

「あたしに何の用かしら？」

「オレとあんた達が初めて会ったときを覚えているか？」

「？……あ～！あたし達ＳＯＳ団を乗っ取ろうとしてたのね！」

「いやいやいや、そんなわけねえって！覚えてねえのか、オレがこの学校の連中全員と友達になるってことを…実はな、お前らをダチにするためには、お前らがどんな奴らなのか知りてぇんだよ」

弦太朗の目的は、ＳＯＳ団の実態調査だった。無論生徒会からの秘密の依頼なのでＳＯＳ団に内緒にしている。決して仮面ライダー部の活動をサボっていると突っ込んではならない！

「あ～！あたしたちの活動を見に来た生徒会のスパイね！」

「スパイじゃねえし。人の話聞けよ…オレはただ、あんた達とダチになりてえだけなんだよ」

もうとっくにバレてしまったかもしれないが弦太朗はＳＯＳ団に入れてくれと頼む。

「わかったわ…あたしとしても、あんたは面白そうだからね。１日限りになるけど、ＳＯＳ団に入団おめでとう！」

「おめでとうございます、如月先輩」

古泉以下、ＳＯＳ団に拍手される弦太朗。

（いやぁ～なんか嬉しいなぁ…でも仮面ライダー部の部員だけどなオレは）

「さぁ、今日の活動を発表するわよ！」

「いったい何をするんだ？」

キョンがすでに制服に着替えているハルヒ（みくる、長門も同様）に質問するや、彼女は笑顔で答えた。

「この学園の不思議を調査するわよ！さあ、キョン、みくるちゃん、有希、古泉君、如月！行くわよ！」

ハルヒに引っ張り出されていく5人。

「なかなか癖のある小娘じゃねえか…落とし甲斐があるぜ」

弦太朗の言葉に若干引くメンバー（特にキョンとみくる）。もちろん、弦太朗は変な意味で言ってるわけじゃないので誤解しないで頂きたい。

【その1：ある女子中学生に姉妹がいる】

「あの美琴に姉妹がいるんだとか…」

弦太朗が口にするとＳＯＳ団が散り散りになって中等部校舎の探索をした。

こうして校舎の外を歩いてみる弦太朗であったが、ある少女に目が留まった。声をかけてみる。

「おい、何してんだ。美琴？」

それは御坂美琴にそっくりな少女だった。だが、確かに美琴に「そっくり」だ。よく見るとまず目がうつろだ。そして頭に近未来的なゴーグルをはめている。

「はい、そこら辺を哨戒していただけです、とミサカは自分の行動を説明しています」

「…ん？お前本当に美琴なのか？」

「それは違います、とミサカはあなたの考えを否定します」

奇妙なしゃべり方をする美琴（？）に唖然とする弦太朗。確かに自分の知っている美琴は、いつも当麻を追っかけまわしているが、面倒見のいい頼れる姉御肌と記憶している。とりあえず弦太朗はかけるべき言葉を探し、そしていつものセリフでこういった。

「なあ、オレとダチになろうぜ」

「友情を育む、と解釈してよろしいのですか？とミサカは内容を再確認します」

「そ、そういうことだな…まあいい、今日からダチにしてやるよ」

そのときだった。

なんと美琴そっくりの少女（目がうつろでゴーグルつき）が数人も現れた！シュールにして不気味だ。

「なんだこいつらは？」

「ミサカと作戦をともにする同胞です、とミサカはあなたの質問に答えます。ミサカはお姉様のクローンであり、とある事情でこの学園のお世話になってます、とミサカは自己紹介します」

弦太朗の質問に答えた後、美琴（？）はこういう。

「クローンか…どおりで妙な感じがすると思っていたぜ」

「これから仲間と合流したので次の作戦に移行します、とミサカは急ぎ早足でその場を脱します」

美琴（？）軍団が去っていった後、弦太朗はあっけらかんとした表情のまま手を振った。その後ハルヒたちがやってきた。古泉がこういった。

「如月さん、どうでしたか？」

「……んー、結局見つからなかったな」

ややこしくなるので何も見なかったということにした。

【その２：ある風紀委員に妹がいる】

「あのなのはに妹がいるってのは本当か？」

「ええ、そうよ？あなた、高町さんたちと仲がいいわよね？というわけで如月君、いってらっしゃい！」

「へいへい、わかったよ」

弦太朗はハルヒに返事しながら、フェイトやはやてと一緒に魔法戦闘の訓練をしているなのはに接近する。

「よ！何してるんだ、なのは、フェイト、はやて」

「あっ弦太朗君」

彼に気づいたようで、3人も声をかけてきた。フェイトが弦太朗の用件を聞く。

「それで弦太朗、私たちに何の用かしら」

「え？えーと…それは…だなぁ…（照）」

「おっ、なんや、人には言えない相談かいな？」

いきなり赤くなり、問い詰められる弦太朗。そしてこう言った。

「なあ…なのはって、妹とかいねえかな？（照）」

「えっいないよ？兄と姉ならいるけど…」

「何を言ってるの、弦太朗？」

「でもなのはちゃんには別に身内がおるんやけど…」

どうやら噂は嘘のようだった。そのとき…

「なのはママー」

と、小さな女の子が駆けつけてきた。オレンジ系の髪に、赤と緑のオッドアイである。弦太朗はある言葉に耳を疑う。

（ママ？）

「ヴィヴィオ！」

彼女に気づいたなのはがヴィヴィオと呼ばれた少女を抱く。その瞬間、弦太朗の思いが爆発した！

「ま！？ママママママ！ま、ま、ま、まーまーまー！ママ！？」

「ちょっと弦太朗！？大丈夫！」

「せや！落ち着いてぇなぁ！」

小さな女の子がなのはをママ呼ばわりしたという現実に暴れ始めた弦太朗をフェイトとはやてが止める！やがて弦太朗の暴走が収まるまで3分はかかった…

「なのはに子供！？」

「ええ、そうよ？名前はヴィヴィオ。初等部に通っているの」

「えへへーよろしくねー弦太朗おにいちゃん！」

ヴィヴィオが弦太朗に挨拶をする。

「お、おう…よろしくな、えーと、Ｖｉｔａ（ヴィータ）！ダチにしてやるよ！」

はやて「弦太郎さん、それプレステちゃう！ヴィヴィオちゃんや！」

ヴィータ「……あたしになんか用か？」

とりあえず、なのはには娘がいることがわかった。とはいっても、ヴィヴィオはなのはとフェイトの養子であり、血のつながりはない。ある事情で引き取られたとのことだが、ヴィヴィオをなのはとフェイトの子供と誤解する人もいるんだとか。

【その３：キャンパスにある珍獣がいる】

「この学園にいる珍獣を何匹か調査するわよ！」

〜〜〜〜〜

「あの３人が珍獣を飼ってるのよ！」

ハルヒが指差すと、赤い髪の活発そうな男の子、ピンク髪のかわ

いらしい女の子、キャップを被った少年が何かを取り囲んでいた。
3人とも見る限り初等部の生徒のようだ。二人からは「ほら、フリードご飯だよ」「ピカチュウ、残すなよー」という声が聞こえる。
「あんた友達作りの天才でしょ？行ってちょうだい！」
ハルヒに言われた弦太朗が3人に接近し、気軽に声をかけた。
「よ！」
「「「あ、こんにちは！」」」
3人が振り向くと、なんと小さなドラゴンと黄色いネズミがいた。
弦太朗は3人に何をしているのかと聞く。
「その生き物はなんだ？」
「この子、フリードっていうんです」
「私たちの親友です！ね、フリード」
『きゅるくぅ！』
「こいつはピカチュウ。オレのパートナーなんだ！」
『ピカ、ピカチュウ！』
フリードと呼ばれたドラゴンは女の子に懐いていた。
「おっと、悪いな…如月弦太朗だ。オレの夢は、この学校の連中全

員と友達になることだ！」

「オレはサトシ！ポケモンマスターを目指してるんだ！」

「僕はエリオ・モンディアルです！よろしくお願いします！」

「キャロ・ル・ルシエです！お話はフェイトさんから伺ってます！」

「あのフェイトが？ああ、さっきなのはたちと一緒に会ってたところだぜ。なあ、ピカチュウ触らしてくれよ」

「いいぜ、ピカチュウは誰にでも懐くんだ」

サトシに言われ、ピカチュウに触れようとしたが…？

『ピカァー！！』

「○$×♪△※□∞☆♂♀♀&！！」

「おい、ピカチュウ！」

ピカチュウが電気を放ってきたので弦太朗は感電！サトシはピカチュウを怒鳴った。

…それにしても弦太朗、電気とつくづく縁が深いものである。詳しくは「先・輩・乱・入」「ヒロインズフェスタ編」を参照されたい。

その時、ハルヒから「如月君、いつまで油売ってんのよ！次行くわよ！」と怒鳴られたので「へいへい、待ってな！」と返した。

「それじゃオレはここで。あばよ！」

「「「また会う日までー！」」」

こうして弦太朗は二人に手を振った。

〜〜〜〜〜

「あそこの小屋にも珍獣がいるのよ！」

ハルヒが指差す先には、小屋があった。

「猛獣がいるんじゃねえのか？」

キョンが呆れるが、ハルヒに「じゃああんた一人で行きなさいよ」と言われたのでしぶしぶ一人で行くことに…

キョンが小屋の戸を開けると、一頭の白い虎がいた。

「虎がいるゥゥゥゥゥゥ！！」

しかも虎は、テレビを見ながら寝転がっていた。

「虎がテレビ見てるゥゥゥゥゥゥ！！」

そして虎が振り向くと、なんと口を開いた！

「ん？なんか用か？」

「喋ったァァァァァ！！」

「んだよ、虎が喋って悪いのかよ、地味野郎」

「なんかムカつくゥゥゥゥゥ！！」

キョンが突っ込みの嵐を連発した後、虎に聞き出す。

「なぁ、お前が珍獣なのか？」

「フ、学校でちやほやされてるなんてな。俺も有名になったもんだ。気がつけばお嬢と出会ってから数年は経ったんだろうな。俺がまだ幼い頃、お嬢に拾われた。そして三千院家でみんなの愛情に囲まれながら育ってきた。そしていつしか、俺の心にはお嬢様を守ると言う…

おい、どこいった！？」

気がつけばキョンに逃げられてしまい、置いてけぼりにされた虎。

「…俺の出番って、これだけ？なんか寂しいな」

ちなみに彼はタマ。三千院ナギのペットなのだそうだ。

〜〜〜〜〜

「なあ、あいつなのか？」

「当然よ！」

キョンとハルヒがみたものは、ピンク髪の女子中学生に問い詰める、ネコなのかウサギなのかわからない白い生物だった。しかし彼女の表情を読み取った弦太朗は一人前に出た。

「あ、弦太朗君、ダメです！」

みくるの制止を振り切り、弦太朗は生物の前に出る。

「おいお前、こいつに何をさせてんだよ」

「何だい君は？」

「オレは如月弦太朗、この学園の連中全員と友達になる男だ！ほら、逃げな！」

「あ…ありがとうございます。わたし、鹿目（かなめ）まどかといいます」

「へえ、いい名前だな」

弦太朗はまどかを逃がす。しかし生物は不敵に笑い、弦太朗にあることを強要した。

「ふふふ…ちょうどいい。僕と契約して魔法少女になってよ」

「オレは少女じゃねええええええええ！！！」

ボコァ！！

弦太朗のアッパーカットが炸裂し、白い生物は星になった…

その時、アサルトライフル（！）を持った黒髪の少女がピンク髪の少女に駆けつけてきた。

「大丈夫？まどか」

「ほむらちゃん！」

まどかとほむらが抱き合い、お互いの無事を確かめる。そしてほむらと呼ばれた黒髪の少女が弦太朗に聞いた。

「あなたが奴を殺ったのね？」

「奴？ああ、まあな」

ほむらが「…礼を言うわ」と謝礼すると、まどかを伴ってどこかへと飛んでいった。

〜〜〜〜〜

ハルヒ「次はヅラのところに行くわよ！ヅラには白くて大きな珍獣

が」

桂「珍獣じゃない、エリザベスだ！」

【その４：奇妙な着ぐるみがいる】

学園には、緑の帽子を被った黄色いネズミの着ぐるみがいた。手には風船を持っていた。

「あれが問題の着ぐるみか？」

「そうよ、ささ、キョン、行ってきなさい！」

「なんで俺が…しょうがねーな…」

キョンが近寄ってくると…なんとネズミがショットガンを構えた！見掛けに似合わず恐ろしい！

『ふもっふ！！』

「え！何で銃を向けられてんの！？ぎゃぁぁぁ！」

『ふもーっ！』

バン！　バンバン！

ネズミはいきなり銃を発砲してきたので、キョンがビビって逃げる！そこに弦太朗が飛び出してきた！

「キョン！ここはオレに任せて逃げろ！ハルヒたちを連れてけ！」

「わ、わかりました！！」

キョンはその場から逃走すると、弦太朗はフォーゼドライバーを腰につけた！

「コラ！丸腰の人様に銃向けてんじゃねえ！」

…3……

…2……

…1……

――変身！

「宇宙キタァァァァ！」

『ふも？ふもーっふ！』

ネズミが叫ぶと、警棒状のスタンガンを手にし、フォーゼと対決した！

「悪いな、オレにもこれがあるんでね！」

フォーゼはそう言ってエレキスイッチに換装！エレキステイツとなると、ビリーザロッドを振るい、ネズミのスタンガンと切り結んだ！

「うおおおおおお！！」

『ふもー！ふもっふーッ！』

稲妻を走らせ、フォーゼとネズミの着ぐるみが戦闘しているさなか、ハルヒはむしろこの状況を楽しんでいた。

「へえ、あれが噂の仮面ライダー…仮入部にしておくには惜しいわね！」

「あの…大丈夫、キョン君？」

「アアアアアアネズミ怖ぃ……」

一方、ＳＯＳ団に戻ったキョンは銃を撃たれかけたのか、みくるに心配されながら失神しかけていた…

【その５：すごい料理のうまい女子生徒がいる】

「そうなのか？料理のうめえダチなんてオレの中ではいくらでもいるぜ」

弦太朗はこの不思議に疑問を浮かべるが、ハルヒは豪語する。

「わかってないわね如月君！あの娘の料理を一度食べればどんな料理もまずく感じてしまうのよ！」

そういってハルヒが連れてくれたのは２－Ａであった。

「ほら、あの娘よ」

ハルヒが指差したのは、少年と話しているピンク色の髪をした女の子だった。

「ほら、如月君、キョン！行ってきなさい」

「おう、任せとけ！」

「また俺かよ！」

弦太朗は承諾するがキョンは普通に気が乗らない。だがハルヒの命令には逆らえないのでキョンはしぶしぶ承諾した。

教室内では茶髪の幼い顔立ちの少年、吉井明久（よしいあきひさ）とピンクのほわほわした少女、姫路瑞希（ひめじみずき）が話していた。明久が瑞希に弁当を勧められているが、どうやらあまり気が乗らない様子。

「あの、明久君…このお弁当ですけど…よ、よかったらどうぞ…（照）」

「え…あ、ありがとう姫路さん…で、でも…い、今はお腹がいっぱいで…」

「よ！」

明久「あ、弦太朗」

瑞希「弦太朗さん」

弦太朗が声をかけたので二人も挨拶する。

「それ、瑞希の作った弁当か？」

「あ、はい！」

「確かに成績優秀で品行方正なお前のことだ…さぞかし料理も得意なんだろうな。少しもらってもいいか？」

「ええ、いいですよ！お少しだけなら…」

瑞希に言われ、よりうれしそうな表情をする弦太朗。キョンと一緒で瑞希の弁当のおかずをとり、口に入れるが、明久が二人を止める！

「ま、待って弦太朗！姫路さんの料理は…！」

ぱくっ

「あ、あああああああ！？」

「どうした明久、顔が青いぞ！」

弦太朗が妙におかしな明久を心配するように言うが、やがて弦太朗とキョンの姿を見るなり、周りの顔が一気に青ざめた…

「何だよ！オレの顔になんかついてんのか！？」

怒鳴る弦太朗をキョンが止めるが、キョンがあることに気がついた。

「そういえば如月さん、俺の体がなんか軽いんすけど」

「え、そうか？つうか電灯ってこんなに手に届くほど低かったっけ？」

「下を見てくださいよ、下」

「んー、ここのクラスがオレ達の事を見上げてるよな。まるで驚きの表情だ。はっはっは、空から見下ろせるなんて、オレ達偉くなってきたな。みろよ、この頭の上に浮いた……ん？」

「な…なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」

弦太朗たちの足元にいたのは、おびえる表情で天井を見上げる生

徒たちと、ぐったりと倒れている自分の姿だった！お互いを確認すると、なんと自分たちの頭に黄色い輪が浮いている…自分たちは今、天使に連れ去られようとしていたのだ！

「お迎えがくる前に体に戻るぞ！」

「え、えー！？出来るんすかそんなこと！？」

「やってみなきゃわかんねえだろ！」

…こうして瑞希の弁当によって一度は他界しかけた弦太朗とキョンであったが、なんとか死地を脱することが出来た。ハルヒが賞賛する。

「これでわかったでしょ！？姫路さんの食べ物は絶品だって」

「あーまったくだよ！ある意味な！」

切れるキョンをよそに、明久が弦太朗に耳を貸した。

（姫路さん、料理するとき化学製品とか入れるんだ…でもしゃべらないほうがいい。姫路さんを傷つけちゃうから）

（マジかよ…まさしく必殺料理人だな…）

弦太朗は顔を真っ青にした。でも瑞希は基本的にいい子なので、明久の言うことに従おうと思う。

【その６：農業科のスイカ畑の番人がいる】

この学園には、普通科のほかに、農業、工業、水産業、商業、芸術、芸能、情報、福祉、スポーツ、サブカルチャーなどの多くの学科が学ばれている。
この農業科が管理しているスイカ畑に番人がいるという噂を聞きつけ、ＳＯＳ団がやってきたのだ。

ふと、長門がスイカを触っていた。そして彼女はこうつぶやく。

「……食べたい」

「そ、そうか…待ってろ！今番人に交渉してくるからな」

「……よろしく」

義に厚い弦太朗は長門に応えるべく番人の元へ向かった。スイカ畑には、ピンク髪のほわほわした少女がスイカを手入れしていた。なぜか首輪としており、背中には翼が生えている。しかも巨乳。

「よ！スイカの番人ってのはあんたか？」

「はい。わたしがここを管理しているイカロスと申します」

「如月弦太朗だ！お前とダチになるためにきた！だから…スイカがほしい！」

弦太朗が頭を下げると、なんとイカロスがあっさりとＯＫしてくれた。

「はい、大丈夫です。何個でもお持ち帰りしても構いません。そこ

のリヤカーをお使いください」

「サンキュ！」

弦太朗がリヤカーを取りに向かおうと思ったときだった。

「きゃあああああああああ！！！」

なんとハルヒ、みくる、長門が一人の少年に襲われていたのだ！少年は女を狙う狼のような目つきで追いかけ回している！

「こら如月君、何見てんのよ！早くこいつをやっつけなさい！団長の護衛サボってんじゃないわよ！」

「オレがいつからボディーガードになったんだ？だがどっちにせよ……待てコラァ！」

弦太朗が駆けつけようとしたとき、イカロスに止められた！

「大丈夫です」

「どうして？」

「あれをご覧ください」

なんと見慣れぬ少女がハルヒたちを追っていた少年を追いかけ、捕まえた。そして少女が少年の首を掴むと、手刀を構えた。手刀か

らはなんとどす黒いオーラが出ており、チョップによって少年の顔を滅多打ちにした！

畑には先ほどの少女に叩きのめされた少年の首が埋まっていた…少女がハルヒたちに必死に謝る。ついでのこの娘もでかい。イカロスのより大きいと思う。

「ごめんなさい！智ちゃんたらいつもああなんです！いつも女の子の尻を見てはそれを追っかけて…でも悪い人じゃないんです！あっ申し送れました！私、中等部の見月（みつき）そはらです！こっちの馬鹿は…」

生き埋めにされた少年はそはらに振り向くと、こういった。

「馬鹿とは失礼だな。俺には桜井智樹（さくらいともき）って名前があるんだぞ」

「なお、彼は私のマスターです。わたしたちはエンジェロイドと呼ばれる存在です」

イカロスの説明に弦太朗は納得した。この学園にクローンや珍獣がいてもおかしくはなかったのだ。ふと…

「へえー、あんたが噂の桜井ね…箒たちＩＳの女の子の風呂を覗いたり、星奈さんや瑞希さんや桃花さんやジュディス先輩やフェイト先輩の胸を触ろうとしたり、風紀委員や軽音部のみんなにセクハラ行為をしたり…」

するとハルヒがこんなことを言い出した！

「ねえ如月君、このバックル貸して！」

「あっ、ハルヒ」

ハルヒが弦太朗からフォーゼドライバーを奪い取った！そして…

…！

……3……

……2……

……1……

――――変身！

「あたしキタァァァァァ！！」

…なんとハルヒがフォーゼに変身してしまったのだ！

「こういうのやってみたかったのよね～♪……さぁて、あたしを追っかけた罰よ…観念なさい…！」

「え、何言ってるんですか…？俺は何も」

「ほうほう、武器ってこれかしら？」

フォーゼ（ハルヒ）はチェーンソースイッチを交換、スイッチをONにした。何故使い方を知っているのかは不明だが、フォーゼ（ハルヒ）の右足にチェーンソーが装備、起動され智樹に構える！

ギュィィィィン！！

「あら、可愛い武器ね♪…と言うわけで……死ねェェェェェェ！！」

「いやぁぁぁ！そんなもので斬られたら死んじゃう！」

智樹は穴から抜け出し、必死に逃げた！

「待ちなさい！」

「ハルヒ落ち着け！」

フォーゼ（ハルヒ）とキョンと智樹の逃走劇を見た弦太朗は…

「あー、これ賢吾やユウキにどう謝ればいいんだ……？」

早速頭を抱えていた…

〜〜〜〜〜

ラビットハッチ。

賢吾「如月…一体どこをほっつき歩いてるんだ…！」

憂・鬱・少・女（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾
『涼宮ハルヒの憂鬱』
キョン、涼宮ハルヒ、朝比奈みくる、長門有希、古泉一樹
『魔法少女まどか☆マギカ』
鹿目まどか、暁美ほむら、キュゥべえ
『バカとテストと召喚獣』
吉井明久、姫路瑞希
『ポケットモンスター』
サトシ、ピカチュウ
『そらのおとしもの』
桜井智樹、イカロス、美月そはら
『とあるシリーズ』
御坂妹
『魔法少女リリカルなのは』
高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやて、ヴィータ
エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ、ヴィヴィオ
『フルメタル・パニック！ふもっふ』
ボン太くん
『ハヤテのごとく！』
タマ
『銀魂』
桂小太郎、エリザベス
『けいおん！』
真鍋和
『機動戦士ガンダム　逆襲のシャア』

アムロ・レイ、シャア・アズナブル

シャア：アムロ！学園に溜まった問題児は、学園の蚤だという事がなぜわからんのだ！

アムロ：世直しのこと、知らないんだな。革命はいつもインテリが始めるが、
夢みたいな目標を持ってやるからいつも過激な事しかやらない。

シャア：私は世直しのことなど考えていない！

アムロ：貴様ほど急ぎすぎもしなければ、生徒に絶望もしちゃいない！

シャア：問題児や変質者どもにその才能を利用されている者が言う事か…

アムロ：馬鹿にして！そうやって貴様は、永遠に他人を見下すことしかしないんだ！

新八：お前らいつまでケンカしとんじゃぁぁぁ！！

恋・仲・冷・遇（前書き）

箒：恋仲冷遇…？そういえば思い出した！
　あの時の決着、まだ着いていなかったぞ！

セシリア：わたくしもちょうどそう思ってましたわ！
　一夏さんをかけてそろそろ雌雄を決しましょう！

鈴：だったらやってやろうじゃない！
　格の違いって奴を見せてあげるわよ！

シャルロット：５人のうち、誰が一夏を手に入れるか…
　みんな、全力で勝負だよ！

ラウラ：待て。今はこの作品を読んでからにしてからのほうがいいだろう。
　もっとも、一夏は私の嫁になる男だがな！

恋・仲・冷・遇

ある会議室。

そこには、野郎ばかりが集まっていた。前にはシートが被さっている意味深な何かがある。教壇には、アホ神子(みこ)…いやゼロスがいた。

「えー、君達に集まってもらったのは他でもない。君達は、俺様と同じ匂いをしていたのでここに集まってもらった」

ゼロスは一息入れると、こう語る。

「…君たちは、キャッキャウフフしてるバカップルに恨みを持ったことはないかね？」

そう、ゼロスの前の席は、かつて妙をストーキングしてシャナや箒らのリンチに遭ったゴリラ近藤、ヒナギクや美琴や愛紗らにボコボコにされた惨事(サンジ)、そはらに叩き伏せられハルヒにも殺されかけたと言う智樹ら被害者がいた。

その他にも、金髪の軽薄な男性、クルツ・ウェーバーのように自分はただ女好きなのに相手にされない残念なイケメンもいれば、中性的な外見の少年でいかにも怪しそうな土屋康太(つちやこうた)こと「ムッツリーニ」もいた。

彼らは、学年の枠を超えて、一堂に会した絶対モテない男達だった。

「……それで先生、俺達は何すればいいですか？」

ムッツリーニに言われたゼロスはシートと掴むと、それを一気に引き剥がした！シートの中には、ロゴマークらしき絵が描かれた旗

が貼っていた！

まず、妙に目玉が描かれたハートマークにヒビが割れている顔のようなマークがあり、顔の下にはＫＲＣ（Ｋｏｉｎａｋａ　Ｒｅｉｇｕ　Ｃｌｕｂ）の文字があり、『よごすぜ、恋愛！！恋仲冷遇部（こいなかれいぐう）』と言うキャッチコピーがされていた。

「恋仲冷遇部だ！この学園にはびこるリア充溢れる腐ったカップルどもに制裁を加えるための部活だ！」

「ちなみに誰がまとめんだよ」

クルツがゼロスに聞いてきた。

「ここの部活は俺様が仕切る…といいてえところだが、こうなった以上、俺様達は運命共同体だ！俺様達、全員が部長だ！」

ゼロスが皆をまとめ、こう言った。

「と言うことで、今日から恋仲冷遇部の活動はスタートだぜ！俺様についてきな！」

こうして恋仲冷遇部の活動が始まった！活動内容はいたって簡単。この学園にはびこるカップルに嫌がらせを仕掛ける。

まずは手始めに、学園中の女の子の胸や尻を触り、監視カメラを使って学生寮の女風呂を覗き…というのは当たり前だ。さらにカップルの女の子の机にはエロ本やパンツを送り、男の子の机には強烈な刺激臭で知られるドリアンから搾取した汁を入れた。

極めつけは「ラブレター攻撃」である。カップルの片方の名前の名義でラブレターを偽る。その中身とは、中年デブや老婆の全裸写真という「誰が得するんだ」という内容のもので、これをしまった封筒でもう片方のカップルの一人の下駄箱に送りつける。

おまけにカップルが仲睦まじそうにしているのを見るや、急接近した上で気づかれないように至近距離にてオナラをぶっ放す。気づかれたときは「あ～今近くで猫が鳴いていましたよ」と嘘の一点張り。これも部活動の一環だと言う。最悪である。

こうして、恋仲冷遇部の活動はエスカレートし、その勇名（笑）を学園中に轟かせていくのだった。

学生寮にある坂本雄二（さかもとゆうじ）の部屋…

身長１８０ｃｍはある、長身と精悍な顔つきをもつ不良少年・雄二が朝目覚めると、目の前に長い黒髪の大和撫子のような少女が声をかけてきた。

「……おはよう、雄二。今日はいい天気…朝ごはん、食べる？」

霧島翔子（きりしましょうこ）がサンドイッチを持ってきた。

「翔子…携帯とってくれ」

雄二に言われ、翔子が携帯を取る。そして雄二はあるところに電話を入れた。

「もしもし警察ですか？不法侵入です」

と、通報しようとしたが…翔子があるものを取り出した。なんとエロ本である…

「……雄二…これは何？」

「（ギクッ）う！？…なんだそれは？オレはその本は知らないぞ…」

「……雄二の机の下の3番目の引き出しの中の本の下に、参考書の表紙に被せて隠してあった」

「（ぐぬぬぅ～翔子め…）すみません、勘違いでした…」

ある意味脅しともいえる翔子の反撃に雄二は心折れ、電話を切った。

「……それじゃ、燃やすだけで許してあげる」

「待て！それは許すとかというレベルじゃない……て、燃やしちゃったァァァ！アアアアアアア！」

翔子がエロ本を燃やしてしまい、雄二が絶叫した…

「それで朝っぱらから何の用だ！？」

雄二にそういわれると、翔子はあるものを取り出した。何かのテーマパークのチケットらしい。

「これ、近日オープンする遊園地のカップル招待チケットじゃないか！どうしてお前がそれを？」

「……優しい人がくれた…」

「オレが知ってる人間でそれを持ってるのは明久くらいだが…」

雄二が憤慨して明久に電話すると、裏声で言い放った！

「お前を殺す…！」

『え！雄二！何言ってるの？僕なんかし（ブチッ！ツー、ツー…）』

電話の後、翔子が手を差し伸べてきた。

「……じゃ、行こう雄二……来ないと怖い目に遭わせる」

「わ…わかったよ、いけばいいんだろ！」

雄二には翔子という幼馴染がいる。翔子は容姿端麗・成績優秀・文武両道で生徒からの人気は高いが、雄二を想う気持ちは一途で、いつか「雄二のお嫁さんになる」事を夢見ている。

…こんな美人に好かれる雄二は幸せものである（本人はあまり乗り気じゃないが）。

だが、この二人に悲劇が舞い下りるという現実を、まだ誰も知る由もなかった……！

ラビットハッチ。
ヒロインズフェスタの件以来、夜空、星奈、小鷹ら隣人部はラビットハッチの一部分を部室として使っていた。全体的に見れば仮面ライダー部の半分にも及ばない規模だが、それでも部室として機能してはいる。
ラビットハッチでは、星奈がハンバーガーとアストロスイッチを手に、コンピュータを操作している賢吾と会話していた。
「う～、せっかく仮面ライダー部で宇宙で遊ぼうと思ったのに」
「そんな部はないし君は隣人部だろう。第一、素人が遊び気分で月面に出たら命の保障はできない」
「そんなことないわよ！宇宙服の扱いはユウキに教えてもらったわ」
星奈がそう言って振り向き、ポテトを取ろうとした。だが、彼女が取ったのはポテト型のメカ「ポテチョキン」だった。
「勝手に触るなよ」
賢吾に釘を刺されるがそれでも星奈はスイッチをポテチョキンに挿入し、ＯＮにした。ポテチョキンが起動し、ロボットに変形した。
「きゃ、動いた！」
星奈はびっくりするが、その後動くポテチョキンを見つめ、目をキラキラ輝かせた。

「わぁ！かわいい～♪」

その時、部屋から夜空が現れ、星奈を皮肉った。

「肉は精神年齢までも幼いのか。頭まで脂肪で出来ていて哀れだな」

「な…なんですってぇ！？」

怒る星奈をよそに夜空はあるビラを賢吾に見せた。

「歌星、これに見覚えはないか？」

ビラには妙に目玉が描かれたハートマークにヒビが割れている顔のようなマークがあり、顔の下にはＫＲＣの文字があり、『よごすぜ、恋愛！！恋仲冷遇部』と言うキャッチコピーがされた絵だった。

「なんだそれは？」

「知らないのか？『恋仲冷遇部』というわけのわからん部活だ。カップルに嫌がらせするのが目的と言う、呆れた馬鹿どもの集まりらしい」

「なるほどな。普段『リア充は死ね』とか言ってる君にピッタリじゃないのか？」

「乙女の純情を汚すあんな馬鹿どもと一緒にするな」

賢吾と夜空が言い争っているうち、星奈が口を割ってきた。

「ねえ、その絵、どっかで見たことない？」

星奈が二人を呼びつけると、「あれ見て、あれ！」と上に指差して叫んだ。フォーゼの顔が描かれてあり、フォーゼの顔の下にはKRCの文字があり、『つかむぜ、宇宙！！仮面ライダー部』と言うキャッチコピーがされた旗が天井に飾られてあった。

賢吾が仮面ライダー部の旗と恋仲冷遇部のビラを見比べると、眉をひそめ、夜空に聞いた。

「…おい三日月、これは…」

「お前らにとばっちり受けてるぞ。そのマークが似てるおかげでな」

「言いがかりか……」

おじゃリゾート。

今川グループが総力を挙げて作り上げた、雅と風流の王国がテーマのレジャーランドだ。

その頭首である今川義元は、おしろい塗りの顔で京風の着物を着ており、扇子を扇いで「風流でおじゃるの～」と言っている、公家かぶれのバカ殿だ。

「義元様、おじゃリゾートの初オープン、おめでとうございます！」

「おじゃリゾートは盛大に盛り上がっておるの、ほほほ」

マスコミから会見を受けていた義元は上機嫌だった。

「我が今川家の浮沈をかけたおじゃリゾートは長年の夢であった事業でおじゃる。これでまろの株は上がったも同然でおじゃ。テレビの前のそなたらもおじゃリゾートに行ってまろのカッコよさを感じてたも！」

義元が笑顔のまま会見から出た。

【坂本雄二×霧島翔子】

入り口には雄二と翔子が歩いており、おじゃリゾートの門をくぐったばかりだった。

「クソ、明久の野郎…次あったらこの恨み晴らし（バキ！）ぐわ！いてえ！」

「……恋人同士のデートだから、離れないで…」

雄二にくっついていた翔子が彼の腕にしがみつき、なんと肘関節を極めた！よほど雄二のことが好きで好きでしょうがなかったのだろう。

「逃がさないように関節極めてるのはお前だけだぁー！」

翔子がしがみついてくるので、雄二は泣いた。ふと、翔子があるものを指差した。

「……雄二、あれ何？」

翔子の指先には、義元の顔が飾られたお城だった…

「…さあな」

雄二は適当に答えた。

【ロイド・アーヴィング×コレット・ブルーネル】

ロイドとコレットは、あるアトラクションを体験したばかりだった。

「ロイド、楽しかったね♪」

「そう言うコレットも、俺以上に楽しんでたんじゃないか？」

二人は、ジェットコースターに乗ったのだ。義元がうつ伏せになったような姿のマシンが、次の客を迎える。

小腹が空いてきたので、二人は食事をとることにした。二人は近くのレストランで、ハンバーガーを買い、休息を取った。

「今度はあれにしようか、コレット？」

ロイドが指差したのは、線路を走る、き●んしゃトーマスよろしく義元の顔が目立つ機関車だった。

「うん！任せるね♪」

相変わらずラブラブなお二人でした。

【綾崎 ハヤテ×三千院ナギ】

「お前と一緒だといつも以上に楽しいのだが…なんだかここは薄気味悪い場所だな」

ナギがハヤテと手をつなぎながら周囲を見渡し、その目の先には、義元に似てるのかどうか微妙なマスコットが子供に風船を配っている。「おじゃ、おじゃ」と言っており、なんとも奇怪さが印象付けられる…

「でもお嬢様、ああ見えても今川グループが存亡をかけて建てたテーマパークですので……なかなか楽しめる施設が多いと思いますよ……あ…あはははは……」

ハヤテが苦笑いしながらおじゃリゾートの説明をする。彼の目には、義元の顔の形をした観覧車が映っていた。しかもゴンドラ別に喜怒哀楽揃った多種多様な表情をしており、妙な不快感さえ覚えてくる…

「フン、あんなのが儲かったら苦労などしておらん！」

ナギもハヤテに同調する。

ふと、ナギがここのアトラクションの中では見た目的にまともなお化け屋敷を指差した。

「ハヤテ！私、あれに入ってみたい！」

「ええ、僕も今そう思いました！（あれにかける金や余裕はなかったのか？）」

地味なお化け屋敷が気になりながらも、ハヤテとナギは乗ることにした。

【音無結弦×立華奏】

奏は、茶髪のお人よしそうな音無結弦（おとなし ゆづる）と付き合っていた。奏にとっては音無は以前救われた恩人であり、その縁で二人は恋人関係になっていた。

ちなみに彼を初登場させたのは、断じて私がこの小説を読み返して彼を出すのをうっかり忘れたわけではない！

「おい作者！今の発言、ワザとだろぉぉぉぉ！」

大空に向かってなんか叫んでいる音無。私にツッコむ君に絶望した！

「なに中の人ネタ使ってんだ！人の話聞けよ！…ったく、モノローグに向かって何てこと叫んでんだ俺は…」

「結弦。どうしたの？」

奏がそんな音無を心配する。そりゃ彼氏に何かあったら心配するだろう。

「い、いやなんでもない…それよりも、上を見てくれ」

音無が見上げたのは、義元が両手を広げて飛んでいるような姿をした回転ブランコだった。

「…悪趣味ね」

アトラクションに対する奏の感想は辛辣なものだった。

【遠山キンジ×星伽白雪】

キンジの隣には、彼の幼馴染であり、実家の神社の娘であり、同じ武偵の同僚である星伽白雪（ほとぎしらゆき）が付き添っていた。長い黒髪に白く長いリボンをつけた彼女は、まるで日本人形のようなかわいさを持つ少女だった。

彼女は抱きつくようにキンジの腕に絡みついた。

「キンちゃん、ここが私オススメの場所だよ。本日オープンなんだって！」

「そうか？それにしては、少しばかり不気味だが…」

キンジがそういって周りを見ると、義元の顔をしたバス、水を吐き出す義元の石像などがあった。

「どこもかしこも、お●ゃる丸の偽物ばっかりじゃないか…」

「ほぇ、ダメなの…？キンちゃんの馬鹿～！」

キンジにダメだしされた白雪はいきなり泣き出し、キンジの胸を叩いた。

「ちょ…落ち着けって白雪！」

【キラ・ヤマト×ラクス・クライン】

黒髪でしっかりした青年キラと、生徒でありながら黒楼州学園の理事も務めるピンク髪のおっとりした少女ラクスもこの場所を訪れていた。ふたりは、義元の顔の形をしたタイヤキを食べていた。

「参りましょう、キラ。時間はまだまだいっぱいありますわ」

「うん、僕たちで一緒にいい思い出を作ろうか」

二人は何かのアトラクションに乗ろうか悩んでいた。
すると視界には義元の頭が生えた馬が回っているメリーゴーランドが目に映った。ラクスがそれを指差し、こう語った。

「キラ。あの馬、なかなかかわいいですわ♪」

「え…そうかな…？」

キラは恋人のセンスに若干引いた。

一方、おじゃリゾートのある場所では6人の人物がたむろしていた。彼らは、赤、青、黄、紫、緑、白の体色をしており、人間離れした姿をしていた（ていうか誰がどう見ても人間には見えない）。

赤い鬼のような怪物がこう言った。

「あ～～～～！暇だ！なんかねえのかよ！」

すると紫の竜のような怪物が「わ～い」と赤い鬼の前を通ってはしゃいでいたので、怒鳴る。

「うるせえ鼻たれ小僧！少し黙ってろ！」

「まぁまぁ先輩、そんなに怒ってると、頭がハゲちゃうよ？」

青い亀のような怪物が彼を諌める。でも全然フォローになってない。

「やかましいわ！亀の癖に生意気なんだよ！オラ、熊も起きろ！」

赤い鬼が、あぐらをかいて熟睡している黄色い熊のような怪物を蹴り起こそうとする。なかなかしぶとく、数度蹴っても起きなかったが、しばらくすると目を覚ました。

「ん～？おぅなんや、もう朝かいな」

「今は１２時だ！あ～、作者から久々の出番だと聞いてやってきたのにグダグダのままストーリーが終わっちまうのか！？」

黄色い熊を怒鳴った後、赤鬼が頭を抱えたり地団駄を踏んだりとイライラを抑えられずにいた。

「まぁまぁ、ここは抑えて」

黒い頭巾を被った緑の怪物が赤鬼を制する。そんな時、青い亀があることを提案した。

「…ねえ、あれに『憑依』してみない？」

彼が指差したのは、手をつないでキャッキャウフフしているカップルの一組だった。

「フ、お供に指図されるのは気が乗らないが…私も参加させてもらおうか」

白い鳥のような怪物が青い亀の提案に乗った。

数時間後、雄二と翔子、ハヤテとナギ、ロイドとコレット、音無と奏、キンジと白雪、キラとラクスは偶然にもロビーに合流した。

「じゃあ、お買い物行って来るね！」

コレットがナギと奏と翔子と白雪とラクスで買い物に行った。彼女らが去った後、雄二らがハヤテに聞き出した。

雄二「三千院のことなんだけどさ、あいつと付き合って大丈夫か？」

ロイド「お、聞きたいなそれ！」

ハヤテ「いいえ、お嬢様の幸せのためなら、たとえこの命すらも投げ捨てる覚悟ですよ！」

音無「いやそれ、ある意味危ないと思うぜ…」

キラ「ハヤテはナギのこと第一だからね。ね、執事少年ハヤテ君？」

ハヤテ「イヤ～からかわないでくださいよ～」

「おい、ヘリコプターが飛んでるぜ」

キンジが指差したのは、上空から見えるヘリだった。そしてその

ヘリはだんだんキンジたちに近づくと…

……ヘリから大きな網が投射された。

コレット「いっぱい買ったね～♪」

奏「そうね」

ラクス「あらあら、買いすぎでしたかしら？」

白雪「私も負けてないもん！これもキンちゃんのため！」

ナギ「さて、私たちも戻るか」

翔子「……うん、行こう」

６人のヒロインは、和気あいあいとした雰囲気でショッピングセンターでお土産を買い、その後も笑顔が絶えないまま店を出た。

だが、６人は信じられない光景を目にする！

なんと彼女たちの思い人が、顔全体を覆うマスクに黒服の男たちにつかまり、縄で縛られていた！

そして彼女たちの周りを、突然黒服たちに囲まれた！彼らは警棒を持っていた。

黒服の背中には、ハートにヒビが割れている顔のようなマーク、顔の下のＫＲＣの文字、『よごすぜ、恋愛！！恋仲冷遇部』のキャッチコピーがプリントされてあった。

彼らの正体は、恋仲冷遇部だった。

「誰だお前らは！」

「お前達に名乗る名はない…」

ナギの質問に答えない黒服。その態度に白雪が怒り、刀を抜刀した！

「よくもキンちゃんを…許さない！」

「おっと、こいつ等がどうなってもいいのかな？」

恋仲冷遇部の部員は警棒を彼女の恋人達に向ける。

「コレット、来るな…ぐぁ！」

バシィッ！！

そして警棒を振りかざし、ロイドの背中を叩いた！強烈な激痛にロイドは悶えた。

「ロイドぉ！」

ロイドを痛めつけられ、悲鳴を上げるコレット。幼馴染であるだけに、その悲痛がひしひし伝わる。

「わたくしたちのいる場所を血に染めるおつもりですか？」

彼らのやり口に理事であるラクスが怒り、大声を張り上げた。

「お前学園の理事か？フン、知ったことじゃないな。我らの目的は、この世のカップルを殲滅することだ！」

「……雄二を傷つけるなら許さない」

物静かな翔子も怒り、両者の間に火花が走った。

「ならば貴様らから血祭りにあげてやる。死ねー！」

恋仲冷遇部の部員たちが警棒を振りかざし、奏たちを襲った！

…その時、不思議なことが起こった。

今にも奏が殴られそうになったその直前、奏が腕を振りかざし、男たちを吹っ飛ばした！そして奏は不敵に笑うと、あの作品のファンなら知っているあのセリフとポーズで決めた！

『俺、参上！！』

なんと奏は無傷のまま男を撃退していた！そればかりではない。彼女の長く美しい銀髪の一部が赤く染まり、まるでスーパーサイヤ人のように逆立っていた。しかも目が赤くなり、声変わりまでしている…

姿や声が変わったのは奏だけではない。

ナギは金髪ツインテールはそのままに青いメッシュが入り、眼鏡までかけている。眼鏡の奥には青い瞳が映っていた。

翔子は黒髪の一部に金色メッシュがあり、目も黄色くなった。いつの間にか着物を着ている。

コレットは金髪の左半分と目が紫に染まり、キャップを被りヘッドホンをかけていた。常に踊っている。

白雪はもみあげのところが緑に染まった。目も緑になっている。

ラクスはもともとのピンクのポニーテールに銀髪が入り、やはり目も白くなっている。首には羽毛のマフラーを巻いていた。

彼女たちの姿を見た彼氏の反応は…

彼氏6人「ギャァァァァァァ！なんか変だァァァァァァァァ！」

でしょうね。

『さーて久しぶりにクライマックスと行くか！行くぜ行くぜ行くぜぇ！』

奏（？）の合図とともに彼女たちは恋仲冷遇部と激突した！

『お前、僕に釣られてみる？』

ナギ（？）が男たちを挑発、向かってきた男たちに向かって手に

したロッドで男たちを追い払った！さらにどさくさに紛れて周りの建物を破壊した！ナギ（？）の活躍ぶりに、ハヤテが感動の涙を流した。

「お嬢様…強くなられた。う、うぅぅぅ」

彼氏５人「いや、目を覚ましてくれ！」

『みんなまとめて倒してもいいよね？答えは聞いてない！』

コレット（？）がわけのわからないことを話すと回りから「ハァ？質問してねえよ」とぼやき始めた。だがその瞬間、部員達は何の反動か、コレット（？）に合わせて踊り始めた！彼女によって結成された恋仲冷遇部部員は、コレット（？）お付きのダンサー集団となった！

そんな時、恋仲冷遇部部員のクルツの乗るアームスレイブ「Ｍ９ガーンズバック」が姿を現した！Ｍ９は全長８ｍの巨大ロボットで、戦場で活躍しているいわば兵器であった。

『ち、俺は狙撃専門だが…こうなりゃ仕方ねえ！』

クルツはそう言ってＭ９を動かし、奏（？）たちに向かって頭部のチェーンガンを撃ってきた！しかし彼女らがいっせいに散り、流れ弾によっておじゃリゾートの建造物が破壊された！

翔子（？）はその華奢な見た目に似合わない怪力で斧で敵を打ち上げた！そしてクルツの乗るＭ９に向かって走っていくと、一気に大ジャンプ！斧を構えた！

『ダイナミックチョップ！』

翔子（？）が斧を振り下ろすと…なんと自分の８倍ほどの大きさを持つクルツのＭ９を真っ二つに斬ってしまった！！両断されたＭ９はそのまま倒れ、義元そっくりのアトラクションが押し潰された。

『お、覚えてろ～！』

クルツは小悪党のような捨て台詞を吐いて脱出した。そして翔子（？）はこういった。

『俺の強さは…泣けるで！』

『みんな大丈夫か？もう安心だぞ～。はい、デネブキャンディーね』

白雪（？）がキャンディーを配りながら縛られたキンジたちを解放していた。キンジは彼女に聞く。

「なぁ、お前本当に白雪なのか？なんか変だぞ」

それに対する白雪（？）の返事はこうだった。

『最初に言っておく……特に言うことは、ない！！』

彼氏６人「ねえなら言うなよ！！」

『ああ、あと侑人（ゆうと）をよろしく！』

彼氏６人「誰だよ！！」

わけわからんと唖然とする恋人たちだった。するとラクス（？）がキラたちに声をかけてきた。

『そこのお供6人、何をしている。早く私についてくるのだ』

「お供って、僕らのこと？それに、ラクス…だよね？」

『小僧、頭が高い！身分をわきまえろ！』

勝手に家来扱いされたキラがラクス（？）に足蹴にされた！彼女の変貌に嘆くキラを無視し、ラクス（？）は声高々に決め台詞を言った。

『降臨…満を持して！』

「……これ…いい！」

彼女たちの変貌に心を奪われた恋仲冷遇部部員のムッツリーニが大量の鼻血を噴出して倒れた！

その時、おじゃリゾートに一台の巨大な戦車が乱入してきた！

サンジ「なんだあいつら、姿が変わるなんて聞いてねえぞ！？」

智樹「ちくしょう！これで俺達の計画は台無しだぜ！」

近藤「クルッ…ムッツリーニ…志半ばで果てたお前らの仇、絶対取

ってやるぞ！」

ゼロス「行くぜ！サンジ、智樹、近藤！これが俺様達、恋仲冷遇部の戦いだぁー！」

ゼロスたちを乗せた戦車は奏（？）たちに向かって突撃した！

「カップルどもめ！我々恋仲冷遇部の怒りを思い知れぇぇぇぇ！」

戦車にはガトリング砲やミサイルランチャー、キャノン砲などを装備しており、まるでハリネズミのように撃ってきた！その結果、おじゃリゾートは火の海と化した！

『ようし、あれに乗り込むか！』

奏（？）の号令で6人のヒロイン（？）は上空へ飛んだ！上空には時の列車「デンライナー」が走っていた。

デンライナーに乗り込んだ奏（？）は、バイクとしての運用も出来るデンライナーの操縦システム「デンバード」に乗り込み、デンライナーを操縦した。

『オラオラオラァ！最後までクライマックスだぜぇ！』

奏（？）はデンバードを動かし、デンライナーからビームやレーザーで一斉射撃！ゼロスたちが乗り込む巨大戦車は直撃を受けた！

「チクショ～～～～～！！くそったれ～～～～～！！」

ゼロス、近藤、サンジ、智樹の断末魔とともに巨大戦車は爆発を起こし、4人は爆風で吹っ飛ばされて星となった……

「こ、これは一体何事でおじゃるか！」

おじゃリゾートで破壊活動が行われていると言う話を聞き、義元が駆けつけてきた！

「お、おじゃ～～～～！！」

だが間に合わず、おじゃリゾートは大爆発！おじゃリゾートに大規模の火災が発生し、義元は爆風で吹っ飛ばされて星となった……

ほ、星でおじゃー

今川グループの存亡をかけたおじゃリゾートは開園半日にして崩壊した。そして桶狭間よろしく今川家は文字通り、衰退の一途を辿ることになる。

恋・仲・冷・遇（後書き）

キャストの皆さま
『ハヤテのごとく』
三千院ナギ、綾崎ハヤテ
『バカとテストと召喚獣』
霧島翔子、坂井雄二
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
立華奏、音無結弦
『テイルズオブシンフォニア』
コレット・ブルーネル、ロイド・アーヴィング
『緋弾のアリア』
星伽白雪、遠山キンジ
『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』
ラクス・クライン、キラ・ヤマト
『仮面ライダー電王』
モモタロス、ウラタロス、キンタロス、
リュウタロス、デネブ、ジーク
『仮面ライダーフォーゼ』
歌星賢吾
『僕は友達が少ない』
三日月夜空、柏崎星奈

今回星になった哀れなキャストの皆さま
『テイルズオブシンフォニア』
ゼロス・ワイルダー
『銀魂』
近藤勲
『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』

サンジ
『そらのおとしもの』
桜井智樹
『バカとテストと召喚獣』
ムッツリーニ
『フルメタルパニック！』
クルツ・ウェーバー
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
今川義元

時の列車デンライナー。次の駅は学園か、宇宙か…？

モモタロス：俺、再び参上！

ウラタロス：僕に釣られてみる？

キンタロス：俺の強さにお前が泣いた！

リュウタロス：答えは聞いてない！

ジーク：降臨、満を持して！

デネブ：最初に言っておく…これからも応援よろしく！
あと、侑人もよろしく！

美・食・厨・房（前書き）

朱里：はわわ！ご主人様、敵が来ちゃいました！

雛里：あわわ！ご主人様の正体はこの回で明かされます！

朱里・雛里：楽しんで読んでください！

美・食・厨・房

どんな調味料にも食材にも勝るものがある。それは料理を作る人の愛情だ。

「仮面ライダーカブト」より、天道総司

ナタリア・ルツ・キムラスカ・ランバルディア。

２－Ｃの学級委員長である。金髪碧眼の気品溢れる容貌でありながら責任感が強く、クラスや生徒にも慕われている。同じクラスのルークの幼馴染である彼女は、ランバルディア流弓術の免許皆伝を持ち、そのリーダーシップから弓道部のエースとして活躍。生徒や教職員からの信望も厚い人物だった。

だが、完璧すぎる人間はそうそういない。彼女にも欠点があった。

「どうして誰も食べようとしないんですの！？」

ナタリアが手にしていたのはまるでゴミのような物体が乗った皿だった。ナタリアがこれを持って人に近寄ろうとするも、人は避けようとする。

「どうしてって言われても…リアクションに困るのよ」

「無愛想な上に嫌味まで…最低ですわね」

ティアが呆れたように皮肉交じりにため息をつくのでナタリアもまた皮肉で返す。

「あんたもサンジ君を見習ったらどう？性格あれだけど、サンジ君の料理はウマいわよ」

オレンジ色の髪の女性、ナミがサンジを立てると…

「え！？俺のこと呼んだんですか、ナミさん！」

サンジがまるで餌に引っかかったかのように釣られ、食いついてきた！サンジはナミに一目惚れなのだ。しかし、

「うん、呼んだだけ」

と返されると、サンジはシュンとして体育座りした。

そんな時、ナタリアの持った不気味な物体を平気で口にする勇者がいた。

セイバー「あいかわらず２－Ａの瑞希に負けず劣らずですね…」

幸村「なんと摩訶不思議な味でござろうか…！」

神楽「お前は錬金術師アルか」

ルフィ「どうやったらこんなものになるんだ？知りてぇくれえだ！」

学年一の大食漢と呼ばれ、「2学年の大食漢四天王」とされる4人だった。

「…私はただ、レシピ通りにやっただけですわ！」

ナタリアは必死に言い訳する。

…そう、彼女は恐ろしいまでに料理の腕前は壊滅的なのだ。

材料や器具は金さえ出せば手に入る。だが大事なのは、調理する料理人の技と腕、そして心だ。

だが、ナタリアのような凶悪な料理を作る女性の前ではこの言葉も通用しない。しかしこれは以下の女性にも適用されることだった。

たとえば志村妙。本人いわく「卵料理は得意」。だが煮ても焼いてもすべて黒焦げにしてしまうので「暗黒物質（ダークマター）」と表現される。彼女の料理を食べたS田G時は「まるで焼死体だ。かわいそうな卵だ」と嘆いたこともあったんだとか。

次に姫路瑞希。彼女はすこぶる勉強が出来るが、料理を食材ではなく化学的なイメージで作るため、その出来は殺人的で匂いだけでY井A久が昏倒しかけるほど。事実、K月G太朗が瑞希の料理に昇天しかけたため、「必殺料理人」と形容された。

セシリア・オルコットも相当ひどい方だ。料理の見た目は完璧と言えるのだが…肝心の調味料を間違えて入れるのでひどい。英国淑女であることに誇りを持つ彼女だが、O斑I夏に「世界一料理のまずい国の何年覇者だよ」とイギリスを馬鹿にされ、激昂したことがある。

ナタリア、妙、瑞希、セシリアの4人は、裏の学園事情で「料理のまずい淑女四天王」とランキングされた。当然、チクったりする

と殺されかけたり傷つけてしまうので誰も口にする事は出来ないが。

かつて放送されていた「●のエプロン」に出れそうな腕前を持つ4人を心配し、政宗、ジーニアスが調理室に呼んだ。彼らは料理のプロだった。

政宗が4人に料理を教えている途中、こんなことを言い出した。

「馳走とは旬の品をさり気なく出し、主人自ら調理して、もてなす事である。Did you understand?」

これ、史実の政宗が実際に言っていた言葉だ。この発言に、料理評論家の多くは「政宗が現代にいたら、相当な料理人になっていただろう」と驚愕し、さらに和洋中問わず多くの料理人がバイブルとして崇めている。政宗は料理好きで、納豆や凍み豆腐を開発し、仙台名物のずんだ餅を考案、さらに味噌の量産体制に積極的に力を入れたのも政宗が初めてなのだ。元々は兵糧開発のために行っていたのだが、戦国が終わり太平の世になると美食を極めるために料理の研究をしていた。

「お、たまにはいいこと言うね、政宗」

「おうとも、オレのかっこよさは…ってこのガキ、生言ってんじゃねえ」

政宗やジーニアスと一緒に料理を研究し、腕を上げていく4人。

そして4人が出したのは…

ナタリア「出来ましたわよ」

妙「さあ、残さず食べてね？」

瑞希「これ、食べてください！」

セシリア「どうぞ、召し上がれ♪」

……暗黒物質だった。唖然としたジーニアスは眉をひそめながら咎める。

「ねえ、ちゃんと真面目にやってる？」

ナタリア以下3名「やってます！」

「…根拠は？」

ナタリア以下3名「自信です！」

呆れてため息をついた。暗黒物質のせいで顔も真っ青だ。もうこれ以上何を教えても意味がないと失望したジーニアスであった。

その時、政宗がある事を言い出した。

「……そんなに料理がうまくなりてえなら、あの男を頼るといい」

「…なんですか？あの男って」

瑞希が政宗に同じ言葉を復唱し、彼が彼女の問いに答える。

「ウチの学園の教師にこんな男がいる。至高の知をもつ『臥龍』…そいつのところに行ってみな。思わぬｌｕｃｋｙが手に入るかもしれねえぜ」

とある山小屋。
ナタリア、妙、瑞希、セシリアの４人がここにたどり着いた。政宗が言う「臥龍」がこの山小屋の中にいると言う。政宗の紹介状を手に、妙が山小屋の戸をノックしてみた。

「すみませーん。料理を教えてもらいたいんですけどー」

しばらくすると、戸が開いた。小屋の入り口には、青みがかったツインテールの上に魔女っ娘のような帽子を被っている、小柄でおどおどしている少女がいた。

「あ、あの…何の御用ですか？」

「ねえ、臥龍さんて人、知らない？」

妙から臥龍と言う名を聞き、少女は噛みながらたどたどしくしゃべる。

「あ、あ、いま寝てましゅ…」

「じゃぁさっさと起こして来いや！さもねえとその首ちょん切って

街中に晒すぞクソガキが！」

「あわわわ！？ごご、ごめんなしゃぁい！！」

妙はなんと強引に少女の胸倉を掴んだ！少女は「あわわ！うえーん！」と泣きながら小屋の中へ逃げ込んだ。

小屋からは、別の少女の声が聞こえた。

「はわわ！雛里（ひなり）ちゃんどうしたの？」

「あわわ！朱里（しゅり）ちゃん！怖い人がうちに来たの～」

このやり取りのセリフに、血管が切れた妙は懐からドスを取り出そうとした！あわててセシリアとナタリアが妙を取り押さえる！

ナタリア「ちょ！妙先輩、ここは抑えてくださいませ！」

セシリア「そうですわ！わたくし達は料理を教えてもらうためにこちらに来てるのですから！」

やがて妙がおとなしくなると、ドスをしまう。その時、先程の魔女っ娘が、金髪でベレー帽を被った同じ服装の少女を連れて入り口に来た。ベレー帽はみなに謝る。

「はわわぁ、先程はすみませんでした！どうぞ、中にお入りください！」

４人が入り口に入ると、そこにはどこか神秘的な雰囲気を感じさ

せる男性が正座していた。手には羽根で出来た団扇を握っている。
「ようこそ、おいでくださいました。私は諸葛亮（しょかつりょう）。黒楼州学園で教師も兼ねているスクールカウンセラーであり、あなた方が捜し求めていた臥龍です」
スクールカウンセラーとは、教育機関において心理相談業務に従事する心理職専門家、つまり悩める生徒の相談役である。
諸葛亮が隣の少女二人に挨拶するように言うと、彼女らも頭を下げた。ベレー帽のほうは朱里で、魔女っ娘のほうが雛里である。
「ご用件はなんですか？」
諸葛亮が妙に用を聞いてきた。すると彼女はこういった。
「……ロリコンですか？」
いきなり無礼な妙の発言に、諸葛亮はこう返した。
「いいえ。この二人は私の養子です。どうか、誤解せぬようにお願いいたします」
「そうです、ご主人様は偉い人です♪」
彼の発言と朱里の自慢に、信じられないと思った４人だった。
「私達は、料理を学びにきたのです」
瑞希が話を本題に移す。諸葛亮は彼女たちから話を聞く。

「……そうですか。ですが、美味しい料理とは粋なもの、さりげなく気が利いていなければなりません。そこで、私から試練を与えます」

そう言って諸葛亮が雛里を呼びつける。諸葛亮の指先の雛里が手にしているものは……

「…雑巾、です？」

雛里の持っている雑巾を指差しながら「左様」と答える諸葛亮に、瑞希たちは目を丸くした。そして諸葛亮は、驚くべきことを言い放った！

「この雑巾を、あなたたちの手で料理してみなさい」

「何ですって！？わたくし達は遊びに来たわけじゃありませんのよ！」

「何か食材とかはありませんの！？私は害虫じゃないですわ！」

この無理難題な一言に憤慨するセシリアとナタリア。だが諸葛亮は何一つ不自由ない顔で嘲笑う。

「これを極めるこそ料理の真髄です。出来ないのなら、ここから出て行ってもらいます」

やがて４人は覚悟を決め、雑巾を使った調理を真面目に受け止めた。

こうして４人の修行が始まった。

まず妙がある雑巾料理を持ち出す。しかし雑巾は例によって真っ黒であった。自室のパソコンでネットサーフィンをしていた諸葛亮にこれを見せる妙。

「雑巾のステーキです！」

「……失格です。どこをどう捉えるとステーキになるのですか？あなたの胸と同じくひねりも厚みもありませんね」

そう言って諸葛亮は雑巾のステーキを窓の外に投げ飛ばした！胸のことを気にしていた妙は激昂し、暴れ始めたがその都度、ナタリアに取り押さえられた。

次の瑞希が雑巾料理を持ち出し、ＰＳ３でゲームをやっていた諸

葛亮に見せる。

「できましたっ！雑巾エキスの雑巾カレーです！」

「……失格です。食材を台無しにしていますね。しかもこの匂い…料理に青酸カリを入れるとは。あなたは殺し屋に向いていますね」

そういって諸葛亮は雑巾カレーをゴミ箱に捨ててしまった。瑞希はシュンとし、そのまま諸葛亮の部屋から出てしまった。

今度はセシリアが次の雑巾料理を持ってきた。雛里と朱里にエロ本（！）を読ませていた諸葛亮に見せる。

「合挽きを練りこんだ雑巾ハンバーグですわ。わたくしの自信作ですわ！」

「……失格です。そのハンバーグは全然膨らんでいませんね。あなたのその無駄に大きな胸は夢も希望もなくただ膨らんでいるだけですか？」

そういって諸葛亮はセシリアの顔面に雑巾ハンバーグをぶち込んだ！怒ったセシリアはやはり暴れ始めたが、これもナタリアに取り押さえられた。

そしてナタリアが自分の雑巾料理を持ち込み、「逆襲のシャア」のリ・ガズィのガンプラを組み立てていた諸葛亮に見せた。

「雑巾ラーメンですの。小麦粉に刻み雑巾を混ぜ込んでみましたわ」

「……失格です。あなた方は本当にどうしようもありませんね。まるで料理を軽蔑し、素材の味を殺しているかのようです」

そういって諸葛亮は雑巾ラーメンを窓の外に流し込んだ。ナタリアの我慢が臨界点に達しかけたので怒ろうとしたが、自分の才能はわかっていたのでしぶしぶ部屋を後にした。

４人は小屋の外に出て諸葛亮について話していた。

妙「何あのロリコン。何様のつもりかしら」

セシリア「これは孔明（こうめい）の罠ですわ！あの人は何を教えようとしてますの！？」

瑞希「でも、政宗君の知り合いみたいだし…悪い人ではなさそうですよ」

ナタリア「ですが、雑巾を調理しろと言ったのですよ！とてもカウンセラーのすることじゃ…」

しかし話しているうちにナタリアのある言葉が４人の耳に強く響いたらしく、話を止めた。すると４人はそれぞれアイコンタクトをすると、その言葉をいっせいに口にした……

４人は諸葛亮の部屋に来て、彼と対面した。４人は正座をし、深

く頭を下げた。

「４人いっせいに来るとはどういうつもりですか？」

諸葛亮が驚いて４人の様子を見る。そしてナタリアはこういった。

「諸葛亮先生。４人で悩み、４人で苦労し、ここまで歩んできました。そして私達はある結論に至ったのです」

そういってナタリアが懐から取り出したのは……

雑巾だった。

セシリア「これがわたくしたちの答えですわ」

諸葛亮「ほう…」

瑞希「やっぱり雑巾を調理するなんて無理です。雑巾をはじめとするありとあらゆるものは、本来の用途に使われるからこそその真価を発揮すると思うんです」

妙「自然を知り、己を知る…それを見極めることが大事なんじゃないかと、私達は思います」

４人の説得を聞いた諸葛亮は……？

「……合格です。よくぞ、料理の真髄を見極めることが出来ましたね」

朱里・雛里「おめでとうございます！」

諸葛亮の顔に笑みがこぼれ、褒め称えた。朱里と雛里も賞賛する。4人を料理人として認めた瞬間だった。

「私から教える事はもうありません。料理にて、存分にその腕を振るってください」

その後学校に戻った4人は調理室でその腕を披露することになった。あの4人の料理だろ。どーせろくなことになんねえよ。連荘で食べたら死ぬし…当然周りからはそんな声が上がってきた。しかし彼女たちの料理を食してみるや…？

ルフィ「うめぇ～～～～～」

幸村「極楽でござる～～～～」

セイバー「幸せ～～～～～～」

神楽「気持ちいいアル～～～～」

なんと以前と180度回転したあまりのうまさに客が恍惚の表情

になった。そして何故か頭に黄色い輪が現れ、背中に翼が生えて、いかにも天国に旅立ちそうになった。それほどの味であろう。
出席していた政宗も例外ではなかった。天使になった彼は、４人を褒め称え、あることを提案した。

「Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！あのオッサンに鍛えられて上達したじゃねえか。それならあの男を超えられるかもな」

「誰ですの？」

「……レーツェル・ファインシュメッカー。家庭科担当の教師にして料理部の顧問。謎の食通と言われる料理の鉄人だ」

政宗によるとレーツェルはその料理の腕前から学園の教職員のくせに、「ビストロトロンベ」という自分のテレビ番組を持ち、自分がオーナーを務める「レストラントロンベ」を開業し、いずれもファンが多いと言う。著書の人気も高く、特に料理本は主婦や評論家、料理人にとってなくてはならないバイブルなんだとか。

「ビストロ・トロンベは毎回料理人のゲストを募っている。生徒ととしてのコネで奴に頼めば出られるかもな」

数日後、テレビ局でビストロトロンベの生放送がオンエアされようとしていた。
スタジオ内のキッチンでは、金髪でサングラスをつけた高貴な顔

立ちのレーツェルが仕込みをしながら司会者からインタビューを受けていた。レーツェルはこう語る。

「まさか我が校の生徒に料理対決を挑まれる日が来るとは…しかもその生徒たちはもともと料理が下手だったのだとか。ふ、今回のビストロトロンベはいつも以上に楽しめそうだな」

ナタリアたちの成長ぶりに心躍らせるレーツェルだった。

ビストロトロンベの生放送前と同じ頃、諸葛亮は朱里と雛里を伴ってレストラントロンベに足を運んでいた。ナタリアたちが番組に出ると言う話を聞いた諸葛亮は、レーツェル直伝の料理の味を味わうためにここにきたのだ。しかし有名店というだけあって、長蛇の列が出来ていた。

「同僚が料理店のオーナーとは…この学園にもまだまだ知らないことがありますね」

朱里「はわわ、ご主人様、すごい行列です！」

雛里「あわわ、いつ待たされるでしょうか、ご主人様？」

「あせる事はありませんよ朱里、雛里。ある人は言っていました。美味しい物を食べるのは楽しいが、一番楽しいのはそれを待っている間だ、と」

諸葛亮は天に向かって指差した。

諸葛亮らがレストラントロンベで食事をしている頃、ビストロトロンベの生放送が開始された！

『みなさんお待ちかね！今週もビストロトロンベへようこそ！制限時間は３０分！スタジオにある食材と器具さえ使えばメニューは自由！

挑戦者の紹介です！なんと現役高校生のチーム、ナタリア・Ｌ・Ｋ・ランバルディア、志村妙、姫路瑞希、セシリア・オルコットの４人！対するは言わずと知れた天才料理人、謎の食通レーツェル・ファインシュメッカーです！』

レーツェルに挑む４人は、期待と不安でいっぱいだった。

セシリア「ついに来ましたのね…」

瑞希「本当に勝てるのでしょうか？」

妙「勝てると思うよ？多分」

ナタリア「さあ…行きますわよ、皆様！」

（フ、期待しているよ、我が校の生徒たちよ……）

レーツェルは横でその腕を競い合う生徒の成長に期待を寄せていた。そして、スパロボでのレーツェルおなじみのあの曲が流れ、それを背に受けながら、妙に刀身が赤く黒光りする自分専用の包丁を

手にレーツェルは意気込んだ。

「ゆくぞ、包丁！今が駆け抜ける時！」

そして対決が始まると、レーツェルは作るべき料理の材料を集め、静かに着実に淡々と調理を進める。３０分と言う制限時間の中での彼の動きはすばやく丁寧に、かつ無駄のないものだった。

対して諸葛亮から修行を受けた４人はそれぞれ手分けして準備を進めた。まずセシリアが材料を出し、妙が調味料を用意し、ナタリアと瑞希が実際に仕込みや調理をする。

その時、レーツェルが皿を持って４人の前に出てきた。

「学生である君たちと対する日が来るとは、私も教師として鼻が高いよ。誰か私の料理を味見してくれないかね？何、ほんの気持ちだよ」

「あ、ありがとうございます。先生」

「ちょっと、瑞希！よそ見してる場合ですの！？」

手が空いた瑞希がレーツェルの料理を受け取り、爪楊枝でこれを食べた。

「す、すごくおいしいです！」

「いや、これでも私の料理道はまだ極まっていないのでな…では、期待しているよ」

そういってレーツェルは去っていった。その時、ナタリアの携帯

が鳴り出した。

「セシリア、取ってくださいまし！」

そういわれたセシリアがナタリアのポケットから携帯を取り出す。画面にはメールが表示されていた。差出人は諸葛亮からだった。４人は携帯に食いついた。

『送信：諸葛亮
件名：伝言
これから皆さんに残念なことをお伝えしなければなりません』

瑞希「どんな内容でしょう？」

『先程、私はレストラントロンベで食事を取って来ました。どの料理も至高に値する味でした。よって私の教えでは、レーツェル先生に勝つことは難しい…敗北は確実だと判断しました』

妙「ちょっとこれ、どういうことよあのロリコン！」

セシリア「でも先輩、これを見てください！」

『そこで、あなた方に必勝の策を授けます。しかしこの策は試作段階である故に、いかなる効果を発揮するかわかりません。その為活用するか否か、あなた方の判断にお任せいたします』

ナタリア「必勝の策ですって？」

『砂糖××g、塩××g、唐辛子××g、カレー粉××g、コショウ×××g、ブラックペッパー×××g、味噌×××g、マスタード×××

g、豆板醤××g、コチュジャン×××g、酢××ml、ラー油×××ml、しょうゆ×××ml、とんかつソース×××ml、めんつゆ×××ml、みりん×××ml、チリソース×××ml、割り下×××ml、ホワイトソース×××ml、料理酒×××ml、マヨネーズ適量、ケチャップ適量…』

「こんなに入れるのね。貸してナタリア！」

妙が携帯を貸すと、そのメールの通りに調味料を調合し始めた。そして妙が味見をする。

「うん、いいかんじね！」

「本当ですか？ではこの味噌汁の鍋の中に入れてくださいまし！」

ナタリアが作っている味噌汁の中に、妙が作った「必勝の策」をトッピングした。

こうして、制限時間３０分を向かえ、料理タイムは終了した。ナタリアたちとレーツェルは自分の料理を持って審査員のほうに持って行った。

『これより、試食タイムに入ります！まずはレーツェル選手から！』

「番組とはいえ、遠慮せずに気軽に食べてほしい」

レーツェルの作ったオムライスは、見た目は平凡だが味に工夫されており、匂いを嗅いだだけでおいしく感じられた。

「うん、うまいなこれは」
「さすがはレーツェル先生ですね」
『次は挑戦者です！』
彼女等の作った味噌汁もレーツェルに負けず劣らずであった。
「挑戦者のほうもなかなかおいしいですよ」
「これはどちらに軍配上げるか迷うな」
『これより、審査を始めます！おいしいと思ったほうの札を上げてください！』
司会者の号令に合わせ、審査員たちが札を上げた。その結果は…！
ナタリアたちの味噌汁だった！
「なんと！是非私も食べさせてくれ！」
驚愕したレーツェルはナタリアたちの作った味噌汁を味見した。
「こ、これはうまい…！」
いつの間にかレーツェルの頭に黄色い輪が現れ、背中に翼が生え

ていた。

「まさしく天に昇る味…私の料理など豚の餌に等しい…！」

セシリア「やりましたわ！」

瑞希「レーツェル先生に勝てるなんて夢みたいです！」

ナタリア「諸葛亮先生に感謝いたましょう！レーツェル先生、今日はどうもありがとうございますわ！」

ナタリアたちが歓声を上げた。そしてナタリアがレーツェルに握手しようとした。

するとその時…？

「ウマイ…本当ニウマイ…天国ニイルヨウダ…」

…そこには、不気味なうめき声を上げながら味噌汁をしゃぶるレーツェルたちの姿があった…

「止マラン…止マランノ〜」

「私ニモ食ワセロォォォォ」

「モウコレナシジャ、生キテイケナイ…グヒヒヒ」

「ア〜〜〜〜〜〜！極楽極楽ゥゥゥゥゥ！」

中毒的なレーツェルたちの様子を見たナタリアたちの顔が一気に青ざめた…

「なんか、様子が変ですわね…？」

「と言うことは妙先輩も…？」

瑞希が妙のほうに振り向くと…

「私ニモクレェ！サモネェトブッ殺スゾ！」

ナタリア・瑞希・セシリア「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

妙までもが変貌してしまったのだ！

そして味噌汁が尽きたとき、化け物となったレーツェルが話しかけてきた。

「モット、モットナイノカ…？」

「そんなこと言われましても、ないものはありませんわよ！？」

「モッタイブッテンジャネェェェェェ！！」

ナタリア・瑞希・セシリア「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

凶暴化した妙とレーツェルが襲いかかってきた！あわててナタリア、瑞希、セシリアの3人もスタジオから逃走しはじめた！

暴徒に追われるなか、ナタリアが携帯で諸葛亮に電話を入れた！

「もしもし、諸葛亮先生！どういうことですのこれは！？レーツェル先生と妙先輩がおかしくなりましたわよ！？」

『そうですか』

「あの『必勝の策』とは何ですの、諸葛亮先生！？」

諸葛亮は、信じられない言葉を言い放った…

『麻薬です』

「あぁ、なるほど。これで納得できましたわ……ではありませんわっ！！」

ナタリアは諸葛亮の発言に激昂した！

レーツェル・妙「ヨコセェェェ

これに合わせてレストラントロンベも閉店、レーツェルの著書も絶版となった。前代未聞のこの事態に、レーツェルは2週間の謹慎処分を受けた。

本当に美味しい料理は食べた者の人生まで変える。

「仮面ライダーカブト」より、天道総司

美・食・厨・房（後書き）

キャストの皆さま
『テイルズオブジアビス』
ナタリア・L・K・ランバルディア、ティア・グランツ
『銀魂』
志村妙、神楽
『バカとテストと召喚獣』
姫路瑞希
『インフィニット・ストラトス』
セシリア・オルコット
『スーパーロボット大戦　オリジナルジェネレーション』
レーツェル・ファインシュメッカー
『真・恋姫無双』
朱里、雛里
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
伊達政宗、真田幸村
『Ｆａｔｅ』
セイバー
『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』
モンキー・Ｄ・ルフィ、ナミ、サンジ
『テイルズオブシンフォニア』
ジーニアス・セイジ

本日の黒幕
『真・三国無双シリーズ』
諸葛亮

諸葛亮：ビーム扇子に孔明の罠に「はわわ」にリ・ガズィ…

これもすべて計算通りです…

怪・獣・戦・争（前書き）

アリア：バカキンジ、どこへ行ったかしら…ったく！

理子：何言ってんのよ、キー君は理子のものなの！

白雪：キンちゃんに近寄ったら私が許さない……

レキ：……

…この後…作者から重大なお知らせがあります…

…くわしくはあとがきで…

怪・獣・戦・争

「なんだこれはぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

学食で食事を取っていた銀時が叫びだした！新八、神楽、ハヤテ、ナギ、明久、赤毛ポニーテールの島田美波（しまだみなみ）が銀時のほうを向いた。

ハヤテ「どうしたんですか坂田先生、そんなに大声張り上げて」

美波「そうですよ坂田先生。生徒の前でみっともないです」

「どーしたもこーしたもあるもんか！これを見ろ！」

銀時が食べていた重箱を6人に見せた。6人が近寄ると、その重箱には大きな海老天が載っている。

明久「なんだ、ただの海老天丼じゃないですか」

神楽「たかが天丼なんかで大声上げるバカがいるアルか」

「バカだな、よく見ろ。これが海老天に見えるか？」

6人は海老天丼に顔を寄せてみる。やはり大きな海老天が載っている。

ナギ「…何言ってんだ？立派な海老天じゃないか」

銀時がナギの疑問に答えるように海老天を箸で取ると、なんとエ

ビからポロリと衣が落ちた。そして肝心のエビはと言うと……その衣が余るほどに小さかったのである。詐欺ともいえる事実に目を丸くする６人。

「見ろよ、これじゃ海老天丼じゃなくて天ぷらの衣丼だよ！小せぇにも程があるぜ！全く、６００円も払って損したよ」

そういって銀時は不機嫌な顔でエビを食べた。そこで美波がとんでもない事を言い出した。

「じゃあアキが食ったんでしょ！？」

「へ！？ちょっ、待って美波！何で僕に八つ当たりするの！？ギャアア！！」

何の因果か、美波が明久に逆エビ固めで極めた！…エビだけに。

新八＆明久「ダジャレかよぉぉぉぉぉぉ！笑えねぇぇぇぇぇぇ！」

新八と明久がダブルで突っ込んだ！

その日の夜…

タン、タン！　タタタタッ！

通学路付近にて銃声が響く。そこには、風紀委員がいた。

「ち！どうしてあんなのが相手なわけ！？」

「あたしだって知らないわよ！バカキンジ、これはどういうこと！？」

「俺に聞かれても困る！つーか俺に振るな！」

「私語は慎め。任務に集中しなければ、死ぬぞ」

風紀委員は何者かと交戦していた。道路に即席に立てられたバリケードでゆり、アリア、キンジ、宗介らが銃撃戦を展開。その先には、異形の怪物がいた。

…いや、怪物といってもあまりそう感じられない。

ゆりたちが交戦していたのは…なんと人間サイズのエビ、カニ、イカなのだ…！

キンジがカスタムハンドガンで敵を射殺するなか、ゆりがショットガンを発砲し、アリアが二丁拳銃で怪物どもを迎撃しながら言い合っていた。

「どうしてこいつらでかいのよ！？何か知ってる？武偵でしょ！」

「知るわけないってば！とにかく、奴等の土手っ腹に風穴開けるわ

よ！」

二人を諌めるように無線から固法美偉（このり　みい）の通信が入る。

『二人とも、そこまでにして。第2派が来るわよ』

「そう言うことだ、見ろ」

サブマシンガンで弾幕を張っていた宗介がそう言うと、さらに人間サイズのエビ、カニ、イカの大群が攻めてきた！そして宗介が手榴弾を投げつけると、攻めてきた怪物の4分の1を爆風と破片で焼き払った！

そして接近戦のため背後に待機していたユーリ、フレン、ルーク、白雪、理子、奏の6人が敵の前に躍り出た！

ユーリ「峻円華斬（シュンエンカザン）！」

フレン「魔皇刃（マコウジン）！」

ルーク「斬影烈昴刺（ザンエイレッコウシ）！」

白雪「はあぁぁっ！」

理子「ひょいっと！」

奏「…ガードスキル、ハンドソニック」

6人はそれぞれ持った剣や刀、ナイフ、カッターを振るい、エビ、カニ、イカの軍勢をバッサリと斬り捨てていく！

「ちっ、切りがねえな！あと何匹出て来るんだ？」

「それがわかったら苦労しないよ！」

ユーリが毒づきながらも転ばせたエビにとどめを刺し、フレンも負けじとカニを討ち取る。

「でも、必ず終わりが見えてくるはずです…」

奏がユーリとフレンに合わせ、両腕のカッターでイカをズタズタに切り裂いた。

5分後、大型生物をあらかた殲滅させた。あちこちに生物の死骸が横たわるなか、白雪が皆を心配し、状況を確認する。

「ふう…終わったね。キンちゃん大丈夫？」

「ああ、こっちは大丈夫だぜ…」

「むー、白雪の奴～。キー君は理子のものなのに～」

白雪のキンジに対する態度に、理子が膨れっ面をしていたその時、建物の中から大きなイカが出現した！

「なんだあのでかさは、半端ねえ！」

ルークが歯をかみ締める。そのイカの大きさは、先程の奴等よりも軽く超えていた…！

「いったん離脱する！ついて来て！」

ゆりたちが戦線を離脱する。その途中、エメラルドグリーンの髪にヘッドホンをかけた、無口・無感情・無表情のロボットのような少女が旧ソ連製のスナイパーライフルを手に、道路で体育座りしていた。

「頼むわよ、レキ！」

「…はい」

ゆりにレキと呼ばれた少女はこくりと頷き、狙撃態勢に入る。

（……私は一発の銃弾…銃弾は人の心を持たない。故に何も考えない。ただ目標に向かって飛ぶだけ…）

レキがライフルを構え、巨大イカの頭に照準を合わせ……撃った。

パァン！

ライフル弾が巨大イカの頭部を貫通、巨大イカは頭から体液を噴出し絶命した。

ユーリ「今度こそ終わったみたいだな…」

フレン「しかし、どうしてエビとかが出て来るのだろう？しかもでかくなって」

固法『…とにかく帰還しましょう。詳細はこちらのほうで調べます』

固法の指示に従い、風紀委員の戦闘部隊は現場を後にした。

…それにしても、彼らは一体何の目的でここまできたのだろうか？

翌日。

『ここ数日、港で漁獲されたものよりもはるかに巨大なエビ、カニ、イカの目撃情報が出ております。そのサイズは人間くらいのものからゾウに匹敵するほどまであると言う報告があります。判明した情報によると某バイオテクノロジー研究所において、来るべき食糧危機に備え、イセエビ、ズワイガニ、ヤリイカを実験体として飼育していたものだとされ、これらが脱走したのではないかと思われます』

職員室でテレビのワイドショーを見ていた、太い眉毛に角刈りの西村宗一（にしむらそういち）（通称・鉄人）、小十郎、さわ子、小萌、リフィルは苦々しい気持ちになっていた。

「人類の未来のために研究するのはよい心がけですが…いささか夢を持ちすぎではありませんかね？」

鉄人はこの一件において懐疑的だ。

「…遺伝子組み換えなんじゃないでしょうか？」

「でもニュースを見る限りそうでもないみたいですよ。数十年位前

からコツコツ品種改良して開発したものらしいです」

「でも食べたいなぁ。しかし謹慎もらってるレーツェル先生のことを思い出すなぁ」

「そうですよね。あの人がこのニュースを知ったらどんな顔するんでしょうね」

さわ子が心配するが、小萌は否定する。その後レーツェルについて談笑に入った。

「だがどうも納得いかねえな……セイジ、お前はどう思う？」

小十郎がリフィルに聞くと、

「ほう、巨大生物か…解剖してみたくなってきたぁ～」

（やっぱりこの人危ねぇぇぇぇぇぇぇ）

リフィルの態度に若干引く教師陣だった。

風紀委員の会議室では先日交戦した巨大バイオ生物（上記のニュースで知った）について会議していた。ある件により停学処分を食

らっている近藤に代わり、眼鏡をかけた固法とティアが説明していた。

ティア「先日、アリアやゆりたちが戦ったエビ、カニ、イカは某バイオテクノロジー研究所から脱走した実験生物と判明しました。ですが、これで終わりではないでしょう」

固法「数々の目撃情報が入っています。…とにかく、現状は彼らの様子を伺い、その目的がわかり次第殲滅するほかありません」

「ちょっと気になることがあるんだけどよ」

ルークが口を割ってきた。

「二人とも、いい胸(メロン)してるね」

……。

「ルーク！そこで反省してなさい！」

「うわぁ！」

セクハラ発言したルークはティアに掴まれ窓の外に投げ飛ばされてしまった！真っ赤になったティアが咳き込みしながら皆に呼びかける。

「……コホン。とにかく、放置しておくと学園の危機を晒しかねません。よって警戒強化を推進します」

「じゃあ土方を奴等の餌にしてもいいんですね？」

「おい総悟、なんつった？」

こうして風紀委員の会議は終了した。

とある映画館。

海から甲殻類のような怪獣が出てきて港町で暴れだす３Ｄ映画が上映されていた。３Ｄ眼鏡で映画を見ている観客は次のような会話をしていた。

「うぉ～、やっぱり●宝の特撮はすごいなぁ～。最高だ！」

「古いよそれ、今は３Ｄの時代だろ？その魅力がわかってねえ」

「そうそう、画面から本当に飛び出しそうなド迫力ってヤツが…」

その時、不思議なことが起こった。

なんとスクリーンを突き破り巨大なエビ、カニ、イカが本当に画面から出てきてしまったのだ！１０メートルにも及ぶ巨大バイオ生物は、映画館を縦横無尽に暴れまわっては、次々と観客に襲い掛かった！

暴虐の限りを尽くした巨大生物は、映画館から脱走した。

校庭の隅っこで仮面ライダー部の活動が行われていた。

ここには新八、神楽、ハヤテ、ナギ、唯、澪、律、紬、梓、明久、雄二、瑞希、美波、秀吉、ムッツリーニ、翔子、夜空、星奈が集まっていた。弦太朗が周りを見ないで平然とフォーゼに変身するものだから、そんなフォーゼを一目見ようと、興味を持ったのだった。

賢吾は４つのスイッチをフォーゼに渡した。

「今回のスイッチは『Ｎｏ１２．ビート』、『Ｎｏ１３．チェーンアレイ』、『Ｎｏ１４．スモーク』『Ｎｏ１５．スパイク』だ。実際に使い、試してくれ」

そう言われたフォーゼはまずビートスイッチを換装し、そのスイッチをＯＮ。右足にスピーカーが装備された。すると…

キィィィィィン！！

雄二「ギャァー！耳がぁー！」

翔子「……うるさい」

強力な超音波を発し、フォーゼ除く２０人は耳をふさぎ、その場にうずくまった。梓が怒鳴る。

「うるさいですよ弦太朗先輩！」

「あ…ごめん。刺激強すぎたかな？」

次にチェーンアレイスイッチと交換し、そのスイッチをＯＮにした。すると右腕から鎖鉄球が装備された！

紬「わあ、トゲトゲボールだぁ♪」

「おお！これはすげえ！ようし、いっちょ行くか！」

チェーンアレイを振り回し、的用の木箱を粉砕した！だが鉄球は思ったよりもリーチは長く、周りにも被害が及びかけた！

律「うわ！」

星奈「きゃあ！」

鉄球を食らったらただではすまないとみんな思っていたのであわててフォーゼから離れようとする！

やがて鉄球はフォーゼの股間に直撃！

「べう！！」

その場でうずくまった…

危うく巻き添えになりかけた、中性的な外見を持つ木下秀吉（きのしたひでよし）が怒鳴った。

「馬鹿者！わしらまで粉々にしてどうするつもりじゃ！？」

「すまねぇ。『お嬢ちゃん』まで巻き込むわけにはいかねえつもりだったんだが…」

「げ、弦太朗！おぬしまでわしを女扱いする気か！？」

そのルックスからフォーゼに女と間違えられる秀吉。そこで明久がフォローに入る。

「秀吉の性別は『女』じゃなくて、『秀吉』なんだよ」

「なんじゃそれは！わしは男じゃといっておろう！」

フォーゼがチェーンアレイをＯＦＦにし、今度はスパイクに換装。左足に無数のトゲがついたユニットが装備された。トゲが展開され、シャドーの要領で左回し蹴りを決めようとしたが…？

ズドォン！！

唯「うわわ！」

澪「ひゃぁ！？」

トゲが地面にめり込んだ！ビビって後方に転ぶ２０人。ナギが立ち上がって怒鳴った。

「おい弦太朗！私たちを串刺しにする気か！？」

「ハハッ、悪い悪い！」

最後はスモークスイッチと交換した。

「……スモーク……？イヤらしそうな響きだ…」

ムッツリーニの言う事は無視してスモークをＯＮにする。右足に何かの装置が装備されたが…

ぷしゅーーーーーーーーーーー

右足の装置から煙幕を発射し、やがてそれはみんなを巻き込んだ！

ハヤテ「うえ、ごほごほ！」

美波「煙たーい！」

神楽「なんか臭いネ！」

「お！？ぅぉー！なんかでた！おい賢吾、何とかしろ！」

パニックになったフォーゼは専用カバンを抱えて逃げ回る賢吾を追いかけた！だがモクモク漂う煙のなかにいるうえに、自分を除き２０人が逃げ回っているので大混乱に陥った！

煙が収まったあと、変身を解いた弦太朗が感想を述べた。

「…みんな暴れ馬でした…」

かくして、４つのスイッチの実験の成果は上がらなかった。瑞希と夜空が声をかける。

「でも、音波や煙のほうは敵のかく乱には有効かもしれないですね」

「まぁ、お前の使い方次第でなんとかなるかも知れんがな」

その時。

ドドーン！

「遠くから物音がしたよ！行ってみよう！」

ユウキがそう言うと、弦太朗たちはすぐに音のした方向に向かった。

街中に、なんと１０メートルほどの巨大バイオ生物が出現した！
エビはその尾を振るって放置されたままの自動車を粉砕し、カニは体に比例して巨大化したハサミで歩行に邪魔な標識や樹木を両断し、イカはしなやかで強靭な腕で町の人々を捕獲し、暴れまわっていた！
警察が銃で応戦しているが、効果は今ひとつだ。
この事態に仮面ライダー部が駆けつけてきた！
「なにあれ！？でっかいエビとカニとイカが暴れてるわよ！」
「知らぬのか？今朝のニュースでやっていた巨大バイオ生物じゃろう！？」
星奈が驚愕し、秀吉が生物について説明する。彼らを見た澪の反応は…
「あ…あ……エビ…カニ…イカ……」
「大変だ！秋山が気絶したぞ！」
雄二が呼びかけ、仲間たちが失神した澪を安全な場所に避難させた。
その横では、風紀委員が応戦していた。
ティア「ホーリーランス！」

フレン「ディバインストリーク！」
なのは「ディバイン…バスター！」
美琴「ビリビリ…行くわよっ！」

風紀委員がバリケード越しから銃火器や魔術や超能力で巨大バイオ生物を攻撃する！しかしさすがはバイオ生物というだけか、思ったよりもなかなかダメージを与えられない。そんな時…

「あ、ハヤテ！」

ハヤテがマシンガンを持って風紀委員のところに行った。ナギが呼び止めようとするが…

「大丈夫ですお嬢様。僕の使命は、お嬢様を守ることですから」

「ハヤテ…」

ハヤテはナギに約束した後、風紀委員に参戦した。

すると近くの「万事屋銀ちゃん」の入り口から銀時と神楽のペット・定春（さだはる）が出てきた。ここは銀時らの住宅で「スナックお登勢」のオーナーから2階を借りて新八、神楽、定春と一緒に住んでいるのだ。

「おい騒がしいぞ！ケンカなら別のところでやれよ！うるさくてジャンプ読めや……な！」

銀時が見たものとは、風紀委員と交戦している巨大バイオ生物だった！

「な、な、な、なんじゃこりゃぁぁぁーーーーー！！」

銀時が仰天して腰を抜かした！弦太朗の近くにいる新八と神楽が叫んだ。

「何って、ニュース見てなかったんですか！？」

「全く、ジャンプばかり読んでるから銀ちゃんダメになるアル」

「テメーらぁぁぁ！教師に向かってなんだその口の利き方はぁぁぁぁ！」

銀時は教師として二人を怒鳴った。何度も言うが彼は教師である。

「くっそー！黙って見てりゃやりたい放題しやがって！」

「おい如月！」

「弦ちゃん危ないって！」

弦太朗は賢吾とユウキの制止を振り切り、バイオ生物に向かって突っ走った！そしてジャンプしようとしたが…

なんと弦太朗に近づかれたカニからアッパーカットを食らった！そしてカニにあわせるようにイカが飛んできた弦太朗を腕で弾き飛

ばし、そしてエビが尾で弦太朗を叩き飛ばした！

「ぐえ！」

巨大バイオ生物の連携によって道路に叩き付けられてしまう！

「くそぅ、やるしかねえか！」

立ち上がった弦太朗はよれよれになりながらも、フォーゼドライバーを構え、腰につけた！

……3……

……2……

……1……

――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

フォーゼは暴れまわっている巨大バイオ生物に対し、宣戦布告した！

「仮面ライダーフォーゼ、タイマン張らせてもらうぜ！」

フォーゼはビートスイッチをＯＮにした。すると強烈な超音波がバイオ生物をひるませた！その次にスモークスイッチをＯＮにして、煙幕を張り、バイオ生物に直接攻撃することで更なる混乱を招かせる！

「なるほど、こういうことか！サンキュー、瑞希に夜空！」

フォーゼは助言を与えた二人に感謝した。

その隙にチェーンアレイスイッチをＯＮ、ひるんでいるうちに鉄球でエビ、カニの甲羅を砕いた！今度はスパイクスイッチをＯＮ、イカの体に回し蹴りを何度も叩き込む！「ドスッ！ドスッ！」と蹴られるたび、イカの体には無数の穴の傷が開き、エビ、カニの甲羅にヒビが割れていた。

そしてロケットとチェーンソースイッチに換装しオンにすると、右腕のロケットと背部のブースターを噴射させ、イカに向かって突進した。イカが向かってくるフォーゼを迎撃しようと腕を振り回すが、フォーゼがサマーソルトキックの要領で体を回転させ…

「食らえ！ライダーロケットチェーンソースラッシュ！」

イカの腕をチェーンソーで切断した！

切断されたイカの巨大な腕は上空に飛ばされ…なんと万事屋の建物に落ち、スナックお登勢共々イカの腕に押し潰された！

「どうだ！」

「どうだじゃねえだろォォォォォ！どうしてくれんだコノヤロー！」

外へ出ていた銀時が主犯・フォーゼを怒鳴りつけた。そこにスナックお登勢のママであり、万事屋の大家であるお登勢がやってきた。お登勢が銀時を怒鳴る。

「おい死んだ目の天然パーマ！何うちの店を潰してくれるんだい！？」

「お、俺じゃねーよ！そこの白いイカ頭が……あれ、いねえ！」
銀時がフォーゼを指差そうとしたが、そこにはフォーゼがおらず、巨大なイカが暴れているのみだった。
「まんまイカじゃねえかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「あべし！」
お登勢から飛び蹴りをもらい、イカに吹っ飛ばされた！イカはそんな銀時を腕で弾き飛ばした！
「ひでぶ！」
イカの攻撃により、遠くへ吹っ飛ばされた銀時。その時、元親とウソップがやってきた。
「よう先生、こんなとこで寝てると風邪引くぜ？」
「…オメーら工学部の元親とウソップじゃねえか。どうしてこんなところに」
「話は聞いたぜ？天丼の具が小さくて困ってたようじゃねえか。だったらこれを使え！」
元親がそう言うとウソップが懐中電灯を持ってきた。
「デデーン！この懐中電灯は体をでかくする事が出来るんだぜ！」

「思いっきりビッグライトじゃねえかぁぁぁぁ！ていうか何でそのこと知ってんだよぉぉぉぉ！」

銀時は叫んだ。

「よし、巨大化だ！」

銀時の話を聞かずウソップは懐中電灯を銀時に照らした！すると…？

デン！！

「な…なんじゃこりゃーーーーーー！！」

なんと銀時が５０メートルほどの大きさに巨大化したのだ！しかも体型まで変化しており、頭だけ妙にデフォルメしている。一言で言うなら…もともと長身だった銀時が、マ●オのような頭がでかく小太りの体型をしていた。

「これで奴等と戦えるぜ！いや、顔がちょっと大きいし手足も少しばかり短いか…まあ頑張れ！」

「何やってくれてんだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

巨大化した上に体型まで変わった銀時は元親とウソップに文句を

言った。

一方フォーゼも巨大バイオ生物相手に悪戦苦闘していた！

「ちくしょー、オレの攻撃も通用しないぜ！どうすりゃいいんだ…ん？」

打開策を考えている途中、フォーゼは辺りを見回してみた。そして彼が目にしたのは…

巨大な天ぷら鍋が乗っかったデパートのビルだった。

「ウルトラクッキング大作戦？」

この作戦を発案したフォーゼに呼びつけられた賢吾、ユウキ、友人たち、風紀委員は声を合わせてこう言った。魔術が必要であるため、スタン、ジーニアス、ジェイド、ミラをはじめ、小柄でゴーグルをかけた１－Ｂのリタ、品のある物腰の老人にして１－Ｂの担任であるローエンもこの作戦に集まっていた。

「そうだ。いいか、計画はこうだ」

フォーゼは作戦の内容を皆に説明する。ローエンは納得したかの

ように感嘆の声を上げる。

「…ほう、なかなか面白い作戦ですな。怪物退治にご飯も食べられてまさしく一石二鳥です」

一方、リタはフォーゼに対して不満を募らせていた。

「そんなんで大丈夫？いくらあんたが作戦の要とはいえ、あんたが一番危ないのよ」

「大丈夫に決まってる！オレが絶対に成功させる！」

かくして、ウルトラクッキング大作戦は実行された。

デパートから取り外された巨大な鍋には、タンクローリー数台分のサラダ油が注がれた。鍋の隣には、斜面が建てられている。

「油の準備、完了でさぁ。ついでに土方の調理も準備完了ですぜ」

沖田の報告にローエンが頷くと、点火部隊に号令をかけた。

「わかりました…では、点火！」

スタン「熱破旋風陣（ネッパセンプウジン）！！」

ジーニアス「エクスプロード！」

ジェイド「フレアトーネード！」

ミラ「レイジングサン！」

巨大鍋に注いだ油を、スタンの炎を纏った奥義で着火し、そして炎の魔術で熱した！４人による灼熱の炎が、鍋に熱きハーモニーを奏し、瞬く間に間に鍋の中の油の温度が上がった！

「ギャアアアア！沖田、後で覚えていろぉぉぉ！」

縄で縛られた誰かさんが熱した鍋の中で叫んでいるが、気にしないことにする。

斜面の高台にはマッシグラーにまたがるフォーゼがいた。背中にはバイオ生物の餌がくっついた棒を背負っている。

「火の準備はＯＫだ、言って来い如月！」

「頑張ってね、弦ちゃん！」

賢吾とユウキに言われ、「おう」と返事したフォーゼがマッシグラーを駆りだし、戦場へ向かった！

現在、巨大エビ、カニ、イカが通学路を破壊しながら進んでいた。

「ほれほれぇ、お前ら食事の時間だぜ！」

フォーゼが背中の餌を3体に見せ付け挑発すると、マッシグラー

を走らせた！そんなフォーゼを追いかけ始める巨大バイオ生物たち。フォーゼの役目は、作戦を成功させるための陽動だった。
フォーゼの走る先には、マーキングがつけられていた。フォーゼがマーキングを通過し、バイオ生物がそこまで来ると、上空のヘリから大量の小麦粉をかけられた！これを合図とし、待機していたリタとローエンが水の魔術をかけた！

リタ、ローエン「タイダルウェイブ！！」

ドバァァァァ！

地面から渦巻きが発生し、小麦粉をかけられたバイオ生物は抵抗する。こうしている間にも、小麦粉は水で固められて生地となり、バイオ生物にくっついていく。

「暴れろ暴れろ！暴れれば生地が絡みつくぜ！」

やがて全身生地だらけとなったバイオ生物は再度フォーゼを追いかけ始めた！だがそんなフォーゼの思惑も知らず、バイオ生物はフォーゼにおびき寄せられていく。

そしてフォーゼは終着点の巨大鍋に到着！高台に乗って鍋を飛び越えた！！

「おっしゃぁぁぁぁーーー！！！」

バイオ生物も高台を登ってフォーゼを追うが、ついには鍋の上に転落！生きたまま残酷に揚げられ、やがてバイオ生物はこんがりキ

ツネ色の巨大な天ぷらとなった！
学園の危機は、今消え去ったのだ……！

バイオ生物天ぷらは今巨大な重箱の上に載せられ、「バイオ天丼」として弦太朗、賢吾、ユウキ、友人たち、風紀委員、ジーニアスたち魔術士チーム、工学部、そして黒楼州学園の生徒たちの晩御飯となった。

ジーニアス「わぁ、すっご～い！」

神楽「まさしく世紀の大晩餐アルね」

唯「いただきまーす♪」

翔子「（もぐもぐ）……美味しい」

美琴「こんな美味しい天丼は初めてね」

ハヤテ「身もぎっしり詰まってますから食べ甲斐がありますよ」

レキ「…たまには、こういう食事も…」

元親「ハッハッハ！うまい上にでかい！最高だぜ！」

…そんな彼らを羨望と嫉妬の目で見ていた男がいた。

……５０メートルに巨大化し、体型も変わった坂田銀時である。

「いいなぁ～俺も食いてぇな…。おーい、このままだと満足に食えねえから元に戻してくれよー」

銀時が満足そうに天丼を食べるウソップに話しかける。だがウソップの口から信じられない一言が…

「すんません先生。縮小のほうは作ってないんでもとに戻らないっス」

「……ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

銀時が暴れ始めたので元親がなのはに「おい」と声をかける。なのはが彼の意図をわかったようで頷くと……

「先生、少し頭冷やしましょうか…？」

なのはがレイジングハートを構えると、それを銀時に向けた…

「え？何の冗談…？おいまさか、やめ」

「スターライト……ブレイカァーーーーー！！」

「ギャァァァァァァ！！」

レイジングハートから大規模なビームを放ち、銀時は灰燼（演出上）に帰した……

こうしてまたひとつ、学園に平和が戻ったのだ。

怪・獣・戦・争（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『ハヤテのごとく！』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ

『けいおん！』

平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬、中野梓、山中さわ子

『バカとテストと召喚獣』

吉井明久、坂本雄二、姫路瑞希、島田美波、

木下秀吉、ムッツリーニ、霧島翔子、鉄人

『僕は友達が少ない』

三日月夜空、柏崎星奈

『銀魂』

坂田銀時、志村新八、神楽、定春、土方十四郎、沖田総悟、お登勢

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

仲村ゆり、立華奏

『緋弾のアリア』

神埼・Ｈ・アリア、遠山キンジ、峰理子、星伽白雪、レキ

『とあるシリーズ』

御坂美琴、固法美偉、月詠小萌

『テイルズオブデスティニー』

スタン・エルロン

『テイルズオブシンフォニア』

ジーニアス・セイジ、リフィル・セイジ

『テイルズオブジアビス』

ルーク・フォン・ファブレ、ティア・グランツ、ジェイド・カーティス

『テイルズオブヴェスペリア』
ユーリ・ローウェル、フレン・シーフォ、リタ・モルディオ
『テイルズオブエクシリア』
ミラ＝マクスウェル、ローエン・Ｊ・イルベルト
『魔法少女リリカルなのは』
高町なのは
『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』
ウソップ
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
長宗我部元親、片倉小十郎

作者：お待たせいたしました。
次回からは長編に入ろうと思います！
それに先駆け、長編の主役であるあの人からメッセージが届いています！

長編の主役：通りすがりの●●●●だ！覚えておけ！

四・十・周・年（前書き）

学園の超新星、フォーゼ。

数々の友を巡り、その瞳は何を見る？

【この長編のオープニングはＧａｃｋｔの「Ｊｏｕｒｎｅｙ ｔｈｒｏｕｇｈ ｔｈｅ Ｄｅｃａｄｅ」でお願いします】

四・十・周・年

朝の登校時間、弦太朗とユウキがアホの子のように雄たけびを上げながら通学路を疾走した！

弦太朗「青しゅうううううん！！」

ユウキ「フルスロットルゥゥゥゥゥゥゥ！！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！

「「うお～～～～～～～～～～～～～～～！！」」

どうやら二人はどちらが先に校門にたどり着けるか競争しているようだ。ゆっくり歩いて通学している生徒という障害物をかき分け、目の前の校門にたどり着く！

さぁ、1位はどっちだ！？

「うおやったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ゴオオオオオオオルっっっ！！

勝者はユウキだぁぁぁーーーーーーーーーー！！

「…朝から徒競走する意味がわからん」

先ほどの競争でばててている弦太朗とユウキに、遅れて学校に来た賢吾が呆れた。

「とりあえず一日の始まりが違うんだよ！」

「ざっと二割ほどパワーが増して学園生活を送れるんだぜ！」

ユウキと弦太朗がこう言う。

「絶叫全力疾走は青春のたしなみだ！」

弦太朗が大声を上げてガッツポーズした。それを聞いて賢吾はため息をついた。

「…無駄にカロリーを消費する事しか能がないのか？」

放課後の音楽室。

唯達と親しい弦太朗は、岩沢に呼びつけられ音楽室に来ていた。音楽室には、放課後ティータイムとガルデモがいた。

「んで、わざわざオレを呼んだって事は何かあるってことだろ。岩沢」

「ああ、そうだ。これを見てほしいんだ」

岩沢が取り出したのは一枚のチラシだった。

「古等簿（こらぼ）市ライブコンサート？」

チラシに書かれていた文字を弦太朗が読み上げる。さらにそのチラシを見ると…？

「参加制限はなし、優勝者には賞金３０万円差し上げます…これに出るのか？」

「うん、そうだよー」

唯が自慢げに言う。

「しかし、どうしてこの大会に出ようと思ったんだ？」

弦太朗が放課後ティータイムとガルデモの面々に聞いた。すると岩沢が口を開いた…

「…私は親のケンカの絶えない家庭で暮らしてて、自身の殻に閉じこもっていたんだ。だけど、あるミュージシャンの歌が耳に響いてな…その時に音楽と出会った。その後家出して、雨のゴミ捨て場で拾ったギターを手に歌い始めた。するとなんだか心が熱くなってくるような感じがしてね。それ以来、私は音楽と歌が好きになった。

音楽を聴いたり、歌を歌っているときの私は、まるで別世界に入っているみたいになって、心の中が燃えるように感じるんだ。だから黒楼州学園に入学したときは軽音楽部に入ったんだが…当時は廃部寸前だった。唯、澪、律、ムギもここに来たのだけど、それでも廃部の方向は変わらなかった。

そんな時、生徒会長が軽音楽部の事を聞いたんだ。あの人は、音楽を生きがいとする私たちのためにいろいろ根回しをしてくれた。さわ子先生と一緒に部員の勧誘や楽器の購入をして、さらにアムロ先生と相談して部費を援助してくれた。おかげで、軽音部は廃部にならずに済んだんだ。

私達は、生徒会長に恩返ししたいんだ。だからこのコンサートで優勝して賞金をあの人に寄付する。伝えたい事は歌に乗せたい…それが私の生きがいだからな。そして私が卒業したら、音楽の世界で生きていきたいな…だから、君も応援に来てくれないか？」

…すると弦太朗は、岩沢の話に涙と鼻水をたらした。

「うおぉ～～～～、いい話じゃねえかぁ！生徒会長に会ってみてぇ！」

弦太朗は涙を流しながら岩沢の肩を掴んだ。

「絶対来るし、応援してるからな！頑張れよ！お前らなら優勝でき

る！」

「…ありがとう。でも鼻水つけようとするな」

岩沢が怪訝そうな顔をしたその隣、唯がギターを構えて弦太朗に言った。

「放課後ティータイムもギー太も応援してね！」

「ギー太？ああ、お前の相棒か」

弦太朗が唯のギターを指差す。

「1年生のとき、唯ちゃんたちと一緒にギター買いに行ったことがあるの。ある楽器屋で唯ちゃんが『あのギター欲しい』ってねだったの。そのギター、結構値が張ってたんだけど、その楽器屋がウチの会社の系列店でね…私のコネで店員さんを脅してタダでもらっちゃった♪それがギー太なの」

「へ、へぇ…そう言うことが…」

弦太朗は唯とギー太の過去を知った。いくら紬の家の傘下とはいえ、脅迫された店員がかわいそうと思うが…。

「ううう、涙が止まんねぇー」

流れる涙を拭きながら音楽室を出て、廊下を歩いていると…

「やあ、君が新しい仮面ライダーだね？」

突然、前方から見慣れない青年が現れた。青年は開いた窓に乗っかっており、その手にはこれまた見慣れない拳銃を持っていた。

「？…なんだお前？」

「いきなり無礼な奴だな。まずは自分から挨拶したまえ」

銃を持った青年がいきなりこんなことを言うので弦太朗は戸惑った。

「あ～、そりゃ悪かった！如月弦太朗、夢はこの学園の連中全員と友達になることだ！」

「へぇ、いい名前だ。それに型破りすぎる夢だ。僕は海東大樹（かいとうだいき）。以後、お見知りおきを」

海東と名乗った青年は口元を微笑ませると、弦太朗を呼びつけこう言った。

「お近づきの印として…少し時間がほしい」

「オレは今急いでんだ。後にしてくれ」

「悪い話じゃない。如月弦太朗、あれを見てくれ」

海東が強引に弦太朗を引き寄せ、校庭を指差すと、そこにはピンク髪の少女が白い生物に問い詰められているのが見えた。

「って、あいつまどかじゃねえか！それにあの白いのはオレがぶっ飛ばしたはずだ…」

するとその時、拳銃を持った黒髪の少女が生物を射殺した！その後まどかと黒髪は互いの無事を確認するかのように抱き合った。

「…なんだよ、あいつらならもうとっくに見たぜ」

「あれは魔法少女。暁美（あけみ）ほむらと言う少女に撃ち殺されたのがキュウべえというんだけど、彼女たちは、もともと『魔法少女まどか☆マギカ』の世界の住人だった…」

突然奇妙なことを言い出す海東。そして彼は語り始めた…

「そう、この学園に通うものは異世界や時空を超えて登校しているんだ」

「…は？」

「この学園には、普通という言葉が似合わない。なぜなら、ここには上条当麻や御坂美琴、モンキー・D・ルフィ、高町なのは、立華奏のような特別な力を持った人間たちがいる。伊達政宗や真田幸村、セイバーのように時空を超えてやってきたものもいる。そのほかに、傭兵や忍者だってこの学園に会しているんだ。だから僕や君のよう

な人間も受け入れる。君も見ただろう？超能力も魔術も。そう、この学園は様々な世界に住んでいた人間たちが一堂に会しているんだ」

わけがわからなくなってきたので弦太朗が聞き出す。

「えー…つまり、どういうことなんだ？」

「つまりこの作品はクロスオーバー作品、何でもありってわけ」

「まんまじゃねえかぁぁぁぁぁーーーーー！！」

メタ発言上等な海東の発言に大きく叫ぶ弦太朗だった！

「ハハハ、期待させて悪いね。あれを見たまえ」

海東の指差す方向には、見覚えのある男女が居た。

「あいつ寮長のルルーシュにC．C．だ…」

「そう言うこと。この二人は、『コードギアス　反逆のルルーシュ』の世界の住人だ。その主人公であるルルーシュ・ランペルージは『ギアス』という絶対遵守の力を持っている。人の目を見て命令し、それを実行させる能力がね」

「げ！すげえのもってんじゃん！」

「あと、C．C．は『魔女』。千年以上も生き、その体は衰えない」

「へえ、改めてみるとすげえもんな」

弦太朗は彼らに対して感心する。以前クローン、珍獣、エンジェロイドといった類とダチにした経験があったからだ。さらに海東は説明する。

「ここの参戦作品である仮面ライダーというのを知っているよね？」

「んー、４０年前から悪の組織と戦って世界を救ってきたって言う、あれか？」

弦太朗は黒猫の言葉を思い出していた。

「そうさ、仮面ライダーとは人知れず悪と戦う仮面の戦士。かつて、４０年前から様々な仮面ライダーがいた。敵に体を改造され戦う宿命を背負わされた者、兄弟同然の友との戦いを宿命づけられた者、願いを叶えるため殺し合いに身を投じねばならなかった者、誰かを

守る為に誰かを倒すという罪を背負った者、その滑舌の悪さから王子と祭り上げられた者、たとえ世界を敵にまわしても守るべきもののために戦った者、親子二代で宿命を負わされた者、街そして世界を泣かせないために戦った者、自分の欲する力のために戦った者…それが仮面ライダーとしての宿命だった」

そして海東はしばらく口を休め、そしてこう言った。

「それが初代からオーズまで見た僕の感想だよ」

「結局地上波やＤＶＤで見てただけじゃねえかぁぁぁぁぁーーーー！！」

メタ発言上等な海東の発言に大きく叫ぶ弦太朗だった！

ふと、海東がこんなことを聞き出した。

「……ところで、この学園の生徒会長に会ったかい？」

「え？いや、ないな」

その答えに何かを察したかのような表情を浮かべた海東はこう言った。

「じゃあ、教えてあげるよ。彼も、君と同じく『仮面ライダー』なんだ…」

海東からの意味深な言葉に妙に首をかしげる弦太朗。まさかこの学園にも仮面ライダーと名乗る男が自分以外にもいるのか？

そして海東は寄りかかっていた窓から降りると、「また会おうね」と言って去っていった。

しばらくの後、弦太朗は生徒会長について考えていた。

（生徒会長ねぇ…岩沢の恩人が仮面ライダーとは。こりゃ、会ってみる価値はありそうだぜ）

あれこれ考えているうちに……？

「あ！急いで仮面ライダー部に戻らねぇと大変なことに！！」

大慌てでラビットハッチに向かう弦太朗だった…

その日の午後６時過ぎ…

現在、秋山澪は、３人の男たちと遭遇していた。
男たちは今路地裏で澪の行く末を塞ぎ、背後にも男が囲んでいた。
澪にとって本来なら路地裏は通らないルートだったが、ある理由により使わざるを得ぬ状況だった。
軽音楽部の練習に取り組もうとしたのに、結局いつも通りのお茶会になってしまい気がつけば夕方になっていた。皆が帰路に着いてしばらく澪は部室に忘れ物をしたことを思い出し、急いで学校に戻る途中、近道で使えるという理由でこの道を辿ったのだ。
この結果が、今の状況である。

「よう姉ちゃん。僕たちと遊ぼうよ」

「こんな所で一人なんて危ないよ？俺のお家に来なぁい？」

背後の男が澪の腕を掴んだ！

「や、やめてください！」

澪は男の手を離そうとするが相当強く握られており、離すことが出来ない。

「は…離して……！」

「えー嫌だなー。僕としてはー、ここで『いいこと』したいと思うんだけどねー」

「あ。オレ、賛成」

澪の話を聞いてない男たちは、あることを思いついたようだ。背後の男が澪を羽交い絞めにすると、なんとほかの男二人が澪の制服のボタンを取り始めた…

下品な薄ら笑いを上げ、狂気染みた目で澪を見つめる男たち。

澪は心の中で強く念じ、涙を浮かばせながら目を強く閉じた。

……助けて！

「みっともねーな、オイ。娘一人に3人で囲むとはな」

……その時澪の前方から青年の声が聞こえた。

声の主は、茶髪の青年。ピンクのアクセントの入った黒いジャケットに身を包んでいる。首にはピンクの2眼レフのトイカメラを紐でぶら下げていた。

澪は目をゆっくりと見開き、青年のほうを向く。そしてその姿に見覚えがあるかのような表情を浮かべた。

「あ〜ん？なんだコラァ！」

男の一人が青年に問う。

「…そいつはうちの生徒だ。そいつを解放しろ、だったら見逃してやる」

「ふざけんじゃねえ！」

男たちはこれから澪に「いいこと」しようというのに、突然やってきた青年に横槍されたのが気に入らず、ガンを飛ばす。

「ぶっ殺すぞテメエ！！」

だが青年はニヤリと笑うとこんなことを言い出した。

「言っとくが、俺はケンカが強い……写真を撮るのは苦手だがな」

青年は懐から何かを取り出す。

「な…それは…！？」

それは「カード」であった。しかしカードとはいっても、一般的に市販されているトレーディングカードとは違う何かのようだが…？

「『これ』がわからないのか？もっとも、『使う』までもないし、お前らみたいな余所者に言っても無駄だと思うがな」

「こいつ…殺っちまえ！」

男の合図とともに二人の男が青年に襲い掛かってきた！だが青年はカードを懐にしまうと向かってくる男たちをことごとく返り討ちにした！場所が狭く、二人は壁に叩きつけられる。

「弱ぇな。全くこういう奴に限って雑魚だと相場が決まってる」

「動くな！」

「や、やめて！」

背後で澪を羽交い絞めにしていた男が澪にナイフを突きつける。

「挙句の果てに人質のうえ刃物頼りか。笑わせる！」

青年はカードを投げつけ、男の持ったナイフを弾き飛ばす！小さくジャンプすると「伏せろ！」と澪に言った！澪は言われたとおりにしゃがむと、青年の蹴りが男の顔面にヒット！男は鼻から血を噴出して倒れた…

「て、てめぇ、何もんだ…？」

青年が最初に仕留めた男の一人が彼に素性を問うた。その問いに青年はこう名乗る…

「通りすがりの『生徒会長』だ。覚えておけ」

澪は命の恩人に感謝する。

「あ、あの…ありがとうございます。なんとお礼を言ったらいいか…」

「気にすんな」

青年は手を振って礼は要らないというジェスチャーを取る。

「それより、あの大会に出場するんだろ？道草食わずにまっすぐ帰りな。ほら」

彼がそう言うと、澪にあるものを渡す。

「それはスコアノート！どうしてこれを…！」

「大事なものなんだろ？それにお前になんかあったら、あいつらに顔向けできないからな」

「あ、ありがとうございます！」

澪は青年に感謝し、その場を後にした。

その後…

「あいつは確か２－Ｂだったよな…？２－Ｂといえば、こないだの転校生のいるクラスか…」

青年はつぶやいた後、不敵に微笑んだ。

四・十・周・年（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『けいおん！』
平沢唯、秋山澪、琴吹紬
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
岩沢まさみ
『特別出演』
海東大樹

海東：ちなみに、この回の僕の長いセリフは特に深い意味がないよ。
ただし、●が主役なのは間違いないけどね。

●●：またこの世界を破壊する気か…！おのれ、●●●●●ーっ！

会・長・邂・逅（前書き）

宇宙。無限のコズミックエナジーを秘めた、神秘の世界。

彼女たちは、それぞれの楽器でその扉を開き、未来を作る。

Ｓｐａｃｅ　ｏｎ　ｙｏｕｒ　ｈａｎｄｓ！　その手で、宇宙を掴め！

弦太朗：なんかナレーションのくだりが違わね？

ユウキ：きっと気のせいだよ、弦ちゃん！

賢吾：無駄話は時間の無駄だ。

今回の話で生徒会長が出てくるぞ。まぁわかると思うがな。

会・長・邂・逅

前回、軽音楽部に呼び出された弦太朗。その理由は、かつて廃部寸前だった軽音部が、この学園の生徒会長の根回しによって存続が確定したため、ガルデモと放課後ティータイムがコンサートで優勝することで生徒会長に恩返しがしたいためだった。彼女らの一番の友人だから応援に来てほしいと言われ、その熱意に心打たれ涙した弦太朗は「頑張れ、優勝できる」と激励するのであった。

その後弦太朗は海東大樹と出会う。彼は「生徒会長は君と同じく仮面ライダーなんだ」と告げた後、どこかへ行ってしまうのだった。

弦太朗が海東と邂逅したその翌朝。

弦太朗は来たるコンサートのために練習している軽音部に入り浸っていた。紬が出してくれたおいしい紅茶と甘いお菓子を口にしながら、放課後ティータイムやガルデモの演奏に耳を傾けていた…

ちなみに、昨日仮面ライダー部の活動に遅れたため、賢吾とユウキにこっぴどく怒られた。事情を話したところ、二人は納得（やはり賢吾は怪訝そうだったが）したので今回は二人に許可をもらって音楽室に来ている。だから部活をサボっているわけではない！

まず、唯、澪、岩沢、ユイのボーカルが、弦太朗の耳にその歌詞の伝えたいことを残し、印象付ける。

そしてそれぞれのパートの楽器が、弦太朗の耳をさらに躍らせた。

梓、岩沢、ユイのギターが刻むリズム…

澪、関根が弾く、ずっしりと響くベース…

律、入江がたたき出すドラムやシンバルの音…

紬が器用に指を弾くキーボードの音の厚み…

唯、ひさ子のリードギターが奏でるメロディ…

彼女たちの奏でるパートは、やがてひとつの音楽となり、弦太朗の耳に……

「ぐがぁ〜」

寝てた。

寝てるのがあんまりなのでユイが演奏を止め…

「このアホンダラがぁぁぁぁ！岩沢さんの演奏ガン無視してアホ面で熟睡してんじゃねえよ！」

「ちにゃ！」

ユイは眠り呆けている弦太朗のきん●まを思いっきり蹴り上げた！男にとっての急所を蹴られ、両手できん●まを押さえ、痛みをこらえた！

「…弦太朗。いくらなんでも入り浸りすぎだぞ？歌を聴いてくれるのはありがたいがな」

「…ハイ、反省します」

岩沢にも注意され、きん●まを押さえながら弦太朗は反省した。

その時、入り口からノックが鳴った。入り口のドアから「入ってもいいか」と言う声が聞こえた。

「あ、入っていいですよ～！」

唯が言った後、ドアが開いた。

ドアから、ピンクのアクセントの入った黒いジャケットを着た茶髪の青年が入ってきた。首にはピンクの2眼レフのトイカメラを紐でぶら下げていた。

「あ、会長！」

軽音部全員が声を合わせて彼の名を呼んだ。

「よう、精が出てるみたいだな」

「いえ、まだまだこれからです！」

「これが私たちの生き甲斐ですから」

会長と呼ばれた青年の問いに、梓と岩沢は謙遜しながら答える。

その時、澪がもじもじしながら会長に言った。

「あ、あの…会長。昨日は…（照）」

「何言ってんだ、澪。気にすんなと言ったばかりだ」

会長がそういった後、律も彼に続く。

「そーだぜ！お前が忘れもんさえしなきゃよかったんだぜ」

「うるさい！！」

「あでっ！」

律が余計なことを言ったので澪から拳骨をもらった。

「会長。今日はゆっくりお茶でもいかがですか？」

「いや、今日は遠慮する。和から仕事しろってうるさくてな」

会長は紬からのお誘いを断った。

このやり取りを見た弦太朗は何か思った後、会長に聞き込む。

「会長？ひょっとして、あんた」

弦太朗が聞くと、今度は逆に会長が彼のほうに振り向き聞いてきた。

「ん？そう言うお前はこないだ転校してきたって言う如月弦太朗か」

名前を出されたので弦太朗は上機嫌になった。

「お、ご名答。オレは如月弦太朗、この学校の連中全員とダチになるのが夢だ！」

会長は「やっぱりな」と思った後、彼も名を出した。

「大体わかった。俺は門矢士(かどやつかさ)。通りすがりの生徒会長だ。覚えておいてくれ」

会長…士はそう名乗った。

弦太朗は感心した後、彼にいきなり質問した。

「あんた、もしかしてかも知れねえけど……か、仮面ライダーって奴か？」

突然の質問に軽音部の空気が固まった…

そして士はしばらく考えた後、答えを言った。

「…さあな」

士の答えはあいまいなものだった。

「えー。なんだよ、教えてくれたっていいじゃねえか！」

がっかりする弦太朗。しかしふと士のカメラに注目し、指差ししてあることを頼んだ。

「じゃあ、そのカメラでオレの写真撮ってくれ！生徒会長様からの記念写真だぜ！」

士は弦太朗の言い分に半ば呆れた後、

「しゃーねぇな。どうなっても知らんぞ」

弦太朗は「やった！」とガッツポーズを決めた。士は首にかけたカメラで笑顔でピースしてる弦太朗を写した。

パシャッ

…しかしその出来はお世辞にもいえないものだった。合成でもないのに何もかも歪んでいる。

「なんだよこれ！？全然汚ぇじゃねぇか！オレのハッピースマイルが台無しだぜ！」

「…世界が俺に撮られたがっていないんだ。何故だか知らんが、俺が写真を撮ると大体こんな感じになる。つうかそれ以前に人の話を聞け」

士は自分の写真についてこう評価した。
「だが…お前のおかげなんだろうな。今日はなんとなく気分がいい。じゃあコンサートは任せた」
士は軽音部に挨拶し、音楽室を出た。
しばらくの後、唯は弦太朗に声をかけた。
「弦ちゃん、あの人はちょっと変わってるけど、悪い人じゃないよ」
「いや、お前が言うとなんか説得力にかける気がするが」
「そうですよ唯先輩。先輩はもっとしっかりするべきです！」
唯の言うことに岩沢と梓のツッコミが入った。

ラビットハッチ。
夜空と星奈はラビットハッチを完全に私物化していた。いくらラビットハッチの一部分を隣人部の部室として貸しているとはいえ、そこはもはや二人のゲームする場所と化していた。

「このクソタレ夜空！このゲームの強キャラであたしが最強だってことを見せてあげるわ！」

『ソニックブーム！』

「考えが幼稚だな、肉！どんなキャラもプレイヤーが性能を引き出さなければ意味がない！」

『昇龍拳！』

両者のキャラクターが必殺技を出し合う。やがてバトルは夜空に軍配が上がった。

「どうだ、思い知ったか肉？これが本物の戦いというものだ」

「ぐぬぬぅ…じゃあリアルファイトで勝負よ！」

星奈がそう言うとラビットハッチの空き部屋から二人が出た。そして二人がラケットを持ち、シャトルを投げてバドミントンを始めた。

頭をかきながらコンピュータを操作しているものの、彼女たちの振る舞いに我慢の臨界点が近づきつつある賢吾が、隣人部の部員である小鷹に聞いた。

「おい羽瀬川。あの二人（バカども）はどうにかならんのか？」

「そういったって聞かねえよ。夜空と星奈はいっつもああなんだ」

小鷹が頭をかきながら答える。犬猿の仲の二人を受け持つ彼には、

彼女たちが悩みの種でもあった。

「そうよねー。柏崎さんも三日月さんも性格があれだからねー。だから友達できないのよねー」

しかしユウキのこの言葉が二人の闘争心をさらにエスカレートさせた！

夜空「おい…なんか言ったか、ギーク」

星奈「そうよ、地味女は引っ込んでなさい！」

ユウキ「ちょい、ギークはまだしも、地味女はないでしょ！」

「よ！遅くなっちまった」

ラビットハッチに弦太朗がやってきた。

「来たか」

賢吾が席から立ち上がると、弦太朗にあるスイッチを渡す。『20』と書かれた、真っ赤なスイッチだ。

「このファイヤースイッチはエレキと同様ステイツチェンジのパワーを持つスイッチだ。炎や高熱を吸収して自身の力に変えることができる」

「へえ、エレキのほかにも…」

弦太朗はファイヤースイッチをまじまじと眺めた後、ポケットにしまった。

一方、士は買い物に来ていた。和の目を盗んで生徒会室から抜け出し、学園の近くのコンビニでレジの店員に注文した。

「肉まん１０個とおでんを頼む」

「支払いはどうします？カードか現金か…」

「これでいい」

士はカードを取り出し、それを店員に示した。

…そのカードには、仮面のような顔をした肖像画が描かれていた。ピンク色をベースに、顔に縦線が刻まれ、緑色の目をしていた。そして「ＭＡＳＫＥＤ　ＲＩＤＥＲ　ＤＥＣＡＤＥ」の文字が浮かび、裏面には顔を模したバーコードのような紋章が刻まれている。

「あ…失礼しました！門矢生徒会長様」

そのカードを見て何かあせったかのような表情を浮かべ、おでんをパックに詰め、肉まんを袋に入れて士に渡す店員。それに対して士は満足したかのような表情だ。

このカードはＩＣカードだった。

黒楼州学園の生徒は学生証やＩＣカードの所持が義務付けられている。このＩＣカードは買い物、食事、図書館での本の貸し出し、アミューズメントパーク、公共交通機関に利用される。教職員も同様。

しかし士のそれは特別仕様で、それらの利用をなんとタダで出来る。つまり金を払うことなくやりたい放題できるのだ。生徒会長だけの特権である。

なお、士は「クレジットカードは作らない」ことにしているが、これ１枚で何でもできるため本人は満更でもないらしい。また、このカードは士にとって重要なある「秘密」を抱えているらしいが…？

その後士はコンビニから出たが…

「会長、何やってんですか…仕事から抜け出さないでください」

「そうですよ会長！私たち心配してたんですから…」

入り口に和とヒナギクが待ち受けていた。

「勝手に抜け出しちまって悪いな。軽音部に差し入れしようと思ってたんだ」

「それは私が唯たちに渡しますから、会長は生徒会室に戻ってください…ヒナ」

「ええ、和。ほら会長、行きますよ！仕事はまだ山ほど残ってんですから！」

「…大体わかった」

士はしぶしぶ品物を和に渡すと、ヒナギクに生徒会室に連れ去られた。とても会長、いや先輩とは思えない。

古等簿市コンサートは明日に迫っていた。

楽器を手に、いつも以上に練習に精を出す放課後ティータイムとガルデモ。その練習風景をさわ子が見守っていた。

音楽室の少し開いた入り口から、弦太朗も彼女たちの頑張りを陰ながら見守っていた…

（頑張れ！唯、澪、律、紬、梓、岩沢、ユイ、関根、入江、ひさ子。明日のコンサートには絶対見に行くからな。お前らなら絶対にやれる、優勝できる！なんたってオレのダチだからな！）

すると、背後から二人の女子生徒が現れ、弦太朗に声をかけた。

「「何覗きしてんの、弦太朗君？」」

「覗きって、人聞き悪いね。オレはただ陰ながら見守ってあげてなぁ…？……わ！和にヒナギク！」

弦太朗が振り向くと、そこにはコンビニ袋を持った和とヒナギクが立っていた。びっくりして腰を抜かす。

和「仮面ライダー部に行ってたんじゃないの？」

ヒナギク「そうよ、風紀委員として感心できないわね」

二人はムッとした表情を浮かばせ、ジト目で弦太朗の顔面に近づけさせる。弦太朗の顔に汗がにじみ出始めていた。

「ご、誤解しないでほしいんだぜ…これはただ、この学園の連中全員の笑顔を守るためにやっているんだ。これも立派な仮面ライダー部の活動なわけで…」

「…うちの部活の覗きして何が立派なのよ、聞こえてるわよ3人とも」

入り口のドアが開き、さわ子が3人の前に現れた。この後、3人はさわ子に絞られた。

和、ヒナギク「ごめんなさい」

弦太朗「悪ぃ、さわちゃん」

「まったく、音楽を聴いてくれるし応援しに来るその気持ちはわかるけど、少しは限度ってものを知りなさい。それと如月君、さわち

ゃんて呼ぶの禁止」

「ええ！？唯と律たちじゃＯＫなのにオレはダメなの！？」

「ダメなものはダメです」

さわ子にダメ出しされ、激しく落ち込む弦太朗を蚊帳の外に、和とヒナギクがコンビニ袋から何かを取り出した。

和「みんな、生徒会長からまた差し入れよ」

ヒナギク「明日のコンサート、頑張ってね！」

テーブルに出されたのは人数分の牛丼だった。

唯「わぁ～おいしそ～♪」

澪「いつもすまないな、和」

律「さっすが和だぜぃ！」

紬「またいいのかしら？頂きます♪」

梓「ありがとうございます！」

岩沢「会長からか？ありがたい」

ユイ「ありがとですぅ☆」

その様子を見た弦太朗は何を思ったのか、音楽室から立ち去ろうとする。ヒナギクはそんな彼を呼び止めようとするが…？

「あ、弦太朗君！ここ数日あなたがここにいるの聞いてるから、その分も買ってきて…」

「それは誰かに食わせてやんな。そいつらが今まで積んできた努力を無駄にしたくねえからな…」

弦太朗はそういった後、音楽室から出た。追おうとするヒナギクを、和に止められる。

「…ヒナ。あなたも弦太朗君の性格を知ってるでしょう？彼の言う通りにしてあげて…」

その夜。

皆が寝静まる中、寮内の自分の部屋にいた弦太朗は一人ベッドの上に寝転がっていた。

ふと、和からこんな話を聞いたのを思い出していた。

『唯が軽音部に入った理由、知ってる？あの子、1年のときにものすごい勘違いをしちゃってね…軽音楽のことを「軽い音楽」と解釈しちゃって入ったの。あら、あの時唯がカスタネット叩いて「うんたん♪」とか言って想像したの思い出しちゃった。まぁあの子らしいといえばそうかしらね…

実際、カスタネットを叩いたくらいだったから全くの音楽初心者だった。でもギー太と一緒になってからは、恐ろしいまでの集中力でギターの腕をメキメキ上げていたの。今まで練習風景やライブで私も見たけれど、あの子、別人と見紛うくらいにすごく変わった。私もビックリしちゃったわ』

「…そうだよな。あいつがギターを弾く姿はオレも正直驚いたぜ。人間、やりゃできるってことだよな」

和の言葉を思い出して感心し、次はその手に握るファイアースイッチを見つめた。

「オレはこいつを使いこなして見せる…あいつがギー太を使いこなせたようにな！」

その後弦太朗は明日のライブで放課後ティータイムとガルデモの演奏が聴けるのを楽しみにしながら、布団にその身をかぶせて寝た。

ライブに臨む放課後ティータイムとガルデモに悲劇が舞い降りることも知らずに…

会・長・邂・逅（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『けいおん！』

平沢唯、秋山澪、田井中率、琴吹紬、中野梓、

真鍋和、山中さわ子

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

岩沢まさみ、ユイ、ひさ子、入江、関根

『ハヤテのごとく！』

桂ヒナギク

『僕は友達が少ない』

羽瀬川小鷹、三日月夜空、柏崎星奈

『仮面ライダーディケイド』

門矢士

鳴滝：この小説でも初出演を飾ったか！おのれ、ディケイドぉー！！

仮・面・暗・躍（前書き）

見ててください、俺の変身！

目覚めよ、その魂。

戦わなければ生き残れない！

戦うことが罪なら、俺が背負ってやる…！

運命の切り札を掴み取れ！

僕達には、ヒーローがいる。

天の道を行き、全てを司る男。

時を超えて、俺、参上！

ウェイクアップ！運命の鎖を解き放て！

全てを破壊し、全てを繋げ！

さあ、お前の罪を数えろ！

死ぬほど後悔するのが嫌だから、手を伸ばすんだ。

青春スイッチオンで、宇宙キター！

仮・面・暗・躍

前回、来たるコンサートのために練習している軽音部に入り浸っていた如月弦太朗は、生徒会長・門矢士と邂逅した。そしていきなり士に「あんたは仮面ライダーなのか」と問うてみたが、あいまいな答えで返されてしまう。

その後弦太朗はラビットハッチで賢吾にファイヤースイッチを渡される。エレキと同じく特殊な能力を持つこのスイッチ。唯の幼馴染である和から唯についての話を聞かされていた彼は、彼女がギー太を使いこなせたように、このスイッチを使いこなしてみせると意気込む。

そして、ライブ当日がやってきた。放課後ティータイムとガルデモの誰もがライブに臨んでいた。だが、その日に起こる悲劇が舞い降りることも知らずに…

ライブ当日の朝。

「ぬぁぁ〜。よく寝たぜ…」

眩しい朝の日差しによって弦太朗は目覚めた。

「さーて、朝飯食って髪型セットして着替えして歯を磨くか！」

弦太朗は朝食用に買ってきたピザトーストを食べようとしたが…

「…ん？もう起きたのか？」

弦太朗の部屋には、ピザトーストをむさぼる一人の女が居座っていた。黄緑色の長い髪に黄金色の瞳をもち、数本のベルトが付けられた白い服をまとう女は弦太朗のほうに振り向いた。

「なにしてんだ、C．C．？」

「何って…朝食を取っていただけだが…？」

「それはオレの朝飯だ！つうかなんでお前がここにいるんだよ」

C．C．を怒鳴る弦太朗。彼女は開き直ったかのような態度をとる。

「お前には関係ないかも知れんが、1年前仮面ライダーと因縁があったからだ。だから…」

…その時、弦太朗の部屋からルルーシュが入ってきた。

「C．C．！何勝手に人の部屋に入ってるんだ！学生寮の合鍵を勝手に使いおって…如月に謝れ！」

「何言ってるんだ。この部屋にピザの気配がしたからな。欲望のままに行動しただけだが？」

今度はルルーシュがC．C．を怒鳴ったが、彼女はまるで悪びれることなく言い訳する。寮長のルルーシュの部屋には、C．C．も同棲しているからだ。

そしてさらに別の男が入ってきた。

「全く、しょうがねえ奴等だな」

ルルーシュ「会長。失礼した」

C．C．「来たか。妖怪・写真歪ませ」

「妖怪は余計だ」

今度は士が入ってきた。３人の来客に弦太朗は戸惑う。

「C．C．にルルーシュ、会長じゃねえか。今日は満員御礼か？」

弦太朗が自嘲気味に頭をかく。士が前に出て弦太朗と目を合わせた。

「今日、コンサートに行くんだろ？だったらお前に伝言を頼みたい」

「伝言だって？会長は行かねぇのか？」

「ヒナギクから仕事があるからとうるさくてな。全く、生徒会長の役割も楽じゃねえぜ」

「そうか…残念だな」

士は自分の立場に自嘲し笑った後、弦太朗にこう言った。

「あいつらに『頑張れ』と言っときゃいい」

ルルーシュも士に続く。

「俺もだ。『みんな頑張れ』と伝えてくれないか？」

「…わかったぜ、あいつらに伝えとくよ」

「…悪いな」

士が微笑んだ後、ルルーシュとC．C．とともに弦太朗の部屋を出た。

「…さて、着替えするか。朝飯は駅前の蕎麦でいいか」

弦太朗は頭をポリポリとかいた後、リーゼントをセットし始めた…

古等簿市内のライブ会場。

「すげぇ！何千人も入るんじゃないのこれ！？」

弦太朗のいうとおり、会場はとてつもなく広かった。

「こんなところでみんなはライブをするのか…さて、唯達はどこだろう？」

周りを見渡し唯達を探していたが、このコンサートを見にきた観客や出場するバンドでいっぱいなのでなかなか見つからない。しかしその時聞き覚えのある声が弦太朗の耳に届いた。

「あ、弦ちゃんだ！お～い、こっちこっち～！」

唯が手を振って弦太朗を呼んだ！どうやら、ほかのメンバーもご一緒の様子。弦太朗はすぐさま彼女たちと合流する。

「おはよう、唯！みんなもいるみてぇだな！」

律「よう弦太朗！応援に来てくれたのか？」

岩沢「わざわざ来てくれてありがとうな」

ユイ「今日は私たちの応援、よろしくお願いします♪」

軽音部のやる気は満々のようだ。すると弦太朗があることに気づく。

「そういや澪はどこいったんだ？」

「ええ、少し待ってね…澪ちゃん、弦太朗君よー」

紬が澪を呼ぼうとするが……

…肝心の澪はピクリともせず、ただ固まっていた。まるでブロンズ像か冷凍マグロのように表情が硬く、顔も青ざめていた。何千人もの観客を相手に演奏するので、相当に緊張しているようだ。澪の性格上、無理もないことだが…

その澪から、声が出てきた。

「ヤァ、ゲンタロウ。オハヨウゴザイマシタ」

「おわ、こりゃ重症だなおい…大丈夫か？」

弦太朗が澪の目の前で手を振ったが、完全に文字通りだった…

そんな時、唯が何かを指差した。

「あ！ＵＦＯ！」

「おい待て、ホール内にＵＦＯ飛んでるか普通？」

「唯先輩はもちっと落ち着いてください…」

律と梓に注意される。そこで弦太朗がフォローに入る。

「まぁ、緊張感のない唯なんて唯らしくないと思うぜ、オレは」

そこで弦太朗は意外な人たちとまみえることに…

「よう、弦太朗！」

「お、日向(ひゅうが)じゃねえの！」

「『ひゅうが』じゃない！『ひなた』だっつの！」

「そいつぁ悪ぃ！」

弦太朗を呼び、苗字を訂正した声の主は、お調子者という風格が出ている青い髪の日向秀樹(ひなたひでき)であった。それだけじゃない。新八、ハヤテ、明久、音無ら弦太朗の友人が集まっていた。

「おお、みんな来てたのか！？」

明久「うん、だって唯さんや岩沢さんのライブがあるから応援しに行かなきゃ！」

音無「友人や後輩のライブなんだ、俺たち全員で駆けつけたってわけ」

ハヤテ「僕らのクラスだけではありませんよ。明久さん達ほかのクラスも来ています」

ナギ「まったく、折角の土曜日くらいゴロゴロさせろよー」

ハヤテ「お嬢様…今日ぐらい我慢しましょう。休みはもう一日ありますし、なにより唯さんたちのライブがありますから…」

その時、パンフレットを見つめていた新八は手をわなわなと震わせていた。

新八「んで、お通ちゃんは！？」

神楽「新八、そんなのはいないアルよ。一体何を求めてるアルか」
ゆり「第一、ここは街のライブなのよ、来るわけないじゃない」
新八「ノォォォォォォォ！」
床にひざまずく新八を見た弦太朗に、音無から説明が入る。
「新八は熱心なアイドルファンなんだ…お通親衛隊なんてところの隊長もやってんだとさ」
「そ、そうか…あいつに意外な趣味があったとはな…」
弦太朗は新八の趣味に驚きを隠せなかった。
銀時「あー、連休の土曜日くらいゴロゴロしてえんだよ…何で俺が呼び出されなきゃいけねーんだよ」
王元姫「先生。そんなこと言うならお仕置きです（むぎゅ）」
銀時「はうっ！何で生徒のお前に俺のきん●ま握られなきゃいけねーんだよ」
教師である銀時がライブに来ていることに不満を募らせていたため、元姫が彼のきん●まを握りつぶした。
星奈「ねぇねぇ元姫、あたしにも触らしていいかしら！」
王元姫「ええ、かまわない」

銀時「な…！柏崎、オメーもなのか…？同じ声そろってＳなのか…」

星奈「何言ってるのよ先生、言うこと聞かないと奴隷にするわよっ！（ぐにゅ）」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

銀時の断末魔を聞きながら、弦太朗はある人物二人を見かけた。

「お、賢吾もユウキもここに来てたのか」

新八やハヤテのほかに、アストロスイッチカバンを片手で担いだ賢吾やユウキがいた。

「友達思いの弦ちゃんだもの、ここに来ると思ってたよ！」

ユウキが笑顔で弦太朗を歓迎するが、賢吾は怪訝そうな顔をしていた。

「本来なら時間の無駄だと言いたかったがな…ひとつ気になることがある」

「気になること？」

弦太朗が聞き返すと、賢吾は弦太朗とユウキの耳を貸し、語りはじめた。

「近頃、この街で黒い噂が流れている。ゾディアーツでもドーパントでもない、奇妙な姿と能力を持った『超人』がほかの学校の生徒を痛めつけてるという話だ。すでにその学校の生徒十数名が病院送りにされている」

「雑煮あんことかドーナッツとかじゃなくてか？」

「ゾディアーツとドーパントだって！」

早速弦太朗がボケをかますのでユウキが訂正する。賢吾が語りを続ける。

「…あくまで噂に過ぎんが、もしそれが本当なら黒楼州学園…とくに軽音部に危機が晒されるかも知れん。もし彼女らの身に何かあった後ではもう遅い。しかし、だからといって、今日が休日の土曜日ということもあって怪物専門ではない風紀委員では当てになるまい」

「そこで、仮面ライダー部（オレたち）の出番てわけだな！」

「部ではない！…だが、いずれにせよ俺達で止めねばならん」

弦太朗に「用心しておけ」と念を入れた賢吾は、バガミールを取り出してカメラスイッチを挿入し、偵察に出させた。

ユウキたちは会場の席に戻った。

「みんな聞いて！」

ユウキたちがいなくなったあと、岩沢がメンバー全員を呼び、円陣を組んだ。

「このコンサートの目的は優勝だ。今まで培ってきた努力の成果を見せるときだ。みんなベストを尽くしてほしい。そして優勝賞金を学園に寄付し、これまでの恩を返す！」

そして軽音部全員がその手を合わせると…

「軽音部ファイト！！」

「おー！」

唯の掛け声で軽音部が一致団結！気合いは十分なようだ。

弦太朗は音無、日向、ゆり、奏、野田と一緒に軽音部を見守っていた。

「いよいよ来るのね…」

「ああ、みんなの演奏を、俺たちが聴き届けないとな」

奏の言葉に音無が続ける。

「俺にはゆりっぺがいれば問題ない！」

「あんたはだまってなさい」

「そ、そんなぁ～」

野田が抱きつこうとするのでゆりが制する。

なお、この野田は弦太朗がこの学園に転校したばかりの頃、ゾディアーツのスイッチャーとして弦太朗の前に立ちはだかり、フォーゼによって倒された。フォーゼ本編ではゾディアーツはエネルギー体として行動するが、スイッチャー自身への負担もかなり大きいようで、ゾディアーツが倒された後はいまだに入院しているということが本編第８話で明かされているが、どうやら野田はいつのまにか復学したらしい。まぁ星奈の一例もあるのだし。

弦太朗が岩沢たちに近寄り、伝言を伝えた。

「生徒会長やルルーシュから伝言を預かっているぜ。『頑張れ』だってさ」

「そうか…会長達がそこまで期待しているなら、なおさら優勝しないとな！」

するとその時、背後から声が聞こえてくる…

「おい、見ろよ。黒楼州学園の連中じゃないか」

「マジか？ははは、まさか出場するのかよ…」

「ありえないしー。超キモいしウザいしー」

そしてその声の主から弦太朗たちを呼んだ。

「おい、お前ら！黒楼州学園の生徒だろう？」

その声の主は、一切の汚れもまったくない、すべて真っ白なブレザーやセーラー服を着た男女だった。楽器を手にしていることから、このライブの出場者と見られる。

先ほどの質問者である、唯一白ランを着ていた男の問いに弦太朗が答える。

「ああ、そうだ。オレたちゃ黒楼州学園だ！」

しかし弦太朗の答えを聞いた白ランたちは…

「はははは！そうかそうか、黒楼州学園の連中は問題児や変質者ばかりとはな！やっぱり噂どおり、いや噂以上の馬鹿者ばかりよな！」

「なんだと！？」

律が怒り出した。白ランが律の言葉に続ける。

「そうだよ、知ってるさ。黒楼州学園はお前みたいなサル以上のおかしな生徒が通う、そこらの不良校よりもタチの悪い学園なんだってな！お前らコンサートに出場するのか？やめとけ、赤っ恥をかきたくないならな！ひゃっはっは！」

白ランが笑うと、他の連中も笑い出した。彼らの振る舞いに眉を上げた弦太朗が文句を言おうとした時、彼よりも早く行動に移した者がいた。

ユイだった。白ランの言動に耐えられなくなったらしく、いきなり白ランに掴みかかった！

「おい、てめぇ！岩沢さんを笑いやがったな！優勝はあたしらがいただくんだよ！！」

「汚い手で俺様に触れるな～！」

ぱしぃん！！

怒った白ランがユイの頬をはたいた！ユイはそのまま床に倒れ、気を失ってしまった。

「きゃぁ！」

「ユイ！」

倒れたユイを岩沢らが見取る。

「ユイ…テメェ！！」

「止せ、日向！」

この光景を見た日向が激昂し、音無の止めも聞かずに掴みかかろうとした！

だが白ランに一歩及ばず、取り巻きのブレザーの男子に腹部を蹴られ、失神した…

その取り巻きの一人が気絶した日向とユイを抱きかかえる。

ユイと日向を傷つけたことで弦太朗が怒鳴った！

「この野郎、オレのダチに何しやがる！」

「何って…汚い手で触ろうとしてきたゴミを処分しただけだが？」

「ゴミだと…？コイツらはゴミじゃねえ！オレのダチだ！黒楼州学園の連中全員がオレのダチなんだ！！さっさと返しやがれ！」

だが白ランたちは大いに笑う。

「ははは！こんなゴミと関係を持ってるとはな！黒楼州学園はやはり問題児の集まりだ！」

ダチを殴ったうえ、さらに気絶したダチを奪い取り、おまけにダチをゴミ呼ばわりする。

ダチ第一の弦太朗の心はもはや我慢の限界だった。彼は白ランをぶん殴りたかった。その拳に力を入れ腕を振るったが……すんでのところで誰かが彼の腕を掴んで止めようとした。

「やめろ弦太朗！こいつらと関わるな！」

岩沢だった。

「岩沢！だが、コイツがユイと日向を…」

岩沢に反論しようとしたが、ゆりに肩を掴まれた。

「…岩沢の言うとおりよ。お願い、ここは彼女の言うことを聞いて…！」

「…わかった」

岩沢とゆりに止められたので殴るのをやめ、拳の力が緩んだ。岩沢とゆりが「ユイ、日向。ごめん…」と小声でつぶやき詫びた。先ほどの白ランたちに笑われながらも、控え室に戻った。

その時、ギターケースを持ったチンピラどもが弦太朗たちを横切った。するとチンピラの一人が梓とぶつかった！

「きゃ！」

「あ～！邪魔じゃコラァ！」

「ご、ごめんなさい…」

岩沢が梓を引き寄せ、耳元で囁いた。

「…大丈夫か？」

「…ハイ、ありがとうございます」

その時、弦太朗は梓とぶつかったチンピラにガンを飛ばしていた。本当ならぶっ飛ばしたいところだったが、先ほどの白ランの一件で気分的にそうする気になれなかった…

控え室では、重苦しい空気が漂っていた。

「お前らなんで止めたんだよ！ユイと日向を傷つけられて、そんで奪われてあんなに言われて、悔しくねぇのかよ！？」

弦太朗は早くも岩沢の胸倉を掴んだ！そして岩沢も怒鳴り返す！

「…そりゃ悔しいさ！私だってほんとは殴りたかった！でも、相手があの連中だから手が出せなかったんだ…！」

「何…？どういうことだ！？」

そういわれて弦太朗は岩沢を放す。ついに奏が語りだした。

「……あれは江良杉（えらすぎ）学院」

「江良杉？」

奏がこくりと頷くと、一呼吸つけてから語り始めた…

「富豪や政治家の子供でしか通うことが許されないエリート学院。その学力は慶応や東大を軽く匹敵するといわれている。もしあなたがあの生徒に手を出してしまったら、その親や学院の理事が黙っていない。権力を使って本気であなたを、いや黒楼州学園を潰すわ。岩沢さんやゆりが弦太朗君を止めたのは、そのため。だって、結弦にもゆりにも学園にも、そして何より学園でいい思い出を作りたいあなたにも、迷惑をかけたくないから…」

すると、普段寡黙で大人しい奏の、美しい黄金色の瞳から一筋の涙がこぼれた…

「か、奏…お前も悔しいのか？」

「…悔しいに決まってるじゃない！私も弦太朗君と同じなの！」

弦太朗に対して奏が涙ぐみながら声を荒げた！弦太朗は初めて気づかされた。自分のおかげで危うく学園に迷惑をかけかけていたことを…

「…それでも、私だって悔しいよ！」

紬も涙ぐみながら奏に続く。

「確かに学園のみんなはちょっと変わっているけど、あんな言い方をするなんて酷いよ！」

「ああ、そうだ。学園の皆はいい奴ばっかなんだ。問題児呼ばわりはあんまりだ！」

紬が続けて言う言葉に、音無も同意する。

岩沢が立ち上がり、ギターを構えて言った。

「だったらここで証明するんだ！このライブで、黒楼州学園の実力を江良杉学院の連中に見せつけてやろう！」

「そうだぜ！あたしら放課後ティータイムも頑張るからな！」

岩沢と律の言葉によって、さっきまで暗い顔をしていた皆の顔が明るくなった。

ふと、唯がこんなことを言い出した。

「あれー？ギー太がいないよー？」

唯があちらこちらを探し回っていた。どうやら唯愛用のギー太がどこかに行ってしまったらしい。澪も梓もギー太を探していたのだが、一向に見つかる気配がない。

「どこに行ってしまったんだ…」

「あれがないと演奏できませんよ！」

弦太朗が唯たちの元へ駆けつける！

「本当なのか！？よく探したのか！？」

「うん、よく探したんだけど……うっ……無いよ…」

唯の瞳から涙がこぼれてきた。

「うわぁぁん…！ギー太がいないとライブに出れないよぉ……」

（クソ…どうすりゃいいんだ…！）

「何を騒いでるかと思えば、こんなとこで道草を食ってるとはな」

すると控え室のドアから食べ物形態のバガミールを持った賢吾が入ってきた。

「賢吾」

「話は聞いた…如月。お前、江良杉と沙汰を起こしかけたようだな」

賢吾は視線を弦太朗から泣きじゃくる唯に向け、問うた。

「それと平沢…お前さっきギー太とか言ってたな」

「え…そうだけど…？」

「なら話が早い…これを見ろ」

賢吾がバガミールにカメラスイッチを挿入する。ロボットに変形したバガミールはモニターを投影した。

柄の悪いチンピラ風情がギターケースを持っている。どう見てもバンドをしているには到底見えないが…？

「あ…あいつらさっきの連中です！」

梓が声を荒げた！彼らは、梓とぶつかったチンピラどもだった。

次の瞬間、一同は驚くべき光景を目にした！

チンピラが白ランの男にギターケースを献上している映像が投影されていた。

「あいつら…エロすぎ学院の連中じゃねえか！」

「江良杉よ、弦太朗君！でも、何であの連中に？」

弦太朗のボケを訂正したゆりは改めてバガミールからの映像を睨む。

賢吾がバガミールを操作し、映像をチンピラがギターケースを持っているところまで巻き戻した。そして賢吾がその時点で一時停止にする。

「これのことだろう？平沢」

バガミールを停止させ、画像を拡大させると…そのギターケース

に、恐るべき事実が隠されていた！

「あ…！これギー太だ！」

チンピラがもっていたギターケースには、なんとギー太の名前が刻まれていた！

「なんてこった！あの時チンピラどもをぶっ飛ばしてりゃ…！」

弦太朗は先ほどの行動を後悔した。あれがギー太とわかっていれば、チンピラをぶん殴れたはずだった…それにユイと日向は江良杉の手に渡っている。

だったらやるべき事はひとつ！

「オレ、あいつら探してくる！」

「待て、危険だ！風紀委員か、最悪警察を…」

「そうだ！学園に迷惑をかけたくないなら…」

「それだと間に合わなくなる！賢吾、まだ遠くに行ってないだろ！？」

岩沢や澪の制止を振り切り、涙ぐむ唯を慰める。

「…和から聞いた。長年付き合ってきたお前の相棒なんだろ？ユイも日向も、そしてギー太も絶対取り戻す。そしてライブに間に合わせる！」

「…うぇっ……弦ちゃん…」

唯に誓ったあと、弦太朗は控え室を出た！音無、ゆり、奏も追おうとするが、賢吾に阻まれた。

「…行かせてやれ。奴は言い出したら聞かん」

「…弦ちゃん」

弦太朗は会場内を疾走していた！彼の脳裏に岩沢やユイの言葉がよぎる。

伝えたい事は歌に乗せたい…それが私の生きがいだからな…

放課後ティータイムもギー太も応援してね！！

うおおおおおお！江良杉の奴等、ぶっ飛ばぁぁぁす！！

そんでユイも日向もギー太も取り戻して、ライブに間に合わせてやる！！

待ってろ！唯、澪、律、紬、梓、岩沢、ユイ、関根、入江、ひさ子！！

オレが絶対に、お前らの笑顔を守る！その笑顔、誰にも崩させやしねえ！！

仮・面・暗・躍（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』

如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『けいおん！』

平沢唯、秋山澪、田井中率、琴吹紬、中野梓

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』

岩沢まさみ、ユイ、入江、関根、ひさ子、

音無結弦、仲村ゆり、立花奏、日向秀樹、野田

『銀魂』

坂田銀時、志村新八、神楽

『ハヤテのごとく！』

綾崎ハヤテ、三千院ナギ

『バカとテストと召喚獣』

吉井明久

『僕は友達が少ない』

柏崎星奈

『真・三國無双シリーズ』

王元姫

『コードギアス　反逆のルルーシュ』

ルルーシュ・ランペルージ、Ｃ．Ｃ．

『仮面ライダーディケイド』

門矢士

鳴滝：まだ私の出番はないのか！？これもお前の仕業だ、ディケイドーッ！！

悪・党・説・教（前書き）

翔太郎：今回、士が活躍するぜ。
　とはいっても、サブタイトルの通り、あのシーンだけだがな。

亜樹子：バトルシーンは次回持越しらしいね。私聞いてない！！
　ていうか竜君。次回、アクセル活躍するってね！おめでとう！

フィリップ：まあ、作者が門矢士のセリフを考えていただけで時間食ってたからね。
　それと照井竜、初出演おめでとう。次回での君の活躍を期待しているよ。

翔太郎：ああ。次回のバトルシーン、照井が出てくるんだってな！
　アクセルがどんな活躍をしてくれるか楽しみに待っててくれ！

竜：まさか左たちを差し置いて俺に白羽の矢が立つとはな…
　次回、ディケイド、フォーゼとともに振り切るぜ！

フィリップ：さあ、検索…いや上映を始めよう。

悪・党・説・教

前回、ライブコンサートにやってきた弦太朗は放課後ティータイムとガルデモと合流する。弦太朗はそこで生徒会長の士からの伝言を伝えたことで、黒楼州学園の軽音部は意気揚々としていた。

だがそこで事件が起きる。江良杉学院の生徒達に黒楼州学園をバカにされたことで日向とユイが激昂した。しかし返り討ちに遭い、江良杉学院に二人を奪われてしまう。ダチを傷つけられたことで殴りかかろうとする弦太朗だったが、すぐさまゆりらに止められた。

超エリート校であるため、手が出せない江良杉学院に憤りを覚えた軽音部に更なる大惨事が起こる。唯のギー太が無くなっていたのだ。誰もが絶望に打ちひしがれていた時、賢吾が現れ、彼はギー太までも江良杉学院に手に渡ったのだと伝えたのだった。

江良杉学院から奪われたユイ、日向、ギー太、そして皆の笑顔を取り戻すため、弦太朗はただ一人、江良杉学院に殴りこんだ！

「くっそー！どこに行きやがった！？」

弦太朗はギー太を奪った江良杉学院を追い求めていた。だが人ごみばかりで見つけ出すのは辛いものがある。

「何とかして見つけださねえと、ライブに間に合わなくなっちまうぜ！」

そこらをウロウロしていたとき、銃を持った青年が弦太朗の元を訪れた。

「あのギターケースと男女を担いだ連中ならもう外へ出てったよ」

「サンキュ！助かる…って、海東？」

声をかけてきたのは海東大樹だった。

「ちなみに近くの廃工場だ。早く行った方がいいんじゃない？君のお宝候補がどこかへ飛んでっちゃうよ」

「…何言ってるのかわからねぇが、とにかくありがとな！」

弦太朗は海東に礼を言ったあと、外へ出て行った。

「やれやれ…あいつよりはマシだが、とんだお人好しを助けたもんだね」

海東は自分の言った事を自嘲しつつ、微笑んだあとどこかへ去っていった。

「どこだぁぁぁぁぁ！！」

会場を抜けた後、廃工場へ繋がる道を突っ走っていた！だがその途中、道端のバナナの皮を踏んで転んでしまう。

「どわ！いって～……（むくり）オラァァァァ！！」

それでも弦太朗は立ち上がり、そのまま走り続けた…

その時、遠くから弦太朗が走っているのを見届けている青年がいた。首にカメラをぶら下げていた彼は弦太朗の姿を見て、口元を緩ませた。

「…大体わかった。あいつ、やはり只者って感じがしないな」

彼の手には、カードが握られていた…

「仕事をサボって正解だったぜ。せっかくの舞台だ、久しぶりに暴れるとするか」

コンサート会場近くの廃工場に潜入していた弦太朗は、まず様子を伺うために入り口の曲がり角から覗き始めた。

すると白ランを中心に、白いブレザーの男子生徒とチンピラ連中

がゲラゲラと下劣な笑い声を上げながら談笑していた。

（どうやら賢吾が言ってた事は本当だったみてぇだな…）

「これがあの女の持ってるギターか」

「ヘイ、そうでヤンス！しかしギターに名前つけるなんて悪趣味でヤンスね～」

（あいつ…唯の事を悪趣味って言いやがった！あいつが努力家ってことも知らねぇくせに！）

江良杉の生徒は懐から封筒を取り出し、チンピラに渡した。チンピラが中身を確認すると、それは札束のようだ。

「これは報酬だ。よくやった」

「これ、もらっていいので！？うへっへっへ、おぬしも悪よの～」

（けっ、金で釣るなんて薄汚ぇ連中だぜ！もっとも、人のもん盗むのも薄汚ぇがな…）

弦太朗の心の中には、激しい憤りが渦巻いていた。そんな弦太朗の心境も知らずチンピラたちの会話は続く。

「けど、あんた達はどうするんでヤンスか？」

「バカだなお前は、権力を使って優勝するんだよ。世の中『ここ』がすべてだからな…」

江良杉の生徒が指差すと、こめかみのところをツンツンと突付いた。そして男達は笑いあう。連中からしてみれば都合のいい話だが、当然弦太朗にとっては不愉快極まりない話であった。

（偉そうにしやがって…今まで全国の学校を転校して来たが、こんなに最低な学校は初めてだ！）

そして江良杉の生徒の一人は不気味な笑い声を発した後、チンピラにこう言った。

「さて、君達にはコンサートが終わり次第、黒楼州の軽音部を襲ってもらいたい。煮るなり焼くなり、お好きにどうぞ」

「やった～！オレ岩沢もらい！」

「俺はあのあずにゃんって娘！」

「何を言う、ユイは俺のものだぜ！」

「じゃあ澪はぼくちんが頂くでヤンス！」

（くっそー！もう我慢ならねぇ！ところでユイと日向はどこにいるんだ…？）

弦太朗はさらに接近し、近くの遮蔽物に身を置いた。そこには、日向とユイの姿があった。そしてその日向とユイが晒されている、信じられない光景が目に映った！

（あの野郎、こんなことまでしやがって！…許さねぇ！）

弦太朗は拳に力を込めながら、怒りの闘志を激しく燃やした…！

「さぁどうした！？まだまだやれるはずだ、この程度で終わると思うな！」

工場内で江良杉の生徒とチンピラが集まっていた。江良杉のリーダー格と思われる白ランの男が高笑いを上げながら、二人の男女をバカにするように叫んでいた。

そう、先ほど人質にされた日向とユイは、ある危険な状況に置かれていた。

天井には日向秀樹がロープで吊るされていた。そしてそのロープは、日向の恋人であるユイが引っ張っている。そのロープを握るユイの手には擦り傷と血で真っ赤に染まっており、その目は涙ぐんでいた。

「うぅぅ…ひなっち先輩…」

「ユ、ユイ……！」

今にも泣きそうなユイを、白ランの男は嘲笑った。

「わっはっは、もっと泣けぃ！その手綱を放した瞬間がその男の最期だ！」

実は吊るされていた日向の下には、ガソリンを焚きながら轟々と燃えるコンテナやドラム缶が置かれていた。つまり、ユイがロープを手放してしまえば、日向は落下し、一瞬で焼死してしまう！

ユイは日向が落ちないように、力を振り絞って彼を引っ張っていた…！

「ユイ…オレの事はいい…！これ以上お前の泣く顔なんか見たくない…！」

「ダメです、ひなっち先輩…！先輩がいないと、ケンカ相手がいなくなっちゃう…！」

だが遠くから眺めていた白ランはいまだに高笑いを続けていた。

「フハハハハ！そうだ、そのつまらぬ友情を捨てろ！そいつが死ねば身も心も軽くなろう！」

だが、ユイは力及ばず、ついに倒れこんでロープを放してしまう！

そして日向は、燃え盛る炎に落下し始めた！

白ランはわざとらしく「ワ～オ！！」と驚いて見せてから顔を隠すようなそぶりをした。

日向の心には、もはやこれまでと観念していた…！

だが…！

「日向ぁ！お前を…ダチを死なせねえ！！」

なんと弦太朗が現れ、ユイが手放したロープを掴み、引っ張り出していた！そして倒れているユイにも叱咤激励する！

「ユイ、大丈夫か！？お前も悲しませるわけにはいかねえ！」

「げ…弦太朗先輩…？」

力尽きかけていたユイは弦太朗の勇姿を見て呟いた。そして…！

「おっしゃぁぁぁー！！」

弦太朗はド根性で日向を縛っていたロープを、まるでカツオの一本釣りのように吊り上げた！吊り出された日向は大きく跳び、ちょうど丈夫なマットに叩き伏せられた！

「いてて…もう少し手柔らかにしろよ。だが、助かったぜ弦太朗」

「おう、ダチを救うのがオレの使命だからな！」

弦太朗は日向にサムズアップを決めた。

「なんだお前！」

予想外の出来事に驚いた白ランが問いかけてきた。

「こいつらのダチだ！さっきから聞いてりゃムカつくことばかり吐きやがって、成敗してやるぜ！」

「クソガキが…てめぇ調子に乗んじゃねぇーーーーッ！」

ブレザー男の一人が叫び始め、ブレザーとチンピラの十数人がガ

イアメモリを取り出し、それを自分の肌に挿入した。

『ＭＡＳＱＵＥＲＡＤＥ』

その瞬間、マスカレイド・ドーパントに変貌した！ドーパントと化した江良杉学院の生徒どもが、まる獲物に喰らいつこうとするピラニアのごとく弦太朗に襲いかかる！

白ランと数人の取り巻きはその様子を眺めようとした。

「ユイ、日向！会場に向かえ！音無や唯たちが待ってる！」

弦太朗はユイと日向に逃げるよう促した。

「…ああ。死ぬなよ、弦太朗！」

ユイも涙ぐみながら、いつもの明るい表情で弦太朗に振舞った。

「弦太朗先輩…唯先輩のギー太、取り返してくださいね☆」

「おう！絶対取り戻す！」

マスカレイドが弦太朗を取り囲んでいる隙に、二人は廃工場から逃亡した。

『ぶっ殺してやる！！』

マスカレイドと化した江良杉の一人がバットで殴りかかってきた！だが弦太朗はマスカレイドの振るったバットを避け、その鳩尾に強烈なパンチを叩き込む！

「素手を相手に武器たぁ、まるで雑魚以下だな！」

『死にやがれェェ！』

次のマスカレイドは火炎瓶を取り出し、投げようとした！だが弦太朗は攻撃される前にそこらの石ころを拾って投げつけた！石ころは火炎瓶に命中し、マスカレイドはその身を焼かれた。

『くたばるでヤンス！』

チンピラのマスカレイドが両手に持った鎌で弦太朗を切りつけようとしたが、これも弦太朗が放った飛び後ろ回し蹴りで顔面に直撃！チンピラは気絶した。

ドーパントが相手であれど、しょせん素人に毛が生えた程度の実力でしかなく、しかも弦太朗はもともとケンカが強い上にゾディアーツやドーパントとの戦いを経験しているため断然負ける要素はなかった。そう思っていたその時…

「動くなコラァ！これがわからねえか！？」

なんと江良杉の生徒がギー太をノコギリにかけようとしていた！

「これ以上ふざけた真似したらこれをぶっ壊す！」

「何！？ずりぃぞ！」

こうされてはさしもの弦太朗も動きが止まる。その隙に背後からマスカレイドの一人が弦太朗を羽交い絞めにした！

そして両手にトンファーを握ったマスカレイドの一人が弦太朗の

目の前に現れ、シャドーを繰り出す。

『今から教育してやるぜ。ケンカってのはこうやるんだよ！』

マスカレイドが叫ぶと、トンファーでいきなり弦太朗のみぞおちを殴り飛ばした！

「ぶ！」

羽交い絞めにされて何も出来ない弦太朗に一方的に殴る、蹴るなどの暴行を働き、それをほかのマスカレイドが笑いまくる。

『オラオラァ！できるもんなら抵抗してみろよ素人がぁ！これじゃつまんねぇだろぉよ！』

その時、弦太朗の懐からフォーゼドライバーが落ちた。

『お、いいもん持ってんじゃね？金の代わりにもらっとくぜ』

マスカレイドが片方のトンファーをしまうと、開いた片手でフォーゼドライバーを盗み出した。そして別のマスカレイドが『俺にもやらせろよ！』とヌンチャクを取り出した。

『香港映画仕込みの技、見せてやるぜ。ほ～、ほあちょ～！』

ゴッ！！

ヌンチャクの演舞をした後、マスカレイドのヌンチャクが弦太朗の頭を強打した！今の一撃で意識がもうろうとし始めた…

薄れていく意識の中、弦太朗は思い出していた。

ギー太が江良杉の連中の手中にある限り、何も出来ねぇ…

フォーゼになろうとも考えたが、今ドライバーは敵に奪われたままだ。

いや、それ以前に抵抗すればギー太は絶対に切断されちまう。

ちくしょう！オレはあいつらの笑顔を取り戻せねぇまま死ぬのかよ…？

唯、澪、律、ムギ、梓、ゆり、奏、音無、日向、岩沢、ユイ、関根、入江、ひさ子、新八、神楽、ハヤテ、ナギ、ヒナギク、明久、雄二、瑞希、美波、秀吉、ムッツリーニ、翔子、夜空、星奈、小鷹、ロイド、コレット、スタン、当麻、美琴、モモタロス、ユウキ、賢吾…

すまねえ……！

「これでわかったか？世の中いつの時代も、どこの世界も、どんな

人間も、力を持った者が勝者なんだよ！人間、力がなければ何も出来ない！弱者はただ滅びるだけだ！貴様もその一人に過ぎん！その小さい脳味噌で学習しておけ！そして恨むなら、おのれの無力さを恨むんだな！」

白ランの男は弦太朗にそう言うと高笑いを上げた。

そして白ランの高笑いを音曲にマスカレイドたちは再び弦太朗へのリンチを続けた……

「…俺としては、お前らの脳味噌が小せぇと思うがな」

その時、青年の声が廃工場に響いた。傷だらけの弦太朗が目を開くと、トンファーとヌンチャクを持ったマスカレイド二人が失神して倒れていた。目の前には、一人の青年がそのマスカレイドの顔面を踏みつけ、その手にフォーゼドライバーを持っていた。

弦太朗の目の前には、門矢士が立っていた……

「ホラ、大事なもんだろ。二度と落とすなよ」

士はフォーゼドライバーを弦太朗に返す。

「…礼を言うぜ、会長さんよ」

「なんだ貴様は！いつのまに入ってきた！？」

白ランの男が士にガンを飛ばした。

だがそれでも士はひるむことなく、ただ言葉をつむぎ始めた…

「確かにお前の言うとおり、力は必要だ。力が無くては何かをしようにも出来るわけがない。しかしお前らの『力』と比べりゃ、あいつらの『力』は金よりもずっと価値のあるものだ。あいつらは、最初から歌も演奏も上手かったわけじゃない。ただひたすらに汗と涙を流し、自分で楽器を演奏し、苦労しながら練習することで人前で歌い、演奏するほどの実力を身につけてきたんだ。

…それを人間は、『努力』と呼ぶ。努力することで、無限の可能性を掴むことが出来る。挫折も苦労も知らないお前らが楽して使うことで何でもできると思い込んでいる『権力』とは、１８０度わけが違う。だからお前らはあいつらに勝てない！」

しかし白ランは士の言い分が気に入らず、近くの箱を蹴り飛ばした。

「くだらんわァ！そんなものにしがみつくのは弱者だ！俺様達はエリートだ、選ばれた人間だァ！
この世は歪んでいる！審査委員どもは黒楼州学園のゴミクズどもを評価している！あんな問題児どもの歌の何がいいんだ！
そしてこいつもそうだ！奴は我々江良杉学院に無謀にも歯向かってきた。だから俺様達に逆らうとどうなるか、この愚かなガキに教育させてやったのだ！」

「違うな！ちっぽけだとしたら、お前らの耳は腐り果てている。あいつらの歌はな、聴く者たちに元気と安らぎを与える。俺も実際に聴いたことがあるからそれがわかる。ろくに聞いたこともねえくせに、ゴミクズなどと随分と勝手なことを抜かしてんじゃねえ！
そしてこの男がお前らに挑んできたのは、無謀じゃない。エリート様であるお前らに何されるかわかっていても、恐れも逃げも隠れもせずに、果敢に立ち向かった勇気そのものだ！この男に比べれば、お前らは足元にも及ばない…ただ親からもらったおもちゃで遊ぶことしか芸が無いクソガキだ」

「クソガキだと！？ふざけるな！お前ごときに説教される筋合いはないわ！」

「あいつらの歌も、こいつの勇気も、歪んだお前らと比べたら立派なものだ。この男はな、あいつらの歌…そしてあいつらとの絆を守るために戦っている。この男が…如月弦太朗が、黒楼州学園の連中全員と友達になると言ってるんだから、俺はこの男との絆を結び、

守り通す！」

「絆…？そんなちっぽけなものに何の必要性が…！？」

「ちっぽけだからこそ…守らなくちゃいけないんだろ！！」

士がここで言葉を止めた。

白ランは、彼からの指摘に激昂し、怒鳴った。

「さっきから黙っていれば好き放題言いやがって！てめぇ何様のつもりだ！」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

士は名乗った！

（や、やっぱり…会長は仮面ライダーだったのか…？）

弦太朗は士の正体に感心していた。

「か、会長。あれさ、オレが言いたかったセリフなんだけど…」

「士と呼んでくれ」

「…そうか。じゃあ、ありがたく呼ばせてもらうぜ、士！」

こうして、士と弦太朗はお互いに笑顔のまま握り拳を打ち合わせた！二人の間に、友情が育まれたのである。

その時、賢吾、ユウキ、ルルーシュがやってきた！

賢吾「如月、大丈夫か！？」

ルルーシュ「酷い怪我だな…」

賢吾とルルーシュが傷だらけの弦太朗を心配するが、

「何、痛みは心の鍛錬だぜ！イテテ…」

「よかった…弦ちゃん、心配してたんだからね！私たちが来なかったら今頃…」

ユウキが涙ぐんでいた。

「つうか、なんでお前らここにいんの？」

弦太朗が疑問を聞くと、賢吾が答えた。

「会長から直々に呼び出されたんだ。平沢のギターが盗まれた、犯人はここにいるってな」

「士…あんたが…」

弦太朗が士に視線を向ける。

「…礼はいい。かわいい生徒をゴミクズの為に死なせたくないからな」

「舐めるなぁ！俺様達にはこれがあるんだ！お前らが束になろうと俺様達が勝つんだよ！」

白ランどもが再びギー太を向ける！やはりギー太にノコギリがかけられようとしていた！

「あ、あれは唯ちゃんのギー太！？」

「くそ！テメーらどこまでも卑怯だぞ！」

ユウキと弦太朗が非難するが、白ランは開き直ったかのように言い返す。

「フン、卑怯もラッキョウも大好物だぜ！」

その時…

「…門矢、如月、歌星、城島。ここは俺に任せておけ」

「ルルーシュ？」

弦太朗がルルーシュに視線を向ける。

「奴等は致命的なミスを犯した。平沢のギターを出した時点でな」

「お、お前何を言ってんだ…？」

「…ここはルルーシュに任せとけ。何、ストレス発散の前に、奴が『前座』をしてくれるさ」

その時、士が弦太朗をとがめた。

「ルルーシュ・ランペルージが命じる…」

ルルーシュが言った時、彼の左目にエンブレムが浮かび上がった…

「そのギターを俺に渡せ！」

ルルーシュが江良杉の生徒に何かの命令を下した！しかし、あの連中のことだ。素直に渡してくれるとは思えないが…

…その時、不思議なことが起こった。

なんと、その男がノコギリを捨て、ギターを持ち歩いてルルーシュに献上したのだ！

その時弦太朗は海東からある言葉を思い出していた…

『ルルーシュ・ランペルージは「ギアス」という絶対遵守の力を持っている。人の目を見て命令し、それを実行させる能力がね』

（そうか、あれは本当だったんだな…）

「俺の役目は終わった…今から俺は平沢にこれを届ける。これから舞台はお前達が盛り上げるのだ！」

ルルーシュがそういって廃工場から出た！

「ち！ゴミが！！」

ルルーシュが起こした不思議なことに激昂した白ランは、足元の鎖分銅を拾った。そしてルルーシュにギターを渡した生徒に走りより、鎖でその生徒を叩きまくった！生徒の顔面から血が噴き出し、生徒は失神した！

「おいテメエ！なんてことしやがる！」

白ランがその生徒を手にかけたため、弦太朗がついに爆発した！！

「使えない粗大ゴミを廃棄処分しただけだ。貴様らも一緒に処分してやる！」

白ランがそう言うと、近くの大きな鏡に体を向け、懐からカードデッキのようなものを取り出した。そして鏡に向かってカードデッキを示した。

「変身！！」

すると白ランの姿が変わった！「仮面ライダー龍騎」より登場、メタリックオレンジに輝くカニの様な仮面ライダーシザースにその姿を変えたのだ！

『このゴミクズどもが～！ここで葬ってくれるわ～！』

「賢吾君、あれって…！」

「噂の超人という奴か！？如月、気をつけろ！」

ユウキと賢吾がシザースを睨んだ。

白ランのどこまでも冷酷な態度に、士は決心した。

「…弦太朗。もはやこいつに人の心はない。変身するぞ」

「おう！やってやるぜ！」

弦太朗と士はお互いの覚悟を決めた…！

悪・党・説・教（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
ユイ、日向秀樹
『コードギアス　反逆のルルーシュ』
ルルーシュ・ランペルージ
『仮面ライダーディケイド』
門矢士、海東大樹
『特別出演』
仮面ライダーシザース

鳴滝：おのれディケイド！作者がもたもたしてるせいで終盤が次回に持ち越しだ！

作者：というわけで次回が生徒会長編・最終回となります…

鳴滝：まったくだ…これもお前のせいだ、ディケイド！！

約・束・交・差（前書き）

平沢唯――――私たちはいつでもどこでも放課後ティータイムだよ！

秋山澪――――目指す音楽の方向性が違ってきたんだ…

田井中律――――色んな事があって、人は強くなっていくってことだよ。

琴吹紬――――ずっと、永遠に一緒だよ。

中野梓――――卒業、しないでください…

岩沢まさみ――――こうして歌い続けていく事が、それが生まれてきた意味なんだ…

ユイ――――ユイ、にゃん♪

約・束・交・差

前回、弦太朗は江良杉学院からユイ、日向、ギー太を取り戻すために彼らの潜む廃工場に潜伏する。
天井からつるされた日向を、落ちないように必死でロープを握るユイ。、床にはガソリンで燃え盛るドラム缶が。ついにロープを放してしまうユイ、もはやこれまでと観念した日向だったが、やはり弦太朗が二人を救出。その江良杉のやり口に彼は怒りをむき出しにし、チンピラや江良杉の生徒をぶっ飛ばす。だがリーダー格の白ランはギー太を取り出し、「ふざけた真似するとこれを壊す」と挑発。今度は逆に弦太朗をリンチに。
だが、その時門矢士が参上。白ランの男に説教した後、自分を「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」と名乗った！さらにルルーシュのギアスによって唯のギー太を奪還することに成功する。激昂した白ランは弦太朗と士を血祭りにあげるため、仮面ライダーシザースに変身するのであった。

『このゴミクズどもが～！ここで葬ってくれるわ～！』

仮面ライダーシザースに変身した白ランは、獲物である左腕のハサミを弦太朗たちに向けた！

「…弦太朗。もはやこいつに人の心はない。変身するぞ」

「おう！やってやるぜ！」

まず、士がカードと変わったバックルを取り出した。

…そのカードには、仮面のような顔をした肖像画が描かれていた。ピンク色をベースに、顔に縦線が刻まれ、緑色の目をしていた。そして「ＭＡＳＫＥＤ　ＲＩＤＥＲ　ＤＥＣＡＤＥ」の文字が浮かび、裏面には顔を模したバーコードのような紋章が刻まれている。

――――――変身！

士が叫ぶと、カードをバックルに挿入し、バックルを構えた！

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ．　ＤＥＣＡＤＥ』

そのカードのイラストのように描かれた仮面に、体中はピンク色。ボディのいたるところに「１０」を意味する「十」や「？」の意匠が取り入られている。腰には変身前の士が巻いていたバックル『ディケイドライバー』をつけている。

門矢士は、世界の破壊者…仮面ライダーディケイドだったのだ！

「弦太朗…お前も変身だ」

「おう！」

なぜ彼が正体を知っているような口振りをしているかはわからな

いが、ディケイドに促され、弦太朗もフォーゼドライバーを構える！

……3……

……2……

……1……

――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

ディケイドとフォーゼの出現に動揺を隠せないシザース。

『な…！貴様等も変身できるのか！？』

「生憎だがな、仮面ライダーに変身できるのはお前だけじゃねえってことだ！」

フォーゼに言われ、焦りはじめる。

「仮面ライダーフォーゼ…タイマン晴らせてもらうぜ！」

何を思ったのか、シザースは後ろを振り向いた。

『お、お願いします、先生！』

シザースの背後から、メカニカルなデザインと重量感があるボディを持つ緑色の戦士が現れた。彼こそ「仮面ライダー龍騎」より登場のゾルダである。

「挙句の果てには用心棒頼みか。カスの極みだな」

ディケイドが皮肉った。しかしそれでもシザースは開き直る。

『馬鹿だな、正々堂々としてる奴が痛い目見るんだよ！』

シザースは『かかれー！』の合図とともにマスカレイド・ドーパントがそれぞれの獲物を持って襲い掛かった！

マスカレイド数体はサブマシンガンをディケイドとフォーゼに向けた！

「学生のくせによくそんなもの調達できるな」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ．　ＩＬＬＵＳＩＯＮ』

ディケイドがカードを挿入すると、ディケイドの数体の分身が現れた！

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ．　ＢＬＡＳＴ』

ディケイドが再びカードを挿入し、本型ツール・ライドブッカーを銃に変形させると、ビーム弾を連射し、マスカレイドを撃退する！分身の効果もあり、一気に殲滅した！

背後から状況を見守っていた賢吾がフォーゼに指示を出す！
「左腕の『１８』と左足の『１９』だ！」
「おう！」
言われたフォーゼがスイッチを入れ替えると、左腕からシールドモジュールが、左足にガトリングモジュールが装備された！サブマシンガンの銃撃をシールドで防ぎ、ガトリング砲の速射によって逆に返り討ちにする！

「やあ士。楽しいことしてるみたいだね」
突然廃工場の2階から風変わりな青年が現れた。ディケイドが声のした方向に向ける。
「…海東。また俺の邪魔をしに来たのか？」
青年の正体は海東大樹だった。彼は「フフン」と鼻を鳴らす。
「僕の邪魔をしてるのはそこのエリート様だよ。そいつらが僕のお宝探しにとって非常に鬱陶しいから潰しに来ただけさ」
海東が指差した先はシザースだった。変わった銃『ディエンドライバー』を手にしていた海東は、士の持っているものと似たようなカードをディエンドライバーに挿入した！
そのカードには、やはりバーコードのような仮面のイラストが描

かれていた。

――――――変身！

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ．　ＤＩＥＮＤ』

なんと海東は上空に銃を発砲し、その瞬間、ディケイドの外見を水色にして頭部などの形状が変化した仮面ライダーに変身した！

仮面ライダーディエンドである。

「士、如月弦太朗、雑魚は僕が始末する。君達はボスの相手をしてやってくれ」

「やれやれ、相変わらず人使いの荒い野郎だ…」

ディケイドはディエンドの命令にやや呆れながらも、両手をパンパンと叩き、フォーゼと目を合わせた。

「行くぜ…弦太朗」

「こっちこそな、士！」

フォーゼとディケイドは、シザースとゾルダに向かって走り出した！

「悪い子には正義のお仕置きだ」

ディエンドがディエンドライバーを構え、２枚のカードをドライバーに挿入する。するとドライバーから音声が響く。

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ．　ＳＴＲＯＮＧＥＲ，ＩＸＡ』

ディエンドライバーの銃口から3体の仮面ライダーが現れた！ストロンガー、「仮面ライダーキバ」よりイクサだ。

ストロンガー『天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ！悪を倒せと俺を呼ぶ！』

イクサ『その命、神に返しなさい』

ストロンガー、イクサは、チンピラや江良杉学院の生徒が変身したマスカレイドと交戦した！

ストロンガーが数体のマスカレイドと肉弾戦を演じる！だがマスカレイドがスタンガンを突きつけた！

しかし電気人間であるストロンガーにそんな攻撃は通用しない。その後ストロンガーが両手を擦り合わせ、その手で地面に触れると…

『エレクトロファイヤー！！』

手を擦り合わせて作り出した電気エネルギーを地面を通して放電、ストロンガーから離れたマスカレイドに流した！マスカレイドは感電し、爆発四散した！

イクサが銃と剣に変形する専用の武器・イクサカリバーの銃形態でマスカレイド数体を撃ち抜く！そしてイクサカリバーを剣形態に変形させた。
そこに、ドスを持ったマスカレイドが迫る！イクサはベルトに専用の電子キーを読み込ませた。
『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ』
電子コールと共に剣に光が宿る…その刹那、ドスを握ったマスカレイドを斬り捨てた！

フォーゼ、ディケイドはそれぞれシザース、ゾルダと交戦していた。
しかし同じ仮面ライダーということもあってか、シザース、ゾルダとともに実力は相当なもので、二人は苦戦を強いられていた。
ゾルダは自分の持っているハンドガンにカードを挿入した。
『ＳＨＯＯＴ　ＶＥＮＴ』
するとゾルダの両肩にキャノン砲を構え、これをディケイドとフォーゼに砲撃する！
「うわぁ～！！」
爆風により、二人は吹っ飛ばされた！そして倒れたフォーゼに駆け寄ったシザースがハサミを構える！

『さあ茶番は終わりだ！とっとと死ねい！』

「やられる！」

その時…！

真っ赤なバイクに乗った男が廃工場に現れた！シザースはその男が乗るバイクに轢かれた！

『ぐぇ！』

大きく吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられるシザース！

バイクに乗っていた男は赤いジャケットを身に纏った青年だった。

『なんだテメェはァ！？』

「俺に質問するな…」

赤いジャケットの青年は腰にバイクハンドルのようなバックルをつけ、手には赤いメモリを持っていた。

その姿を見たディケイドは驚きの声を上げた…

「風紀委員の照井竜（てるいりゅう）か。休日返上か？」

「そう言う会長も大変だな。気持ちはわからんでもないが…そいつは誰だ？」

フォーゼ、ディケイド、ディエンドを見た竜はフォーゼを指差した。ディケイドが答える。

「こいつは、お前のダチだ」

「よ！」

フォーゼが竜に手を振ったので竜はディケイドに呆れた。

「お前か、噂の仮面ライダー部ってのは…ふっ、まあいい。どの道学園の治安を守るのが、俺達風紀委員の仕事だ」

その時賢吾が話の輪に入った。彼はシザースに指を指した。

「照井、ひとつ聞きたい。あの超人について何か知ってるか？」

「…その姿なら写真で知っている。近頃発生している隣町の学校の生徒襲撃事件。こいつがその元凶だ」

「なんだと…？」

竜から語られる事実に賢吾が目を丸くする。そして彼はこう語った。

「江良杉学院は富豪や政治屋の子供が通う学院であることは知ってるな？この学院は政治屋から多額の賄賂を受け取って運営されてい

る。生徒達はそのコネで武器や銃火器の持ち出しを許せたりできるわけだ。そのかわり、この学院に都合が悪いことが発生したら警察や裁判所にも通さず事実を捏造、隠蔽することで無理矢理捻じ曲げ、その罪をなんも罪もない他人になすりつけて来た。おかげで強盗や殺人を犯してもまったく罪に問われん。そこで俺は、なのはやフェイトたちほかの風紀委員に迷惑をかけたくないため、危険を承知で独自に学院に潜入した。そこで手に入れた事実がその男の変身している超人だ！」

『フン、ネズミが嗅ぎまわっていたとはな…ならネズミらしく駆除してくれるワ！』

竜はシザースを指差し、彼の所業を糾弾した！

「今日、貴様を絶望の奈落に叩き落す！」

竜がそう叫ぶと手に持っていた赤いガイアメモリをシザースに示した！このガイアメモリに刻まれていた「A」の文字がバイクの計器にも見える。

『ＡＣＣＥＬ』

「変…身！」

ガイアメモリをバックルに挿入！

竜が纏うは、赤を基調とした装甲。頭部をフルフェイスヘルメットで覆われ、奥の青いモノアイが輝く！

竜の姿は、仮面ライダーアクセルとなっていた。

「さあ…振り切るぜ！」

アクセルは専用の大剣・エンジンブレードを振りかざしながらマスカレイドを斬り進んでいた。だが、大勢のマスカレイドに囲まれてしまう！

「チ…鬱陶しい！」

しかしアクセルはエンジンメモリをブレードに挿入する。

『ＡＣＣＥＬ・　ＭＡＸＩＭＡＭ　ＤＲＩＶＥ』

エンジンブレードで周囲をＡ字型に切り裂く！マスカレイドは爆発した！

「絶望がお前たちのゴールだ…！」

その後エンジンメモリは薬莢のようにブレードから排出された。

４人の活躍もあって残すはシザースとゾルダのみとなった。彼らの戦い方を、ユウキと賢吾が見守っていた。

「すごいよ！弦ちゃんも会長も照井先輩も海東さんも！」

「…ああ。あとは如月に渡したファイヤースイッチだが…」

賢吾がフォーゼに注目していた。フォーゼは賢吾に振り向き、頭をリーゼントのセットのように撫でた。

「賢吾、使えってことだよな！任せとけよ！」

「初の実戦だ、使いこなせよ！…あと名前で呼ぶな」

フォーゼは賢吾にそう言ったあと、ファイアースイッチを交換する！

なんと…フォーゼの姿が変わった！緑色の目に真っ赤な赤いスーツは、灼熱の炎を想起させる。右手には変わった形状のバズーカを持っていた。

「今度は熱いのがドッと来るぜ！！」

「それが『ファイアーステイツ』だ！『ヒーハックガン』は銃のフレームによって火炎弾と水流を撃ち分けることが出来る。うまく使えよ！」

「わかった！」

フォーゼがバズーカのヒーハックガンを構え、引き金を引き、ゾルダとシザースに火炎弾を叩き込む！火炎弾が命中し、二人は後方に弾き飛ばされる！

しかしゾルダのほうも負けておらず、自分のハンドガンにまたカードを挿入すると、今度は身の丈ほどもあるランチャー砲を構えた！砲撃し、フォーゼに命中した！

「うお！」

フォーゼはすかさず盾を構えるが、ランチャー砲の衝撃でどうしても仰け反ってしまう。

「ク…何か打開策は……ん？」

賢吾がアストロスイッチカバンを見ると、画面上のフォーゼに何らかの表示がされていた。そしてモニターを見て何かを思ったユウキは、フォーゼに叫んだ！

「盾は使わないで！」

「え…？ああ、わかった」

シールドスイッチをＯＦＦにする。

「おらぁ！オレが受け止めて…どわ！」

シールドをＯＦＦにしているので大きく吹っ飛ばされるフォーゼ。

二人がカバンのモニターを見ると、やはりフォーゼに異変が起きていた…

「やはりな…フォーゼに熱エネルギーが蓄積している…」

「ファイヤースイッチがドンドン点滅していくよ！」

二人がフォーゼを見ると、ゾルダの砲撃を受け止める姿があった。砲撃による火薬の炎熱と爆風をスイッチに吸収させてパワーに転換し、敵の飛び道具を敢えて受け流してエネルギーを蓄積させていた。

「まさかファイヤースイッチにこれほどのスペックが秘められていたとはな…」

だが賢吾の言葉を、ディケイドが否定する。

「違うな、そのスイッチには弦太朗の意思も入っている。あいつの魂が、そのスイッチの潜在能力を引き出したんだ」

そういわれた二人は、あの時のエレキステイツを思い出していた。思えば、最初はまったく使いこなせなかった状態だったが…

『癖のある奴は、ねじくれてひん曲がった部分も含めて受け入れる！！』

…弦太朗が力を受け入れたことで、エレキスイッチを使いこなせるようになったのだ。

「なら話は早い。僕にいい考えがある」

ディエンドがディケイドを呼び寄せ、賢吾に提案を持ちかけた…

「オラァ！もっと撃ってこいやー！」

フォーゼがゾルダを挑発し続け、ついにゾルダの砲撃を受け止めた！爆風によって吹っ飛ばされるフォーゼであったが…

そこに、ディケイドとディエンドが待ち構えていた。

「如月、そこを動くな！」

「え？」

賢吾の言葉にポカンとする弦太朗。

ディケイドがカードをドライバーに挿入すると…

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ．　ＲＹＵＫＩ』

ディケイドの姿が仮面ライダー龍騎となった。そして再びカードをドライバーに挿入し…

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ．　ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ』

ディケイド龍騎に龍型の篭手が装備された。そして…

ディケイド「ちょっとくすぐったいぞ」

ディエンド「痛みは一瞬だ！」

なんとディケイド龍騎がフォーゼに向けて龍型の篭手から火炎を放射し、ディエンドはガソリンの焚かれたドラム缶を蹴り飛ばし、ガソリンがフォーゼを焼いた！

「うわっ！熱！くすぐったい以前の問題じゃねえって！」

燃え盛る炎に包まれ、一人のたうちまわるフォーゼ！その様子をアクセルが眺めてこう言った。

「拷問だなこれは…」

『ハッハッハ！ついに同士討ちか！やはり黒楼州学園の生徒様はやることが違うなぁ！！』

シザースはこのやり取りで高笑いする。

「一瞬どころじゃねえだろ！しかも痛みじゃなくて熱さ…あれ、熱くない？」

しかし、しばらくすると熱さを感じなくなった。するとユウキと賢吾の声が聞こえた。

「弦ちゃん、それがファイヤーステイツの真骨頂だよ！」

「ファイヤーステイツは炎や熱を吸収する。つまり溜まれば溜まるほどその真価が発揮される！さっきのはその特性を利用した戦術だ！」

「そ、そうだったのか…サンキュ！これでやっとオレの中の怒りゲージが最大にまで溜まってきたぜ！」

龍騎の変身を解いたディケイド、ディエンド、アクセル、そしてフォーゼが臨戦した！そしてフォーゼはシザースを弾劾する。

「恐れ入ったか、外道野郎！これが絆ってもんだ！こっからはガチでやるから、覚悟しとけよ！」

『く、くっそ～！おい！！』

シザースがゾルダに命令すると、ハンドガンにカードを挿入した。

『ＡＤＶＥＮＴ』

するとバッファロー型のモンスター・マグナギガが出現した。

『このゴミクズどもを片付けるんだ！さっさとしろ！』

だが、何故かゾルダはシザースの強硬な命令に動こうともしない。そればかりか、シザースに発砲してきた！

『ぐはっ！お、お前！！』

逆上するシザースを無視し、ゾルダが土下座をした。アクセルがその意思を汲み取る…

「あの白ランの言うことをもう聞きたくない、だったら潔く俺達に倒される道を選ぶ…それが本望か？」

ゾルダはこくりと頷く。

そしてディケイドは手をパンパンと叩いた。

「大体わかった。海東と照井は下がってろ。弦太朗はあの外道の息の根を止めてやれ」

「わかってるぜ！お前らのおかげでパワー満タンだ！」

ディケイドはカードを取り出し、これをドライバーに挿入した…！

「あの白ラン外道に使われるより幾分とマシか…恨むなよ！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ．　ｄｅ，ｄｅ，ｄｅ，ＤＥＣＡＤＥ』

ディケイドと標的の間に、１０枚のホログラム状のカード型エネルギーが出現した！そしてディケイドがジャンプし、カードを潜り抜け跳び蹴り「ディメンションキック」を放った！

「ふっ！！タァァァァーーーーッ！！」

ディメンションキックはマグナギガを貫通し、やがてゾルダに命中した！

マグナギガは破壊され、ゾルダもまたディケイドに倒された。

『お、おのれ、どいつもこいつも使えん奴等ばかりだ！おい、お前らも戦うんだよ！』

シザースのまわりには、取り巻きの一人もいなかった。どうやら彼をおいて逃げたらしい。

「…チェックメイト。完全に人望をなくしたな。お前の絶望は目の前だ」

アクセルの言葉に怒ったシザースは、すぐさま逃げようとする！だが…

『待ちなさい！』

突然イクサとストロンガーに阻まれた！やがてシザースはイクサたちに羽交い絞めにされる。

『なんだお前らはぁ！俺様は逃げるんだよォ！退けって言ってんだ

よォ！』

「止めを刺せ、如月！」

ファイヤースイッチをヒーハックガンの後部にセットすると、消防車のサイレンのような音が鳴り、銃口部分がパトランプのように赤く発光した。

『ＬＩＭＩＴ　ＢＲＥＡＫ』

「これがお前に虐げられた人間たちの怒りと悲しみだ！唯も澪も律もムギも梓も岩沢もユイも関根も入江もひさ子も、向こうでお怒りだぜ！釣りはいらねえ、取っときな！」

フォーゼはヒーハックガンを構える。ゾルダやディケイドらの攻撃の熱エネルギーを吸収しファイヤースイッチに蓄積した力を、ヒーハックガンに装填する…

「必殺！ライダー爆熱シュートォーーーーーー！！」

ヒーハックガンから大火力の高熱ビームが放射された！ビームはシザースを飲み込んだ！そして羽交い絞めにしていたイクサとストロンガーも巻き添えにより消滅した。

シザースの変身を解除された白ランはボロボロとなった…

「やったぜ！」

フォーゼはディケイド、ディエンド、アクセル、賢吾、ユウキの掌を叩き、勝利を祝った！

「いや～みんなありがとな！」

「礼は要らない。俺はただ、気に入らない奴をぶっ飛ばしに来ただけだ」

「僕も同じく」

「俺も風紀委員としての任務を全うしたまでだ」

ほかのライダーもフォーゼと同じ気持ちのようだった。

「それよりも、平沢達を応援しに来たんじゃなかったのか？」

「あ！いけね！！」

「弦ちゃん早く！唯ちゃんたちが待ってるよ！」

賢吾とユウキにそそのかされ、弦太朗たちはライブ会場へ向かった…

廃工場を出た白ランは足を引きずりながら歩いていた。彼はシザ

ースとして数々の非道を行い、罪無き人々を殺めてきた男である。そしてさっき、フォーゼに敗れたままであった。

「私は誇りある江良杉学院の生徒だぞ…あんなゴミクズどもに…」

しかし、そこでカニの怪人が待ち構えていた。そしてカニに自分の腹を貫かれた！

「がっ！馬鹿な、私は…絶対生き延びて…！」

その後白ランはカニに捕まってしまう。カニは生きたままの白ランを頭をぼりぼりと食い始めた。白ランが上げる悲鳴もその耳に届かず、本能の赴くままにただ美味しそうに白ランの血肉を食らっていた…

数分後、そこには、全体が血に染まった白い制服だけが残っていた…

自業自得といえる、白ランの最期であった…

コンサート会場に急ぎ足でたどり着いた弦太朗たち。そこには、新八達が会場のロビーで待っていた！

ルフィ「よお弦太朗！待ちくたびれたぜ！」

新八「弦太朗君！無事だったんだね！」

「へっ、まあな！」

弦太朗の頭に包帯と、頬に絆創膏が貼られていた。

雄二「弦太朗…大丈夫か？」

ハヤテ「ひどい怪我ですよ！あまり無理なさらないほうが…」

「何言ってんだ！怪我は男の勲章ってな！」

「…こいつは危険を承知で、あの江良杉学院の連中を叩きのめしたんだからな」

賢吾が弦太朗の勇姿を皆に聞かせる。

スタン「だけど、弦太郎が帰ってきてくれてなによりだぜ」

美波「まったくよ、みんな心配してたんだから！」

星奈「そうよ…あんたが死んだら、あたし」

小鷹「どうした、星奈？まさかひょっとして」

星奈「や、妬いてないわよ！」

沖田「やれやれ、土方が死んだと思ってたぜ」

土方「おい、ＫＹ。いったん表出ろや」

弦太朗が無事帰ってきた皆の反応は、歓喜する者、驚く者、涙し

た者、ほっとした者、皆それぞれだった。

政宗「どうやら間に合ったようだな。ちょうど唯達がＰａｒｔｙする時間だぜ」

司馬昭「ガルデモも準備完了だとさ。ホラ、もたもたしてると聴き逃しちまうぜ」

「おう！ベストコンディションで聴きに行くぜ！」

「じゃあ怪我してないのは何なの？（笑）」

ユウキに突っ込まれながら、弦太朗はコンサート会場に向かった。

やがて、放課後ティータイムとガルデモのライブが始まった。

「唯、澪、律、ムギ、梓、岩沢、ユイ、入江、関根、ひさ子！頑張れよ！応援してるぜ！」

ライブに間に合い、椅子に座っていた弦太朗は、それぞれのバンドに手を上げてアピールし、精一杯応援した。彼の姿が見えた女の子達は、笑顔で応えた。

無事でよかった…

だったら頑張らなきゃ…

弦太朗、みんな、聴いてくれ…！

私達の演奏(きずな)を…

放課後ティータイムは「ふわふわ時間」、ガルデモは「Ｃｒｏｗ Ｓｏｎｇ」を演奏し、歌いだした…

彼女らの歌は弦太朗たちの耳に入り、それはとても輝いているように聞こえ、思わず魅了された…

演奏が終わると、観客から盛大な拍手が鳴り出した。皆は「ありがとうございます！」と手を振ると、そのままステージから降りていった…

そして放課後ティータイムとガルデモは無事演奏を終えた。ライブの結果は、放課後ティータイムとガルデモが同時に優勝を飾ったのだった…

「うおぉぉぉ～～～～！やったじゃねぇかお前ら！！」

弦太朗は涙しながら唯と岩沢に抱きついた。

「…何言ってるんだ。これも全部お前のおかげだよ。歌星やユウキから聞いたんだ、江良杉の連中もお前が叩き潰したって。私達のために、ありがとう！」

「弦ちゃんがいなかったら、私たちもうダメかと思ってたよ！弦ちゃんがギー太を取り返してくれたから、私たちは楽しく歌えたんだ。ほんとにありがとね、弦ちゃん！」

岩沢と唯が礼を言った後、ユイもまた弦太朗に感謝する。

「先輩はあのアホどもからあたしとひなっち先輩を助け出してくれました…！ありがとです！あたしもあんなことされてなかったら先輩と一緒にブッ殺してやりたかったです☆」

すると背後から声が聞こえてきた。

「彼女達が歌うのは、その歌で皆の笑顔と絆をつなげるためだ」

弦太朗が振り向くと、士がいた。

「士…」

「彼女達は、努力して完成させたその歌で誰かを笑顔にしたい、そう信じてる。苦労しても挫折しても、共に仲間を励まし、助け合う。彼女達によって紡がれる歌は、その苦労した分以上に輝くものだ」

すると突然岩沢が士の前に来た。

「あの、会長！」

「ん？」

岩沢は士に優勝賞金の入っている封筒を渡した。

「このお金、学園に寄付します！いつか、私達軽音部を救ってくれたお礼です！」

しかし士はこんなことを言い出した。

「いらねえよ、その金は軽音部で使え」

「え？でも…」

士は岩沢の肩を掴んで話し始めた。

「俺はな、お前らの音楽を聞いてると何かいいことが起こりそうでたまらないんだよ。お前らの演奏も、ボーカルもな。だからその金は俺には不釣合いだ。もし俺に渡しちまったら何に使うかわからねぇだろ？これからもいい歌を作る為にも、その金は大事にしろよ。折角俺が繋げてやった絆だ。無駄にするなよ」

「会長…はい、頑張ります！」

「私達も頑張ります！」

唯も返事をした。放課後ティータイムとガルデモの笑顔を見た士は弦太朗にそれを見せた。

「…知ってるか？こいつらの笑顔……悪くない」

「ああ、そうだな…」

弦太朗も彼女達の笑顔に、微笑んだのであった…

約・束・交・差（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『仮面ライダーディケイド』
門矢士、海東大樹

『仮面ライダーＷ』
照井竜

『けいおん！』
平沢唯、秋山澪、田井中率、琴吹紬、中野梓

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
岩沢まさみ、ユイ、入江、関根、ひさ子、

『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』
モンキー・Ｄ・ルフィ

『銀魂』
志村新八、土方十四郎、沖田総悟

『ハヤテのごとく！』
綾崎ハヤテ

『バカとテストと召喚獣』
坂本雄二、島田美波

『僕は友達が少ない』
柏崎星奈、羽瀬川小鷹

『テイルズオブデスティニー』
スタン・エルロン

『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
伊達政宗

『真・三國無双シリーズ』
司馬昭

『特別出演』
仮面ライダーストロンガー
仮面ライダーイクサ
仮面ライダーゾルダ
仮面ライダーシザース

鳴滝：おのれディケイド！お前のせいでこの世界が破壊されてしまった！

作者：ここで生徒会長編は終了です。ご愛読ありがとうございます。
次回から短編に入ります。次回からも応援よろしくお願いします！

静・寂・閑・雅（前書き）

恒例のキャストの皆様ですが、今回は前書きで掲載いたします。

『銀魂』
土方十四郎
『新機動戦記ガンダムＷ』
ヒイロ・ユイ、トロワ・バートン
『機動戦士ガンダム００　セカンドシーズン』
刹那・Ｆ・セイエイ
『新世紀エヴァンゲリオン』
綾波レイ
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
風魔小太郎
『真・三國無双』
周泰
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
立華奏
『バカとテストと召喚獣』
ムッツリーニ、霧島翔子
『涼宮ハルヒの憂鬱』
長門有希
『機動戦艦ナデシコ』
ホシノルリ
『緋弾のアリア』
レキ
『テイルズオブシンフォニア』
プレセア・コンパティール
『クイズマジックアカデミー』

ミュー
『これはゾンビですか？』
ユークリウッド・ヘルサイズ
『アルカナハート』
リーゼロッテ・アッヒェンバッハ
『真・恋姫無双』
恋
『ギャラクシーエンジェル』
ヴァニラ・H

静・寂・閑・雅

アニメ、マンガ、ゲーム、ラノベなどの業界において、近年いちブランドとして定着した無口キャラクター。本会議は、彼らの魅力や欠点について改めて認識し、周囲に与える印象や対人関係における摩擦、注意点を話し合う無口キャラクターの、無口キャラクターによる、無口キャラクターのための会議が本校の会議室にて行われました。

土方「土方十四郎だ。今日はわざわざ時間を割いてこの会議に出席してくれたこと、うれしく思う。俺も現場を任された身として、最大限有意義な会議になるよう努力するつもりだ。お前達も意見があったら遠慮なく口を開いてくれて結構だ。では、よろしく頼む」

ヒイロ「……」

トロワ「……」

刹那「……」

風魔(ふうま)「……」

周泰(しゅうたい)「……」

ムッツリーニ「……」

翔子「……」

奏「……」

長門「……」

ルリ「……」

レキ「……」

プレセア「……」

ミュー「……」

リーゼロッテ「……」

恋「……」

ヴァニラ「……」

ユークリウッド（以下ユー）「……」

綾波（あやなみ）「……」

土方「……あー、口を開いてくれて結構だ。…さて、トロワ・バートン。何か初めに言っておきたいことがあったら構わねぇ。遠慮なく言ってくれ」

トロワ「……特にない」

土方「……あー、何でも良いぞ。そうだ、俺特製のマヨネーズ茶だ。会議の席では何かと体力を使うからな」

トロワ「……遠慮する」

土方「……そうか。まぁその、何だな、よろしく頼む」

奏「……」

長門「……」

ルリ「……」

トロワ「……」

風魔「……」

リーゼロッテ「……」

恋「……」

ヴァニラ「……」

刹那「……」

ユー「……」

綾波「……」

周泰「……」

ムッツリーニ「……」

レキ「……」

プレセア「……」

ミュー「……」

ヒイロ「……」

翔子「……」

土方「（空気重いな…この会議）……ゴ、ゴホン！ではまず、そうだな、今回も物静かな雰囲気なところ悪いのだが、俺から議題を提出させて貰おう。良いだろうか？」

風魔「……」

長門「……」

プレセア「……」

ムッツリーニ「……」

ミュー「……」

リーゼロッテ「……」

ヴァニラ「……」

ユー「……」

綾波「……」

土方「…いいんだよな？」

ヒイロ「…任務了解」

土方「……そうか。それじゃあまず、どの程度までの無口が許されるのか、という点について各自の持論を拝聴したいのだが、誰かあるか？」

トロワ「……」

刹那「……」

周泰「……」

奏「……」

翔子「……」

長門「……」

ルリ「……」

レキ「……」

恋「……」

土方「……ねぇ、みてえだな。それじゃあ次の議題に進むか」

ヴァニラ「……饒舌ですね」

土方「俺か？そうだな、俺はお前らと違って徹底的に無口じゃねえ。長ゼリフも喋るし、ツッコミだってする。周りが賑やかだから無口キャラに見えるのかも知れねえが、どちらかと言えばクール系だな」

リーゼロッテ「ただ地味なだけ……」

土方「オイ！やっと口利いたと思ったらずいぶん辛辣なセリフを吐くなアンタ！」

ルリ「……」

ムッツリーニ「……」

レキ「……」

恋「……」

土方「……だから、そうだな。無口すぎると地味になってしまうのは止むを得ん部分はある。どの程度までの無口が許されるのか、という点はかなり重要だと俺は思う。やはり俺としてはその加減を話し合いたい。どうだ？何か意見は」

プレセア「……」

ミュー「……」

ヒイロ「……」

翔子「……」

奏「……」

土方「……いや、だから何か喋ろうぜ。おめぇらは気づいてないのかも知れねぇが、さっきから俺ばかり話してるぞ」

すると、刹那が突然周りを見て周囲に言い放つ。

刹那「お前は…歪んでいる！」

土方「歪んでいる？…そうだな、各自の器によって許される無口の度合いは変わって来る。アンタはそう言いたいわけだな？なかなか良い意見じゃないか。そういうのが聞きたかったんだ」

翔子「……器を見せて」

恋「……」

長門「……」

ルリ「……」

トロワ「……」

ヴァニラ「……」

ユー「……」

リーゼロッテ「……」

土方「いや、そんな張り合わなくても良いから。なんか喋ろうとしてとして途中で詰まるのはやめてくれ。ただでさえ空気が重いんだ。

余計に話し辛くなるから」

ルリ「……」

レキ「……」

土方「……綾波、何か意見はないか？」

綾波「……そうね。無口キャラが男性か女性かによって、度合いは大きく違って来ると思うわ」

土方「なるほど、そうだな。男の無口はクール系に走るしかないが、女性の無口は一部マニアを強烈に惹き付けるものがあると聞く」

翔子（ジーーッ）

プレセア（ジーーッ）

恋（ジーーッ）

ミュー（ジーーッ）

奏（ジーーッ）

ユー（ジーーッ）

土方「いや、俺は違うぞ！そんなマニアじゃないからな！無言で威圧するのははやめてくれ」

周泰「……土方、少しいいか……」

土方「ん、何だ？意見があるなら言ってくれ。歓迎する」

周泰「……排尿に行ってもいいか……」

土方「…いや、行けば良いだろう。そんな、授業中じゃねぇんだから、俺に断りを入れられても困る」

周泰「……本来なら会議の前に用を済ませたかったが……急な呼び出しで準備を怠ってしまい……」

土方「いや、そんな説明はいいから！早く行けばいいだろう！別に聞いてねぇし、聞きたくもねえし、そんな話をされても困る」

周泰「……かたじけない……」

そして周泰は会議室から出て行った。

土方「やっとまともに話したと思ったら何なんだ、一体……どこまで進んだのか忘れてしまった」

恋「……もう、おしまい？」

土方「いや、俺としても終わりたいんだがそうもいかんだろう」

ヒイロ「…命なんて安いものだ。特に俺のはな！」

土方「ん？　突然に何を言っているのか解らんが、そうだな。無口な中にもキラリと光る決め台詞は必要だ。それがないと本当にただ存在感がないだけのキャラになってしまうからな。無口キャラだからこそ決め台詞が必要という見方は正しいだろう」

ミュー「決め台詞ですか？……にゃ～ん」

長門「とーりまーせー、とーりませー」

トロワ「兵などしょせん捨て駒だ…」

ヴァニラ「あなたに…力を……」

土方「いや、だから別に張り合わなくても良いんだが、なんで中の人ネタなんだ？」

ムッツリーニ「……うっ…ブハァッ！！」

突然ムッツリーニが鼻血を噴き出した！

土方「……まぁそれでも良いんだが、それ以前にお前の決め台詞はそれで良いのか？何か疑問はないのか？」

ユーがメモとボールペンを取り出し、何かを書き始めた。

ユー『面白い』

土方「…いきなり失礼だな。ていうかメモでしか意思疎通できねえのか？」

ユー『私の言葉は本当にその言葉通りになるから筆談で』

風魔（ひゅぅぅぅ…スパン！！）

土方「それはセリフじゃねぇし！効果音だし！」

周泰「……敵将…俺が討ち取った……」

土方「いやそれは無双で敵将を討ち取ったときのの共通セリフだし。誰でも言えるし。というか帰って来てたんだな、アンタ」

周泰「……いや……便所がどこにあるか解らず……」

土方「売店のおばちゃんにでも聞けばいいだろう！オメー無口って言うよりただのダメ人間じゃねぇかぁぁぁぁ！」

刹那「お前は、歪んでいる…」

周泰「……申し訳ない……本来なら会議の前に用を済ませたかったが……急な呼び出しで準備を……」

土方「いやその話はもう聞いたから！どうしてそんな話をする。そんな事情を聞いて俺はどうすりゃいいんだ！早くおばちゃんに聞いて用を済ませて来い」

周泰「……かたじけない……」

そして周泰は会議室から出て行った。

土方「…やれやれ、無口キャラというのは本当に些細な違いで印象が１８０度変わってしまうものだ。おめぇらも気をつけるこった」

レキ「……」

プレセア「……」

ヴァニラ「……」

トロワ「……」

ミュー「……」

奏「……」

土方「別に同意を求めたわけじゃねえが、そう黙り込まれると辛い物があるな……」

リーゼロッテ「……ねぇ、もうちょっと賢くなって。馬鹿の相手、疲れるから」

土方「軽くショックを受けたのは事実だな。アンタのせいでダブルショックだ」

刹那「…お前は歪んでいる」

土方「……アンタそれしか言うことねぇのか？」

長門「…土方十四郎」

土方「ん？何だ、長門」

長門「『お前は…歪んでいる！』『お前は、歪んでいる…』『…お前は歪んでいる』。刹那・F・セイエイの発言を考察すると、完全に同一というわけではない」

土方「…そういうくだらん細かい部分よりも本題の方を考察して貰いたいものだな」

ルリ「……」

綾波「……」

ヴァニラ「……」

奏「……」

ヒイロ「……」

ユー「……」

リーゼロッテ「……」

風魔「……」

長門「……」

土方「…ごほん！…え～、無口メンバーは周囲にどういう目で見られているのか？無口メンバーは他人の目を気にしない傾向があるが、そこはやはり円滑な対人関係を築くうえでも重要だと俺は考える」

ムッツリーニ「……」

プレセア「……」

刹那「……」

恋「……」

レキ「……」

翔子「……」

トロワ「……」

ミュー「……」

土方「……まぁ、あくまで俺がそう考えているだけなのかも知れんが、とかく風魔、土屋、霧島、長門、トロワ、綾波、レキ、ミュー。お前らには共通してミステリアスな雰囲気があるな。それについて、無口であることとの関連性についてはどう考える？」

長門「……」

トロワ「……」

ミュー「……」

翔子「……別に」

土方「……そ、そうか。俺としてはそういう何を考えているのかよく解らんところにミステリーを感じてしまうのだがな」

綾波「……」

ムッツリーニ「……」

風魔「……」

レキ「……」

土方「……あぁ、まぁ、そういうことで…次はヒイロ、セイエイ、立華、恋、プレセア、ホシノ、リーゼロッテ、ユークリウッド、ヴァニラ。お前達には物悲しげな雰囲気があるな。陰があるとでも言おうか。その辺について、無口であることとの関連性はどう見る？」

ヒイロ「……」

プレセア「……」

ルリ「……」

恋「……」

ヴァニラ「……」

土方「…まぁ、この会議に限っては俺の方がよほど陰に満ちているよな。この陰鬱な雰囲気…本当に気が滅入りそうだ。葬式みてぇな気分になる」

刹那「……」

奏「……」

リーゼロッテ「……」

ユー「……」

土方「…ま、まぁ、俺の愚痴こそどうでも良いよな。余計に空気を重くするようなことを言ってすまなかった。あー、さて、無口メンバーにはそれぞれ雰囲気に共通点があることが解った。周囲の目にしてもそれは同じだろう。だが、例外として無口であるにも関わらず、ミステリアスでも陰を背負ってるようにも見えないメンバーも存在する。内向的だとか、人見知りといった主にマイナスイメージだな。例えば俺にもそういった要素がないわけじゃないが、その違いはどこにあるのだろうか？」

翔子「……目つき」

ヒイロ「……目つきだ」

長門「……目つき」

ルリ「……目つき」

綾波「……目つきね」

レキ「……目つき」

プレセア「……目つきですね」

風魔『（書き書き…）目つき』

ミュー「……目つき」

周泰「……目つき……」

恋「……目つき」

刹那「……目つきだな」

奏「……目つきよ」

ヴァニラ「……目つきです」

ユー『目つき』

リーゼロッテ「……目つき」

トロワ「……目つきか」

ムッツリーニ「……目つき」

土方「何だその一体感はァァァァァ！やっとみんなで喋り始めたと思ったらお前ら、この！俺の目つきはそんなに悪くねぇだろ！そし

て周泰！何ドサクサに紛れて帰ってきてやがる！しかも何を平気な顔して集団に混ざっている！自分のポジションをよく考えた行動をしろ」

周泰「……わかった……それよりも……売店の場所を教えてくれ……」

土方「まだトイレに行ってなかったんかいィィィ！！」

周泰「……本来なら会議の前に用を済ませて……」

土方「その話はもう良いんだ！売店についてはその辺の人に聞けばいいだろ！手遅れになる前に早く行け！そして出来ればもう帰って来ないでくれ！」

周泰「……かたじけない……」

そして周泰は会議室から出て行った。

土方「ま、まぁ、俺も言い過ぎたがな。とにかく無口であることはマイナスイメージを生む原因にもなりかねない、言わば諸刃の剣なのではないか？と俺は言いたかったわけだ」

長門「……」

レキ「……」

トロワ「……」

恋「……」

風魔「……」

ルリ「……」

土方「…ま、まぁ、あくまで俺がそう思っただけなんだが」

綾波「……」

ユー「……」

ヒイロ「……」

リーゼロッテ「……」

翔子「……」

土方「だから何か喋れよ！『ああ』とか『うん』とか『そうだね』だけでもいいんだ！本当に社交性のねえ連中だな！
…あー、そうだ。お前達の対人関係はどうなっている？これを聞きたかったんだ。とかく無口メンバーは誤解を与えやすいからな。どうだ、お前ら。人間関係は上手く築けているか？」

プレセア「……」

ムッツリーニ「……」

ミュー「……」

刹那「……」

ヴァニラ「……」

奏「……」

土方「……どっちなんだ……まぁ、お前らはどうか知らんが、周りに理解者がいるに越したことはねえな。特にレキ、風紀委員としてお前とも付き合いも長いが、その辺りどうだ？」

レキ「……はい。ノリに付いていけない上司がいます」

土方「そうか、後で近藤さんにはキツく言っておこう」

レキ「……ふぅ」

土方「な、何だ、そのため息は！俺か！？俺のことを言っていたのか！？お前らはどういう目で俺を見てるんだ！？俺が気になって仕方がない！」

長門「……」

ユー「……」

綾波「……」

ヒイロ「……」

ルリ「……」

レキ「……」

刹那「……」

ヴァニラ「……」

土方「どうなんだ、一体！しかもだんまりかよオメェら！アニメ版のカービィでももうちょっとは喋るだろ！」

奏「…土方君」

土方「なんだ！？」

奏「アニメ版のカービィは、片言だったり『ぽよ』としか喋ることができないであって、口数自体が少ないわけじゃないわ」

土方「だからそんなことはどうでもいいんだ！ニュアンスが伝われば それで良いんだ！」

風魔「……」

リーゼロッテ「……」

翔子「……」

プレセア「……」

トロワ「……」

ムッツリーニ「……」

ミュー「……」

恋「……」

土方「他に言うことねえのかよ！そもそもお前ら黙ってばっかりで、何のために会議に出席してるんだ！何を求めてこの場に出席してるんだ！やる気はあるのか！？」

恋「……飽きた」

ルリ「バカばっか」

リーゼロッテ「つまんない。帰る」

プレセア「私にかまわないでください」

ヒイロ「……話す事など無い」

土方「なら来るなよ！何しに来たんだ、おめぇらは！」

奏「……結弦のえっち」

刹那「…俺は、新世界の神になる」

土方「だから張り合わなくてもいいんだ！脈絡なく中の人ネタされてもリアクションに困るから！」

レキ「……クールと地味とは紙一重」

ヴァニラ「……でも、それ自体が個性となる人もいます」

恋「……恋はただ、やりたい事をしたいだけ」

ムッツリーニ「……たとえ地味といわれようと、俺は俺の道を行く」

リーゼロッテ「……だって個性がないと生きてる意味ないし」

ミュー「……わたし達がここにいる理由はそれだけ…」

翔子「……そして無口とは孤独なもの」

綾波「……冷たい印象は避けられないわ」

長門「……理解者は得難い」

トロワ「……だが、往々にして俺達には周囲に理解者が配置される」

ルリ「……仲間、友人、兄弟、ときには恋人であったり」

周泰「……大地の恵みか、神の意思か……」

ヒイロ「……俺達と外の世界を繋ぐ彼らに、対人関係は集約される」

プレセア「……頼りきりになるのは心苦しいけれど」

奏「……二人で作る世界もあるわ」

刹那「……だからこそ示さなければならない…世界はこんなにも簡単だということを。…そうだ、なぜなら俺達が……ガンダムだからだ」

風魔（シュパンッ！！）

ユー『これが結論』

土方「な、何を言ってるんだ、オメェら急に！なんだその息の合った連携トークは！何急にまとめてるんだ！卒業式か何かか！？オメェらちゃっかり俺が散々そういった方向に話を持って行こうとしていただろう！何が神の意思だよ！あとどうして効果音と筆談で締めるんだ！最後のセリフ、何でガンダムなんだ！意味が解らん！お前

ら本当は仲が良いのか！？ここで仲悪いの俺だけか！そうなのか！？そして周泰、もう帰ってくるなと言っただろ！」

レキ「……」

ヴァニラ「……」

恋「……」

ムッツリーニ「……」

リーゼロッテ「……」

ミュー「……」

翔子「……」

綾波「……」

長門「……」

トロワ「……」

ルリ「……」

周泰「……」

ヒイロ「……」

プレセア「……」

奏「……」

刹那「……」

風魔「……」

ユー「……」

土方「何でまただんまりなんだ！ひょっとして俺だけが無視されているのか！？　そうなんだな！？俺ばっかりこんなに喋らせて……もう無口キャラとは言えねぇと、そういうことか！？ああ、そうだよ！原作での俺は、年甲斐ねぇうえに一人の女のケツ追うしか能のねえ同僚の脇にクールに佇んで、同僚がバカやらかした際にツッコミするポジションなんだよ！ああ、そうさ！無口は無口でもお前らとは根本的に違うんだ！オメェらがそう来るんなら俺ももう喋らんぞ。これから一切、一言も言葉を発することはねえ！誰も喋らない会議の重苦しさをオメェらも味わうがいいさ！」

翔子「……」

ヒイロ「……」

長門「……」

ルリ「……」

綾波「……」

レキ「……」

プレセア「……」

風魔「……」

ミュー「……」

周泰「……」

恋「……」

土方「……」

刹那「……」

奏「……」

ヴァニラ「……」

ユー「……」

リーゼロッテ「……」

トロワ「……」

ムッツリーニ「……」

奏「……」

長門「……」

ルリ「……」

トロワ「……」

風魔「……」

リーゼロッテ「……」

恋「……」

ヴァニラ「……」

刹那「……」

ユー「……」

土方「……」

綾波「……」

周泰「……」

ムッツリーニ「……」

レキ「……」

プレセア「……」

ミュー「……」

ヒイロ「……」

翔子「……」

長門「……」

トロワ「……」

ミュー「……」

翔子「……」

綾波「……」

ムッツリーニ「……」

風魔「……」

土方「……」

レキ「……」

ヒイロ「……」

プレセア「……」

ルリ「……」

恋「……」

ヴァニラ「……」

刹那「……」

奏「……」

リーゼロッテ「……」

ユー「……」

ヒイロ「……」

トロワ「……」

刹那「……」

風魔「……」

周泰「……」

ムッツリーニ「……」

翔子「……」

奏「……」

長門「……」

ルリ「……」

レキ「……」

土方「……」

プレセア「……」

ミュー「……」

リーゼロッテ「……」

恋「……」

ヴァニラ「……」

ユー「……」

綾波「……」

奏「……」

長門「……」

ルリ「……」

トロワ「……」

風魔「……」

リーゼロッテ「……」

恋「……」

土方「……」

ヴァニラ「……」

刹那「……」

ユー「……」

綾波「……」

周泰「……」

ムッツリーニ「……」

レキ「……」

プレセア「……」

ミュー「……」

ヒイロ「……」

翔子「……」

土方「なんか喋れよ！！何がしてぇんだよおめぇらは！！俺もだんまり始めてからもう5分は経ってるぞ！！原作の真撰組動乱編でもこんな孤独感を味わったことがないぞ！！」

その時、ルリの携帯が鳴り出した。彼女が電話を取る。

ルリ「……あ、はい。もしもし。……はい、わかりました。土方さん」

土方「ん、どうした？」

ルリ「次は常に瞳孔が開いてそうな生徒、およびいつか後輩に殺されそうな生徒、レッツパーリーと叫びたい生徒、心の中ではオタクでありたい生徒、あと、マヨネーズがないと死んでしまいそうな生徒による会議を行うので、第二会議室へ移動して下さいとのことです」

土方「誰からの電話だ！！何の会議だ！！つうかまるっきり俺のことといってんじゃねえか！！」

するとその時、会議室の窓から砲弾が直撃した！

ドカァァーン！！

土方「おい誰だテメエ！まだ会議は終わってねえぞ！おい、おめえらも逃げるぞ！」

だが土方以外の１８人が一列に並んで会議室の入り口をふさいでいた。

土方「何やっとんじゃぁぁぁぁぁ！！お前らグルなのか！？お前ら本当に俺のことウザがってんのか！？」

そこでバズーカを持った沖田が会議室の窓から這い上がってきた。

沖田「ちっ、失敗したか」

土方「失敗したかじゃねえだろ！まさかテメエか、仕組んだのは！？」

沖田「いやぁー新しい暗殺方法を編み出したんで、立華や霧島たちの協力で試していただきました。交渉するのに手間かかりましたぜぃ」

土方「やっぱりおめえかよォォォォォォォォォォ！！」

そしていつの間にか窓の外には沖田と無口メンバーがいた。ドアと窓の鍵は完全に閉まっている。

土方「おいオメェら、何で総悟と一緒にいるんだ！謀ったな！？謀ったなオメェらァァァァァ！！」

そして会議室が突然煙りかかった。

土方「何じゃこれはぁァァァァァァァァァ！！」

沖田「それは俺が仕掛けた毒ガスでさぁ。早く出ないと大変なことになっちまいますよ。ああ、その窓は強化ガラスですんで」

土方「っざっけんなーーーーーーーーーーー！！」

窓の鍵を開けようとするが、外側から何かの細工が施されていて簡単に開かない。土方は必死に窓を叩く。

綾波「大丈夫。あなたは死なないわ」

土方「死ぬわ！こんなことされたら！何他人事みてぇに抜かしてんだオメェは！？」

長門「…頑張って」

土方「オメーまでそんなこと言うのか！？だったらそれよりも早く助けろ！！」

しかし、窓の外には誰もいなかった。

土方「誰もいねぇぇぇぇ！！あいつらとうとう逃げやがったな！？」

どうやら無口メンバーは土方をおいて逃げたようである。

土方「チクショォォォォォォ！！総悟、あとでぶっ殺してやらぁぁぁぁぁぁぁ！！」

静・寂・閑・雅（後書き）

ヒイロ：……。
トロワ：……。
刹那：……。
風魔：……。
周泰：……。
奏：……。
翔子：……。
ムッツリーニ：……。
長門：……。
ルリ：……。
レキ：……。
プレセア：……。
ミュー：……。
リーゼロッテ：……。

恋：……。

ヴァニラ：……。

ユー：……。

綾波：……。

土方：オメェらァァァァァァァ！！見てねえで早く助けろォォォォォォォォォ！！

本日の黒幕

『銀魂』

沖田総悟

逆・襲・宣・言（前書き）

ハヤテ：……今回は悪ふざけネタがあります…うぅぅぅ…

咲夜：……これほど強烈なもん…うちはじめてや…うぅぅぅ…

ナギ：……覚悟を決めたら…注意して読んでくれ…うぅぅぅ…

ヒナギク：……心の準備はいいかしら…？…始まるわよ…うぅぅぅ…

逆・襲・宣・言

ある古びた部室。

ゼロス・ワイルダーが近藤勲、サンジ、桜井智樹、クルツ・ウェーバーの４人を呼び寄せていた。そのほかにもモブキャラ十数名もここに呼び出されている。前のほうには、おそらく自作と思われる、顔のようなロゴマークらしき絵が描かれた旗が貼っていた。

教壇に立っていたゼロスは頭をかきながら皆に号令した。

「え～、本日から我々に新しい仲間が加わることとなった。さ、入りたまえ」

ドアから二人の男が入ってきた。

一人は糸目の少年で、どうやら二人のうちの年下のようだ。

「どうも、中等部のタケシです。ゼロス先生から話は伺い、先生にだまされてここに来ました！今日からよろしくお願いします！」

「タケシ先輩！オヒサっす！」

智樹が席を立った。彼もタケシと同じく中等部だからだ。

「智樹も元気してるな！同じ中学生同士、仲良くやろうぜ！」

そしてもう一人は長身で銀髪、色黒の青年だ。

「俺はロニ・デュナミスだ。スカートめくりにかけては右に出る奴はいないと思っている。スカートめくりならこのつむじ風の俺に任せておけ！」

まわりから「オーッ」という声が上がる。別名を持っているからして、彼は相当な手練であろう。

「というわけで、今日からこの二人が入ってくることとなった。みな、よろしく頼む！」

やがて男達から拍手喝采が響いた。

「さて、近藤君やサンジ君達は存じていると思うが、先日のバカップル襲撃作戦は失敗に終わった。だが俺様達はまだあきらめてはいない！」

この集団こそ、ゼロスが顧問を務める非公認の部活「恋仲冷遇部」であった…

かつて、バカップル殲滅のためにゼロスがスケベな男達を集めて恋仲冷遇部と称し、その活動を始めていた。学園中の女の子のセクハラや女子寮の風呂覗きなどの数々の奇行で、その勇名を（ある意味）轟かせていった。

そして先日のバカップル襲撃作戦というのは新設されたばかりの

遊園地にカップルが集まるだろうということで実行された作戦で、この日は恋仲冷遇部の初めての野外活動ということで行われたものだが、何故かカップルの彼女のほうが何者かに憑り付かれたかのように変貌し、散々に暴れまわったおかげで作戦は失敗に終わった。
当然非公認なので部費は出ないため、創部されて瞬く間に経済状況は火の車となった。おかげで近藤、サンジ、智樹、クルツは1週間の停学処分を食らい、ゼロスも減給のうえ1週間の謹慎処分となっていた。

なお、この部活動には土屋康太（ムッツリーニ）も参加していたが、彼の素性を調べた際、「ムッツリーニは寡黙な性格の上に男としては比較的かわいらしい容姿なので女性に人気がある」という理由だけで退部にさせられた。また、強制入部のようなものだったので本人としてもあまり乗り気ではなかったらしい。

「というわけで、恋仲冷遇部の活動を始めるとする！」

かくして、恋仲冷遇部の活動が始まった…

高等部のキャンパス。
クルツとサンジとロニはある人物らに目をつけていた。
黒いテンガロンハットを被り、全身黒ずくめの衣装を身に纏った銀髪蒼眼の青年と、赤いちょんまげの古風な少年が、スタイル抜群の女二人をはべらしていた。女は一方は黒髪ポニーテールで赤いメッシュがあり、もう一方は金髪の縦ロールでツーサイドトップだった。

クルツがサンジとロニにこう言った。

「あいつだよ、サンジ、ロニ。ハーケン・ブロウニング。学園ランクは『カッコつけ野郎』。『風来坊』の前田慶次と同じくいろんなところに遊びまわっては女にちょっかい出してるいけすかねえ野郎だ。あのアレディ・ナアシュってやつも気にいらねえ。学園ランクの『修行バカ』のくせしてあのネージュと付き合ってるって話だ。ていうかこいつ見てると俺の知り合いになんとなく似てるんだよな〜。くそ真面目な性格とか、声とか」

「まったくだぜ、クルツ、ロニ。あの二人、楠舞神夜(なんぶかぐや)ちゃんとネージュ・ハウゼンたん。エステルちゃんと同じ『姫』を二人もはべらすなんて、ムカつく野郎どもだぜ！しかもすげーおっぱいでよ、神夜ちゃんネージュたんそろって『ダブル乳』取るなんて…許せねぇ！」

「同感だ、クルツ、サンジ。しっかし、神夜もネージュもすごいスカートしてるなぁ。もろパンチラしてるんじゃね？めくりがいがあるぜ。あんなチャラ男とムッツリの彼女にしておくには絶対に惜しい！」

ちなみにクルツのいうハーケンとは黒いテンガロンのほうで、アレディはちょんまげのこと。サンジが言う神夜とは黒髪ポニーのほうで、ネージュとは金髪縦ロールのこと。そしてロニの言うチャラ男はハーケンで、ムッツリとはアレディのことだ。

ちなみに、二人が言っている通り黒楼州学園は、「学園ランク」なるものを生徒、教職員問わず採用している。個性が強すぎる生徒、教職員に裏で付けられているあだ名のようなものだ。生徒自身の個性を尊重し、個性を伸ばすことこの学園の校風を面白がった一部の人間によって勝手に付けられ、広まり、やがて公式化したようなも

のらしい。ようするに、仮面ライダーフォーゼの舞台・天ノ川学園高校でつけられる「学園ヒエラルキー」と似たようなものである（少し意味が違うが）。

たとえばこの学園における学園ランクは、如月弦太朗は「バッドボーイ」、志村新八は「地味」、モンキー・D・ルフィは「麦わら」、三千院ナギは「ツンデレ」、涼宮ハルヒは「俺様女」、平沢唯は「うんたん」、柏崎星奈は「タカビー」、伊達政宗は「筆頭」、吉井明久は「バカ」、上条当麻は「不幸」などと呼ばれている。ちなみにサンジとクルツとロニは「スケベ」または「残念なイケメン」、近藤は「ゴリラ」または「ストーカー」。

クルツは軍用の指向性マイクを取り出す。彼の持ち物にサンジとロニが驚きの色を隠せない。

サンジ「すごいもの持ってるな」

「何いってんだ。俺はスナイパーだぜ」

ロニ「えー、スカートめくりマシンはねえのか？」

「そんなもんはねえ」

クルツは指向性マイクをハーケン、神夜、アレディ、ネージュに向けた…

神夜「それにしても、こないだのライブの放課後ティータイムとガルデモの歌はよかったですね～♪最高極まりないです！」

ハーケン「ああ、俺のハートとソウルに最高に響くソングだったぜ。やるじゃねえか、あのエンジェルガールズは」

ネージュ「ハートとソウルはド酷似ようなものですけれど？」

ハーケン「……男ってのはそういうのを気にしたら負けだ」

アレディ「…そう言うものなのですか？ハーケン殿」

神夜「私、気分がいいです！明日はデートにしましょう、ハーケンさん！」

ネージュ「ちょ！突然なんてことおっしゃいますの！？」

ハーケン「…ＯＫ、プリンセス・カグヤ。明日はデートだ」

神夜「はいっ、楽しみです！なんだかドキドキ極まりないです♪」

ネージュ「ちょっと、何話を勝手に進めてらっしゃいますの！？私もデートに行きますわよ、アレディ！」

アレディ「私もですか？構いませんが…？」

ハーケン「ＯＫ。というわけで明日午前１０時にかめかめ波銅像の前に集合だ。侍ボーイ、ド生意気プリンセス」

アレディ「承知いたしました、ハーケン殿」

ネージュ「誰がド生意気ですの！？…まぁ、アレディと一緒なら…？（照）」

神夜「では、決まりですね♪」

…これがクルツが傍受した４人の会話だ。

「…にひひ、ハーケン・ブロウニング、アレディ・ナアシュ。明日がお前らの命日だ」

クルツとサンジは不気味な笑みを浮かべながらその場を後にした。

近藤とタケシと智樹は初等部に来ていた。どうやら放課後で皆帰路についているらしい。草むらに身を隠していたタケシが目をつけたのは、小さな竜をつれていたピンク髪の少女と赤い髪の少年であった。

「あの二人だぜ。俺の友人と同じクラスでな…」

「サトシでしたっけ、そいつ？」

「し、静かにするんだ。この草むらに身を隠すぞ！」

近藤の合図で二人は草むらに隠れた。

小さな竜をつれていたピンクの少女が赤い髪の少年に話しかけた。

「エリオ君…。あ、明日の土曜日、切腹神社に一緒に行かない…？」

「い…いいよ！」

「…じゃあ１０時にかめかめ波銅像前に待ち合わせでいい？」

「うん、いいよ！」

「じゃあ、フリードも一緒に連れてってあげるね」

『キュルクゥ！』

その二人とは、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエであった。

「いや～その歳で青春してるねぇ」

背後から青い髪をした小柄の少女、来海（くるみ）えりかがやってきた。するとえりかから彼女より背が高い、赤い髪のお下げの少女、花咲（はなさき）つぼみと茶髪の少年のような少女、明堂院（みょうどういん）いつき、ピンクのツインテールの寡黙な少女、プレセア・コンバティールがやってきた。４人とも中等部に通っている。

「「あ、えりかさん、つぼみさん、いつきさん、プレセアさん！」」

「なんだかうらやましそうですね」

「プレセアも行くんだったけ？切腹神社」

つぼみがこう言った後、いつきがプレセアに話しかけてきた。

「はい。ジーニアスが、明日、付き合ってほしいといっていました」
プレセアもそう言った。彼女は、飛び級で学年が違うものの高等部のジーニアスとは仲良しであった。
えりか「それにしてもいつきとプレセア、何故か気が合うよね！」
つぼみ「一見違いますけど、どことなく他人とは思えないような…」
いつき「え、そうかな…？僕とプレセアって…」
キャロ「そういえばつぼみ先輩。どことなくフェイトさんと似たような雰囲気が…」
つぼみ「私がフェイト先輩と…？そ、そうですか…？そういえば切腹神社って明日縁日があるって聞いてますね」
エリオ「ええ、そうです！あ、もしよかったらつぼみさんたちと一緒に…」
つぼみ「いいんですか！ありがとう、エリオ君、キャロちゃん」
えりか「じゃああたしは最高級のファッションで付き合ってあげるよ！」
いつき「それじゃ、僕たちも行くからね！」
そんな会話が聞こえていた。

「まさか中等部のあの４人までいるとは…クソ！お妙さんをモノに出来ない自分が憎たらしい！」

「ぬぅぅぅぅ～！リア充雰囲気出しまくりやがって～！先輩、やりましょう！」

「あ、ああ、そうだな…（すまん、サトシ…！）」

近藤と智樹はやる気満々だったが、タケシはどこか心配していた。

【翌日…】

かめかめ波銅像で合流したハーケン、神夜、アレディ、ネージュ、エリオ、キャロ、ジーニアス、つぼみ、えりか、いつきは銅像のすぐ近くにある切腹神社に来た。つぼみの言うとおり、神社には縁日が開かれており、そこには大勢の客で賑わっていた。

カップルやつぼみたちは、誰かに狙われているということも知らずに、ただ悠々と縁日を満喫していた。

「ホラ、カグヤ。お前が食いたがっていたたこ焼きだ」

「ありがとうございます！このたこ焼き、美味極まりないですぅ～！」

ハーケンと神夜のやり取りをネージュが見ていた。アレディはそんな彼女の気持ちをよそに屋台の横で腕立てしていた。

「アレディ！わたくしはあのドふんわりしたものが食べたいですわ！買ってくださいまし！」

不機嫌そうにラムネを飲んでいたネージュが指差したのは、綿菓子の屋台であった。

「ネージュ姫殿…では、私が買ってまいります」

腕立てをやめたアレディはすぐさま綿菓子屋台へ向かった。

「わぁ～すご～い！」

神社の境内には、縁日で賑わっていた。ジーニアス、プレセア、エリオ、キャロ、つぼみ、えりか、いつきもこの様子に目を輝かせていた。

いつき「それでは、僕たちはほかのところで」

えりか「いい思い出作りなよ～！」

つぼみ「待ち合わせは本堂にしましょう！」

つぼみ、えりか、いつきの3人もどこかへ行った。

射的の屋台。

そこに、ある人物が射的屋の主人と話をしていた。彼は主人にこ

う言った。

「例の連中がこの神社に現れたようだ。すぐ『仕留め』に行ってくれるか？」

「…わかった。お前は同胞に連絡しろ。俺が奴等を狙撃したあと、例のポイントに連れて行けとな。店はお前に任せる」

主人は射的用のそれとは全然違う、自分専用のスナイパーライフルを構えたあと、店をその人物に任せ、屋台を出た。

主人は懐に隠し持っていたケースを手にしていた。ケースには、「麻酔弾」と書かれていた。

「俺は生まれてから既にスナイパー。俺に狙われて無事で済んだ人間は誰一人いねえ」

彼の正体は、クルツ・ウェーバーであった。

「それでは、買い物に行ってきますね！」

「ちゃんと二人仲良くしていらっしゃることね」

神夜とネージュは恋人と別れたあと、ハーケンとアレディは2人ベンチに座り始めた。ハーケンがテンガロンハットを脱ぎ、ため息をつく。

「…はぁー、何でうちの知り合いはこんなにもコアなキャラクターがいるもんだか。なぁ修羅ボーイ」

「そうですね」

彼らは、自分の立場について考え始めた…

その時、ハーケンが何者かに撃たれた！彼はそのまま昏倒した！

「ハーケン殿…？いかがされたのです？」

アレディがハーケンを調べると、頭に注射器のようなものがあった。

「ぬ、これは、麻酔針…」

幸い、命に別状はなく、ただ眠っていただけのようだ。

「この覇気…おのれ、何者だ！」

アレディが気配を感じたその時、程なくアレディも撃たれた！彼もまた頭に麻酔針が刺さり、眠っていただけだったが、それでもハーケンとアレディは黒い装束に実を包んだ何者かに連れ去られていった…

一方、エリオ、キャロ、ジーニアス、プレセアの４人は縁日を楽

しんでいた。

エリオ「キャロ…このりんご飴、すっごくおいしいよ」

キャロ「このカキ氷もおいしいね。エリオ君、食べる？」

ジーニアス「プ、プ、プレセア…どうかなこのお面…似合うかな…」

プレセア「…ええ、すごく似合うと思います」

などという会話をしていた。

だが、そんな４人の少年少女の平穏が今、壊されようとしていた…

４人は突然、黒い覆面に黒服の集団に囲まれたのだ。

「だ…誰だ！」

「お前達の質問には答えないでおこう」

黒服の背中には、ハートにヒビが割れている顔のようなマーク、顔の下のＫＲＣの文字、『よごすぜ、恋愛！！恋仲冷遇部』のキャッチコピーがプリントされていた。

彼らの正体は、恋仲冷遇部だった。

「仕方ありません…」

「戦うしかないよね」

ジーニアスは剣玉を、プレセアは斧を、エリオとキャロはデバイスを構えたが、黒服の４人が真っ先にモデルガンを構え発射！銃弾

は二人の武器やデバイスに当たり、弾き飛ばされた！

「ジーニアス…！」
「エリオ君…きゃ！」

突然プレセアとキャロが何者かに羽交い絞めにされた！

「プレセア！」
「キャロ！？」

「ジーニアス・セイジ、エリオ・モンディアル…我々の狙いはお前達二人だ！」

ジーニアスとエリオは男達に催眠スプレーを吹きかけられた！二人は昏倒し、失神。そのまま男達に連れ去られた！
残されたプレセアとキャロの叫びが空しく響く…

【神社の境内にある誰もいない空き地】

そこには、長い板に吊るされ、縄で縛られたハーケン、アレディ、エリオ、ジーニアスの姿があった。その中心には真っ赤な炎が轟々と焼かれていた。
そして４人を取り囲むように、半裸にボディペイントを施した原住民の格好をした男達が、槍や盾を持って陽気に踊っていた。

「リア充は～♪ホイ！皆殺し～♪ホイ！」

この原住民こそ、恋仲冷遇部の部員だった。

そこには、ゼロス、近藤、サンジ、智樹、クルツ、ロニ、タケシの姿が。やはり黒い覆面に黒服だ。

ハーケンが黒服の一人に声を荒げて怒鳴った。

「ヘイ、そこの悪役ブラザース！俺達にこんなことして何する気だ？まさか儀式か？」

「お前は黙ってな！ウザキザ、もといキモキザ」

「なんだと！？」

馬鹿にされるハーケンをよそに、黒服たちもまた原住民と一緒に踊り始めた…

「待ちなさい！！」

男達が声をした方向に振り向くと、そこにはつぼみ、えりか、いつきが立っていた！

「誰だお前らは！？」

「今すぐその人たちを解放して！」

だが近藤はいつきの言葉に開き直る。

「ふん、知ったことではないわ！我らの目的は、この世のカップル

を殲滅することだ！」

「仕方ない…だったら！」

つぼみ、えりか、いつきは懐から香水ビンのようなアイテム・ココロパフュームを取り出し、これをかざした…

「「「プリキュア、オープンマイハート！！！」」」

ココロパフュームから光が輝き、やがてそれは3人を包んだ！つぼみはピンクの、えりかは水色の、いつきは金色の光に包まれ、やがて彼女らは服装も髪型も髪の色も変わった！

つぼみ「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！！」

えりか「海風にゆれる一輪の花！キュアマリン！！」

いつき「日の光浴びるは一輪の花！キュアサンシャイン！！」

「「「ハートキャッチプリキュア！！！」」」

彼女たちはプリキュアに変身したのだ！

「おのれ～！…姿が変わっただけだ、やっちまえー！！」

恋仲冷遇部が3人に襲い掛かってきた！

だがプリキュアにとっては脅威すらも感じなかった。

「ブロッサム・インパクト！」

「マリン・ダイナマイト！」

「サンシャイン・フラッシュ！」

ブロッサム、マリン、サンシャインは襲い掛かってきた数十人の黒服や原住民を相手にしてもひるむことなく叩き潰していく！

「悪を断つ剣ですから、断ちますね！」

「わたくし達、ド派手にド参上！」

「いつきさん…手伝います。ジーニアスを助けたいから…！」

「エリオ君たちはあそこに…許さない！」

なんと神夜、ネージュ、プレセア、キャロがプリキュアに加勢した！

「分の悪い賭け、乗っちゃいますよ！月架美刃（げっかびじん）！」

神夜が自慢の大剣・斬冠刀（ざんかんとう）を振るい、敵を蹴散らした！

「さぁさぁ、ドっ始めましょうか！ロイヤル・キッス！」

ネージュが伝家のランス・フェイスレイヤーで敵を砲撃し、突きつける！

「爆砕斬（ばくさいざん）！！」

プレセアが斧を振り下ろし、その衝撃で敵が上空に飛ぶ！

「行って、フリード！」

キャロがフリードを使役し、フリードから吐き出す火の玉で敵を燃やした！

7人の戦いは、終始優勢と思われた…

「動くな！こいつらがどうなってもいいのか！？」

黒服たちがジーニアスたちに構えたのは、ダイナマイトだった。

「卑怯極まりないです！」

「やめて！それだけは絶対にやめて！」

神夜、キャロが叫んだ！そうこうしているうちに7人は恋仲冷遇部員に囲まれた！

抵抗できないなか、ブロッサムとマリンが激昂した…！

「わたし…堪忍袋の緒が切れました！！」

「海より広いあたしの心もここらが我慢の限界よ！！」

サンシャインも恋仲冷遇部に対し、言い放った！

「その心の闇、私の光で照らしてみせる！！」

友人や恋人を奪われたブロッサムとマリン、そしてサンシャインたちが怒りに燃えていた…

その時だった。

「うぬらか？俺の生徒に手を出す雑兵どもは！？」

彼らの目の前に、筋骨隆々の大男が現れた！

「あ、アンタは…あの…！？」

「そうだ！この俺が世紀末の拳王（けんおう）にして黒楼州学園初等部校長、ラオウよ！」

なんと世紀末覇王にして初等部校長・ラオウがゼロスたちの前に現れた！！

「よくも俺の生徒をいじめてくれたな…その代償、うぬらの命で払ってもらう！！」

ラオウの出す禍々しいオーラに怯えだす恋仲冷遇部。正直こんな奴が小学校の校長やってるとは思えない。

「我が北斗神拳（ほくとしんけん）の奥義の真髄の前にひざまずくがいい！」

ラオウが叫ぶと、自らの奥義を出した！！

「北斗神拳究極奥義、無想転生（ムー●ライトパ●ー メイ●アップ）！！」

ラオウは三日月のついた棒切れを取り出すと、突然光に包まれた！

テーレーレーレーテーッテーン♪

彼はいつの間にかそこらにあったスポットライトとカーテンを使用し、これまたいつの間にかラジカセで一昔前のヒロインアニメを想起させるＢＧＭに合わせ、踊っていた。て言うか誰がどう見ても明らかに着替えているようにも見える…

「おいおい何かヤベーぞあいつ…」

ロニが光の中（カーテン）のラオウを指差す。嫌な予感がしてきそうで気が気でなかった…

するとラオウの姿が変わった！

……だがその姿は、始めて見たら絶対に忘れられない格好であった……！

「我が名は天よりの使者！恐怖と暴力の美少女戦士、セーラオウムーン！！」

…そこには見てはいけない光景が見えた。

…簡単に言うと、ラオウが「セーラームーン」のコスプレをしていたのである！！
ラオウは、セーラームーンを知っている方なら誰もが知っているあのポーズで決めセリフを言い放った！！

「雑兵どもよ！天(つき)に代わってお仕置きよ！！」

誰もが動揺した。

誰もが戦慄した。

誰もが恐怖した。

誰もが絶望した。

「オウェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！」

「キャァァァァァーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

ラオウ…もといセーラオウムーン強烈な姿に、恋仲冷遇部も、恋人達も、正義の戦士たちも震えた。

「うわっ変態しやがった！変態！！」
「変身じゃないの？」
「同じだ、同じ！」
セーラオウムーンの姿にロニが思わず悶絶した…ていうか高校生が小学校の校長に向かってそのセリフはないだろう。
「これが世紀末美少女拳王（セーラオウムーン）の拳よ！！」
「こっち見んなぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「こっち来んなぁぁぁぁぁぁぁ！！」
目の前の悪夢を見たゼロスたちはその場で悲鳴を上げたあと、異様に気分が悪くなり始めた…
セーラオウムーンは好機とばかりに恋仲冷遇部の部員を蹴散らす！
「この世紀末美少女拳王の前に敵うと思うてかッ！？」
「あべし！！」
「ひでぶ！！」

「か、怪物だー！」

「逃げろ～！敵わねぇ～！」

ついに部員達は逃げ出し、残るはゼロス、近藤、サンジ、智樹、クルツ、ロニ、タケシのみとなった。セーラオウムーンの戦闘力もあり、そして何よりその格好に生理的嫌悪感を覚えていた。

「観念するがいい！ここがうぬらの墓場ぞ！」

セーラオウムーンは最初に智樹、タケシの前に姿を現した！

「北斗神拳奥義、色仕掛け！」

智樹とタケシの首をセーラオウムーンの脇に挟むと、そのまま筋力で締めた！あまりのすごさに、二人は泡を吐いて気を失った（死んだわけではないのでご安心ください）…

「ひれ伏すがいい！北斗神拳奥義、悩殺！！」

セーラオウムーンはその巨体に似合わぬスピードで接近し、サンジ、ロニ、クルツにスカートの中を至近距離で見せた！

「「「うぇっぷ…オロロロロロロロロロ！！」」」

ある意味正しいとも言える奥義の前についに3人は吐いた。不幸にも覆面をしているので、吐いた●●が覆面の中に逆流した…

「痴れ者め、おのれの恥を知れい！」

セーラオウムーンが3人の覆面を脱がす。そこには、顔じゅう●●まみれになって失神したクルツ、サンジ、ロニの姿があった。

「最後はうぬらの番ぞ！」

セーラオウムーンはその牙をゼロスと近藤に向ける！二人は恐怖のあまり抱き合うしかなかった…

「あわわ…ゼロス先生、逃げましょうよー！」

「逃げたくても逃げれないぜ…なんせ足が動かないからぁ～！」

近藤とゼロスはついにセーラオウムーンに頭を掴まれてしまう！

「北斗神拳奥義、愛の抱擁！」

そして覆面を脱がされた二人はセーラオウムーンによっていきなりお互いの唇で無理矢理ディープキスした！

ぶちゅ～～～

二人はそのまま失神した…

「な…なんてヘビーなキューティーマッチョマンなんだ…」

「ですが……私としては助かった気にはなれません…」

「嘘でしょ！？エリオたちの校長がこれって…」

「あんなのが校長の初等部に通う僕って…？」

本来ならラオウに助けてもらうはず側のハーケン、アレディ、ジーニアス、エリオがつぶやいた。そして倒れていく恋仲冷遇部を見届けたあと、ハーケン達は静かに、そして燃え尽きるように目を閉じた…

「キャァァァァァーーーーーーーーー！！」

「強烈極まりないですぅぅ～～～～～！！」

「ド下品ですわぁぁぁぁーーーーーー！！」

「イヤァァァァァーーーーーーーーー！！」

無論女性も例外ではない。

本来なら彼に守ってもらう側であったはずが、神夜も、ネージュも、プレセアも、キャロも、つぼみも、えりかも、いつきもセーラオウムーンのそのインパクトある勇姿の前に恐れをなし、ついには逃亡した！

誰もが嘔吐し、誰もが絶叫し、誰もが逃げ惑った。

そしてセーラオウムーンは気絶したゼロス、近藤、サンジ、智樹、

クルツ、ロニ、タケシを見て言い放つ。

「我が生涯に、一片の悔い無し！！」

阿鼻叫喚の嵐が吹き荒れる中、神社の境内には気絶した恋仲冷遇部と、右拳を高々と上げる下品で強烈な格好をしたラオウの姿があった。

この大惨事は、「筋骨隆々の大男が女装して平穏なひと時を悪夢に変えた」という都市伝説として一応の決着は着いた。事件直後、ゼロス、近藤、サンジ、智樹、クルツ、ロニ、タケシの7人は、すぐさま病院に運ばれ、やがて彼らは１０日間も入院した。精神崩壊による昏睡状態であったという。

逆・襲・宣・言（後書き）

キャストの皆さま
『テイルズオブシンフォニア』
ジーニアス・セイジ、プレセア・コンバティール、ゼロス・ワイルダー
『無限のフロンティア　スーパーロボット大戦ＯＧ』
ハーケン・ブロウニング、楠舞神夜、アレディ・ナアシュ、ネージュ・ハウゼン
『魔法少女リリカルなのは』
エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ
『ハートキャッチプリキュア』
花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき
『銀魂』
近藤勲
『ワンピース』
サンジ
『フルメタル・パニック！』
クルツ・ウェーバー
『そらのおとしもの』
桜井智樹
『テイルズオブデスティニー２』
ロニ・デュナミス
『ポケットモンスター』
タケシ

本日の黒幕
『北斗の拳』
世紀末覇者・ラオウ

ロイド：……いくらなんでも、やりすぎだろ…うぅぅぅ…

スタン：……吐き気がしてきた……うぅぅぅ…

ルーク：……タケシたちに同情するぜ…うぅぅぅ…

ジュード：……か、帰っていい…？…うぅぅぅ…

セネル：……もう被害がエンディングコーナーにまで…うぅぅぅ…

アスベル：……誰か…助けて……うぅぅぅ…

ユーリ：……じ、次回もよろしくな…うぅぅぅ…

作者：読者の皆さま、本当にごめんなさい。

＞（＿＿）＜

仁・義・一・筋（前書き）

明久：今回の短編は前編と後編に分かれて掲載するよ！

瑞希：さらにこの時のためにジャンプから新作品が参戦ですよ♪

美波：ていうかここじゃ恒例みたいなもんじゃない？

秀吉：美波…細かいことを気にしたら負けじゃぞ？

ムッツリーニ：……。

翔子：……。

雄二：だからなんか喋れよ！！

仁・義・一・筋

ごきげんよう諸君。

俺の名は、中等部の守形英四郎（すがたえいしろう）。新大陸発見部の部長だ。こちらの人形は助手のプリティー君だ。

地球には、北極と南極を軸とした磁力…つまり地磁気を纏っている。しかし、地磁気がもし狂っているとしたらどうなるのか…

たとえばハトのような渡り鳥は地磁気を頼りにして飛ぶ方向を決めている。磁気の影響によって鳥は飛ぶ方向を見失い、空から落ちてしまう。だが逆に言えば、飛べないものが飛ぶこともありえなくはないはずだ。

物事には、全て原因がある。つまり飛ぶものには、全て理由がある。そして、何かをするものには、全て理由がある。

俺はこのハトに、プリティー君を乗せて窓から飛ばせて見ようと思う。さあ、行くのだ、プリティー君！

ぴゅーーーー

あ、落ちた。…いかん、失敗か。

【高等部　生徒会室】

〜〜〜〜〜〜

江戸時代は雪景色の街並み。
舎弟と思われる青年が駆けつけ、着流し姿の中年を呼び止めた。
ドスを手にしていた中年は頬に傷を負っており、番傘を差してどこかへ行こうとしていた。

『叔父貴ぃ！』

だが中年は空を見上げ、こう語った。

『死んだ親父さんが口癖のように言っていた…漢(おとこ)のケンカは一生に一度。命を捨てる覚悟があるなら許しておけってな…』

中年男はこう言った後、舎弟が呼び止める声を振り切り、去って行った…

〜〜〜〜〜〜

このやり取りはヤクザ映画の1シーンだった。

生徒会室のテレビで、千鳥かなめがポテトを食べながらこの映画を見ていたのであった。

「んー。ヤクザ映画って、どうしてこんなのかしらね。ああやってドス持って突撃するだけなんて…なんかこう、敵をまとめて吹っ飛ばしたり、親分だけ狙撃したり、もうちょっとスマートなやり方がありそうなんだわー」

「まぁ、そんな物騒な…相良さんのようなことを言わないでください…」

かなめの発言を、席に座り書類を書いていた、物腰丁寧な紫のロングヘアの女学生、高等部生徒会の美樹原蓮(みきはられん)が困り顔でとがめた。

かなめの周りには、戦場育ちの相良宗介をはじめ、幻想殺しをもつ上条当麻、魔道師のスバルやティアナ、ラウラやシャルロットらIS操縦者のような人間がいるからだ。そんなのがクラスメイトにいるのだからこの発言が素で出るのも無理はないと思う。

しかし蓮は天井を見上げてこんなことを言い出した。

「それにドスはいい物なのですよ？あれを上手に使いこなしてこそ、男の株が立派になるものです。拳銃(チャカ)などに頼ってはいけません…ですよね、美香子さん」

「そうよね～、ロマンですものねぇ。拳銃(ハジキ)と違ってあれは直接血を吸えるから最高なものねぇ。さすがはお蓮さん、わかっていらっしゃるわ、ウフフ」

蓮の発言に、隣に座っていた、紫のロングヘアに横髪を白いリボンで結んだ中等部の生徒会長、五月田根美香子(さつきたねみかこ)が不気味に同意した。

二人の意気投合に若干目を丸くし、引いたかなめであった…する

とかなめが二人に聞いた。

「もしかして…お蓮さんや美香子さんって、ヤクザ映画のファン？」

「いいえ…そう言うわけでは…」

「もう、何をおっしゃっているんですか千鳥先輩…」

その時、相良宗介がやってきた。彼はいつもの無表情ではなく、陰鬱な顔をしてかなめの隣の椅子に座り、頭を抱え始めた…

「どうしたの宗介？暗い顔して」

「ああ…千鳥か…実は投資に失敗してな…」

「投資？株でもやってんの？」

「いや、軍や警察向けの新商品を開発したんだが…」

宗介が言っているのは、どうやら軍用の装備品のようだ。

宗介いわく、数々のハイテクを盛り込んでおり、現代戦の様相を一変させる可能性がある装備とのことで、これをアメリカのＮａｖｙ ＳＥＡＬｓやＵ．Ｓ．ＳＯＣＯＭ、イギリス王室軍、フランス外人部隊、ドイツ連邦軍、ロシアのスペツナズなど世界各国の特殊部隊や民間軍事会社に売り込もうとしていたが、一蹴されてしまいほとんど売れなかったらしい。アメリカのＦＢＩやＳＷＡＴなどが買ってくれたそうだがそれも一部分で、売れ残りは宗介が全部引き受けることになってしまった。

「ふ～ん…ま、なんだかよくわからないけど、人生山あり谷ありよ！とにかく元気出す！帰りにソフト奢ってあげるから」

かなめはそんな宗介を慰めた…

【その後…】

弦太朗、宗介、かなめ、蓮、智樹、そはら、守形、美香子、イカロス、ニンフ、アストレアの１１人は、学校の近く商店街でソフトクリームを購入し、食べ歩いていた。

なお、ニンフは小柄の水色のツインテールで、アストレアは金髪の巨乳。いずれもイカロスと同じくエンジェロイドだ。

宗介、守形「ん、うまい」

智樹「うめーじゃんこれ！」

ニンフ「ふーん。こんなもんね」

アストレア「う、美味すぎる！」

弦太朗はソフトの味を絶賛した。

「なんだこれ！普通に美味ぇ、このソフトは今までも奴より最高だぜ！」

「そうですか！気に入ってもらってうれしいです！やったね、そは

らちゃん♪」

「そうですね、かなめ先輩！」

かなめとそはらが喜んだ。ふと、かなめの目線が宗介の尻に…

なんとかなめの目には、宗介に尻尾が生えているように錯覚していた。

「やっぱ犬だよね」

「ですね」

かなめと連が声を出し合う。

「…何のことだ？」

宗介が疑問に思っていたその矢先…

「上等だァ、このクソ野郎が～～！」

宗介らの目に入ったのは、一軒のラーメン屋。そこから怒鳴り声と物音が聞こえた。そのラーメン屋から二人のガラの悪い男が出てきた。一人はスキンヘッドで、もう一人はひげを生やしたアフロヘア。アフロの手には割れたビール瓶を握っている。

「オラ出てこいやー！ガチで勝負（ゲンコ）するぞゴルァッ！」

アフロがそう叫ぶと、ラーメン屋からこれまたスーツ姿のガラの悪い男たちが出てきた。ぱっと見て5、6人はいる。

「ショバ代、払ってもらうかんな！」

「舐めた真似しやがって…！シメるぞコラァ！」

「テメーらたァ落とし前つけなきゃなンねえみてぇだな！」

こうしてケンカが始まった！

「この野郎！ドンパチやりやがって！」

「あたしもそう思った！フルボッコ決定！」

「こ、ここは抑えてください先輩！」

「このバカ！何考えてんの、デルタ！？」

弦太朗と剣を持ったアストレアが首を突っ込もうとしたのでそはらとニンフが食い止める。ちなみにニンフが言うデルタとはアストレアのことだ。

「いやぁ～やってるわねぇ。軍曹殿はどう思われますか～？」

美香子に食べかけのソフトをマイクのように向けられた宗介はこう言った。

「…なっとらんな。全員動きが直線的だ」

「うむ、そうだな。あれなら猿踊りのほうがまだマシだ」

「わたしも相良さんと同意見です」

宗介の意見に守形とイカロスも納得する。するとかなめがある光景を見て叫んだ！

「お！パワーボムだー！ただのヤクザとは違う！ちなみにどっちが勝つんです、軍曹殿？」

かなめが宗介に聞く。

「双方に火器も技術もない。ならば数の多いほうが勝つだろう」

「あんたの言う通りね。ま、ワンパターンだけど」

宗介とニンフの返答にかなめが苦笑いしたあと、蓮に視線を向けた。彼女の表情に陰りが見えていた。

「あ、ははは……やっぱりお蓮さんは、ああいうの見て怖い？」

「困りました…」

だが智樹は楽観的だ。

「いいんじゃないっスか？あいつらはあいつらでやれば」

「いいえ、そう言うわけには…」

智樹の発言も蓮に否定される。

そして宗介の読みどおり、スーツ側のほうが勝った。

「これに懲りたら、もう俺らのシマを荒らさねぇことだな！」

「ったく、『美樹原組』も揃いに揃って根性なしばっかっすねー」

ボコボコにされたアフロをさらに数人してリンチにし、彼の懐から金を奪い取ったスーツの男たちはそのまま帰っていった。

だが美香子以外の一行の耳が「美樹原組」という言葉に耳を疑った。そして蓮がスキンヘッドの男に駆けつけ、声をかけた！

「…大丈夫ですか！？」

「お、お嬢さん、それに美香子さん…！…すんません、やばいとこ見られてしもうて…」

「お怪我はありませんか…？」

なんと蓮とスキンヘッドに面識があった！普段おしとやかな蓮が彼と知り合いとはとても思えないからだ。蓮が彼の怪我にハンカチを当てるが、怪我のせいで痛がった。

「いや、ご覧の通りです。とりあえず大丈夫ですわ。いててて…」

美香子が先ほどのヤクザについてスキンヘッドに聞いてみた。

「…今のきん●まの小さそうなロクデナシどもは何者なの？」

「ああ、龍虎会（りゅうこかい）の連中ですぜ。あいつら最近この街を根城にしてまして、おやっさんが病気じゃなきゃ…！」

「あらあら、困ったわね～」

泣き出す彼をまるで嘲笑う美香子。だが彼女にとっても心底穏やかではなかった。そこで彼女はあることを持ちかける。

「じゃあ私にいい考えがあるの。如月先輩～？」

いきなり美香子に指名され、困惑しながら自分に指差す弦太朗。

「え、オレ！？」

「あなたが落とし前つけるんですよ～？だってあなた、正義を愛する仮面ライダーじゃないですかぁ？」

「ちょ、ちょっと待てって！いくらオレがフォーゼに変身できるからって、生身の人間相手にフォーゼはやべえんじゃねえの！？」

「じゃあ出来ないなら私が代わりにフォーゼになって桜井君を痛めつけちゃおう、か・し・ら♪」

今度は智樹に振った。智樹も当然の反応をした。

「ななな、何言ってるんですか会長！？俺この間フォーゼに殺されかけたっての、会長も知ってるでしょう！」

そはら「あ、それ私も賛成」

「そはらァァァァァァ！お前までそんなこと言うのか！？」

こうして一行は蓮と美香子にお世話になることに…

蓮と美香子は代々続く極道の家系出身で、お互いの家が協力関係であるため、二人は幼馴染の関係であった。だがこの一族に、宿敵が現れた。それが蓮の舎弟が言っていた龍虎会である。龍虎会とは、近頃、古等簿市に手を伸ばしつつある極道であり、古等簿市周辺の土地のほとんどを領地としており、その勢力は巨大であった。その差、美樹原組と五月田根組の勢力をあわせても２５％にも満たないという。そして今日、蓮の舎弟が龍虎会にボロ負けを喫したため、このままでは五月田根組にも悪影響が出てしまう。そこで蓮と美香子は、幼い頃から育った家を守るために弦太朗たちに協力を持ちかけたのだ。

【後日、美樹原家】

そこには、病で寝込んでいた蓮の父が驚きの声を上げた。

「用心棒だと？」

「へい。ちょうど、めっぽう、お強い方と知り合いになったばっか

りで…何でも、長いこと外国で兵隊をやっていたということですわ」
蓮の父が胡散臭そうに眉をひそめるので、スキンヘッドが背後にむかって声を出した。
「先生！！」
すると現れたのは、千鳥かなめと黄色いネズミのようなぬいぐるみであった…
「親分、ご紹介いたします！用心棒のボン太くんと、通訳のかなめさんです！」
『ふも！！ふもふも、ふもー！ふもー、ふもっふ！ふもふ、ふもふっふ、ふも！』
「えーっと…ボン太くんはこう言っております。お初にお目にかかれて光栄です。組長、戦闘インストラクションなら自分にお任せください。あなたの部下を一人前の戦士に育ててご覧に入れましょう。案ずる事はありません。自分はプロフェッショナルであります…」
かなめの通訳が入る。しかしふざけていると思われているようで、蓮の父に呆れと怒りが生じていた…
そして蓮の父は日本刀を抜き、舎弟に突きつけた！
「貴様ぁ～！病人との面会にしちゃ随分手の込んだイタズラしてくれんじゃねぇか、えぇ～！？だが俺とて昔は仏滅と呼ばれた極道よぉ！ぬいぐるみごときに舐められるようなお人好しじゃ…」

「お父様！落ち着いてください！」

娘の蓮が暴走し始めた父にブレーキをかけるが、その前にボン太くんが蓮の父に近寄り、投げ飛ばした！父は庭の池に落とされる！

「親分！」

「お父様！」

ボン太くんは蓮の父に向かって説教し始める…

『ふも、ふもっふ！ふもも、ふもっふっふ！ふもふも！』

かなめの通訳「見かけで相手を判断しないことだ。戦場ではそれが命取りになる」

こうして、ボン太くんによる地獄の特訓がスタートするのだった…

『ふも、ふもっふも！ふもももも！』

「貴様らそれでも兵士なのか？その程度では死ぬぞ。あ！いえ…あたしじゃないんです…」

ヤクザの下っ端がぬいぐるみに馬鹿にされるのが我慢できなくなったようで、スキンヘッドの舎弟があわてて諌める。

『ふもー！ふもっふー！』

「まずはランニングだ、走れー！だそうです」

ボン太くんが拳銃をヤクザに向け発砲！強制的に始めさせられた…

一方、この様子を眺めていた美樹原親子は…

「こんなのに敗れるとは、７代続いた美樹原家もおしめえか…うぅぅ」

「…お茶、入れましょうか？」

【黒楼州学園　工学部】

その日のあと、弦太朗は工学部に来ていた。彼は工学部の部長、長宗我部元親とその部員であるウソップたちにフォーゼドライバーとアストロスイッチを見せていた。

ウソップ「これで仮面ライダーとか言う奴に変身すんのか？」

「ああ、これをあんたたちの手で作って見せてくれ。仮面ライダー部の宣伝なんだ！」

元親「それはいいんだが…こいつはとてつもない性能を持った化け物マシンだ。そう簡単には…」

「…あら？人間、誰でも出来ると思いますよ？長宗我部先輩？」

「「うわ！！」」

なんと元親とウソップの背後から美香子が現れた！そして美香子は元親とウソップの首根っこを掴んだ！

「「ぐぇ！！」」

「中等部の会長からの依頼なのですよ～。早く作るって言わないとそのまま首の骨が折れて死んでしまいますよ～？くふふふふふふ……」

「「つ、作ります！だから放して…」」

ようやく二人は美香子から解放された…

「と、というわけだ…上手く似せれねえと思うんだが、それでもいいか？」

「上手くなくとも『似せ』りゃいいのさ」

元親が納得したかのように答えた。

「わかったぜ！じゃあ1週間くらいになると思うが、構わねぇな？」

「おう！」

【その夜……】

その日の夜、ボン太君と美樹原組、五月田根組がとある空き地で訓練をしているのを見かけた2人の男たちがいた…

「フン、美樹原や五月田根の連中、何を始めたかと思えば、こんなとこでぬいぐるみとお遊戯とはな…」

「仏滅の美樹原も地に堕ちやしたね」

「俺ら龍虎会の従属と警告を何度も蹴りやがって…ここはひとつ思い知らせてなきゃなるめぇ」

リーダーと思われる男が眉を上げるが、もう一人の男が彼にある事を持ちかける。

「そこで、あっしからひとつ提案が…」

「ん、なんだ？」

「確か美樹原と五月田根には年頃の一人娘がいるんだとか…その娘達を、嬉しく恥ずかしく面白くイヤらしく…ゲヒヒ」

「くくく、このエッチめ…」

舎弟の男が浮かべる笑みをあざけるリーダー格。しかしその後、彼も笑い出し、二人の間に邪な笑い声が聞こえ始めた…

【校外の公園】

ボン太くんは一人夕焼けの公園に立っていた。

（あいつらは非常に気性が激しいうえ時に自惚れる悪い癖がある。どうしたものか…）

ボン太くんの着ぐるみには、相良宗介が入って操縦していた。

もともとボン太くんは遊園地「ふもふもランド」のマスコットとして人気の着ぐるみだったが、ある事情で宗介のものとなっていた。彼はこれが気に入ったようであり、各種探知センサーや戦術支援ＡＩまで搭載させるなど、操縦系統を改造し、もはや私物としていた…ボイスチェンジャーは改造前からあるようだが、何故かこれをＯＦＦにすると機能しなくなるらしい。

「あ、ボン太くんだー」

「やっつけろー」

早速子供達に遊ばれるボン太（宗介）くん。子供達に囲まれた彼はバットで叩かれたりドロップキックをかまされたりしていた。

そこに…

「先生ーーーーー！」

『ふも？』

ボン太くんを呼ぶ声が聞こえた。声の主は美樹原組のヤクザだった…

【美樹原家】

そこには、美樹原と五月田根のヤクザが集まっていた。みな沈痛な気持ちであった。美樹原のヤクザは涙ながらにボン太くんに謝罪する。

「め、面目ねぇ…帰りにお嬢さんと美香子嬢とかなめちゃんとそはらちゃんを迎えにいったとき、いきなり龍虎会に襲われて…俺達が不甲斐ないばかりに…」

どうやら、蓮、美香子、かなめ、そはらを龍虎会にさらわれたらしい。今度は五月田根のヤクザがボン太くんに泣きついた。

「先生！どうかお嬢さんたちを…！」

「もちろんワシら美樹原家もお供しますぜ！」

「そうだ！あっしら五月田根家には美樹原家と縁があるんだ！」

ヤクザたちがいっせいに参戦を表明する。

だがボン太くんの中の宗介の心中はいつもの冷静沈着なものではなかった。

（どうする…？龍虎会の構成員は１００名はいる。強力、高水準の銃火器の類を駆使すれば勝てない相手ではないが、それでは死傷者の数は甚大なものとなる。せめて少しでも多く味方がいればいいのだが…しかしこいつらは軟弱そのもの、放置しても犬死するのは明

らかだ。何か適切な装備があれば…む、装備か…！？）

宗介は自分の心の言葉で何かを思い出した…

【高等部校舎　校庭のすみっこ】

仮面ライダー部は高校生や中学生の友人達を集め何かの作戦会議を開いていた。

そこには智樹をはじめ、守形、イカロス、ニンフ、アストレア、新八、神楽、桂、ハヤテ、ナギ、ヒナギク、唯、澪、律、紬、梓、明久、雄二、瑞希、美波、秀吉、ムッツリーニ、翔子、奏、夜空、星奈、ハルヒ、みくる、長門、古泉、キョン、桐乃、黒猫らが集まっていた。

初登場として、ハヤテやナギの知り合いで、関西弁を話す銀髪の少女、愛沢咲夜（あいざわ さくや）もいた。

そしてさらわれたかなめたちの救出作戦には、学園生活支援部、通称「スケット団」も参加していた。彼らも初登場だ。

そのスケット団のメンバーである、角の生えた赤い帽子を被りゴーグルをはめた少年、ホッケースティックを握った関西弁を話す金髪の少女、眼鏡をかけ、ノートパソコンを常に開いている少年がやってきた。なお、眼鏡の彼は音声合成ソフトを使って会話している。

『ウム、俺達にもこの小説からの招待状が来たようだな』

「せやな。よっしゃ、初っぱなから気合い入れていくか！」

「おう。せっかくの初参戦だ、オレ達の伝説の幕開けだぜ！」

頼れるスケット団団長、藤崎佑助（ふじさきゆうすけ）こと「ボッスン」！

スケット団の武闘派、鬼塚一愛（おにづかひめ）こと「ヒメコ」！

スケット団のブレーン、笛吹和義（うすいかずよし）こと「スイッチ」！

「…それがオレ達、スケット団だぜ！！」

赤い帽子のボッスンをセンターに、眼鏡のスイッチ、金髪のヒメコをともない、ポーズを決めた！！

「…よし！」

「よしちゃうやろ！あんた前出すぎやわ！もっとフラットに並ぼうわ！」

何故かいい争いを始めるボッスンとヒメコ。

「いーんだよこれで！オレはリーダー、お前ら雑魚！なんならオレだけでソロでいいぐれぇだ！」

「ええ訳ないやろォォォォォ！！ここは紅一点がやるもんやで。つーわけでどけお前」

「やだ！」

「代われ！」

「やだ！」

「いやだァァァァァァァァァァ！！」

「必死かァァァァァァァァァ！！」

そこにスイッチが割って入ってきた。

『まぁまぁ、ここは俺が間を取ってセンターを取るべきじゃないか？』

「なんや、間って！」

「何でオメーがセンターなんだよ！」

ヒメコとボッスンが同時に突っ込んだ！それに対し、スイッチはこう答える。

『眼鏡をかけているからに決まってるだろう？』

「何で眼鏡なん！？何の理由なん！？訳わからんわ！！」

「んなの地味なツッコミ役が適任だろうが！！オレが銀さんでヒメコが神楽で！」

地味でツッコミ役という言葉に反応した新八がやはりツッコミを入れた！

「おいヘンテコ帽子ィィィィィィ！今テメー何言いやがったァァァァァァァ！！」

「誰がヘンテコ帽子じゃァァァァァァァァァァァ！！」

言い争っているうちに言葉で乱入する人々が現れ…

夜空「リア充は死ね！！」

星奈「あんたも死ね！！」

ヒメコ「お前らドサクサに紛れて何言うとんねん！？」

秀吉「ボッスン、おぬし変なヅラをしておるのう」

桂「ヅラじゃない桂だァァァァァァ！」

ヒナギク「ヅラじゃありませんヒナギクです！」

ボッスン「ヅラじゃねえ帽子だ！それにオレはフサフサだ！後そこの二人反応するな！」

ヒメコ「ったくなんやその髪の長さは、鬱陶しいわ！アタシが斬ってやろうか？」

ボッスン「いらねぇよ！ていうか漢字と用法おかしくね！？」

スイッチ『テメェら、それでも銀魂ついてんのかぁぁぁぁ！』

明久「いやそんな中の人ネタでウケ狙ってもリアクションに困るからね！」

ヒメコ「おいハヤテ、うちらも対抗や！」

ハヤテ「何で僕に振るんですか！？」

ヒメコ「中の人ネタで対抗するんやろうが！」

ボッスン「アレ●ヤァァァァァァッ！！」

美波「ボッスンあれをやれっての！？頭からガブリはイヤだからね！」

神楽「なら私らも対抗アル！『緋弾のアリア』と『灼眼のシャナ』と『ゼロの使い魔』と『とらドラ』からあいつら拉致してくるネ！」

ナギ「わかってるよ！」

ハルヒ「悪いわね！シャナはあたしのものよ！剣道部から拉致ってきたわ！イラストレーターが一緒だからね！」

澪「お前らメタ発言するなぁぁぁぁ！！」

みくる「禁則事項にも程がありますよぉ！」

翔子「……」

長門「……」

奏「……」

スイッチ『……』

ムッツリーニ「……」

雄二「いや、そこでだんまりで返すのはやめてくれ！リアクションに困るから！」

律「そういえば、スケット団って、何の略なんだ？」

唯「きっとスケトウダラを愛でる部活なんだよ、りっちゃん！」

咲夜「そ、そうやったんか…」

ヒメコ「なるほど、これでおいしいカマボコが…なわけあるかァァァァァ！」

梓「そういえばさ、桐乃。わたし達って、なんか似てない？」

桐乃「うん、うん、声がね…」

スイッチ『あと君たちはオタク趣味だとか。俺も参加させてもいいか？』

桐乃・黒猫「ウザい、死ね。変人」

守形「なら君達も俺と一緒に空を飛んでみないか？」

桐乃・黒猫「キモい、死ね。変人」

ムッツリーニ「……体を見せてくれ…はぁはぁ」

桐乃・黒猫「ムカつく、死ね。変人」

紬「あらあら、仲がいいことね～♪」

瑞希「そうですね～♪」

咲夜「そういう意味ちゃうやろ！！」

古泉「彼らが何とかしなければ確実に世界が滅んでしまう。フッ、困ったものです…」

ボッスン「ならお前が何とかしろォォォォ！！」

スイッチ『キバってぇ…行くぜぇぇぇぇぇ！』

キョン「お前が一番キバりすぎなんだよ！」

「いい加減にしろ！！」

賢吾がついにキレ出し、壁を殴った！ビビって賢吾のほうを見る

仲間たち。

「時間の無駄だ。何馬鹿な事やってる。さっさと始めろ」

賢吾に言われ、弦太朗は作戦内容を説明した。

「…実はお前らに頼みたいことがある。蓮と美香子とかなめとそはらが変な連中にさらわれちまったんだ！あいつらはＵＦＯ会っていうらしい」

「…龍虎会」

ニンフが訂正する。

「何でも、蓮と美香子はヤクザの跡取り娘で、それを付けねらってるＵＦＯ会にさらわれたらしいんだ。しかし、このニンフがＵＦＯ会について調べてみたんだ。ヤクザなあの連中のことだ。話によると、鯛焼きメモリも持ってるって噂だ」

「…ガイアメモリよ」

やはりニンフが訂正する。

「どっちにしても蓮と美香子の家が奴等にやられちまう！ＵＦＯ会って連中はこの街全部を恐怖で埋め尽くす気だぜ！うちの学校の生徒が痛い目に遭ってるかもしれねぇってのに、お前らそれでいいのか！？」

「んで、あたし達にどうしろって言うのよ？」

中等部の生徒で茶髪ロングのツンツンしてる少女、高坂桐乃（こうさかきりの）が言った。

「お前らには美樹原組と五月田根組とのドンパチにつき合わせてもらう！」

「なんやて！？正気か、あんた！相手は極道やし、生きて帰れる保障あるんか！？」

咲夜が驚愕した。

「何か勝算があるのか？」

ナギの質問に弦太朗は得意げに鼻で笑うと、何かを掲げた。

「…これだ！！」

弦太朗がかざしたのは、いつも自分が持っているものの「色違い」であった…

次回へ続く！！

仁・義・一・筋（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾
『フルメタル・パニック！』
相良宗介、千鳥かなめ、美樹原蓮、ボン太くん
『そらのおとしもの』
桜井智樹、イカロス、ニンフ、アストレア、見月そはら、守形英四郎、五月田根美香子
『スケットダンス』
ボッスン、ヒメコ、スイッチ
『銀魂』
志村新八、神楽
『ハヤテのごとく！』
綾崎ハヤテ、三千院ナギ、桂ヒナギク、愛沢咲夜
『けいおん！』
平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬、中野梓
『バカとテストと召喚獣』
吉井明久、坂本雄二、姫路瑞希、島田美波、木下秀吉、ムッツリーニ、霧島翔子
『僕は友達が少ない』
三日月夜空、柏崎星奈
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
立華奏
『涼宮ハルヒの憂鬱』
涼宮ハルヒ、キョン、朝比奈みくる、長門有希、古泉一樹
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
長宗我部元親

『ワンピース』
ウソップ

ルフィ：みんな元気か？この話には出てきてねーけど、次回おれ達も参戦だ！

チョッパー：まあ、次回はバトルだしな！

ウソップ：さらにこの作品オリジナルキャラも出てくるらしいぜ！

ゾロ：フン、腕がなるぜ。

サンジ：ナミすわぁ～～～～ん！！ロビンちゅわぁ～～～～ん！！
あなたたちは俺がお守りします！

ロビン：ま、まぁ、頼りにしてるわね…サンジ。

ナミ：というわけで、次回に続くわよ。楽しみに待っててね！

任・侠・幻・想（前書き）

ボッスン：っしゃー！今回はオレが大活躍だ！その目に焼き付けとけよ！

ヒメコ：大活躍～？大惨事の間違いやないか？

ボッスン：ヒメコはいちいちうっせーな！
　いいか、オレはスタートからゴールまで絶好調だぜ！

スイッチ『セリフまでパクるとは感心できんな。
　そうだな…たとえば「ＧＯ！アク●リオン！！」とか』

ヒメコ：それもパクっとるやんけ！決め台詞になっとらんわ！

前回、弦太朗たちは下校途中、ヤクザのケンカを目撃する。なんとそのヤクザとは、黒楼州学園の生徒、美樹原蓮と五月田根美香子の知り合いであった。さらに二人は、実家が極道で幼馴染だという。だが二人の実家は、龍虎会という巨大な極道の魔の手に脅かされていた。二人は家を守るため、弦太朗や宗介に協力を依頼する。それぞれのやり方で打開策を模索する弦太朗と宗介。そんな時、蓮、美香子、かなめ、そはらが龍虎会に襲撃され、拉致されたことを知る。黒楼州学園の生徒が仲間の救出に燃えるなか、弦太朗はある秘策を秘めて龍虎会との抗争に臨んだのだった…

【龍虎会本部　独房】

独房には、かなめ、蓮、そはら、美香子が捕らえられていた。彼女らは、帰り道の途中、龍虎会に拉致されたのだ。

かなめ「…とほほ。どうしてあたしって悪党に捕らえられることが多いのかしら？」

蓮「まぁ、千鳥さんはこういう経験が多いんですか？」

かなめ「どっかのバカのおかげでね」

そはら「まぁ、気持ちはわかりますよ。あたしだってどっかのバカ

の幼馴染なんですから」

かなめ「そうよね…」

そはら「それにしても会長まで捕らえられるなんて…」

美香子「うふふ、会長だってピンチに陥ることがあるのよ♪」

そはら「前向きですね…」

蓮「いつもマイペースなお人ですから」

するとその時、サングラスをかけ、派手なスーツを着た男が現れた…

「ほほう、噂以上にお美しいお嬢さんたちだ…」

「誰です？」

「私は龍虎会の組長です」

蓮の質問に彼は答える。そして龍虎会組長は恐るべきことを口にした。

「あなた方美樹原家と五月田根家は古等簿市を支配するのに邪魔な存在だ。だからこそこの一件から手を引いていただきたい。そこで、そのための『エサ』となってもらいます」

「『エサ』ですって？」

龍虎会組長の言い分に、目を鋭くさせるかなめ、そはら、蓮。かなめが聞き返す。
すると龍虎会組長が指を鳴らし、取り巻きのものが何かを持ち出した。
かなめ、そはら、蓮「うっ…」
それは、メイド、ナース、巫女、シスター、ウェイトレス、婦警、レースクイーンなどのコスプレセットだった…
「うひひひひ…さあ、服を脱ぐんだ…」
しかし美香子はこの状況にも動じなかった。そして彼女の心中も落ち着いていた。
(好きなだけ足掻いていなさい。痛い目に遭うのはあなた達龍虎会のほうよ…うふふふふ)

【龍虎会本部前】
弦太朗は無線で宗介と交信していた。彼がリーダーの部隊にはルフィらがいた。
「えー、こちらトラッシュ7。宗介、いやウルズ7、聞こえるか?」
『…こちらウルズ7。こちらは準備万端だ』

ちなみに、宗介の部隊には美樹原組と五月田根組の舎弟で構成されていた。

「よし、オレ達がここの門前で思いっきり暴れるから、かなめ達の救出はお前に託すぜ」

『…了解した。問題ない。だが如月、秘策とはなんだ？』

「ああ、本当ならお前にも見せてやりたかったが、今は四の五の言ってられねえ。仮面ライダー部の生き様を、門前からお前に見せてやるよ」

『…何を言っているのかわからんが、とにかく作戦開始の合図はそちらに任せる』

「ＯＫ…」

こうして弦太朗は無線を切った。

緑の髪で３本の日本刀を持った青年、ロロノア・ゾロが聞いた。

「なぁ…本当にこんな作戦でいいのか、弦太朗？」

「オレが持ち出してきたとっておきの秘策なんだ、奴等きっとびっくりするぜ！」

その時、ルフィとボッスンと智樹が大声を出した。

「すっげー！おれ、わくわくしてきたぞ！」

「オレもだぜ！スケット団に任せな！」
「いつでも準備万端ッス！」
「静かにしなさい！ばれたらどうすんの！？」
「せや！何しとんねんお前ら！」
ルフィたちが大声を出したので、ナミとヒメコが注意する。その後弦太朗はユウキと賢吾を下がらせ、ウソップに声をかける。
「賢吾にユウキ、下がってろ。それじゃぁ出だしは頼んだぜ、ウソップ」
「お、おう！」

ウソップが龍虎会本部のパチンコに手をかけると、これを龍虎会本部の広場にあるドラム缶に向けた！
「必殺、火炎星！」
広場に火の玉が発射されドラム缶に命中、爆発した！その瞬間、龍虎会に動揺が走った！龍虎会のメンバーが門前に集まる。
「な、なんだ！？」
「敵襲だー！！」
「どこの組じゃコラァ！？」
龍虎会のヤクザはガイアメモリを取り出し、敵の襲来に備えた。

『ＭＡＳＱＵＥＲＡＩＤ』

ヤクザはマスカレイド・ドーパントに変身した！

「よし、みんな変身だ！」

弦太朗の合図でおとりの部隊の３人はバックルを腰につけ、４つの特殊なスイッチを押す。そして…

……３……

……２……

……１……

――――変身！

「「「宇宙キターーーーーーーーー！！」」」

どういうことだろうか？

なんと弦太朗以外の人間にも３人もフォーゼに変身してしまったのだ！よく見ると体のカラーリングが薄いグレーになっているが、それ以外は明らかにフォーゼである。

…実は彼らは、弦太朗が龍虎会の殴りこみのために、前もって工学部に頼んで作らせた量産型フォーゼドライバーによって変身した量産型仮面ライダーフォーゼだったのだ。たったの3台しか完成していなかったため、ウソップ、ボッスン、智樹に変身させていた。当然、ルフィやゾロなどもともと高い戦闘能力を持った人間には支給されていないので変身していない。

先頭を張るオリジナルフォーゼの弦太朗は龍虎会本部の門前に走りより、龍虎会に宣戦布告した！

「仮面ライダー部、タイマン張らせてもらうぜ！！」

「「「俺達、仮面ライダー部じゃねーし！」」」

みんなのツッコミを戦いのゴングに、仮面ライダー部ＶＳ龍虎会のバトルが始まった…

【龍虎会本部内部】

「…如月たちは上手くいっているようだな」

美樹原組と五月田根組がいた。彼らは、ボン太くんの着ぐるみに身を包んでいた。

ボン太くんは皆、緑の帽子を脱ぎ、代わりに軍用ヘルメットとタクティカルベストを着用。ショットガン、アサルトライフル、サブマシンガン、ロケットランチャー、グレネードなどを装備していた。
宗介のボン太くんのヘルメットの上には、まるでジオン軍の指揮官用ザクのような角が生えていた。
一方、量産型ボン太くんと呼ばれる宗介の部下（ヤクザ）が着るものは、グレーの生地に黒いまだら模様があった。

宗介はある人物と協力し、挨拶するためにボン太くんから降り、弦太朗たちを見守っていた。

その時…

「待たせたな」

宗介が背後を振り向くと、そこには黒いバンダナを巻いた男がいた。

「…スネーク少佐！」

声の主は、宗介が尊敬する、伝説の傭兵にして中等部校長・ソリッド・スネークだった…！
宗介はスネークに敬礼する。彼が何故スネークのことを少佐と呼んでいるのは…お察しください。

「少佐！お待ちしておりました」

「俺のかわいい生徒が極道にさらわれたとあっては放っておく事はできん」

「はっ！これから自分は少佐の生徒を救出する作戦を実行するところであります！」

「なら潜入捜査は俺に任せろ。君達は彼女達を救出するのだ！」

そういってスネークはひとつのダンボール箱を用意する。宗介が不思議に思い、スネークに聞く。

「少佐…使うのですね？」

「これは潜入任務（スニーキングミッション）の必須アイテムだ…心配するな、俺は死なん」

そういってスネークは龍虎会に潜入、宗介も専用ボン太くんに乗り込み、別ルートから突入した！

『ふももー！（訳：突入ー！）』

宗介、スネークらかなめたちの救出部隊は仮面ライダー部が起こした混乱に乗じて本部に潜入！

まず一人（一体？）の量産型ボン太くんが内部に煙幕手榴弾を投げつける！煙が広がり龍虎会の極道が変身したマスカレイドが煙がっているその隙にボン太くん部隊が突入した！

マスカレイド数人がピストルを構え発砲するが、数人（数体？）のボン太くんがアサルトライフルやサブマシンガン（いずれもゴム弾）を連射してマスカレイドを撃退する！宗介のボン太くんは愛用

のショットガン（これもゴム弾）を至近距離で放ち、スタンガンを振りかざしてきたマスカレイドを吹っ飛ばした！

『ふもふもー！』

ボン太くん部隊が通り過ぎていった後は、撃たれたマスカレイド数人が横たわっていた…

【龍虎会本部前】

仮面ライダー部と龍虎会マスカレイドの戦いは熾烈を極めていた。数のほうは龍虎会のほうが上だが、仮面ライダー部率いるおとりの部隊もかなめたちの救出という旗を掲げている以上、気合と根性で奮戦していた。

量産型フォーゼになっていたボッスン、ウソップ、智樹が弦太朗のフォーゼに使い方を教えてもらう。

「ランチャーを使うにはレーダーを使え！敵を捕捉することが出来るぜ！」

「おう！」

ウソップはランチャーとレーダーをＯＮにすると、その通りレーダーの索敵によってランチャーミサイルが放射され、マスカレイド

を焼き払った！

「じゃあオレはこれを使うぜ！」

ボッスンはロケットをＯＮ、ロケットの噴射力によって敵を殴り飛ばす！そして右手のチェーンアレイをＯＮにし、迫ってくるマスカレイドを撃破していく！

しかし…

ゴン！！

「オウ！」

チェーンアレイがボッスンのきん●まに直撃！ボッスンは痛がった…

「俺も負けてらんねぇ！」

智樹はカメラスイッチをＯＮ、左腕のカメラモジュールで周りを見始めた…

「…くふふ、戦う女ってかわいくて最高だぜぇ…特におっぱいや尻が揺れる瞬間は…」

なんと遠くからカメラモジュールで覗きをしていたのだ！

カメラモジュールは超広角から望遠まで対応したレンズを備える高感度のビデオカメラで、映像だけでなく周辺環境データも補足してフォーゼに伝え、解析や敵の正体を探る事もできる。スイッチはバガミールに装着することも出来るが、フォーゼ本人が使うことでより詳細かつ鮮明な映像を録画する事もできる。

フォーゼモジュールをこんなバカなことに使うとは何たる男か。ここにはいないが、賢吾が黙っていないだろう…

すると近くにいた美琴にレールガンを撃ち込まれ、智樹の足元を砕いた！

ドシュゥゥゥン！

美琴「あんたね、みんなが真面目に戦ってるってのに自分だけ何様のつもりなの！？」

イカロス「マスター、今はそれどころではありません」

ニンフ「ホント、どうしようもないクズね」

アストレア「バカ！死ね虫けら！」

「ス、スンマセン…」

３人のエンジェロイドにまで怒られる智樹フォーゼであった…

「なぁ、『３』やろうぜ！」

「そうそう、これが男のロマンってね！」

「よし、スイッチオンだ！」

ボッスンとウソップと智樹が次に手にかけたのはドリルスイッチだった。３人がドリルをＯＮにし、左足にドリルが装備されると…

ギュイィィィィィィン！！

「「「どわァァァァァァァァァァ！！目が回るゥゥゥゥゥゥゥ！！」」」

左足につけられたドリルによって足が地面に埋め込まれ、３人は左足を軸に、まるで竜巻のように大回転した！ドリルモジュールは装備位置の都合上、必殺技の発動にしか使用されないため、まともな歩行ができないのである。

ヒメコ「アホや」

スイッチ『アホだな』

ナミ「アホね」

ニンフ「アホだわ」

アストレア「アホは死ね！」

フォーゼ「ドリルは青春のハリケーンだぜ！」

「「「見てないで助けてくれぇぇぇぇぇぇ！！」」」

このままスピンし続けるウソップとボッスンと智樹を放置するのであった。

「ゴムゴムの…銃乱打(ガトリング)！！」

ルフィが先手とばかりに連続パンチで極道マスカレイドどもを葬った！「ゴムゴムの実」の能力者であるルフィにとってマスカレイドの大群は敵ではなかった。

「へへっまだ来るのか…面白ぇ！」

まだ数は多い。そのうち数人のマスカレイドがルフィに向かってきた！

「ゴムゴムのバズーカァー！！」

警棒を持って迫り来るマスカレイドを強力な掌底で吹っ飛ばした！マスカレイドは壁に叩きつけられた！

乱戦の中、ナミが突然転んだ！

「きゃぁ、痛いー！」

膝をすりむいてしまったらしい。マスカレイドの一人が近寄ってくる…

『どうしたんだい、お嬢さん？』

しかしこれは彼女の策略だった。ナミは隠し持っていた天候棒(クリマ・タクト)をマスカレイドに突き刺した！

「バカね、引っかかったわね！」

『え？』

「サンダーボルト＝テンポ！」

バチバチ！！

『ギャァァァァァ！！』

天候棒に刺されたマスカレイドの上空からなんと落雷！感電し、失神した…

ウソップ「えげつねえ…」

ボッスン「ヒメコよりもえげつねえ…」

智樹「そはらの殺人チョップより怖ぇ…」

遠くからナミの戦闘を傍観していたウソップ、ボッスン、智樹ら量産型フォーゼの感想だった。

「首肉（コリエ）、肩肉（エポール）、背肉（コートレット）！！」

サンジは得意の足技でマスカレイドを滅多打ちならぬ滅多蹴りにしていく！人間でありながら、その足の鋭さと正確さで、とても常人のものとは思えなかった。

「羊肉（ムートン）ショットォォォ！！」

最後は強烈な後ろ蹴りでマスカレイドを吹っ飛ばした！
「レディに手を出す奴は俺の敵だぜ…特にナミさんにはな！」
くわえた煙草を取り、煙を吹く。今日はなんだかかっこいいぞ、サンジ！
「ま、この次の短編ではヘマしないようにね。サンジ君♪」
ナミの突っ込みにこけたサンジであった…

一方、当麻、美琴、黒子はマスカレイドに囲まれていた。
「チ、どれもこれもきりがないわね！」
すると美琴がある事を当麻に持ちかける。
「ねえあんた、あの右手で何とかしなさいよ！」
「出来るかー！あれは魔術とか超能力しか通用しねえんだよ！」
二人が言い争っているうち、黒子が提案した。
「ならお姉さま、黒子に考えがありますの」
そう言って黒子は何かの行動を取った…
すると…

美琴が自分の体に異変を感じる。

「ん？なんか足がスースーするような…」

なんとマスカレイドの手のもとに美琴が履いていた短パンがあったのだ！無論、犯人はモノをテレポートさせられる黒子である。

「何やっとんじゃ黒子ォォォォォォォォォォォォ！！」

美琴がぶち切れてレールガンを乱射！それはマスカレイド、黒子、そして当麻にも及んだ！

「不幸だァァァァァァァァァァ！！」

当麻は美琴の怒りのレールガンから逃れるため、近くの壁に身を隠した。だが何故かそこにいたインデックスがいた。

「とうまも大変だねー。まぁいつものことだけどさー」

「どわ、インデックス！お前はオレの部屋に戻ってろ！」

「は～い」

「リボルバー…キャノン！」

スバルが右手のリボルバーナックルでマスカレイドを殴りつけ、

敵は遠くに吹っ飛ばされた！

「…よし！」

『くたばれこのガキ！』

スバルが隙を見せたつかの間、背後からハンマーを持ったマスカレイド数人が襲ってきた！

「…クロスファイアシュート！」

ティアナが銃のクロスミラージュを構え、複数の弾がスバルの頭を叩こうとしたマスカレイドを蜂の巣にする！

「バカ、何余所見してんのよ…！」

「…ごめん、ティア」

「そんな事は後でいいの、今は目の前の敵に集中しなさい！」

「うん！」

等、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラも自分のＩＳを起動させて戦っていた。

マスカレイドが上空を舞うＩＳに向けてマシンガンやショットガンで銃撃した！ＩＳはその特性上常に浮遊しているため、彼らにとってはこれがＩＳへの対抗手段であった。

しかしＩＳは機動性、運動性とも高水準であるため、銃弾をあっさりと避けてしまう。

「おーっほっほ！これぞ、蝶のように舞、ハチのように刺す！ですわ♪」

「ＩＳを相手に安物のガイアメモリで挑むとは…無謀にも程があるな」

セシリアとラウラが得意げに銃弾をかわすが…

「ねえ、あたしたちで一夏を賭けてみない？誰が多く敵を倒せるか…」

なんと鈴がそんなことを提案した。挑発された箒は…？

「一夏…？じょ、上等だ！受けて立つ！」

「ちょ、ちょっと！二人ともケンカしてる場合じゃ…ってセシリアもラウラも！」

シャルロットの制止も聞かず、やがて織斑一夏を巡ってケンカを始めるいつもの５人。その隙にマスカレイドがダイナマイトを投げつけた！

ボン！！

「「「「「「きゃあああああ！！」」」」」」

ダイナマイトが爆発し、５人は地面に叩きつけられた！まぁ自業自得という奴だ。

「鬼斬り！虎狩り！」

そしてゾロが両手、さらには口にくわえた三刀流を構え、マスカレイドの集団をズタズタにする！この戦法はソロがもっとも得意とするスタイルだった。

『この野郎、死ねぇー！』

最後のマスカレイドが日本刀を持ってゾロに斬りかかろうとする！しかし…

「一刀流奥義…獅子歌歌（ししそんそん）！！」

刀を1本に戻し、一刀流の奥義の居合いによって最後に残ったマスカレイドを斬り捨てた……

「斬れぬものはねえ……ん？」

気がつくとゾロの周りには倒されたマスカレイドだけが残っていた。

「ん…？あれ！？みんなどこだ！？いねぇ！！どこ行った！？入り口はどこだぁぁァァァ！！」

つまり味方はどこかへいったようだ。みんなに置いてけぼりにさ

れたようだ。ゾロとしてはまだまだ暴れたりないのであろう、しかしこれが現実だ。彼は方向音痴だからだ。

ゾロは悲鳴を上げながら入り口を探しはじめた……

「待ってくれぇ！俺を置いていかないでくれぇぇぇぇぇ！」

【龍虎会本部　通路】

龍虎会に動揺が走る中、一人の男があるダンボール箱を見かけた。ダンボールにしてはいささか大きいようにも見えるが、男はそれを覗いていた。

そして男は怪しいと思い、ダンボールを取り出すと…

！

そこには、体育座りしているソリッドスネークの姿があった…彼はダンボールの中に隠れ、ここに潜入していたのだった…

一方、宗介率いるボン太くん部隊の作戦は順調に進んでいた。

宗介のボン太くんが量産型ボン太くんに突入を指示。量産型ボン太くんは邪魔してくるマスカレイドを手当たりしだいライフル（ゴム弾）で葬っていく。

『ふも！（訳：クリア！）』

『ふも！（訳：クリア！）』

量産型ボン太くんがドアを開け、手榴弾を投擲、ライフルで威嚇射撃した後、宗介に合図する。

その時宗介のボン太くんの生体センサーがあるものをキャッチした。サーモグラフィーで表示されたそれには、何人かの人影が確認できた。なお、そのうちの４人が床にひざまずいている。

宗介のボン太くんは、その部屋に向かって歩き始めた…

ふと、宗介はこんなことをつぶやいた。

「やはり使えるではないか。何故売れなかったんだろう…？」

この量産型ボン太くんは、前回の話で、世界各国の特殊部隊や民間軍事企業に売り込んでおきながら、買い手がつかなかったあの装備品のことである。売れなかったのは、少なくともそのデザインのせいだと思うが。

そして量産型ボン太くんの一体がブレーカーを落とし、停電させた。

『ふもっふ！（訳：ブラヴォーチーム、ゴー）』

宗介の指示により、彼が捉えた部屋に突入した！

宗介が捉えた部屋には、やはり組長とその取り巻き数人、かなめたちが捕らわれていた！ドアが破壊され、姿を現したのは、宗介のボン太くんと、先ほど合流したフォーゼ、そして何故かダンボールだった…

「ボ、ボン太くんに仮面ライダー、ダ…ダンボール…だと……？か、仮面ライダーはともかく…お、俺の組がボン太くんとダンボールごときに全滅…？」

組長が声を震わす。しかし彼にとってはボン太くんよりもフォーゼよりも、まずダンボールがここに来たのかが気になるところだろう。そのダンボールから声が聞こえる…

『逃げ場はない。降伏するんだな』

「ダンボールがしゃべった！？」

するとダンボールからスネークが現れた。声の主は彼であった。中等部のそはらと美香子は校長と再会を喜ぶ。

そはら「スネーク校長！め、迷惑かけてごめんなさい…」

美香子「あらあら、校長。こんなところにいらしてたんですかぁ」

スネーク「俺はただ、やるべき事をしただけだ」

かなめと蓮もボン太くんとフォーゼが助けに来たため、喜んだ。
かなめ「宗介！それに弦太朗先輩も！」
蓮「相良さん、如月さん。ありがとうございます」
フォーゼ「礼には及ばねえって、ハハハ…」
しかし組長は声を荒げ、かなめを捉えて銃を突きつけた！
フォーゼ「おい、卑怯だぜこの野郎！」
「ふ…ふざけるなぁ！ぬいぐるみとダンボールごときに負けるんじゃ、この世界で生きていけねえんだよ！来るな…来るんじゃねえ！」
かなめを盾に、組長は後ずさりするが…その隙にかなめに拳銃を持ったほうの腕をかまれてしまう！その隙にボン太くんのショットガン（ゴム弾）が撃たれ、組長の頭に当たる！組長は失神した…
『ふもふも、ふもーふもっふふもっふ（訳：貴様はひとつミスを犯した…敵の戦力は過小評価しないことだ）』
「命までは取らん。これ以上抵抗しても無駄だ」
「さあ、観念するんだな！！」
ボン太くん、スネーク、フォーゼは龍虎会を追い詰める！
「フ、フン！だかこれで終わったわけじゃねえ！」

そういって組長を失った取り巻きはスイッチを押すとなんと煙幕が発生！
気がつくと取り巻きとかなめたちは倒れている組長を残し、どこかにいったようだ…

後を追うため、フォーゼ、ボン太くん、スネークは外を出た…
「ちくしょう、どこ行きやがった…？」
フォーゼが毒づいたその時…背後から声がしてきた。

「彼女達を救えるのは…君達だけだ！」

「士！」
フォーゼが呼んだのは、なんと高等部生徒会長の門矢士ことディケイドだった…
「この話での俺の役目はお前たちのサポートだ」
ディケイドはそう言いながら2枚のカードを取り出した。どちらもバイクのイラストが描かれている。ディケイドはこの2枚をディケイドライバーに装着した。

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭＲＩＤＥ．　Ｇｉ，Ｇｉ，Ｇｉ，ＧＩＮＳＡＮ』

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭＲＩＤＥ．　Ｈｉ，Ｈｉ，Ｈｉ，ＨＩＪＩＫＡＴＡ』

その後ディケイドは何故かそこら辺にいた銀時と土方に声をかけた。

銀時「ああ？生徒会長かよ」

土方「なんだよ、俺らに何の用だよ」

「ちょっとくすぐったいぞ」

「「え？」」

ディケイドに肩を叩かれた銀時と土方は…

なんと銀時と土方の体が無理矢理変形し、バイクに銀時と土方の顔がついただけの不気味な姿となった！

「「な、な、何じゃこりゃぁぁぁ

「さぁ、これに乗れ！」

悲鳴を上げる銀時と土方を無視し、ディケイドはボン太くんとスネークに乗るように促した。遠慮なくバイク化した銀時と土方に乗り込む。

「ちょっと待てぇぇぇぃ！何で俺達がこんな目に…」

「痛ぇぇぇ！！俺の背中に乗るんじゃねぇぇぇ！」

その時レーダースイッチから着信音がなり、フォーゼはスイッチをオン、レーダーモジュールを装備した。賢吾からだった。

『如月、今そっちにマッシグラーを走らせた。千鳥や見月たちは今龍虎会のトラックに乗せられ国道を走っている。龍虎会に止めを刺し、彼女達を救い出して来い』

「おう！！」

そして数秒のうちにマッシグラーが到着、フォーゼもこれに乗り込んだ。

「おいテメェらァァァァァァァ！生徒のくせに教師(オレ)をなんだと思ってんだァァァァ！」

バイク化した銀時の悲鳴も聞こえないのか、3人（うち一人は中等部の校長）はそのまま龍虎会のジープを追った！

『弦ちゃん、ターゲットはもうすぐそこよ！』

ユウキからの通信を聞いたフォーゼ、スネーク、ボン太くんがトラックを捕らえると、カーチェイスを始めた！トラックの荷台には、捕らわれの４人がいた！

銀時・土方「あぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ！！」

バイクになっていた二人は高速で走らされているため、まるで「フォーゼ第７話で大文字隼がロケットで空を飛ぶフォーゼに捕まっている時のような変な顔」になっていた…

「おい、早く振り切れよ！」

「これが限界なんだってば！」

「ていうかあの２台のバイク、キモいな！何でバイクに顔生えてるんだよ！」

追い詰められてあせる龍虎会。その隙にニンフとアストレアが出現した！

「ほんとに逃げれるなんてバカみたい…デルタ！」

「はい、ニンフ先輩！はぁぁぁぁ！！」

アストレアが超振動光子剣「クリュサオル」を振りかざしてトラ

ックを両断！その隙にアストレアとニンフがそはらたちを救出した。

「助けに来たわ。感謝することね」

「ありがとう。ニンフさん」

「逃げろー！」

トラックが破壊されたため、逃亡する龍虎会のメンバーだったが、彼らが空を見上げると、そこには翼を大きく広げたイカロスの姿が…

「ターゲット捕捉…『アポロン』発射準備…」

するとイカロスの緑色の目が赤く変色した。そして彼女が「アポロン」と呼ばれる弓を構えると、それを龍虎会に向けて発射！大爆発を起こし、龍虎会のメンバーは星となった…

【後日談】

かなめ、蓮、そはら、美香子を取り戻した宗介たちは普通の日常へ戻っていった。

しかし、一部の人を除いては…

２－Ｃ教室…

「…ウソップにボッスン。なんなのその格好は？」

この時間はニコ・ロビンの授業だった。黒髪に褐色肌で知的な印象があるロビンは、眉をひそめてこう言った。

ウソップ「先生！これは最近話題のヒーローであります！」

ボッスン「そうですとも！このヒーローのコスプレです！」

ウソップとボッスンは何故か量産型フォーゼのままの姿だった…

ウソップ（あちゃーーーー、量産型フォーゼは一度変身すると７２時間は変身解除されないの忘れてたぁ～）

ウソップたちの作った量産型フォーゼドライバーにはその欠陥があった。つまり３日間この格好で過ごさないと変身を解除するのが出来ないからだ。無論、中等部の智樹も７２時間、量産型フォーゼのままなのだ。

ロビンは呆れるようにため息をつく。

「何に影響されたかは知らないけど…二人とも立ちなさい。お仕置

きよ」

ロビンはそう言って二人を立たせ、「ハナハナの実」の能力を駆使する。すると、なんとウソップとボッスンの両腕にロビンの腕が6本も出現した！

「六輪咲（セイスフルール）きツイスト！」

6本の腕が二人に絡みつき、まるでサブミッションのように極めた…

ばき

「「ぎゃぁぁぁーーーー！！」」

ロビンに制裁を加えられる二人を、クラス中のみんなが見守っていた。

ヒメコ「アホや」

スイッチ『アホだな』

ナミ「アホね」

セネル「アホだぜ」

ネージュ「ドアホですわ」

今日も２－Ｃは平和だった…

一方、銀時と土方は……

バイク姿のままスクラップの山に捨てられていた……

「なぁ土方君。俺達ってなんだろうね…」

「そうだよね坂田君。俺達だけ損してるよね」

任・侠・幻・想（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『フルメタル・パニック！』
相良宗介、千鳥かなめ、美樹原蓮、ボン太くん
『そらのおとしもの』
桜井智樹、イカロス、ニンフ、アストレア、見月そはら、五月田根美香子
『ＯＮＥＰＩＥＣＥ』
モンキー・Ｄ・ルフィ、ロロノア・ゾロ、ナミ、ウソップ、サンジ、ニコ・ロビン
『スケットダンス』
ボッスン、ヒメコ、スイッチ
『とあるシリーズ』
上条当麻、御坂美琴、白井黒子、インデックス
『魔法少女リリカルなのは』
スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター
『インフィニット・ストラトス』
篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ
『メタルギアソリッド』
ソリッド・スネーク
『仮面ライダーディケイド』
門矢士
『銀魂』
志村新八、土方十四郎

鳴滝：ディケイド…いい加減に私の出番を出せぇぇぇぇぇ！！

武・闘・列・伝（前書き）

ストーカー：さぁさぁ！皆さん、お待ちかねぇー！
今回の短編は特別編となります！ゆっくりとお楽しみください。
そして最後に、私から重大発表がありますのでお見逃しなく！
それでは、ガンダムファイト！レディー…ゴォォォォー！！

武・闘・列・伝

さぁさぁ！皆さん、お待ちかねぇー！

今週もやってまいりました「黒楼州学園武闘大会」！

さて皆さん、よろしければ司会進行および、実況、語り部を務めますこの私、ストーカーが武闘大会についてご説明させていただきましょう。

この作品の時間帯の毎週金曜日の放課後を武闘大会に回し、初等部、中等部、高等部、そしてこの学園の教職員から性別、実力問わずランダムで選手を選び、校内のコロシアムで闘っていただきます！

ルールはいたって簡単！闘って、闘って、闘い抜いて…そして試合に勝利するだけ！命を奪いさえしなければなんでもあり！武器の使用、騙まし討ち、不意打ちも戦法のひとつです。降参、失神、および場外に脱落した時点でその選手の敗退となります！

たとえ選手に実力差があっても、組み合わせや運次第で、とんでもない試合運びとなる可能性もあるので、ひと時たりとも目が離せません！

並み居る強豪を打ち倒し、今週の学園の頂点に立つのは誰か！勝者には今週の学園・ザ・学園の栄光が贈られます！

観戦につきましては、放課後ですので参加は自由！毎日厳しくも楽しい部活の息抜きに、黒楼州学園武闘大会の観戦はいかがでしょうか？ちなみに大会直営の売店も営業されており、ソフトドリンクは１００円、ポップコーンは塩味、キャラメル味ともに３００円で

ございます。

今回の大会は我々に対してどのようなドラマをもたらしてくれるのでしょうか…

選手宣誓は、おなじみ流派・東方不敗（とうほうふはい）部の部長、ドモン・カッシュ選手と、流派・東方不敗部の顧問にしてこの学園の理事、東方不敗・マスターアジア先生が行います！

ドモン「宣誓！我ら学園ファイターは！」

東方不敗「この手に学園・ザ・学園の栄誉を掴むため」

東方不敗・ドモン「己の技量の全てをもって戦うことを、今ここに誓う！」

東方不敗・ドモン「流派！」

東方不敗「東方不敗は！」

ドモン「王者の風よ！」

東方不敗「全新！」

ドモン「系列！」

東方不敗・ドモン「天破侠乱！」

東方不敗・ドモン「見よ！東方は、赤く燃えているゥゥゥゥゥ！！」

選手宣誓、ありがとうございます。お二人に盛大な拍手を！

さて皆さん、大変お待たせいたしました。

それでは、皆さんご一緒にぃ～…学園ファイト！レディー…ゴォォォォォー！！

まずは今大会第1回目、そしてこの小説連載始めての試合と行きましょう！

赤コーナー、武偵一のエースにして双剣双銃（カドラ）のアリア…

神埼・H・アリアーーーーーーーー！！

青コーナー、愛刀・贄殿遮那（にえとののしゃな）を振るう炎髪灼眼（えんぱつしゃくがん）の討ち手…

シャナーーーーーーーーー！！

年頃の少女でありながら大人の男顔負けの実力を持つこの二人。これはいい試合になりそうです！

シャナ「あんたが双剣双銃の…？たいしたことなさそうね」

アリア「ムカ…！あんた、絶対覚えてなさいよ！こっちには小太刀二刀流と二丁拳銃があるんだから！」

なんとシャナがアリアを挑発！ゴングを鳴らす前から火花を散らしております…

それでは、学園ファイト！レディー…ゴォォォォー！！

シャナ「ハァァァァァ…！」

なんとゴング直後にシャナに異変が！いつものシャナの黒い目と黒髪が、煌めく灼眼と燃える炎髪に変化しました！

アリア「先手必勝！」

対するアリアは先手とばかりに懐の二丁拳銃を撃ち出しました！…え？生身の人間に銃火器はまずいのかと？いいえ、そんなことはありません！死傷者さえ出さなければこの大会は何でもありです

から！

シャナ「くっ！！」

おーっと！シャナが側転し、銃弾を避けたァ！さすがは炎髪灼眼の討ち手、只者ではありません！

アリア「だったらこれでどう！？」

アリアが小太刀を抜きました！そして小太刀二刀流を振るい、シャナに斬りかかろうとするっ！

しかぁし！シャナも負けていられません！愛刀・贄殿遮那でアリアの右手の小太刀を受け止め、アリアの腹部に蹴りをいれたァ！！

シャナ「甘いッ！」

アリア「ガハッ…！」

大きく吹っ飛ばされるアリア！伊達に炎髪灼眼の討ち手と呼ばれた事はありません！アリアも受身を取って倒れる隙を無くします！

アリア「ハァァァァァァ！」

しかしアリア、次もシャナに向かって突進していきます！対するシャナもその刀を炎髪灼眼に呼応するように炎が纏われました！

そして二人の刀が振るうたび交差し火花が散り、鍔迫り合いによる剣劇を奏でます！その姿、まるで踊っているよう！

そしてアリアがシャナの足元を蹴ったぁ！シャナもこれには倒れてしまいます！

シャナ「きゃぁ！」

アリア「ふん、あんたもあんたでたいしたことないわね！」

そのとき、アリアの動きが止まったぞ！？これは一体どういうことでしょうか…

アリア「も、も、も、も、ももまん！！」

なんとアリアの目に入ったのはシャナのポケットからこぼれ落ちたももまんでした！

アリア「どいて！！」

シャナ「あ」

なんとアリアがシャナをどかし、ももまんを食べ始めたぞぉ！バトル中にもかかわらず、です！

おっと！突然客席からシャナの頭に何かがあたったぁ！

シャナ「あ、メロンパン！」

なんとメロンパンです！シャナがメロンパンに食いつく！そして食べ始めたァァァァ！

そこでなんと試合終了のゴングが鳴ったァ！

シャナ、アリア「えーっ！もう試合終了！？」

というわけで、アリアが先にももまんを食べ始めたということで、勝者はシャナ！！

アリア「えっうそ！？」

そうです！試合中にそこらに落ちていた食べ物を食べたとして戦意喪失とみなし、勝敗がついたのです。

アリア「ちょっと！ずるいわよシャナ！ももまんが無きゃ絶対勝てたのに…！」

シャナ「フ……フッ！ゆ、油断するからいけないのよ！」

おっと、そういうシャナもメロンパンを食べていたのではありませんか？

シャナ「う、うるさい！うるさい！うるさい！！」

ということで、この試合の勝者はシャナに決まりました！皆さま、シャナに盛大な拍手を！

【第１試合】
神崎・Ｈ・アリア　ＶＳ　シャナ
勝者：シャナ
決まり手：アリアの拾い食いによる戦意喪失

それでは次の試合と参りましょう。

赤コーナー、ムッツリの中のムッツリ！寡黙なる性職者こと…
土屋康太こと、ムッツリーニィィィーーーーーー！！

青コーナー、放課後ティータイムのマスコット！あずにゃんこと…
中野梓ーーーーーーーー！！

なんと二人とも生身での実戦経験がありません！
ですが、意外な組み合わせもまた、この大会の醍醐味！この組み合わせだからこそどんな試合になるのかわからない！

ムッツリーニ「……」

梓「…わたしなんかがこの大会に出場してもいいんでしょうか…？他にも強い人がいっぱいいますし…」

中野梓ことあずにゃん、突然の武闘大会のエントリーに戸惑っている様子！対するムッツリーニは、いつもの寡黙な表情で試合に臨んでおります…

それでは、学園ファイト！レディー…ゴォォォォー！！

あぁーっと！両者、一歩も動きません！二人ともバトルの経験が無いのか…一歩も動きません！

梓「土屋先輩…一緒に棄権しましょう…？わたし達には場違いみたいですよ…」

ムッツリーニ「……その前に、ひとつやりたい事がある……」

しばらくの静寂の中、先に歩みだしたのはムッツリーニだ！そしてムッツリーニが制服の懐から何かを取り出しました…

ムッツリーニ「……中野梓…許せ……」

梓「え！？」

パシャ

梓「ちょ！何するんですか先輩！！」

ムッツリーニ「……これといってない（……ムッツリ商会のネタが切れたから撮らせてもらった……これは売れる……）」

梓「何が無いですか！思いっきり写真撮ってますよー！」

なんとムッツリーニ、カメラであずにゃんを撮り始めたぞ！なるほど、彼にとってはカメラも武器ということですか！

ムッツリーニ「……悪事には使わない」

梓「だったら人の許可取ってから写真撮ってくださいよ！あと鼻血垂れてます！」

ムッツリーニ「……すまない」

しかしそれでもムッツリーニは写真を撮るのをやめません！これも男の意地というものでしょうか！？あとそれ以前に鼻血を拭いてもらいたいものです。このままでは試合に悪影響が出てしまいます！

梓「もう…！いい加減にしてください！！」

アーッと！あずにゃんがムッツリーニの体に乗り出し、その小さな体を震わせコブラツイストを極めたァァァァ！！

ムッツリーニ「うわらば！！」

おっとぉぉ！あずにゃんのコブラツイストにより、さらに鼻血の滝がァァァァァ！！彼女に抱きつかれて興奮したのでしょうか、効果は抜群だァァァァァァァ！！

ムッツリーニ、鼻血を噴き出したまま失血により気絶！ドクターストップがかけられました！

梓「あ…ご、ごめんなさい！土屋先輩！！」

あずにゃん、ムッツリーニを解放！罪悪感を感じたのか、謝罪しております！

この試合、勝者はあずにゃんこと中野梓に決定いたしました！！

【第２試合】
土屋康太　ＶＳ　中野梓
勝者：中野梓
決まり手：コブラツイスト

…ごほん。さて、第３試合と参りましょう…

赤コーナー、その勇姿、燃える炎の如し。日の本一の兵…

天・覇・絶・槍！真田幸村ーーーーーーー！！

青コーナー、覇皇拳（はこうけん）の体得者、剛錬の修羅こと…

アレディ・ナアシューーーーーーーー！！

熱き魂と静かなる拳の戦い！この試合を皆さんのその目に焼き付けてください！

幸村「剛錬のアレディ殿と手合わせできること！それがし、光栄でござる！」

アレディ「ならばお互いに手加減は必要ありません。よき勝負にいたしましょう！」

それでは、学園ファイト！レディー…ゴォォォォー！！

幸村「うおおおおおおお！！み・な・ぎ・る・わぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

なんと幸村の雄叫びによって周囲が燃え始めたぁぁぁぁぁぁ！！あたりには火の海となってしまいました！！

アレディ「さすがは幸村殿、その覇気が熱い…ですが、私も負けていられません！！」

アレディが腰を落とし、何かの構えをする模様です…

アレディ「機神乱獣撃（きじんらんじゅうげき）！！」

なんとアレディの掌からオーラの飛び道具を数発も飛ばしたぞぉおおおお！！

しかし負けじと幸村も二振りの槍でオーラを、弾く！弾くッ！弾くゥッ！すごい接戦だぁぁぁぁぁぁ！！

幸村・アレディ「うおおお

行われています！

そして武田信玄先生が乱入だーーーーー！！

信玄「周りを見ぬか馬鹿者がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

幸村・アレディ「ぶっふぉぉぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

赤コーナー、三刀流の使い手にしてルフィ一味一の剣士…

ロロノア・ゾローーーーーーーー！！

青コーナー、誰もが恐れる風紀委員の鬼の副長！

土方十四郎ーーーーーーーー！！

どちらも優れた剣豪同士！彼らの試合もいいものとなるでしょう。その剣劇、とくとご覧あれ！

土方「オメェ、最近調子乗りすぎなんだよ。刀3本も持ってるし、独眼竜かオメェは」

ゾロ「あぁ？泣きを見るのはテメエのほうだぜ…開きっぱなしの瞳孔から涙流させてやらぁ」

両者、なんとゴング前からお互い近くにたち、至近距離でガンを飛ばしあっています！あわててレフェリーが二人をバトル開始位置に離させます…

それでは、学園ファイト！レディー…ゴォォォォォー！！

ゾロ「じゃあ行くとするか…」

土方「レッツ…パァァァリィィィィィ！！」

両者、激・突！ゾロの三刀流が土方に襲い掛かる！

ゾロ「鬼斬りぃ！！」

しかし土方、ゾロの攻撃をただ一振りの刀で受け止めたーーーー！！

土方「そんなもんが通用するかよ」

土方、煙草をふかしながら余裕の表情だ！しかし彼は学生で、本来なら学生の喫煙は校則違反と見なしますが原作からの流用ですので禁則事項でお願いいたします。

ゾロ「へッ、そう来ると思ったぜ」

土方「どうやら痛い目見ねえとわからねえみてえだな…」

なおも切り結ぶ二人の剣！お互いに退けぬ意地があるのでしょうか…！

ゾロ「甘ぇ！」

ゾロが土方を弾き飛ばした！そしてゾロが何かの構えをとったぁぁー！

ゾロ「終わらせてやる！三刀流奥義、三千世…」

チュドォォォォン！！

ゾロ「グワァァァァァァァァァァ！！」

土方「なにっ！！」

あぁーっと！！これはどういうことでしょうか！？ゾロがいきなり爆発してリング外に吹き飛ばされてしまったぞぉ！！大丈夫かゾローーーーーーーーー！！

ゾロ「…なんだよこれは…なんでリングが爆発すんだよ…」

リング外に落ちたゾロ、どうやら無事なようです！ですがこの試合でゾロは敗退となります！

ゾロ「ちょっと待てコラァァァァァァ！！それ以前になんでリングが爆発すんのかこっちが知りてえよ！！」

それは私にもわかりません！！

ゾロ「オィィィィィィィ！！そんな理由で負けてたまるかぁぁぁぁぁぁ！！」

土方「ふん。じゃあこの試合は俺の勝ちってことでいいな…」

ということで、勝者・土方十四郎！！土方に盛大な拍手を！！

土方「やれやれ、茶番レベルの試合だったぜ…帰って土方スペシャルでも食うと…」

チュドォォォォォン！！

土方「おわァァァァ！！」

なんと土方の背後が爆発しました！！これは一体どういうことでしょうかァァァァァ！！

沖田「ちっ、失敗したか」

土方「やっぱりテメェかァァァァァァァァァ！！」

なんと沖田総悟がリングに現れたぞ！

沖田「いやぁーどうですかい？このガム地雷、便利でしょう？噛み終えたガムに超小型爆弾を仕込んでロロノア・ゾロを葬ったんですぜ」

土方「待てやコラァァァァァァァァ！！さっきのあれはテメェの仕業だったんかい！」

沖田「このあと、試合に勝った土方さんが油断してるうちに俺が出てきて暗殺して勝利を頂くの。なかなか面白いっしょ？」

土方「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁ！！俺としては全然面白くもなんとも無いんですけどォォォォォ！つうかテメェいつからいた！？」

実はこの大会、一試合につき一人だけですが飛び入り参戦も出来るのです！沖田は「何でもいいから学園・ザ・学園になりたい」と私と交渉しまして、その結果、この試合に乱入して土方抹殺という形で出場させてもらいました。

土方「やっぱりテメェらの陰謀かァァァァァァァァ！！つうかそんなルールがあるなら最初から言えぇぇぇぇぇぇ！！」

沖田「さぁ、試合再開でさぁ。後はあんたを退場させるだけですぜ」

なんと沖田、バズーカを土方に向けて撃ったァァァ

青コーナー、フランスの戦乙女の末裔にして銀氷の魔女…
ジャンヌ・ダルク３０世ーーーーーー！！

待ちに待った英雄同士の夢のドリームマッチ！勝つのは一体どっちだぁぁぁぁぁ！！

ジャンヌ「英雄と歌われたあなたと対するときが来るとは…この日をずっと待っていた」

セイバー「私もです。ジャンヌ。正々堂々、戦いましょう」

さすがは英雄と称えられたお二人。戦う前から礼儀を持って臨もうとしております。その佇まいから、先ほどの試合とはまさしく違う風格を漂わせています…

セイバー・ジャンヌ「いざ、勝負ッッ！！」

両者は互いに武器を取り、臨戦に入ります。

それでは、学園ファイト！レディー…ゴォォォォー！！

セイバーとジャンヌの戦いが今幕を開けました！勝つのはどちらでしょうか！

セイバー、ジャンヌ「……」

なんと！！
試合開始のゴングが鳴っても両者一歩も動かない様子！お互いの出方を伺っているのか！？

…ん。なんと二人の戦いが始まった瞬間、Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏのオープニングテーマ「ＯＡＴＨ　ＳＩＧＮ」のＢＧＭが鳴り出しました！！
この演出は音響さんの計らいなのだそうです！これは燃える！！音響さんありがとう！音響さんに盛大な拍手を！

セイバー「ハァァァァァ！」

ジャンヌ「テイヤッ！」

「ＯＡＴＨ　ＳＩＧＮ」のＡメロを皮切りに両者激突！
セイバーの約束された勝利の剣（エクスカリバー）とジャンヌの魔剣デュランダルがお互いに打ち合うたびに剣戟の音を響かせ、火花を散らします！両

者、一歩も引きません！
凛々しく気高き姫騎士達の一騎討ち！果たして、この激闘を制するのは誰でしょうか！！

セイバー「…噂以上の腕前ですね」
ジャンヌ「あなたも大したものだな…」

そして両者、いったん距離を置きます！

ジャンヌ「ならばこちらから行かせてもらう！！」
ジャンヌがデュランダルでの連打をセイバーに浴びせる！対するセイバー、ジャンヌの連撃をエクスカリバーで受け流し続けます！
セイバー「くっ……！」
ジャンヌの猛攻撃の前に、セイバーは押され気味だぁぁぁ！このままだと、勝利するのはジャンヌ・ダルク３０世か！？

セイバー「まだです！せいやっ！！」
なんとセイバーがエクスカリバーで大きく振り払い、ジャンヌを弾き飛ばした！さらに両者、距離を置きます！果たしてこの勝負、誰が勝つのでしょうか！？

セイバー「さすがは戦乙女の末裔。ですが、私にも譲れぬものがある！！」

ジャンヌ「……よかろう、騎士王！ならば我が渾身の一撃を受けるがいい！！」

あぁっと！セイバーとジャンヌ、お互いの気力を溜め始めたぞー！セイバーからは風が纏い、ジャンヌからは冷気が纏われております！彼女達から出るオーラからは、並々ならぬ気迫が現れております！

そしてぇぇぇぇーーーー！！

セイバー「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ジャンヌ「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！」

お互いに一閃！！！

その衝撃でリングに膨大な砂埃が立ったァァァァァーーーー！

砂埃が蔓延しているため、中の様子がどうなっているのかわかりません！

勝敗はどうなったのでしょうか…

だんだんと砂埃が晴れていきます…

アーッと！両者、直立しています！これは何かの兆しなのでしょうか。それともただのハッタリなのでしょうか…

なんと！！ジャンヌの持っていた魔剣デュランダルが折れてしまったぁ！そして彼女の結っていた美しい銀髪も解けたぁ！

ジャンヌ「……あなたの…勝利だ……グハァ」

ジャンヌ、そのままうつ伏せに倒れてしまいました！

セイバー「……あなたの戦い、お見事の一言です」

セイバーもエクスカリバーをしまいました。
この勝負、セイバーの勝利となります！！それでは皆さん、彼女に盛大な拍手をーーー！！

なんとセイバー、傷つき倒れたジャンヌを抱きかかえました…

セイバー「…ストーカー、すみません。医務室はどちらでしょうか？」

は…はい、選手控え室の隣にございます。

セイバー「ありがとうございます…」

なんとセイバー、傷ついたジャンヌを医務室に運ぼうとしていました！これは感動！この戦いによって、姫騎士同士の厚い友情が育まれました！！
これぞ騎士の鑑！！みなさん、今一度セイバーとジャンヌに盛大な拍手をお願いいたします！！

セイバー「……ジャンヌ・ダルク３０世。願わくばいつか、お手合わせ願いましょう」

【第５試合】

セイバー　ＶＳ　ジャンヌ・ダルク３０世
勝者：セイバー
決まり手：約束された勝利の剣（エクスカリバー）

さて、皆さんいかがだったでしょうか。
こうして生徒や教職員達は、この武闘大会を通じ戦いあうことで、様々なドラマが紡がれていくのです。
次回の武闘大会は、どんなドラマを見せてくれるのでしょうか…
それでは次回も、皆さんご一緒にぃ～…学園ファイト！レディー…ゴォォォォー！！

武・闘・列・伝（後書き）

ストーカー：皆様、長らくお待たせいたしました！
この私、ストーカーが今大会の出場者の皆さまを紹介いたします！
『機動武闘伝Ｇガンダム』
ドモン・カッシュ、東方不敗マスターアジア、ストーカー
『灼眼のシャナ』
シャナ
『緋弾のアリア』
神埼・Ｈ・アリア、ジャンヌ・ダルク
『けいおん！』
中野梓
『バカとテストと召喚獣』
ムッツリーニ
『戦国ＢＡＳＡＲＡ』
真田幸村
『無限のフロンティア』
アレディ・ナアシュ
『ワンピース』
ロロノア・ゾロ
『銀魂』
土方十四郎、沖田総悟
『Ｆａｔｅ』
セイバー

ストーカー：さぁさぁ、皆さんお待ちかねー！
次回のこちらコラボレーション私立クロスオーバー学園！
なんとある手違いによって歌星賢吾がラビットハッチに取り残されてしまいます！

果たして如月弦太朗は賢吾を、そして仮面ライダー部を救うことが出来るのでしょうか？
次回から仮面ライダーフォーゼの１１話、１２話をモチーフとした長編となります！
そして、あの仮面ライダーも登場！その彼からメッセージが届いております！

●●●：さあ、お前のスイッチを数えろ！

ストーカー：メッセージありがとうございます！彼に盛大な拍手を！
それでは次回も、皆さんご一緒にぃ～…学園ファイト！レディー…ゴォォォォー！！

学・生・探・偵（前書き）

唯：ついに長編が始まったね！

紬：けいおんとオーズ&フォーゼの映画公開記念に、W、オーズ、フォーゼのキャラデコケーキよ。

梓：ライダーはともかく、けいおんとどう関係があるんですか…

ギャレン校長：（ジーーッ）

律：…なんか、気配感じない？

澪：…気のせいだろ。

学・生・探・偵

【写真部　部室】

一人の男子生徒が、三千院ナギを問い詰めていた。彼女に問い詰めている男子生徒の名前は南家宇佐蔵（なんかうざぞう）。写真部の部長にして、たった一人の部員である。

なお、彼はこの作品のオリジナルキャラだ。見た目としては、長身痩躯の男で出っ歯が出ている、まるでイヤミのような奴であった。

南家から大量の封筒をもらったナギは、これらを投げ捨て彼を怒鳴っていた。

「…お願いだからこういうのやめてくれ！このラブレターだけじゃない！私の携帯にもお前からの電話やメールでぎっしりだ！玄関のロッカーにもな！」

「だってさ～三千院君。チミがいてくれないと我が写真部は廃部の危機に陥るんでザンスよ～。だから今、旬の女の子は君に決定なんでザンスよ。これミーの持論ザンス」

「そんなもん、新聞部に頼めばいいだろう。第一、写真を撮るから写真部も新聞部も似たようなもんだぞ」

いまだ怒り続けるナギにそういわれ、何かを考える南家。

一人でじゃんけんしてみたり、一人で写真の中の人をカメラで撮ってみたり、一人で誰もいない席に何かを話してみたり、一人で紙とペンと割り箸で作った「紙部員」と話してみたり…

「とにかく…呼んで字のごとくウザイからやめろよな」

カンカンのナギは部室からさっさと出て行った。「あ～ちょっと待ってザンス！」という南家の声も聞こえず、部室のドアをバタンと閉めた。

「三千院君…」

南家が窓を開けると、そこにはプンプンしながら歩くナギの後姿が。南家は彼女の後姿をカメラで見つめていた。

そして南家は、不気味な薄ら笑いを浮かべていた…

「逃がさないでザンスよ…ナギぃ。そしてチミたちも……くふふふ」

【フィギュア部】

あたり一面真っ暗で、電気スタンドでしか明かりの灯されていない部屋中にはクローゼットが何台も置かれていた。そしてそのクローゼットには女の子のフィギュアばかりが並べられていた。

そして一人の男子生徒が、あるものを愛でていた…

「あ～フェイトたんにラクスたんペロペロ～！奏たん、美琴たんハァハァ…（恍惚）」

男子生徒が手に持っていたのは、彼が自作したという、フェイト・T・ハラオウン、ラクス・クライン、立華奏、御坂美琴のフィギュアであった。

手にしたフィギュアを舌で舐めまわす、この紛れもない変質者は肝井宅夫（きもいたくお）。彼もまた、このフィギュア部の部長にして、たった一人の部員だった。

ちなみに彼もオリジナルキャラなのである。眼鏡をかけており、肥満体型に丸顔という、いかにもキモオタという風貌であった。

「…どうしてこの4人はボクチンに振り向いてくれないでしゅかね？」

突然変な事を言い出す肝井。正直どうでもいい発言だが、彼にとっては死活問題に等しいものであった。彼は、その見てくれと嗜好から、黒楼州学園全ての女子生徒に嫌われていた（まぁ当然だが）。なのでこうして学園の女子生徒をモデルとしたフィギュアを作り出し、それは自分の妄想上の彼女にしては、これを舐めまわしたりする、実にその名のとおりキモイ男であった。

…ふと、肝井のもとにある男がやってきた。

「…どうやらチミとミーは同じにおいがするザンスね」

その正体は南家宇佐蔵だった。

「お、おたくは南家君ではないでしゅか。どうしたんでしゅ、こんなところで」

肝井に呼ばれた南家はこう答えた。

「チミにいい話があるのでザンスよ…」

南家がそういって取り出したのは不気味なスイッチだった…
しかしそれに対し肝井は薄気味悪い笑みを浮かべた…

「ブヒヒ、奇遇でしゅね～。実はボクチンもでしゅよ…」

肝井の手にも、不気味なメモリが握られていた。

『ＢＲＯＮＺＥ』

「くくく、これで役者はそろったでザンス。さぁ、ミーらの『欲望』を解放するザンス」

そして南家が、懐から不気味なメダルのようなものを取り出し、これを肝井自作のフィギュアに向ける。するとフィギュアからメダルの投入口が出現した…

メダルが投入され、フィギュアから生み出されたものは……ペガサスの怪物だった。ペガサスはこう言う。

『ウヒヒヒヒ、オラがいるからにはもう安心ヅラ』

そして肝井がそのメモリを肌に挿し、また南家がスイッチを押す

と、肝井の姿が銅像のような怪物、南家の姿が青い昆虫のような怪物となった…！

【？？？？？？？】

藤崎佑助（ボッスン）、吉井明久、秋山澪、柏崎星奈は闇の中にいた。

４人が辺りを見回してみても、全ては闇の中だった…

そしてその闇の中に一筋の光が照らす…

そこには、一人の黒髪の少女の幻が映し出され、こう囁いた……

「……私…きれい？……ウフフフ……」

「イヤァァァァァァァァァァァ！！」

少女の霊を見たボッスン、明久、澪、星奈が絶叫した！

「如月…フォーゼモジュールをそんなくだらないことに使うな」

「まったくだ。馬鹿かお前らは、特に星奈（にく）」

自室から出た賢吾とホットドッグを食べていた夜空が声をかけた。そこには、フォーゼ、ボッスン、明久、澪、星奈、翔子がいた。

「へいへい」

実はラビットハッチの照明を落とし、暗闇の中フォーゼが右腕のフラッシュモジュールで翔子に光を当て、ボッスン、明久、澪、星奈を脅かしていたのだ。

「楽しかったのに、な？」

フォーゼが彼らを呼んだのは、フォーゼモジュールで遊ぶためだけだった。

フォーゼが照明を入れ、フラッシュスイッチをオフにすると、シェイクのカップのようなメカにそのフラッシュスイッチを差し込んだ。するとシェイクがペンギンのようなメカに変形した。シェイクメカは踊るように動き始めた。

「オッ、動いた！」

「すげぇ！」

「わあ！かわいい～！」

「新しいフードロイドか？」

明久、ボッスン、星奈が感動の声を上げ、澪がシェイクメカについてフォーゼに聞く。

「おう、フラシェキーってんだ…」

フォーゼは賢吾の部屋に行く。そこには賢吾がコンピュータを操作していた。

「賢吾、今日はどうする？」

「まだ準備段階だ。今日はフォーゼの協力は必要ない。それと…むやみに変身するな、むやみに名前を呼ぶな」

フォーゼは「へいへい」と呆れたように返事をし、変身を解いた。弦太朗が賢吾の机にあった「２１」のスイッチを手に取った。

「お、新しいスイッチか」

「微調整はまだだけどな」

弦太朗は賢吾の部屋を出ると、賢吾以外の5人に向かってこう言った。

「よーし、腹も減ったし、ラーメンでも食いに行くか！」

夜空「そうだな、行こうか」

星奈「ラーメン？何それ、おいしいのかしら？」

明久「え！？ラーメン、食べたこと無いの、柏崎さん！」

ボッスン「どんだけお嬢様なんだよお前は～」

翔子「……如月。雄二も連れて行っていい？」

澪「ごめん弦太朗。私には部活があるんだ…」

夜空が同意し、明久、ボッスン、翔子も同意した。澪には軽音部があるので行けない。

「青春の塩味が涙なら…青春のしょうゆ味はラーメンだ！仮面ライダー部、ラーメン屋へＧＯ！」

弦太朗は思いっきり叫ぶと、みんなも弦太朗に合わせて拳を上げて「オーッ！！」と叫んだ。

「賢吾も来いよ！」
「俺は仮面ライダー部じゃない」
「まだそんなことを…友達付き合いが悪いぜ」
「…友達でもない」
「ま、先に行ってるぜ！絶対に来いよ！」
「おい、俺のカバン！」
弦太朗がそういってアストロスイッチカバンを奪い取る。
「仮面ライダー部、ラーメン屋へＧＯ！」
「僕らも仮面ライダー部じゃないし！」
弦太朗がツッコミを入れる明久、ボッスン、夜空、星奈、翔子、澪を伴ってラビットハッチを出た…
それを見守っていた賢吾はため息をついた。
「……ふぅ。まったく、あの男は」

【仮面ライダー部前の廃部室】

「澪ちゃんまだラビット(あそこ)ハッチにいるかなぁ～♪」

平沢唯は澪を呼ぶため仮面ライダー部に行こうとしていた。

「…コラ平沢、何やってんの？」

しかし、廃部室に入ろうとしていたのを運悪く3人の男性教師に見つかってしまった！

「せ、先生！」

唯の前に現れたのは、青緑の髪の理知的なジェレミア・ゴットバルト、茶髪の単細胞なパトリック・コーラサワー、そして唯の担任の坂田銀時だった。なお、先ほど唯に声をかけたのは銀時である。ジェレミアが唯の行動に眉をひそめた。

「…ここは立ち入り禁止のはずだ。勝手に入っては駄目だろう？」

「い、いやぁ～それは、その…そうですね～…」

ジェレミアの問いに戸惑う唯。

「中になんかあるはずだ！行くぜお前ら！」

「きゃぁ！」

コーラサワーの号令で唯を無理矢理どかし、3人がかりで廃部室に入った！

「…なんもねーじゃねーか」

部室に入った銀時の一言。確かにめぼしいものはない。

「…ん？なんだあれは」

…その時ジェレミアがあるものに目をつけた。

ロッカーから指が出ていた！そのロッカーは、紛れも無く唯たち如月ファミリー（弦太朗命名の仲間たち）が知っているラビットハッチへの入り口だった！

その時背後から唯がジェレミアに飛びつき、両腕で首を絞めた！

「待ってください！」

「ぐえ！やめろ平沢、教師になんてことするんだ！」

一方ロッカーから弦太朗が出てくると、唯が銀時、ジェレミア、コーラサワーと格闘している場面が目に入った！あわてて、しかしソーッとロッカーのドアを閉める。

「おい如月、なんかあったのか？」

「まずい！銀さんとオレンジと不死身だ！」

夜空に聞かれた弦太朗が皆に呼びかける。ちなみにオレンジとはジェレミア、不死身とはコーラサワーのことである。

唯ＶＳ教師トリオの格闘は２分もかからなかった。必死にロッカーにしがみつく唯を、コーラサワーが問い詰める。

「平沢さぁ、そんなにロッカーが好きなのかよ？」

「あ？いいえぇー！実はマネキン先生に…」

「え！？大佐…じゃなかったマネキン先生がなんだって！？」

唯が言ったマネキンという言葉に反応するコーラサワー。その様子はギョッとした様な表情だった。

「先生に頼まれて、このロッカー処分しろって！自分が使ってたものなんだけど、『呪われてるから捨てといてくれ』って言われてたんですよ！」

唯が焦りながらカバンからノートを取り出し、１枚破る。そしてその１枚をマジックで「不良品」と書いてロッカーに貼り付けた。

「た、大佐…じゃなくてマネキン先生が…使って…？」

頬を真っ赤にしたコーラサワーが女教師カティ・マネキンのことを妄想する。そう、自分のロッカーで着替えているカティ・マネキンのことを…

『コーラサワー先生…見るなよ…？』

「…うひひひひひひ」

マネキンの着替え姿を妄想して不気味な笑みを浮かべるコーラサワー。呆れた銀時がロッカーに手をかけようとした！

「そこどけ！中確認しねえと困るでしょーに！」

「銀ちゃん先生！のの、オバケに呪われますよ！がおー！！」

唯が威嚇し、オバケ嫌いの銀時をけん制した！

「ひゃぁー！おおおオバケなんか、ここ怖くねーよ…でも怖ぇーし！」

オバケに震える情けない同僚に呆れたジェレミアが強引に突っ込んだ！

「ど、どうせ我々の人生は呪われているのだ！いまさらオバケや呪いごときに怯んでは教師などやってられん！行くぞ坂田先生、コーラサワー先生！」

銀時、コーラサワー「お、おー！！」

ジェレミアの号令で唯を無理矢理どかし、大人3人でロッカーを開けようとした！

…こいつらは教師として、大人として恥ずかしくはないのか？

ともあれ絶体絶命の唯。万事休すか！？

「あ、先生、ここにいらしてましたか」

その時、背後から綾崎ハヤテがやってきた。彼は爽やかな顔で3人にこう言う。

「坂田先生、カフェテラスでパフェの大食い大会が開催されるそうです。ゴットバルト先生、先生の農場のオレンジが大量にほしいというお客さんが農場に来てます。コーラサワー先生、マネキン先生から大事なお話があるので来てほしいとおっしゃってましたよ」

銀時「何!?パフェの大食い!?」

ジェレミア「オレンジのお客!?」

コーラサワー「オレの大佐が!?」

教師三人「急がねば!!」

ハヤテから急報を聞いた3人はすぐさま廃部室を出た!しばらくするとハヤテはにやりと笑い、唯に言った。ハヤテが3人を撒くために言いつけた嘘だった。

「…よし。もう大丈夫ですよ、唯さん」

「ナイスフォローだね!ありがとー、ハヤテ君♪みんな、もう出てきていいよー!」

唯がロッカーのドアを開けると、すし詰めにされてえらいことになってる弦太朗、ボッスン、明久、夜空、星奈、翔子、澪の姿があった…

その下校途中、ユウキが弦太朗と会い、ＪＡＸＡ（ジャクサ）に向かった…

【ＪＡＸＡ】

ＪＡＸＡとは、宇宙開発機構のことである。
総務省・文部科学省所管の独立行政法人であり、ロケットや人工衛星、航空機などの研究開発機関である。宇宙科学に関する学術研究、宇宙科学技術、航空科学技術に関する基礎研究や基盤的研究開発およびこれらに関連する業務を総合的に行い、日本の航空宇宙開発政策全般を担っている。

弦太朗とユウキの二人は、このＪＡＸＡの施設にやってきたのだ。
施設内の設備や展示を見学しながら、弦太朗は呟いた。

「でもさ、よく考えたらユウキの夢叶ってるよな」

「え？」

弦太朗の言うことにポカンとするユウキ。

「宇宙飛行士になって、宇宙に行くって夢だよ。だって毎日月行ってるぜ、オレ達」

それはそうだ。二人は授業が終わった後、いつも仮面ライダー部の部室であるラビットハッチに向かっている。廃部室のロッカーを通じ、月面に向かっているからだ。

しかしユウキは少し考えた後、首を横に振る。

「う～ん…でも違うな。それとこれとは別。ちゃんと自力で行かなきゃ、行ったことにはならない。宇宙って素晴らしい！でも、とっても怖い所でもある。だから、甘く見ずに自分の力で挑戦したい。それよりも、私がここに入学した理由を話すね！

この黒楼州学園ってのは、普通学科、農業、工業、商業、芸術、スポーツ、情報、福祉、サブカルチャー、宇宙開発など、実に多くの学科が学ばれている。その面における優秀な人材を育成するために、ある一族によって黒楼州学園都市が創られたの。だから私は黒楼州学園に来た」

ユウキには宇宙飛行士になる夢がある。彼女にとっては、毎日楽してつきに言っても、夢は叶ったことにならない。

だから宇宙飛行士になって、自分で宇宙に飛びたいのだ。

「そうか、偉いぞ！そうでなきゃいけない。夢は自分の手で掴むもんだ！力いっぱい掴め！砕け散るぐらい！」

「砕けちゃ駄目でしょ！」

「砕けたら吸収されて、骨と体が１つになる。それがいい！」

「相変わらず、よく分からないな…」

談笑しながら、二人はＪＡＸＡを回った……

【キャンパスの一角】

３人の男女がキャンパスの掃き掃除をしていた。
一人は古着を着ている火野映司（ひのえいじ）、一人はおとなしそうな女子生徒・泉比奈（いずみひな）、そしてもう一人は奇妙な赤い右腕をした金髪のガラの悪そうな青年アンクだった。日陰に隠れていたアンクは不機嫌そうにアイスキャンデーを食べていた。

「ちっ、作者の野郎からもらった出番がこの学園の用務員とはな…しかも貴様らと一緒で」

「そう言うなよ。俺だってこの学園に雇ってもらってるんだから」

映司がアンクをとがめる。すると比奈がこんなことを…

「…そんなことよりも映司君、この話知ってますか？部員がたった一人しかない部活があるって」

「あ～、知ってる！確か、フィギュア部と写真部」

「女子生徒に嫌われていて、二人とも『キモイ奴』『ウザイ奴』に学園ランキングされたあの生徒です。何でも、女子生徒をストーキ

ングしてるとか…」

「まさか。妙さんをストーキングしてる近藤さんではあるまいし、ははは」

うつむく比奈の話を前向きに笑う映司。アンクは逆に興味なさそうだ。

「フン…おい映司、売店行ってアイス買って来い。ガリガリ君のソーダだ！」

「…わかったよ。いちいち人使い荒いなーアンクは」

渋々アイスを買いに行こうとする映司だが、比奈がアンクのもとに近寄り…

グイっ

「痛ぇ！！」

「もう！アイスくらい自分で買いなさい、アンク！」

比奈が怒ってアンクの耳を引っ張った！アンクは「しょーがねぇな…」とぼやきながらも渋々アイスを買いに行った。

…しかしその途上、アンクは奇妙な気配を感じ取った。

（…この気配、ヤミーか？いや、気のせいか…）

気にせず、売店へと向かった…

【鳴海探偵事務所】

黒楼州学園の外れにある古びたビリヤード場。風になびく風車と風見鶏。
ここが鳴海探偵事務所。武偵とも風紀委員とも違う、探偵部という部活の部室である。

「あー、今日も人が来ねぇーなぁ」

鬱屈とした態度でため息をつくこの青年。ソフト帽を被り、決まっているようにも見えないこの男は左翔太郎（ひだりしょうたろう）。自称、ハードボイルド探偵だ。
しかし、一人の小柄な少女がそんな翔太郎の頭をスリッパで叩いた！

「いて！亜樹子（あきこ）、何しやがんだよ」

「翔太郎君！宿題やりなさいよ！」

翔太郎を叩いた張本人は鳴海亜樹子（なるみ）。女子中学生に見えるかもしれないがこう見えても高校生だ。原作じゃ二十歳だけど。

「おめーも人のこと言えねぇだろ。お前、こないだ宿題忘れて鉄人先生に補修させられたじゃねえか、いて！」

「それとこれとは別！私は鳴海探偵事務所の所長だから！」

「この話の場合、お前は探偵部の部長だろ」

「…やれやれ、これだから翔太郎はいつまで経ってもハーフボイルドなんだよ」

コーヒーを飲みながら二人のやり取りを聞いていた不思議な雰囲気を持つ魔少年、フィリップが翔太郎に追い討ちをかける。

「な…！人が気にしてるところを！」

「だって実際そうじゃないか。新入生歓迎会のとき部活紹介をさせられたんだけど、確かそのとき僕と亜樹ちゃんだけ出て、君はインフルエンザをこじらせていたね」

フィリップの発言に亜樹子も「そうそう」と頷く。翔太郎は苦い顔をしてタイプライターを打ち始めた。

「……テメェら、あとで覚えてろよ」

翔太郎の手元には、学校新聞が置かれていた。新聞には以下の記事が掲載されていた…

悪質！ストーカー事件

次々と狙われる女子生徒たち
少女達の心を踏みにじる二人の変質者！
その背後には悪魔が潜む…

ストーカーに詳しい近藤勲さんに聞いてみました。
近藤勲「え！？俺やってませんよ」
志村妙「テメーも同じ人種だろうがぁァァ！」
近藤勲「ギャァァァァァ！！」

黒楼州学園新聞部発行

学・生・探・偵（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『仮面ライダーW』
左翔太郎、フィリップ、鳴海亜樹子
『仮面ライダーOOO』
火野映司、アンク、泉比奈
『けいおん！』
平沢唯、秋山澪
『ハヤテのごとく！』
綾崎ハヤテ、三千院ナギ
『僕は友達が少ない』
三日月夜空、柏崎星奈
『バカとテストと召喚獣』
吉井明久、霧島翔子
『スケットダンス』
ボッスン
『銀魂』
坂田銀時
『コードギアス　反逆のルルーシュ』
ジェレミア・ゴットバルト
『機動戦士ガンダムOO』
パトリック・コーラサワー、カティ・マネキン

鴻上会長：後藤君！誕生日おめでとう！！

後藤：（迎えてないし）

鴻上会長：誕生日記念に、君にプレゼントしよう！

きゅい～ん

電動泡立て機で生クリームを飛ばし、後藤の顔面にかける鴻上会長。

ぺちゃっ

後藤：うっ！（俺の出番はここだけなのか…）

脱・出・不・能（前書き）

ヒイロ：……。

刹那：……。

ヒイロ：……。

刹那：……。

ヒイロ：今回は仮面ライダーW、オーズ、フォーゼが初共演だ。
だが、この回後半からこの長編でオリキャラによる過激な描写がある…

刹那：…覚悟を決めたら読んでくれ。行こう、ヒイロ・ユイ。刹那・F・セイエイ…未来を切り開く！

ヒイロ：任務、了解。

脱・出・不・能

前回、三千院ナギは写真部のたった一人の部員である南家宇佐蔵(なんかうざそう)に言い寄られていた。モデルになって欲しいといっておきながら、実際は毎日のように送られてくるラブレター、メール、電話でまるでストーカーのようにアタックされるナギであったが、彼女はこれを拒絶。怒りに燃えた南家は、学園の女子生徒全てに嫌われているフィギュア部のたった一人の部員・肝井宅夫(きもいたくお)と結託。ガイアメモリ、セルメダル、アストロスイッチを手に、何かを企てようとしていた…！

【公園】

綾崎ハヤテと三千院ナギは、いつものようにデートしていた。
いつもならラブラブの二人だが、ナギのほうは何故か浮かない顔をしていた。ハヤテはそんな彼女に気づき、声をかけてみることに…

「どうしましたか、お嬢様？少し顔色がよくないですよ？」

「な…なんでもない…！」

すぐさま首を横にふるナギ。しかし彼女のことを一番身近に見てきたハヤテは下がらない。

「そういうわけにはいきません。何かあったらマリアさんに顔向け

できないですし。何でもおっしゃってください…お嬢様の悩みは僕が解いて見せます！」

「ほ、本当か？」

「本当ですとも！」

ハヤテの言葉に元気付けられたナギ。二人はベンチに座った後、ナギは自分の悩みを彼に打ち明けた…

「実は…ストーカーに狙われているんだ…」

「ストーカーですって？ストーカーって、あのGガンダムの…」

「バカ！あのオッサンなわけあるか！本物の『ストーカー』だよ！」

ちなみに、ストーカーというのは本来、「潜む者」という意味がある。

「その…だから…私にはお前がいないと……」

ナギが喋ろうとした途端…

『見つけたザンス、三千院君』

『まさかあんな奴と付き合っていたとはでしゅね』

「何だ、貴様ら！？」

ハヤテとナギの目の前に現れたのは、ハンミョウに似た青い昆虫と、青銅製の仏像を思わせる怪人であった。青い昆虫の怪物は自分の腕を示して豪語した。

『ミーは羅針盤ザンス。ミーが望むものは、何でも見つけられるのでザンス。どこに隠れようが、どんなものでもこのダウジングホーンが指し示してくれる！もう逃げることはできないザンス』

『もう観念したほうがでしゅよ。おたくらはすでに我が手中で踊り続けているでしゅ！ブヒヒヒヒ』

昆虫にあわせるかのように、仏像の怪人も中二病的な発言のあと高笑いした。

「お嬢様、下がっててください！」

「あ、ああ！」

ハヤテがナギをかばった。

しかし戦闘開始と思いきや、怪物は自らの正体を明かす。なんと…その正体は驚くべきものだった。

南家宇佐蔵が昆虫に、肝井宅夫が仏像に変身していたのだ…

「お前写真部の南家にフィギュア部の肝井！？」

ナギはその正体に驚愕、戦慄した。そんな彼女をハヤテが訪ねる。

「お嬢様？知っているのですか？」

「ああ、さっきお前に言った私にストーカー行為を働いているバカどもだ！」

「バカとは失礼ザンスね。ミーはミーの生き様に誇りを持っているだけザンス」

ふと、ハヤテの視線が二人の手元に移った。二人の手には、不気味なスイッチとメモリが握られていた…

ハヤテが二人に警告を呼びかけた。

「そのスイッチとメモリは使わないでください！人間に戻れなくなります！」

「ほう、このスイッチの事を知っているようでザンスね」

「そう、ボクチンらは人間を超える力を手に入れたのでしゅ。さぁ、これを見るでしゅ！」

警告も聞かず肝井が出したのはこれまたキモいノート。

「これはボクチンの未来ダイアリー、今日は今から南家君とナギたんと旅行」

「うわ……」

日記とは…大体予想はついていたが、まさかこれほどとは思うと逆にこちらがドン引きする。

「今日はナギと課外活動。美しい風景の前で3人はラブラブでザンス…ヒッヒッヒ」

奇怪な笑い声を上げる南家。こいつら、変態どころかキチガイを凌駕している…

「ハヤテ、こいつら怖い……」

「大丈夫です、お嬢様。僕がついてます！」

その背後で震えるナギをハヤテにますます接近する2人。

「貴様、邪魔ザンスね。カスはカスらしく死ぬザンス！」

「男は大嫌いでしゅから、お前はここで殺してやるでしゅよ！」

『ＢＲＯＮＺＥ』

南家が懐からスイッチを出し、肝井もガイアメモリを取り出す。肝井がメモリを肌に挿し、南家もスイッチを押すと、再び怪物に変化！肝井の姿が仏像のようなブロンズ・ドーパント、南家の姿が青い昆虫のようなピクシス・ゾディアーツとなった！

怪物の姿を見た人たちはおびえ、逃げ出した！

「…致し方ありません。話し合いで解決したかったのですが…」

ハヤテはそこらに落ちていた鉄パイプを拾うと、これでゾディアーツらに殴りかかった！しかしドーパントが盾となり、鉄パイプがグニャリと折れてしまった。

「なに！？うわ！！」

すぐさまハヤテはドーパントに殴られてしまう！

「ハヤテぇ！！」

『バカめ、そんなものでボクチンに歯向かおうとは笑わせるでしゅ』

下衆な高笑いを上げる二人。

その時だった。

愛紗「そこまでだ！外道！」

ミラ「さぁ観念してもらおうか、変質者ども」

そこには、それぞれ得物を構えたミラ＝マクスウェル、ジュディス、愛紗、星がやってきた！

「ミラさん！ジュディスさん！」

「愛紗！星！」

突然の援軍に喚起の声を上げるハヤテとナギ。

星「さぁ、次は私達が相手だ！」

いっせいに戦闘態勢に入る４人。一気に２対４になった。

だが、こんな状況に置かれても彼らは平然としていた。

『ヒヒヒ…女の子相手とは、さっきよりも「やる気」が出たザンス』

『そうでしゅね…我が「コレクション」に加えたいでしゅ…ブヒヒ』

「…何を言ってるのかわからないわね。まぁ、あなた達に負ける気しないけど」

ジュディスがにやりと笑うと、４人はいっせいにゾディアーツとドーパントに攻撃した！

ミラ「アサルトダンス！」

ジュディス「月影刃（げつえいじん）！」

ジュディスの槍の一突きとミラのすばやい剣術がゾディアーツに襲い掛かる！

『い、痛いザンス！』

愛紗「はぁぁぁぁ！！」

ズバッ！

『て、手加減してほしいでしゅ～！』

「誰が貴様なんぞに手加減するか！」

愛紗が叫びとともに青龍堰月刀を振るい、ドーパントに斬りつけた！

どうやら、ドーパントもゾディアーツも、身体能力だけ見ればたいした戦闘力はなさそうだ。もともと文化系の生徒ということもあるが…

「覚悟ッ！！」

星がドーパントに向けて槍を突き立てようとしたその刹那…！

『そうはさせねぇゾラ』

なんとペガサスの怪物…ペガサスヤミーが翼で飛んできて、愛紗と星にダブルラリアットをかました！

「きゃぁ！」

いきなりの攻撃に倒れる二人。

『さぁ、我がコレクションになるがいいでしゅ！』

隙ありとばかりにドーパントが銃口状の左手を向けると、立ち上がった瞬間、愛紗と星に強力なガスをかけた！

「うっ…！なんだこれは…！」

ガスを浴び続ける二人。ガスに浴びられながら、やがて二人に何かが起こった…

愛紗と星は、ドーパントによってブロンズ像にされてしまったのだ…！

『ぶひひひひ！コレクションがまたふたつ、増えたでしゅ！』

二人のありさまに、戦慄したジュディス、ハヤテ、ナギ。そしてミラが激昂した！

「…貴様ァ！！」

『ブヒヒ、これはブロンズガスと言ってでしゅね…なんとこのガスにかかったら最期、ブロンズ像にされるのでしゅよ！』

「許さん！！」

しかしミラとジュディスが攻撃しようとした途端、やはりペガサスヤミーに邪魔される。

そして二人の頭上に謎のカプセルが落下し、二人は運悪くカプセ

ルに捕まってしまう！

「な、なんだこれは！くそっ、出せ！」

カプセル内でもがくミラとジュディス。しかし、カプセルのてっぺんの部分から謎の液体が流れ始めた！

「な、何なのこの液体は！？」

『ブロンズリキッド…ガスと同じ成分の液体でしゅ。その液体を流し込むカプセルから逃げられると思ったら大間違いでしゅ！そこでブロンズ像になるでしゅよ！』

やがて二人に謎の液体が充満し、二人もブロンズ像にされてしまった…

「みなさん…！お嬢様、逃げましょう！早く弦太郎さんたちを…」

「ああ！あんな奴等、放ってはおけん！」

『くっくっく、逃がさないザンスよ…』

『あの小僧を殺し、ナギたんもコレクションに加えるでしゅ』

ハヤテとナギの表情に絶望が満ちたときだった…

「おい、随分好き勝手なことしてくれんじゃねーか」

そこに現れたのは、左翔太郎、フィリップ、火野映司、アンクだった。

「間に合わなかったか…だけど、お前達の好きにはさせない！」

ブロンズ像にされたミラ、ジュディス、愛紗、星を見た映司はこう叫んだ。勝負の邪魔をされたゾディアーツが叫ぶ。

『なんザンスか、お前らは！？』

言われた翔太郎、フィリップが名乗りを上げる。

「俺（僕）達は…二人で一人の仮面ライダーだ！」

翔太郎が黒いメモリ、フィリップが緑のメモリを差し出す。翔太郎の腰には、二つのスロットが設けられたダブルドライバーというベルトが取り付けられていた。その瞬間、フィリップの腰にもダブルドライバーがつけられた。

二人はスロットにメモリを差し込んだ。

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

『ＪＯＫＥＲ』

――――――変身！

現れたのは、右側が緑、左側が黒の仮面ライダーＷだった！

Ｗに変身した途端、フィリップが倒れた。しかし意識はＷに飛んでおり、Ｗ（ふたり）はゾディアーツに指差した！

「「さぁ、お前の罪を数えろ！」」

「ヤミーまで出やがったな…映司、変身だ！」

「ああ、わかった！」

アンクが映司に色違いの３枚のコアメダルを投げつける。そして映司がオーズドライバーなる３つのスロットが入ったバックルを腰につけ、そのスロットにメダルを入れた。その後バックルを傾け、スキャナーでバックルの中のメダルを読み取ると…

――――――変身！

タカ！　トラ！　バッタ！
タ・ト・バ♪　タトバ・タ・ト・バ♪

愉快な歌が流れたあと、映司の姿が変わった！

赤い翼のような頭部、黄色い上半身、緑の足。胸には円状の飾りがつけられていた。
彼もまた、仮面ライダー。火野映司は仮面ライダーオーズなのだ！

「もう大丈夫だぜ、今度は俺達の番だ」

『綾崎ハヤテに三千院ナギ。君達には退避を勧めるよ』

「ここから先は、俺達に任せてよ！」

W、Wの意識内のフィリップ、オーズがハヤテとナギに声をかけた。

ＪＡＸＡからの帰り道、如月弦太朗と城島ユウキは…

「いやぁ、やっぱＪＡＸＡは楽しいなあ！」

趣味への愛は本物のようで、ハイテンションなユウキ。弦太朗が声をかけた。

「楽しかったな！でも、次は絶対ラーメン屋な」

「いいよ？」

「ラーメンってのはな、しょうゆ味に限るんだよ」

「え～？味噌だよ」

そんな他愛のない話をしていると…

なんと仮面ライダーWとオーズがゾディアーツ、ヤミー、ドーパントとの戦闘に出くわした！そこには、ナギを安全なところに退避させているハヤテがいた。

「…あれ、翔太郎先輩、フィリップ先輩、映司さんだ！ゾディアーツと戦ってる！」

「なんなら加勢するしかねえな！ハヤテとナギの命があぶねえ、行くぜ！」

弦太朗は友人の危機を救うため、フォーゼドライバーを手にした！

……3……

……2……

……1……

――――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

フォーゼがWとオーズの戦いに乱入した！手始めにゾディアーツに蹴りを入れる！

『何するザンス！？』

「おいコラ！3対2とは汚ぇぞ！」

突然の援軍に動揺するゾディアーツ、ヤミー、ドーパント。

「弦太朗…お前が来てくれるとは心強いぜ」

『如月弦太朗、礼を言うよ』

「こっちは手一杯だったんだ。ありがとう弦太朗君！」

Wとオーズがフォーゼに感謝する。ふと、フォーゼがブロンズ像となったミラたちを見る。

「おい、ミラたちが大変なことになってるぞ！」

「あの仏像野郎の仕業だ！気をつけろ！」

ブロンズ・ドーパントの能力を見たナギがフォーゼに警告する。

その間に、ユウキはバガミールを通じてラビットハッチの賢吾に連絡する。

「賢吾君、ゾディアーツよ！」

『わかった、すぐ行く！』

早速、廃部室にあるロッカー経由で学校に向かおうとした。しかし、ここで妙なことが…

『何だ？え…？』

ワープ空間の出口がどこにも見当たらないのだ。これには流石の賢吾もうろたえる。

そう、弦太朗たちが毎日行く仮面ライダー部へのロッカー自体が姿を消していたのだ……

そんなことも知らないフォーゼは、ゾディアーツと戦闘を繰り広げていた。

『翔太郎、マキシマムドライブで決めよう。ルナトリガーだ』

「ああ！」

『ＬＵＮＡ』

『ＴＲＩＧＧＥＲ』

Ｗが黄色いメモリと青いメモリを出し、右側の金、左側の青にその姿を変えた！そして拳銃・トリガーマグナムにトリガーメモリを取り付けて構え、ドーパントたちに止めを刺そうとした…

『ＴＲＩＧＧＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「『トリガー・フルバースト！！』」

その一瞬、マグナムから無数のビーム弾が発射され、それはドーパント、ヤミー、ゾディアーツに向かって飛んだ！

「転がれ！」

しかしゾディアーツが何かの手振りに合わせて、そこにあった車が急に間に割って入り、車は爆発、炎上した…

それに乗じてゾディアーツたちは避難。Ｗのマキシマムドライブ

は失敗に終わった。

「くそ！仕留めそこなったか…」

「あれ？」

『どこ見てる、こっちザンス。三千院君。そんな男とつるんでるとは、見損なったザンス』

いつの間にかゾディアーツ、ドーパント、ヤミーが別の場所にいた。そこには、いつの間にか愛紗達４人のブロンズ像も浮遊していた。あの怪人の誰かの能力なのだろうか？

「愛紗ちゃんたちを返せ！」

『嫌でしゅ。ナギたん、おたくもそのうちコレクションに加わることになるでしゅから楽しみにね…』

オーズのいうことも聞かず、ドーパントは言いたいことだけ言って逃げ帰ってしまった。

「お前らの言うことなんか願い下げだ！」

「しかも逃げ足は速ぇぜ！…ん」

そこでフォーゼのレーダースイッチに着信が。

「何だ？賢吾」

『困った事になった』

「どうした？」

賢吾がその困ったことを口にした…

『ラビットハッチから…出られなくなった』

「出られなくなった……えーーーーーーっ！？」

衝撃の事実に、ショックを隠せないフォーゼたちだった。

【翌日】

周囲に誰もいない荒地。そして古びた小屋。

小屋の中、フェイト・T・ハラオウンが目を覚ましていた。

（ん、ここは…私は…？）

先ほどまで女子生徒へのストーカーがいるという連絡が風紀委員に伝わり、フェイト一人が成敗に向かったが、フェイトはそのストーカーに敗れ去った。その後、ここに運ばれたらしい。

フェイトが辺りを見回すと、そこには、信じられない光景が目に映った…

（…ラクス、奏、美琴！？）

フェイトの視界には、ラクス・クライン、御坂美琴、立華奏が、首に奴隷がはめる鎖つきの首輪がつけられ、声をたてさせないためにかませる太い木の棒をくわえられていた…

（誰がこんな真似を…許さない！）

こんな悪趣味なことが許されるはずがない…！フェイトが叫ぼうとしたが、やはり首輪に巻かれ首輪から壁に伸びる鎖に動きを封じられ、自分も木の棒をかませられていた。そのために大きな声を上げることが出来ない！

するとフェイトの前に、仏像のような怪物が現れた！

『いや～我がいとしのフェイトたんが来てくれるなんて思いもよらなかったでしゅ。ぶひひひひ』

下劣な笑い声を上げるこの怪物ブロンズ・ドーパントは、フェイトがくわえていた木の棒をはずす。

「ぷはぁ！…まさかあなたなの、犯人は！」

『そうでしゅ。でもそれを知ったおたくらは、一生を生きることはない！これはその前座でしゅ』

「なんですって！？」

恐るべき事実に、フェイトは激怒した！

「今すぐラクスたちも解放しなさい！さもないと風紀委員としての権限であなたを拘束するわ！」

『ブヒヒヒヒ、やれるもんならやってみるがいいでしゅ。さぁフェイトたん。デバイスを出して…』

「誰があなたなんかに…あっ！」

フェイトの手には、彼女のデバイス・バルディッシュが握られていた。

『ブヒヒ、尋問用の薬を南家君から裏ルートでもらってよかったでしゅ…さぁここでアクションポーズ！』

「え…きゃぁ！」

ドーパントの命令によって勝手に体が動き、バルディッシュを構えるような動作をするフェイト。

『ブヒヒ、我ながら理想系な感じでしゅね…動くなでしゅ！』

そしてドーパントが左手からブロンズガスをフェイトに吹きかける！フェイトが抵抗するが体が薬の効能に支配されているためそれも空しく、十秒してフェイトはブロンズ像にされてしまったのだ…

『まずは一人目…ブヒヒ』

やがてブロンズ・ドーパントは、ラクスに木の棒をはずし、彼女を起こす。

「は…ここは…フェイトさん！？それに奏さんに美琴さん！何ですの…」

『ブヒヒ、ようこそ♪』

「あなたは…！近頃、女子生徒が銅像にされているという噂を耳にしますが、このような外道を繰り返すのはあなたなのですか！？」

『そうでしゅ。さぁ、おたくも我がコレクションになるのでしゅよ』

「まずはその前に、あなたのしたことを悔い改めなさい！」

ラクスがドーパントのした外道を咎めた。しかし…

『ブヒヒ、ラクスたんに説教されるなんて夢のようでしゅ！』

「な…！何をおっしゃって…きゃあ！」

薬を飲まされたためにドーパントの命令どおりにポージングさせられ、そしてラクスもまた、ブロンズガスを浴びてブロンズ像にさ

れていった…

そしてドーパントは奏と美琴をも起こす。

「あ…御坂さん？ここは…」

「立華さん…ていうかフェイトさんやラクスさんがブロンズ像に…？」

『ようやく目が覚めたようでしゅね。ようこそ、ボクチンのブロンズワールドへ！』

「……あなた、こんなことをして何のつもり？」

「そうよ！この外道！悪魔！キチガイ！！」

奏と美琴も眉を上げて彼を咎めるが、やはり彼には馬の耳に念仏だ。

『おたくらもコレクション収集に協力してもらうでしゅよ。奏たん、ハンドソニック。美琴たんはレールガンね』

「そ、そんなわけ……あっ、ハンドソニック！」

「か、体が勝手に…！なんてことすんのよ！」

フェイト、ラクス同様に薬を飲まされた奏に片手にブレードが装備され、美琴も同じくレールガンの発射ポーズを構え、それぞれドーパント理想のアクションポーズをさせられた！そして奏も美琴も

ブロンズガスを浴びてブロンズ像にされていった…

ドーパントが変身を解く。その変身者である、肝井宅夫がここにいた…

「ブヒヒヒヒ……このところ大漁で気分がいいでしゅ。こいつらはあとは南家君に任せるでしゅか…」

肝井の目つきと口元は、悪意と狂気に満ちていた……

脱・出・不・能（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『仮面ライダーＷ』
左翔太郎、フィリップ
『仮面ライダーＯＯＯ』
火野映司、アンク
『ハヤテのごとく！』
綾崎ハヤテ、三千院ナギ
『テイルズオブエクシリア』
ミラ＝マクスウェル
『テイルズオブヴェスペリア』
ジュディス
『真・恋姫無双』
愛紗、星
『魔法少女リリカルなのは』
フェイト・Ｔ・ハラオウン
『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』
ラクス・クライン
『とあるシリーズ』
御坂美琴
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
立華奏

デュオ：いやー、読者のみんな。作者の奴が年末だから
お仕事が忙しくて更新が上手くいかねえみてえだぜ。

ロックオン：というわけで、次回も楽しみにしてくれよな！
ロックオン・ストラトス、次回も狙い撃つぜ！！

狂・人・嘲・笑（前書き）

神楽：フォーゼとWとオーズを出した作者だけど、まだ映画見てないアルよ。

作者：う！痛いところを…

仮面ライダー部編、年末に終わらせたいー
でも仮面ライダーの映画見たいー
でも年末仕事忙しー
でもやりたいゲームたくさんあるー
でも小説ネタがどんどん湧き上がるー
でもトルネに録っといた見てないアニメあるー

新八：働けぇぇぇぇ！！

狂・人・嘲・笑

前回で綾崎ハヤテと三千院ナギを襲ったピクシス・ゾディアーツとブロンズ・ドーパント。その正体は、取材と称してナギをストーキングしていた写真部部員・南家宇佐蔵と、学園の女子生徒全てに嫌われていたフィギュア部部員・肝井宅夫だった。二人は、二人の欲望の権化であるペガサスヤミーを引き連れ、ハヤテとナギに襲い掛かったのだ。しかしミラ＝マクスウェルや愛紗らの加勢で優勢になるものの、ドーパントの能力によって彼女たちはブロンズ像にされてしまう。

そこに現れた仮面ライダーフォーゼ、W、オーズ。ライダー側の優勢となるものの、ゾディアーツの能力でライダーの攻撃をかわし、「いつかナギもこの学園中の女子もブロンズ像コレクションにしてやる」と言い残して逃亡した。城島ユウキの連絡を受けた歌星賢吾はラビットハッチから現場へ駆けつけようとするが、なぜか出口が見当たらない。どうやらラビットハッチに通じる廃部室のロッカーがなくなってしまったらしい…

【仮面ライダー部前の廃部室】

「みんなこっち、こっち来て！」

志村新八が手招きで如月弦太朗、ユウキ、ハヤテ、ナギを呼びつけ、廃部室に誘う。そこには、弦太朗の仲間たち、通称如月ファミリーがいた。

いつもなら仮面ライダー部や如月ファミリーがいつも使うあのロッカー、影も形もないのだ…

弦太朗が焦りを感じ、バガミール経由で賢吾と通信する。

「確かにロッカーが消えてる…ゲートもない…」

『その場所が鍵穴、ロッカーが鍵のようなものだ。そこにロッカーをセットして初めて、月と地球のゲートが開くんだ。なんとかロッカーを探し出してくれ』

というわけで、如月ファミリー総出でロッカーを探すことになった。

【仮面ライダー部と如月ファミリー、ロッカー捜査中】

弦太朗からの依頼で鳴海探偵事務所の左翔太郎、用務員の火野映司も聞き込みを開始した。同じ仮面ライダー同士、助け合っていかなければ賢吾を救うことは出来ない。

「これぐらいの、古いボロボロのロッカー、どこかで見ませんでしたか？」

翔太郎が聞き込みをするが、やはりいい結果は得られない。クワガタ型の携帯電話『スタッグフォン』でフィリップと通信する。

「おいフィリップ、そっちどうだ？」

翔太郎の相棒であるフィリップには、「地球（ほし）の本棚」というアカシックレコードに検索をかける特殊能力がある。真っ白な空間に無数の本棚が並んでおり、それらが一冊一冊が「地球の記憶」のデータベースとなっている。フィリップがキーワードを唱え検索をかけると自動的に本が選抜されていき、任意の情報が入った本を絞り込むことができる。

しかし万能とは言えず、フィリップは困惑の声を上げた。

『お手上げだね。ロッカーってだけじゃ、ひとつに絞りきれないよ、半熟探偵（ハーフボイルド）君』

「んだと！？」

またフィリップに挑発される翔太郎。

一方、映司はアンクを説得していた。アンクはいつも暇つぶしにスマートフォンでネット検索しているため、映司はそんな彼にロッカーに関する情報を集めさせようとしたが…

「ふざけるな、何でたかがロッカーのために俺が働かなきゃいけないんだ」

「そのロッカーが弦太朗君たちにとって大事なものなんだよ。頼むよ！」

「もともと奴等の自業自得だろうが」

「…比奈ちゃん呼ぶぞ？」

「ち、面倒だな…あとでアイス奢れよ」

しぶしぶアンクも映司に協力することに…

弦太朗がロッカーを探している矢先、平沢唯と鉢合わせした。

「あっ、あった？」

「なかったよー！」

「ん？如月、平沢。何をしているんだ？」

と、そこで教師のアムロ・レイとバッタリ会った。

弦太朗「ああアムロ先生…いや、ちょっと…」

「そう言えば今日の俺の授業、相変わらず歌星がいなかったな。また保健室か？」

突然のことなので、困惑し始める弦太朗と唯。しかしアムロにはそれが手に取るようにわかるようで…

「…まさかと思うが、俺達が知らないところでどこかを彷徨ってい

るのか？」

「え？」

賢吾の事を聞かれて動揺する2人。

唯「…い、いや、保健室です！」

さすがに「歌星君は宇宙にいます」なんて言えるわけがない。唯がいい加減なその場しのぎでお茶を濁す。

だがアムロは微笑んだ。

「ははは…すまないな、変なこと聞いて。しかし、彼も体弱いから心配だな。でも如月、君が来てから随分明るくなったと思うよ。もし困ったことがあったらいつでも俺や坂田先生に相談してくれ」

アムロは二人の前から去っていった。

「アムロ先生はいつ見ても渋いねえ」

などと弦太朗がしみじみ言っていると、唯があることを思い出した。

「そうだ！きっとあの人だ…」

【職員室】

「あ？ロッカーだって？」

坂田銀時が鼻をほじりながらこう言った。

唯はつい先ほど銀時、ジェレミア、コーラサワーにロッカーのことで問い詰められていたのを思い出していたため、３人を尋ねたのだった。

「あ、ああ。あれなら廃品回収に出しておいたぞ」

何故か動揺していたジェレミアがこう言ったので唯が目を丸くした。

「廃品回収！？どこの業者ですか？」

「え！？し、知らねぇなー。たまたま、あの…トラックが通ってさ…えっとその…名前まではわからん」

こちらのコーラサワーもあいまいな言い方で唯に説明した。

「そんなぁ…」

唯が愕然とした。

【２－Ｂ教室】

「あー」

弦太朗が机に乗っかりながらぐったりとしていた。弦太朗の隣には、陰鬱な表情をしていたナギがいた…

もはや絶望的であった…

キンジ「ダメだ！トラックの目撃者は見つからなかった…」

ハヤテ「来客用の駐車場を見てきましたが、そっちもダメでした！」

遠山キンジも綾崎ハヤテも手当たりしだい情報を探していたが、結果は残念なものに…

スイッチ『廃品業者のリストアップも引っかからなかった』

初春「わたしもです…力になれなくてごめんなさい…」

スイッチと初春飾利がノートパソコンで検索したものの、やはり見つからず。

ジリリン！ジリリン！

するとアストロスイッチカバンから着信音が鳴り響く…

『ロッカーは見つかったか？』

「ごめん、まだ…」

それがユウキの返答だった…

するとロイド・アーヴィングがこんなことを言い出した…

「そういや、ラビットハッチのゲートって、何であのロッカーなんだ？」

その必然ともいえる疑問に、賢吾は少し呆れながら間をおいた後、語り始めた…

〜〜〜〜〜

1年前。

去年の夏に誕生日を迎えたその日、俺は差出人不明の誕生日プレゼントをもらった。独りきりになりたいときは、いつもあの廃部室だった。

そこで俺は、目の前に置かれていたある包みを開けた。

「なんだこれは…？」

包みの中のプリントには、こう書かれてあった。

『そのスイッチが新たなる扉を開く。自分の運命を知りたまえ。パスワードはＦＯＵＲＺＥ。その運命を掴むかどうかは君次第だ』

「……？差出人は無しか。どういう意味だ？」

包みの中にはもうひとつ、不思議なスイッチがあった。

ことの始まりはこのアストロスイッチだったんだ…

ともあれこのアストロスイッチを押してみた。するとそれは突然ピカリと光りだした。

そこで廃部室に入ってきたのが城島ユウキだ。俺はあわててロッカーにスイッチを投げ込み、自分の背にロッカーをくっつけたが、ユウキの方が先に言ってきた。

「あっ！ねえ君、歌星博士の息子さんだよね？地球外文明の研究で有名なんだよね！話、聞かせてもらっていいかな、ね？」

積極的に俺の事を聞いてくる。まぁ、ユウキの言うとおり俺の父親は宇宙関連の分野では著名だったからな。

すると、背後のロッカーの隙間から眩しい光が漏れた。

「何これ…？」

ユウキは恐る恐るロッカーの戸を開けた。常識では考えられない

空間に困惑するも、躊躇なく乗り込んだ。

「おい待て！」

俺もまぶしい光に目を瞑りながらも、好奇心のままに進むユウキの後を追った。

「うわ…何これ…長いな…」

謎の空間を見渡しながらユウキはつぶやいた。

そして着いたのが月面基地ラビットハッチだ。まるでＳＦ映画のような真新しい世界に、俺達は当然最初は困惑した。

「なんだ…ここは？」

俺達が内部に一歩足を踏み入れると、突然、低重力が働いた。

「う、うわぁぁー！」

「賢吾君！？うわぁ！」

低重力に体を遊ばれ、俺達は壁に叩きつけられた。

ふと、ユウキが俺を呼んで何かを指差したのだ…

「賢吾君、あれ…！」

窓の外には地球と月面。そう、ここは紛れも無い月面基地だったのだ。

ラビットハッチ内に進み、奥の部屋にある端末には、俺にあてられたメッセージがあった。そこで俺達は、恐ろしい真実とフォーゼドライバーとに出会った。

俺の父がここで死んだこと。

フォーゼシステムの存在。

ゾディアーツ出現の示唆。

アストロスイッチを悪用するゾディアーツは必ず現れる。俺は父さんの遺志を継いで、それを止める。人々を守る。このフォーゼシステムを使って…！

「私も手伝う！」

あれが、全ての始まりだった――――

～～～～～

【ラビットハッチ】

『……分かった。とにかくロッカーを探し出す。あとはオレ達に任せてくれ』

「頼んだぞ…」

弦太朗との通信を切り、ラビットハッチのメインホールに戻る賢吾。

ずっと騒がしい日が続いていたからだろうか、図らずも1年前と同じ状況に置かれていた。

弦太朗たちがここに来るまでは、ユウキと一緒にフォーゼドライバーやアストロスイッチの研究をしていた。

そして近頃、弦太朗がフォーゼになってからは、ラビットハッチがにぎやかになった。

仮面ライダー部の旗が天井に貼られ、ラビットハッチ内部には、オーディオプレーヤーやプレステ3にWiiが置かれ、本棚にマンガ本が収まり、食べ物が散らかり、ポスターが貼られ、何故か楽器や筋トレグッズが置かれていた。

ここで、三日月夜空と柏崎星奈がゲームして遊んだり、平沢唯ら放課後ティータイムや岩沢まさみらガルデモがここでも演奏したり、ボッスンたちスケット団や涼宮ハルヒたちSOS団が遊びに来たり、神楽やルフィや真田幸村が暴れまわったり、ここでも綾崎ハヤテが三千院ナギや桂ヒナギクの世話を焼いたり、吉井明久や坂本雄二がバカやったり、高町なのはやフェイト・T・ハラオウンが興味津々

にやってきたり、中等部から御坂美琴や鹿目まどかや花咲つぼみらが遊びに来たり…

しかし、いざ独りになってみると…室内なのに、懐かしくもどこか寂しい風が自分の背に吹いていた…

賢吾はこの状況をつぶやいた。

「…こんなに静かだったのか。父さんは、ここで1人でフォーゼの開発を…」

【音楽室】

いつもの通り楽器を持って練習を始める放課後ティータイムとガルデモ。

「なぁ唯、歌星君のことなら、弦太朗やユウキが何とかしてくれるからな…」

澪が唯に声をかけた。ラビットハッチへ繋がるロッカーがなくなった為に、きっと唯はふさぎこんでるんじゃないかと心配だった。

そんな唯の返答は……

「もー大丈夫だよー♪」

「うわ、立ち直るの早いですね…まあいつもの先輩でよかったです」

唯の反応に梓はやや呆れながらもくすりと笑った。皆がまとまった所で律がドラムスティックを構える。

「さぁ！いつも通り練習を始めるとするかー！」

「何がいつも通りだよ。いつもお茶をガブガブ飲んでるだけじゃないか…」

「アホですね」

律の発言に調子を狂わされる岩沢とユイ。そんななか、紬がティーカップを持ち出してきた。

「その前に、お茶と行きましょ～」

「いやいや、ここは練習するべきだろう……ってお前ら何お茶飲んでんだ！？」

紬が出したティーカップにつられる唯、律、梓、ユイを制止する岩沢と澪だった…

１０分後…

「さぁ、今度こそ練習を始めよう！」

ティータイムを終え、やがて澪の合図で楽器を弾き始めた。

そのときだった。

演奏を開始している彼女らを、突然天井から謎の煙が襲った！煙は徐々に音楽室を支配し…

放課後ティータイムとガルデモの面々はたちまち銅像と化した！銅像となった彼女達はその後引力に引かれる様に動いてから宙を舞い、音楽室の窓ガラスを突き破ってどこかへ飛んで行った…

【ＳＯＳ団部室】

「あー、なんか暇ねー」

ハルヒは口を尖らせながら机を指でトントンと叩いていた。キョンは呆れて席を立った。ちなみにこの二人にも、メイド服を着たみくるがお茶を入れ、いつも通りに本を読んでいる長門がいる。

「まったく、行儀悪いぞハルヒ…トイレ行ってくる」

「行ってらっしゃい。あ、そうそう。キョン、あとでみんなの分のジュース買って来なさいね！」

「へいへい」

しぶしぶキョンは部室を出て行った。

「あのー、涼宮さん。今日は何をすればいいんでしょうか～？」

「暇だから何をしようとするのか考えてるんじゃない」

みくるがこう言ったのでハルヒが不機嫌そうに返す。

しかししばらくの沈黙のあと、ハルヒが何かを思い出したようで、席を立ち、いつもの我が物顔で言い放った。

「…そうだ、いいこと思いついたわ！」

そのときだった。

ハルヒ、みくる、長門を、突然天井から謎の煙が襲った！ＳＯＳ団の部室は煙に覆われ、３人は一瞬にして銅像と化した！銅像となった彼女達はやはり引きずられた後浮遊し、ＳＯＳ団の部室の窓を越えてどこかへ飛んで行った。キョンが戻ってきた頃には、３人の姿はどこにもいなかった…

【写真部】

南家が恍惚そうなツラを浮かべて多すぎるフィルム写真やパソコン画面内のデジタル写真を眺めていた。

その被写体には、学園中のたくさんの少女達が写っていた。

三千院ナギをはじめ、桂ヒナギク、愛沢咲夜、天王州アテネ、御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子、平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬、中野梓、姫路瑞希、島田美波、霧島翔子、仲村ゆり、立華奏、ユイ、三日月夜空、柏崎星奈、涼宮ハルヒ、朝比奈みくる、長門有希、神楽、志村妙、ナミ、ネフェルタリ・ビビ、シェリル・ノーム、ランカ・リー、シャナ、神埼・H・アリア、峰理子、星伽白雪、レキ、ジャンヌ・ダルク、鹿目まどか、暁美ほむら、巴マミ、美樹さやか、佐倉杏子、高町なのは、八神はやて、フェイト・T・ハラオウン、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、キャロ・ル・ルシエ、ヴィータ、シグナム、コレット・ブルーネル、プレセア・コンバティール、ティア・グランツ、ナタリア・L・K・ランバルディア、エステル、リタ・モルディオ、ジュディス、ミラ＝マクスウェル、レイア・ロランド、ラクス・クライン、カガリ・ユラ・アスハ、ルナマリア・ホーク、ステラ・ルーシェ、フェルト・グレイス、ネーナ・トリニティ、クスハ・ミズハ、ゼオラ・シュバイツァー、楠舞神夜、小牟、ネージュ・ハウゼン、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、高坂桐乃、五更瑠璃、花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき、ノエル＝ヴァーミリオン、レイチェル＝アルカード、ツバキ＝ヤヨイ、お市、かすが、大喬、小喬、王元姫、桃香、愛紗、星…

そのほか、数え切れぬ少女達の写真が…

（ククク、こいつらが悪いのザンス。こいつらがミーの取材を断ら

なければ、肝井君にやられずに済んだものを…）

…実は、南家が肝井と結託している理由があった。

南家には学園生活の思い出として、写真集を作りたいという写真部部長としての夢があった。だがご覧の通り、彼がカメラで撮っているのは美少女ばかりである。つまり、風景や静物、生き物の写真を撮ろうなんて最初からなかったのである。

おまけにこの男は妙な性的嗜好があるようで、気に入った少女を見つけては取材と称してしつこくストーキングするという、相手からしてみればウザすぎる行動をとっていた。

そんな時、自分と似たような境遇を持つ肝井と意気投合。南家や肝井がひそかに持っていた裏ルートで入手したゾディアーツスイッチやガイアメモリ、セルメダルなどを持ち出し、凶行に及んだ。道理でキモイわけだ。

そのとき、ノックが鳴った。

「ちょっといいか？」

ノックのあと、少女の声が聞こえてきた。声の主は、三千院ナギだった。

「三千院君！やっと来てくれたザンスね！」

南家が抱きつこうとしたが、ナギは近くにあったデッキブラシで彼を押し付けた。

「バカかお前は。今日はある頼みをしに来たんだ」

「ミーに頼みごとザンスか？」

ナギが一息つくと、大きく息を吸い、南家に言った。

「…お前、あの化け物（ゾディアーツ）になってくれないか？あの化け物の力で探し物を見つけ出してくれ。大事な友達の命がかかってるんだ！」

ナギは南家の変身したピクシス・ゾディアーツの能力に気づいていた。ゾディアーツは、ダウジングで探したいものをすぐに見つけ出せる能力を持っていた。

それを知ったナギは、ロッカーを探している弦太朗とユウキ、如月ファミリーの噂を聞きつけた。そのファミリーには、弦太朗のクラスメイトでもある綾崎ハヤテも含まれていた。必死になってロッカーを探しているが、一向に見つからないという。

自分が愛するハヤテの友人が困っている。それは、誰にでも優しいハヤテの悩みでもあった。ハヤテには恩がある。勢いよく振った手前、嫌な気分になるが、ハヤテたちのためのなら…

ナギからの依頼に南家は…

「さ、三千院君…！ようやくミーからの思いに気づいてくれたザンスね！？喜んで引き受けるザンスよ」

露骨に喜びだした南家。今まで拒絶されていたナギに認められたからだ。

しかし彼は、不気味に口元を緩ませた後、ナギに言った。

「…ただし、条件があるザンス。チミがあの優男どもと袂を分かち、ミーのペットになるのならね…くふふ」

「え…？」

不気味な笑い声を上げ、ナギを挑発するような提案をする南家。ハヤテのことを言っているらしい。彼はナギとハヤテを別れさせようとしていた。

「な…何言ってるんだ！あいつは私の…！」

「大事な友達の命がくたばってもいいザンスか？くふふ…」

ニヤケた表情でなおもナギをもてあそぶ南家。ナギはいちいちこいつが気に入らんと心の中で罵りながらも、彼の言うことを聞くことに…

「……わかった、やってくれ」

「素直でよろしい。さすが我がペット、ナギでザンス。くっくっく…」

取り引き成立。

南家はゾディアーツスイッチを押し、ピクシス・ゾディアーツに変貌した。ゾディアーツは両腕の触覚であるダウジングホーンをナギに向ける。

『さぁ…ミーの触覚を掴んで、チミが探し求めているものを強くイメージするザンスよ？』

ナギは若干戸惑いながらも、ハヤテたちのためにとダウジングホーンに触れる。そして触覚を強く掴み、目を瞑って自分達が欲しいものを想像した…

不良品と書かれた紙。

ボロボロのロッカー。

『くふふ、見える、ミーにもあれが見えるザンス……こっちザンスね』

「ほ、ほんとにわかったのか？」

ナギが胡散臭そうに見るので、ゾディアーツが明後日の方向にダウジングホーンを向けた…

【スクラップ処理場】

二人がたどり着いたのはスクラップの山の中。

『これでザンスね？探し物は』

すると、そこには「不良品」と書かれたロッカーがあった。幸いにも処分されておらず、自分たちが通っているそれそのもののしての原形をとどめていた。そしてその後ろには、妙な人型のブロンズ像があった。

「本当にあった！？ありがとう、南家！」

『いいや、礼には及ばないザンスよ』

ナギに感謝されたゾディアーツは薄ら笑いを浮かべながらナギにこう言った…

『ミーは、チミのそのかわいい顔が涙と悔しさで歪むのが見たいザンスからね』

ゾディアーツはおもむろにロッカーに近づき、そのまま蹴倒してしまった！

「おい！何すんだ！？」

『もうお前なんかに興味はない！あんな優男（ハヤテ）とくっついている女なんか汚れている！全ての女は、ミーのような選ばれた人間によって

結ばれるべきザンス！ミーに屈辱を与えたお前らごときの女は許さないザンス！』

「騙したのか！？」

『これを探すのを手伝ってほしいと言ったのはチミのほうじゃないザンスか。ミーはチミの依頼に応えただけ。それはチミが悪いのでザンスよ。騙されて、大事なものをなくすわけザンスよ。ざまあみろ！ひゃっひゃっひゃ！！』

非道。

こいつの心にルールやマナー、モラルはないのだろうか？
怒れるナギには、この言葉しか思い浮かばなかった…！

「お前！卑怯だぞ！」

『ありがとうナギぃぃ～！最高の褒め言葉ザンスね～。肝井君！』

『ハイでしゅ』

『おうヅラ』

肝井が変貌したブロンズ・ドーパントとペガサスヤミーも来た。
そして奴らは、そこらの鉄パイプを拾い横になったロッカーを叩こうとした！

しかし、弦太朗がマッシグラーで駆けつけた！
いや彼だけではない。自転車に乗ったハヤテ、自販機に変形するバイク「ライドベンダー」に乗った映司とアンク、黒・緑のツートンカラーの「ハードボイルダー」に乗った翔太郎もともに駆けつけた！

『また貴様らザンスか！？』

そのままバイクでゾディアーツ、ドーパント、ペガサスヤミーに体当たりした！

『あっ！折れるザンス！』

『このバカ、考えろでしゅ！』

『痛ぇヅラ！卑怯ヅラ！』

「させるかよ、この野郎！」

突然の登場に目を丸くするナギ。

「弦太朗！？それにハヤテ！！」

「お嬢様、言ったじゃないですか。あなたの悩みは僕が解決してみせるって」

「お前の様子が変だったからな。バガミールに見張らせていた」

するとナギのバッグからバガミールが顔を覗かせていた。

「結局ロッカーの場所まで案内してくれたってわけだ。ありがとよ……」

翔太郎、映司、弦太朗はそれぞれのドライバーを構えた。

――――――変身！

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

『ＪＯＫＥＲ』

「『さぁ、お前の罪を数えろ！』」

アンク「映司！変身だ！」

――――――変身！

タカ！　トラ！　バッタ！

タ・ト・バ♪　タトバ・タ・ト・バ♪

……３……

……２……

……１……

――――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

フォーゼ、W、オーズは怪人どもと戦闘を開始する！

「オラどうした！？」

『割れるザンス、このバカ！』

『い、痛いでしゅ！』

しかし南家と肝井は文化部所属。スイッチやメモリで強化されても、戦闘に関してはてんで素人だ。一方的にボコボコにされる二人。

遅れて到着したユウキと如月ファミリー。新八があるものに指を指した！

「あ、あった！あれだ！」

それは「不良品」と書かれたロッカーだった！ユウキがアストロスイッチカバンで賢吾に連絡する。

「賢吾君！あったよロッカー！」

『ああ、こっちでも見えてる。助かった……』

カバンのモニター越しに賢吾が安堵した。

「今のうちにロッカーを取り戻そう！」

ロッカーを回収しに行くユウキたち。これを聞いたライダーは一

気に畳み掛けた！
フォーゼがロケットスイッチをＯＮにする！
「喰らえ！ライダーロケットパァーーーーンチッ！！」
右手のロケットの推進力でゾディアーツを殴りつけようとしたその時…！
『曲がれ！』
なんとフォーゼはロケットを装備したまま急に方向転換し、瓦礫の山に突っ込んできた！
そしてロッカーに歩み寄るゾディアーツ。フォーゼが走ろうとしたが、ヤミーに邪魔される！
『行かせねえヅラ』
「ロッカーに手出しさせるか！」
オーズはスキャナーでドライバーをスキャンする。
『スキャニングチャージ！』
するとオーズの緑の足がバッタのように変形し大ジャンプ！そして赤、気、緑のリングが生成され、それをくぐってゾディアーツに「タトバキック」を放った！
「せいやぁーーーー！！」

しかし…！

『チミもバカザンスね…曲がれ！』

「なに！？」

ゾディアーツの合図でオーズも軌道を曲げられてしまう！

そしてオーズのタトバキックはあろうことにもロッカーと後ろのブロンズ像に直撃した…！

「あ…あ…？」

ロッカーは木っ端微塵に大破。絶句するライダーと仮面ライダー部と如月ファミリー。

しかも彼らに追い討ちをかけるように、恐れていたことが…

壊されたブロンズ像の頭を見る。それは彼らにとって見慣れたものだった。

なんと、壊されたブロンズ像の正体は、仮面ライダーディケイド。

高等部生徒会長の門矢士だった！
オーズは皮肉にも、ディケイド……士を自分の手で殺してしまったのだ！

『そうそう、忘れていたザンスね…ミーの能力はもう1つあるザンス。指し示した相手を、ミーの思いのままに操れるザンス！さっきのバカなカラフル仮面君のようにね』

フォーゼ「何！？貴様！」

『ヒャーッハッハ！チミたちはホントにマヌケでどうしようもないザンスね！自分の仲間を二人も殺してしまうとは！』

W「テメェ士を！」

『ぶひひひひ！あの門矢士というクソ野郎の態度は前々から気に入らなかったのでしゅ。だから不意打ちしてブロンズ像に変えてやったのでしゅ。ムカつくから殺そうと思ったのでしゅが、いやーおたくらが代わりにやってくれたさせたようで何よりでしゅた！南家君とおたくらに感謝しようと思うでしゅ！ぶひひひ！』

不快な笑い声を上げ、怒りと絶望に打ちひしがれる弦太朗たちの表情を、勝利の美酒の代わりに愉悦に浸る南家と肝井。

賢吾が現場に居ない状況で、相手の能力の把握の遅れ……完全敗北だ。

「俺はもう…月から帰れない」

ラビットハッチに取り残され、途方に暮れる賢吾はたった1人、月面で嘆いた……

狂・人・嘲・笑（後書き）

キャストの皆さま

『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ

『仮面ライダーＷ』
左翔太郎、フィリップ

『仮面ライダーＯＯＯ』
火野映司、アンク

『仮面ライダーディケイド』
門矢士

『銀魂』
坂田銀時、志村新八

『ハヤテのごとく！』
綾崎ハヤテ、三千院ナギ

『けいおん！』
平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬、中野梓

『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
岩沢まさみ、ユイ

『涼宮ハルヒの憂鬱』
涼宮ハルヒ、朝比奈みくる、長門有希、キョン

『テイルズオブシンフォニア』
ロイド・アーヴィング

『緋弾のアリア』
遠山キンジ

『スケットダンス』
スイッチ

『とあるシリーズ』
初春飾利

『機動戦士ガンダム　逆襲のシャア』
アムロ・レイ
『コードギアス　反逆のルルーシュ』
ジェレミア・ゴットバルト
『機動戦士ガンダムＯＯ』
パトリック・コーラサワー

キュウべえ：ここから後半に入るよ。そうそう、僕と契約して、魔法少（パァン！！）

ほむら：……次回も楽しみにしていてね。たぶん年末中に終わらすと思うから。

乙・女・狙・撃（前書き）

佐助：ここからは後半戦に入るぜ。俺様も登場だ。

孫市：あの二人の横暴、もはや生き様まどではない。許しておけんな…

鶴姫：そうですよね！ドバーンとぶっ飛ばしたいです☆

官兵衛：何故じゃあああああああああああ！！
　何故小生の出番がない！？

大谷：ヒヒヒッ…そんなのどうでもよいではないか…

小十郎：テメェら、ゆっくりとしていけよ！

乙・女・狙・撃

前回で廃部室のロッカーをなくしたということを歌星賢吾から聞き、仮面ライダー部、如月ファミリーはロッカー探しを開始。ロッカーの件で思いあたりがある平沢唯は坂田銀時らに聞くが、廃品回収に出してしまったという。しかし、トラックの目撃者もおらず、廃品業者をリストアップすることもできない…このままでは賢吾は地球にもどれなくなる。

いずれにしても賢吾の体力が持たない。三千院ナギは嫌々ながらも、何でも探し出すことができるピクシス・ゾディアーツに変身できる南家宇佐蔵に頼み、ロッカーを見つけようとする。快諾した南家はダウジングでスクラップ処理場にあるロッカーをみごとに探し当てる。喜ぶナギだったが、実は南家の罠。自分ではなく綾崎ハヤテや如月弦太朗らと仲良くするナギに怒り心頭の南家は、ナギを騙して大切な探し物を探り当てぶち壊そうとしていた。

そこへナギの後をつけていたハヤテ、弦太朗、左翔太郎、火野映司がやってきた。弦太朗はフォーゼに、翔太郎はWに、映司はオーズに変身、ゾディアーツらに立ち向かう。しかし、ゾディアーツの能力によってオーズは自らの手でロッカーを破壊してしまう！しかも皮肉なことに、南家と結託した肝井宅夫の変身したブロンズ・ドーパントによって銅像にされた仮面ライダーディケイドも一緒に砕かれていた…！門矢士は死亡し、このままでは賢吾も地球へ帰ることが出来ない。あまりの惨劇にフォーゼも、Wも、オーズも、仮面ライダー部も、如月ファミリーも、声を失ってしまうのだった。

フォーゼたちの目の前にあったのは、自らの手で破壊し、粉々になったロッカーとディケイドのブロンズ像だった…

「ひどい、ひどすぎるよ…」

『バカな…ゲートが壊れただと…？』

「ロッカーだけならず、会長まで…」

賢吾がユウキの持っていたバガミール経由で唖然とし、新八が声を漏らす。

『あ、そうそう。言い忘れていたんでしゅけど、一度ブロンズ像にされた人は、ボクチンの意思で元に戻すことも出来るんでしゅ。壊されたものも戻すことは一応出来ましゅけど、死体を見る気がある なら見てもいいでしゅよ。ブヒヒ』

だが、時既に遅し。ディケイドは既に砕かれていた。

「……てめぇ！！」

「お前…いくらハヤテたちのことが腹立つからってこれはないだろ！」

「あなた達は、いま自分のしたことがなんなのかわかっているんですか！？」

W、ナギ、ハヤテが激昂した！

『何言ってるザンスか？壊したのはチミたちでしょうが』

『そうそう、なんでも人の所為にするのはよくないでしゅよ』

この期に及んで勝手に開き直る南家のゾディアーツと肝井のドーパント。この態度にオーズ、フォーゼの怒りの炎に油が注がれた！

「…ふざけるな。人の命をもてあそぶな！あれだけのことして、よく平気でいられるな！」

「貴様と言う奴は…！その腐り果てた性根、叩きなおしてやる！」

フォーゼがスイッチを入れ替えし、右腕のファイヤー、右足のランチャー、左足のガトリング、左腕のレーダーのスイッチをＯＮにする。その瞬間、ファイヤーステイツとなり、ランチャーとガトリング砲が出された。

「クソ野郎め、絶対許さねぇ！命の尊さをわからせてやる！」

『ＴＲＩＧＧＥＲ』

Ｗも左側のジョーカーからトリガーのメモリに換装する。Ｗが緑と青のサイクロントリガーとなる。

『落ち着きたまえ翔太郎！』

「バカが！状況を考えろ！」

「弦太朗さん！落ち着いてください！」

フィリップ、アンク、ハヤテの制止も聞かず、フォーゼがヒーハックガンを、Wがトリガーマグナムを構えた！ヒーハックガンから火炎弾、フォーゼの足からミサイルと機銃掃射、トリガーマグナムから風の弾丸が放たれ、それはゾディアーツ、ドーパント、ペガサスヤミーに襲い掛かった！

ドヒュゥゥゥン！！
バン！バン！バン！
ダダダダダダッ！

しかし…

『曲がれ！』

またしてもゾディアーツによって弾道を曲げられてしまい、逆にフォーゼとWの射撃がオーズや如月ファミリーに誤爆！

「うわぁー！！」

「きゃぁー！！」

『いいのかなぁ？今度はチミたちの攻撃によってチミの大事な友達が死んじゃうかもしれないザンスよ？くっくっく…』

下劣な笑い声を上げるゾディアーツ。幸い、誰も怪我人はいなかったが、これにはさすがのWもフォーゼも攻撃を戸惑う。

『また来るでしゅ、ナギたん。今度はみんなと一緒に最高の「ジオラマ」に招待するでしゅよ』

『そしてミーの肉眼越(ファインダー)しに写る「被写体」はまだまだいるザンス…』

『そうヅラ、もっと欲望を出すヅラ…お前達の欲望がオラのパワーヅラ…』

肝井と南家が言いたい放題したあと、変身を解除し、高笑いをあげながら去っていった。ペガサスヤミーも空を飛んで逃げた…

「……ジオラマに…被写体…だと……」

呆然としていたフォーゼは、二人の言っていた言葉をつぶやいていた…

【学園外　某所】

フォーゼは月に取り残された賢吾を救うため、直接月に行くのを試みた。

パワーダイザーは発射台形態(タワーモード)に変形し、マッシグラーにまたがっ

たフォーゼがダイザーに乗り込む。こうすることで、フォーゼを大気圏突破させることが出来る。

『Ｍａｃｈｉｎｅ　ｓｅｔ』

「離れて！」

ユウキの合図で如月ファミリーが退く。乗り込んだと同時に、マッシグラーを乗せたダイザーはマスドライバーのごとく垂直に傾き始めた。

『Ｒｅａｄｙ．　３，　２，　１…』

「今行くぞ、賢吾！」

『Ｂｌｕｓｔ　ｏｆｆ』

ブラスト・オフの音声とともにフォーゼは上空へ打ち上げられた！

大気圏突破し、宇宙まで飛んだフォーゼ。

しかし途中でマッシグラーの推力が切れてしまう。マッシグラーを降りて、これを踏み台にして宇宙に飛ぶ。

次はロケットモジュールでの飛翔を試みるが、やはりロケットの推力も切れてしまい、最後の手段、宇宙で泳ぎ始め、月に手を伸ばした…

「届け…届けー！」

結局、直接宇宙まで泳ぐのも限界があった。

左手にパラシュートモジュールを展開させ、そのまま地上へ帰還し、如月ファミリーの元へ舞い戻った。

早速賢吾から通信が。

『何をやってる！今のフォーゼの装備で月まで来られる訳がない。ふざけてるのか！？』

「ふざけちゃいねえ！やれる事をやってるだけだ！」

それはそうだ。フォーゼはなにより友達のことを思う男だ。あれこれ賢吾を救う手段を考え、試みている。

『何が仮面ライダー部だ！何が如月ファミリーだ！肝心な時に、何の役にも立たない…こんなの、ただのごっこ遊びじゃないか！！』

ラビットハッチに取り残されている賢吾が重力コントロール用のレバーをあげると、そのまま低重力でジャンプし、天井にある仮面ライダー部の旗を引き剥がしてしまった！

『出せよここから！出してくれよ！早く！！』

もはや怒鳴り散らすばかり。

「もう手はないんじゃねーの？」

さらに、不謹慎にも司馬昭がうっかり口を滑らせてしまった。如月ファミリーに睨まれ、その一人である長宗我部元親に胸倉を掴まれた！

「おい…！」

「あ！…いや、悪い！」

そこで桂小太郎があることを思い出した…

「ウム、やはり妙だな…？如月、少し行ってくる」

何やら、確信めいたものがあっての行動のようだ。エリザベスを伴い、桂はどこかへ行ってしまった。

さらに変身をといた弦太朗の携帯にメールの着信が…

差出人は猿飛佐助。映司と一緒に情報収集をしていた。メールの内容はこうだ。

差出：佐助

件名：肝井について

如月の旦那。

俺様は真田の旦那や火野の旦那と一緒にフィギュア部を探ってみた。

あの御仁、まったく悪趣味なヤツだぜ。フィギュア部部室に変なモンを手に入れた。
ロープ、ろうそく、ムチ、首輪、口を封じるあれ…まぁ猿ぐつわだな。
一体どういう趣味してんだかね、あの豚野郎は…
それと、肝井が女の子をブロンズ像にしてるのは知ってるよな？
俺様達がそれを見張ってたんだが、何かに引っ張り出されるように動き、どこかへ飛び始めた。
俺様達が阻止しようとしたが、馬みたいな化け物に邪魔をされちまったがな…
俺様が見るに、奴はきっととんでもねえことをしでかそうと思ってるに違いねえ…！
またなんかあったら連絡するさ。火野の旦那からも頑張れってな。
歌星の旦那の救出、応援してるぜ。

今度は電話の着信がなった。相手は前田慶次だった。

「どうした、慶次」

『あの南家に肝井、思った以上にヤバい野郎だ。奴らが狙った女の子が行方不明になってやがる。しかも大変なものを見つけちまったんだよ…！急いで写真部に来てくれ！』

「わかった、すぐ行く！」

慶次や佐助の方も何か手がかりを掴んだ様子。ひとまずは怪物退治を優先する事となり、写真部に向かう弦太朗一行だが、そこで恐ろしい事実を知ることになる…！

【ラビットハッチ】

「全く、どいつもこいつも役に立たない！」

賢吾が声を荒げてフテくされていた。

ふと、弦太朗と出会った当初の事を思い出す。

お前は気に食わねえ。だから、オレがダチになる。

お前の代わりは務まらねえが、お前を助ける事は出来る！

頼む…オレにしか出来ないことをやらせてくれ！

「何がダチだ！口だけじゃないか！」

今度は剥がした仮面ライダー部の旗を、怒りに任せてテーブルに投げつけた！テーブルにあった食べ物や道具、玩具などが旗に被さる。こうしている間にも、時間が賢吾の体力を奪っていく…

「仮面ライダー部？…ふざけるな！」

賢吾は通信用のヘッドセットを頭からはずし、周りを見てつぶやいた…

「父さん…あなたは、ここで1人でフォーゼを造った。何で、そんな事が出来たんです。怖くなかったんですか？」

賢吾の父は宇宙開発の権威だった。そして彼は、ここでフォーゼシステムやアストロスイッチを開発し、ここで逝った。宇宙のなかで、孤独に耐えながらそんなことが出来たのだろうか？

賢吾は頭を抱え、わめいた。孤独と恐怖に襲われながら。

「僕は…怖い。ここで死ぬのは嫌だ…うぅぅ、うわぁー！」

やがて賢吾は嗚咽を漏らした。そして声を出して泣きはじめた……

【写真部】

「こっちこっち！早く早く！」

慶次が見つけた手がかりとは、南家ただ1人が所属する写真部の部室にあった。

「まずはこれを見てくれ！」

そこには、机の上だけでも百枚は超える学園の女子のフィルムがあり、アルバムにもやはり女子の写真一色だった。開きっぱなしのパソコンの画面には、十以上のファイルに女子のデジタル写真がぎっしり詰まっていた。

「こればっかりじゃねぇんだ」

慶次が指差したのは、何の変哲もない真っ白なホワイトボード。だが…

「これこれ、見てくれよ！」

裏返すと、たくさんの女子の写真が隙間なく貼られてあった…

「うーわっ、何だこりゃ…」

これには弦太朗もドン引き。

「……気にいらん。俺でもここまではしない」

「いや写真売りさばくあんたもどうかと」

ムッツリーニもさすがに眉をひそめるが、そこを新八がツッコミする。

「どうやらあの写真部、学園にいる上玉の女子をマークしていたらしいな」

刹那・F・セイエイが苦々しくこの状況を睨んだ。その中には、学園の人気者の一人であるシェリル・ノームの写真も当然ながら、大きく載っていた。刹那の言うことに頷いた慶次はこう言う。

「この中のほとんどが俺の知り合いがいたんだけど、携帯かけても繋がらなかったんだ。こいつぁヤバいなぁと思って…」

「ナミさんたちが南家に狙われたって事か！？おい！あのクソ野郎、どこへ消えた！？」

女子、ましてナミやネフェルタリ・ビビの事となると落ち着いていられないサンジ。ナミやビビの危険を感じた彼は慶次の肩をつかむ。

「誘拐のうえブロンズ漬けだと…あいつら、シャーリィに手を出したら…！」

妹のシャーリィ・フェンネスがいるセネル・クーリッジも同じく憤慨した。

「あ…なんだこれ？」

ふと、机の上にあるノートが上条当麻の目に入った。

机の上には、南家と肝井が書いたと思われる、あの妄想未来日記が置き去りになっていた。

当麻がノートの中を開いてみると…

○月×日

今日は、捕らわれのお姫様が集まるザンス。

お姫様は、彼女達の自由を奪う悪い奴らに狙われていたザンス。

しかし、もう大丈夫！一人の勇者がお姫様達を助けに来たのでザンス。
勇者は魔法で馬車にお姫様達を乗せたのでザンス。
この後、彼女たちは荒れ果てた地のステキな檻のなかに…
世界中からたくさんの王子様が助けに来るザンス。
彼女達は王子様達にもう一目惚れザンス。
体を重ね合わせ、飛び切り楽しい結婚式が始まるザンス。
そして子供も出来てみんなはＨＡＰＰＹ♪

「なんだこりゃ…？気持ち悪…」

「おいおい、何がハッピーだよ…」

「いかにも奴等の考えそうな書き方だな」

思わず当麻もサンジも真っ青になる。刹那もこの内容に退いた。

「しかし、魔法はともかく、馬車、結婚式…これはどういうことだ…？」

セネルがこう言った途端…

「よぉ、困ってるみてぇだな」

部室の入り口から声が聞こえた。するとその背後には、左目に包帯を巻いており、キセルを咥えている青年がいた。
高杉晋助（たかすぎしんすけ）。学園ランクは「最も過激で最も危険な男」。その風貌と実力から、黒楼州学園のみならず、ほかの学校や、教師や学園の理事団、ＰＴＡすらも恐れられている男である。

弦太朗が高杉を呼んだ。

「つうかお前煙草…」

「？　ああ、電子キセルといってな…ニコチンが入ってねえ奴だから」

高杉が薄ら笑いを浮かべると、当麻から日記を奪った。

「…へぇ。確かに悪趣味だよな」

高杉が日記を閉じると、恐ろしいことを口にした。

「あの南家（ムシケラ）と肝井（ブタ）、男どもを連れて女達を犯そうと考えてるぜ」

「なんだって！？」

セネルが驚愕する。その反応に高杉はやはり「ククク」と笑う。

「簡単なことだ。奴等お前らを悪人呼ばわりし、連中は正義の味方気取り。お姫様たちは連中に救出され、顔も名前も知らねえ男たちと一緒に結婚式と言う名の暴力パーティーを開こうとお考えだぜ。まったく、とんだ美談だなこりゃ」

ようするに、弦太朗たちは悪人呼ばわりし、南家と肝井はブロンズ像にした少女達を導き、その上で少女を襲わせ、その身と心を汚す非道な計画だった…！

奴等にとっては面白いと思うが、如月ファミリーにとっては許せないことだった…！

「なんだと！？犯行計画じゃねえか…やべえぞ…！」

サンジが憤慨する。

「よう、なんか証拠はねえのかい？」

「このメールを見てくれ」

言われた弦太朗が携帯を取り出し、佐助から送られてきたメールを高杉に見せる。これをみた彼は何かの予感を危惧した。

「馬車に見立てた馬の化け物に、引っ張り出される表現か…急がねぇと大変なことになるぜ、こりゃ」

【フィリップの意識、地球の本棚】

『どうだ、フィリップ』

「ダメだね、なかなか本が出てこない」

翔太郎は自分で得た情報を地球の本棚で検索しているフィリップに伝えていた。だがなかなかいい検索結果がでてこない。

すると、翔太郎に何かが起こったようだ。

『あ、フィリップ。待ってくれ。弦太朗からのメールだ』

しばらくすると…

『キーワードを追加する…荒地に檻だ』

このキーワードをもとに検索する…

すると、一冊の本が出てきた。フィリップが本を読み出す。

「この学園都市にあるとしたらここしかいない。『戦場ヶ原(いくさばがはら)』だ。栃木県日光市のほうじゃないよ」

『余計な説明はいい、まさか…?』

「南家宇佐蔵と肝井宅夫はそこで悪事を働こうとしてるに違いない」
『ああ、あんな奴等は放っておくわけにはいかねえ。今度こそ成敗してやる』
フィリップは二人の犯行計画を翔太郎に伝えた。

【戦場ヶ原】

荒地。
雑草も少しばかりしか生えておらず、放置されたのか、ドラム缶や土管、鉄筋しかない殺風景。ほかに目立つところがあるとすれば、大きなプレハブ小屋と、金網でできたフェンスで囲まれた別の広場があるだけだ。

そこに、高町なのはを筆頭に、八神はやて、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、キャロ・ル・ルシエ、ヴィータ、シグナム、炎髪灼眼状態のシャナ、アリアや白雪ら武偵、まどかやほむらたち魔法少女、セイバー、コレット・ブルーネル、ティア・グランツ、レイア・ロランド、楠舞神夜、ネージュ・ハウゼン、篠之乃箒らIS操縦者、プリキュアなど、戦闘可能な女子がここで待ち構えていた。
女子生徒がここに集まることで、南家と肝井をおびき出し、いっせいにボコボコにしようとする考えだ。
（フェイトちゃん、みんな…待っていてね。すぐに助け出すから！）

そしてなのはの狙い通り、ピクシス・ゾディアーツ、ブロンズ・ドーパント、ペガサスヤミーがやってきた。

『ブヒヒヒ、よく来てくれたでしゅね、わがお姫様たち』

ヴィータ（何がお姫様だ。散々やりやがったくせに…）

シグナム（テスタロッサたちをあのような目に遭わせた罪は重いぞ、貴様ら）

ヴィータとシグナムは毒づいていた。

『やぁ皆さんいらっしゃい。チミたちが来てくれてミーはうれしいザンス！』

箒「知るか！馬鹿者！」

神夜「卑劣極まりないです！」

シャナ「さっさと殺されなさい！」

箒、神夜、シャナも非難する。

『やれやれ、ボクチンたちは嫌われているでしゅね…』

『でも大丈夫！チミたちはミーたちのことが好きになるザンス』

セイバー「少し仕置きが必要ですね…」

ティア「そうね。反省させてあげるわ…！」

横柄な二人の態度に、ティアもセイバーも、皆もその怒りに触れた。

「あなた達…少し、頭冷やそうか…？」

なのはの怒りも限界を超えていた。そして彼女の合図とともに、戦う少女達はしびれを切らして一斉攻撃した！

『やれやれ、これだから鶏以下のバカは困るザンス…出でよ、我が分身たちよ！』

ゾディアーツが何かの合図を送る。

その瞬間、黒装束の忍者が数十体も現れた。忍者は刀を持って少女達を取り囲み攻撃！シャナ、白雪、セイバー、シグナム、ジャンヌと鍔迫り合いした！

白雪「くっ！！」

シグナム「数で攻める気か…」

ジャンヌ「だがこの程度、物の数ではないッ！」

やがて5人に斬られた忍者は破裂、消滅した！忍者からは、星屑のような残骸が流れた…

次の忍者軍団は手裏剣を投げた！しかしスバルはローラーブレードで坂まで駆け上り、手裏剣攻撃をかわす！

「スバル！相手が変態だからって油断しないでよ！」

「わかったよ、ティア！じゃあ、連携の合図は任せるね！」

一方ティアナは、隙を見せた忍者軍団に狙いを定めていた。

スバル「リボルバー…！」

ティアナ「クロスファイア…！」

「「シュゥゥゥトッ！！」」

スバルとティアナの連携攻撃で忍者は消滅した！

青いショートの美樹（みき）さやか、赤いポニーテールの佐倉杏子（さくらきょうこ）も背中を合わせて忍者と戦っていた。杏子が手にした槍で忍者を突き刺しながらさやかに問いかける。

「くそ、きりがねえな！あと何匹いんだ！？」

「それがわかったら苦労しないし！このっ！」

さやかが言い返しながらサーベルで忍者を斬りつける！今度は逆にさやかが言った。

「杏子、先にブロンズ像にされたらあたしが許さないから！」

「はっ、言ってろさやか！お前もな！」

アリア「風穴開けるわよ！」

ゆり「うららぁー！」

ほむら「邪魔なのよね」

ティア「グランドクロス！」

リタ「タイダルウェイブ！」

ティア、リタらも魔術で忍者軍団を一掃した！アリア、理子、レキ、ほむら、ゆりらも銃撃戦を展開、手にした銃で忍者軍団を掃討する！

神夜が斬冠刀で叩き切り、ネージュがフェイスレイヤーで敵を突き刺し、ヴィータがハンマーで殴り、キャロがフリードに攻撃の指示を出し、コレットが手にしたチャクラムで敵を切り裂き、プレセアが斧で敵を打ち上げ、レイアが巧みな棒術で敵を叩き、王元姫がクナイを投げつけ敵を葬ったり、ＩＳを展開した箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラも敵を撃滅させ…

なのはたちが優勢と思われた。

しかし…

『くふふ、やはり戦う女は美しいザンスねぇ』

『ごもっともでしゅ。さぁ、新技を食らうがいいでしゅよ！』

ドーパントがそう言ったあと、顔に手を出した。

『ブロンズソニック！！』

すると強烈な超音波が少女達を襲った！そして即座に少女達の姿がブロンズ像にされてしまった！

『ブヒヒヒ…これで大豊作でしゅねぇー』

ブロンズ像にされた少女達は、その後ゾディアーツによって引きずられるように移動し、フェンスの中に収容された…

ちょうどその時、たくさんの男たちが戦場ヶ原にやってきた。その面子は…デブ、ガリガリ、メガネ、マッチョ、ヒゲなどという、いわゆるキモオタと呼ばれる人間だった。

「ここかー。結婚式場は」

ゾディアーツがキモオタにプレハブの中に案内させる。

『そうザンス！もう少し待ってもらうザンス』
「女の子とやれるってのはほんとかい？」
『もちろんでしゅ。好きにしていいでしゅよ』
「やった～！俺あのなのはって女いただき！」
「うほっ！オレ王元姫もらい！」
「僕はほむほむことほむらたんと結婚する！」
「俺様はあのセイバーって娘！」
「何を言う、ラクス様は俺のものだぜ！」
「美琴たんって娘は僕が頂くね！」
「奏はおいらのもの～！マジ天使！」
「じゃあ、俺はあのシャルロットって女な！」
「だったら僕はみくるって女ね！胸でかいし！」
「ゲヘヘヘヘヘ、俺はシャナね」
などというゲスな欲望をむき出しにしてキモオタどもは笑っていた…

それもそのはず、肝井と南家の計画では、フェンスに収容されている女の子達のブロンズ像を、キモオタが近寄る。ドーパントの能力で元に戻った彼女たちは、すでにキモオタに襲われ、その身を犯されているというシナリオであった…

無論フェンスで囲まれているため彼女たちは逃げることもできない。つまり、キモオタたちのやりたい放題というわけだ。

『じゃあ肝井君。行くザンスか』

『ブヒヒ、そうでしゅね。楽しみにしてるでしゅよ、ボクチンの王子達』

ゾディアーツとドーパントは満足そうに笑ったあと、ヤミーに抱きかかえられ、どこかへ飛んで行った…

【学園外】

「きゃぁー！」

「いやぁー！」

「助けてー！」

女子生徒たちが妙な足取りで悲鳴を上げながらバスに乗り込んで

いく。そのなかには、ナギも含まれていた。
なかなかにシュールな光景だが、こんな芸当ができるのは無論ヤツしかいない。
『入れ！もう1人、入れ！入れぇ！もっと入れ！いっぱい入れぇー！』
バスの傍らには、次々と女子生徒をバスに誘導すゾディアーツとドーパントが。ゾディアーツとドーパントもバスに乗り込む。
追いついてきたユウキは、その光景に驚愕。が、バスはすぐにドアを閉まり、なんと運転手不在のまま発進した！そこにユウキは走って追いかけるも、流石にバスには追いつけない。
するとそこに、ちょうど弦太朗、翔太郎、映司、アンクがバイクに乗って現れた。
「弦ちゃん！あのバスにみんなが！ナギちゃんもいる！」
「分かってる、こっちは任せろ…翔太郎さんと映司さんとアンクは先に！」
翔太郎「…ああ、頼むぜ弦太朗」
映司「わかった。絶対に来てくれよ！」
アンク「……ふん」
3人は弦太朗を置いて先に行った。そして彼はユウキに伝える。
「ユウキは賢吾を頼む」

「え？」

「あいつにはオレ達がいる。あいつがどう思っていようと、オレ達仮面ライダー部はあいつのダチだ。その事を伝えてくれ。…頼んだぞ」

ユウキに伝言を送るとフォーゼドライバーを構え、マッシグラーを走らせた…！

バスのなかでは、女の子の阿鼻叫喚で埋め尽くされていた。

「桂先輩、怖いです…体勝手に動くし、怪物いるし…」

「落ち着いてランカさん！だけど…何なのあいつら？」

おびえるランカ・リーを、桂ヒナギクが落ち着かせる。

そこにゾディアーツが語り始めた…

『やあ、みんな。ミーのために集まってくれてありがとう。チミたちは、みんなミーをフッた娘たちザンス』

『そしてボクチンも、おたくらに嫌われているのでしゅ』

当然、まわりから「えー！？」「イヤだ！」「知らない！」「ウザい！」という声が飛んできた。
なんという身の程知らずだ。ゾディアーツとドーパントは変身を解除する…

あまりのウザさとキモさに、女子たちはさらに嫌がり、あちこちから「キモい！」「消えろ！」「こっち見んな！」という声が聞こえてきた。

「一体どういうつもり！？」

「そうよ、何考えてんのよ！キモオタ！」

島田美波と柏崎星奈が肝井と南家を避難する。

「あら、聞こえなかったのでザンスか？チミたち、チンパンジーよりもバカザンスね」

「というわけで、おたくらもその報いを受けねばならないのでしゅ。ブヒヒヒヒ」

そして二人は怪物に変身した！その瞬間、南家は不気味な繭に包まれ、女子生徒は困惑した。

『さぁ、オードブルを召し上がるでしゅよ！ブロンズガス！』

ドーパントは左手から煙を発射！その瞬間、女子生徒はブロンズ像になった…！

ゾディアーツはいやらしい笑い声を上げた…

『くふふ、これで我が計画も大詰めザンス…』

乙・女・狙・撃（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『仮面ライダーW』
左翔太郎、フィリップ
『仮面ライダーOOO』
火野映司、アンク
『銀魂』
高杉晋助、志村新八、桂小太郎
『ハヤテのごとく！』
綾崎ハヤテ、三千院ナギ、桂ヒナギク
『ワンピース』
サンジ
『機動戦士ガンダムOOセカンドシーズン』
刹那・F・セイエイ
『バカとテストと召喚獣』
ムッツリーニ、島田美波
『真・三國無双』
司馬昭、王元姫
『戦国BASARA』
長宗我部元親、猿飛佐助、前田慶次
『とあるシリーズ』
上条当麻
『テイルズオブシンフォニア』
コレット・ブルーネル、プレセア・コンバティール
『テイルズオブレジェンディア』
セネル・クーリッジ

『テイルズオブジアビス』
ティア・グランツ
『テイルズオブヴェスペリア』
リタ・モルディオ
『テイルズオブエクシリア』
レイア・ロランド
『魔法少女リリカルなのは』
高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、八神はやて、スバル・ナカジマ、
ティアナ・ランスター、キャロ・ル・ルシエ、シグナム、ヴィータ
『魔法少女まどか☆マギカ』
鹿目まどか、暁美ほむら、美樹さやか、佐倉杏子
『灼眼のシャナ』
シャナ
『緋弾のアリア』
神崎・Ｈ・アリア、星伽白雪、峰理子、レキ、ジャンヌ・ダルク
『Ｆａｔｅ』
セイバー
『ハートキャッチプリキュア』
花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき
『無限のフロンティア』
楠舞神夜、ネージュ・ハウゼン
『インフィニット・ストラトス』
篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ
『僕は友達が少ない』
柏崎星奈
『マクロスＦ』
ランカ・リー

銀時：最近、俺の出番少ねぇー。おい作者！俺に出番よこせ！メインで！

土方：俺もだ！沖田に襲われる損な訳回りさせやがって…

作者：次回仮面ライダー部最終回だよ。あんたらの出番ないよ？

銀時＆土方：……。

親・友・奪・還（前書き）

ルルーシュ：今回は仮面ライダー部編最終回だ。
いよいよ大詰めだ。心して、読んでくれ。

C．C．：このシスコンは活躍どころか、出番すらないがな。

ルルーシュ：……ピザ女は黙ってろ。

親・友・奪・還

前回の戦い、南家が変身したピクシス・ゾディアーツの能力によって自らの手でディケイドのブロンズ像とラビットハッチ行きのロッカーを破壊してしまった！このままでは賢吾はラビットハッチから地球に戻ることが出来ない。フォーゼはマッシグラーで宇宙空間へと飛び出すが、月には届かず。そんな弦太朗らの失敗に賢吾は苛立ちを募らせる。

ダチになるといった弦太朗の言葉は嘘だったのか！何が仮面ライダー部だ！賢吾は仮面ライダー部の旗を壁からはがすと投げ捨ててしまう。

一方、今回の事件の犯人である南家と肝井の情報を集めていた前田慶次に、言われるまま写真部の部室にやってきた弦太朗たち。そこで部室に放置されていた妄想日記から、南家と肝井が自分を袖にした女子を集めて戦場ヶ原に行く計画を立てていたことを知る。が、その戦場ヶ原で女子達は名前も顔も知らない男たちに犯され…。弦太朗らは南家と肝井を阻止しようと動き出す。

一方戦場ヶ原ではなのはたちがブロンズ像にされた少女達を救うため、南家と肝井と対決していた。だが肝井扮するブロンズ・ドーパントの能力によって逆に返り討ちにされてしまう！ちょうどその頃、下品な男たちが戦場ヶ原に集まっていた。彼らは、南家と肝井に呼びつけられた計画の参加者だった…

その後ナギらがゾディアーツの誘導で無理やりバスに乗せられてしまった。ユウキの報告を受けた弦太朗、翔太郎、映司はバイクで追跡するのだった。

南家宇佐蔵、肝井宅夫……許すまじ！！

【ラビットハッチ】

賢吾はヘッドセットを取り、基地の端末でアストロスイッチカバンを展開させたユウキと連絡をとっていた。

『賢吾君、ユウキです』

「さっきの通信はどうして出なかった！俺を見捨てたのか！？」

やはり荒れ始める賢吾。ユウキがなだめる。

『賢吾君、落ち着いて！お願い…』

しかし、当の賢吾は孤独な月面で、さらに体調まで悪化した。

『大丈夫！？体の具合、悪くしてない？』

「今更そんな事聞いてどうする？時間の無駄だ…」

もう諦めつつある賢吾に、ユウキは叱咤した。

『無駄じゃないよ！全然、無駄じゃない！人の気持ちだもん！心配しちゃいけないの！？弦ちゃんだって、本当は賢吾君の事いっぱい心配してるんだよ？でも、今は我慢してる。ゾディアーツを止める方が先だから。今、自分にできることを一生懸命やってる。それは、賢吾君が望んだこと』

「……俺が望んだこと？」

何か引っかかるようなところを思い出した賢吾は、誠心誠意にユウキと向き合い始める…

【戦場ヶ原】

南家が変身したピクシス・ゾディアーツ、肝井が変身したブロンズ・ドーパント、二人の欲望が具現化したペガサスヤミーがここに集結していた。戦場ヶ原にあるフェンス広場には、ブロンズ像と化したなのはたちが収容されていた。そしてフェンスの隣の数軒のプレハブ小屋には、キモオタどもが集まっていた。

『ブヒヒ、これで役者はそろったでしゅね…』

『さて、はじめるとするザンスか。楽しい結婚式を…ヒッヒッヒ…』

ゾディアーツとドーパントはお互いに笑いあい、準備を進めていた。自分をコケにした女子生徒を、自分たちが連れてきた男たちに襲わせる。ブロンズ像にされた少女達は、元に戻ったと思いきや、時既に遅く、自分達の仕業に気づかずその体が犯されていく…二人にとってはまさしくハッピーエンドといえる、しかし他から見れば自分勝手な計画を着々と進めていた。

『そうヅラ、もっとお前らの欲望を出すヅラ。お前らの欲望がオラの力ヅラ』

そんな二人を、ペガサスヤミーはさらに扇動した……

しかし、その準備を邪魔するものが現れた。

バイクに乗った翔太郎、フィリップ、映司、アンク、そして弦太朗がやってきた！

『ちっ、うるさい奴等でしゅね…』

ドーパントが舌打ちしたが、翔太郎は逆に受け入れた。

「うるさくて結構だ。学園を泣かせる奴らは俺達が許さねえ」

『世迷言ヅラ、死ねヅラ！』

ペガサスヤミーが手から破壊光線を放射した！５人はそれを回避する！

「世迷言なんかじゃない！お前たちのやってる事は非道そのものだ！」

映司が二人の所業を弾劾する。

「オレのダチを傷つけた罪は重ぇ！ナギや唯たちは絶対に救い出す！」

弦太朗がそういってドライバーを構えた…

「アンク、僕の体を頼んだよ」

「ふん」

フィリップがアンクに頼みごとした後、翔太郎、フィリップ、映司、弦太朗はそれぞれのドライバーと変身アイテムを構えた…

――――――変身！

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

『ＪＯＫＥＲ』

「『さぁ、お前の罪を数えろ！』」

アンク「映司！変身だ！」

――――――変身！

タカ！　トラ！　バッタ！

タ・ト・バ♪　タトバ・タ・ト・バ♪

……３……

……２……

……１……

――――――変身！

「宇宙キタァァァァァ！！」

「うぉい！びっくりするじゃねぇか！」

フォーゼが大声を張り上げたのでビビるWの翔太郎。

「こうでもしねえと、戦いが始まらねえよ！」

「そうそう、出始めが肝心だよね」

『そういうことさ、翔太郎』

そういって3人は戦いを始めた！

『調子に乗るなザンス！』

ゾディアーツがキモオタとは別の不良を呼び寄せた！そして自分の分身である星屑忍者・ダスタードの軍団を召喚した！

ドーパントも不気味なメダル数枚を割ってそれを投げつける。するとメダルの破片から包帯の巻かれた化け物・クズヤミーが出現した！

ケンカで鍛えられた不良たちもガイアメモリを持っており、これを差し込んでマスカレイド・ドーパントに変身した！

戦闘員であるマスカレイド、クズヤミー、ダスタードを合わせると、１００体は軽く超えていた…

「うわ、結構な数だね…」
オーズも引き気味だ…
「だが、やってみなくちゃわからねえ。そうだろ？」
Ｗがフォーゼに同意を求める。
「そうさ、行くぜみんな！」
フォーゼの合図とともに、３人は一斉攻撃を開始した！

「行くぜ、フィリップ！」
『わかってるよ、翔太郎』

まずはバランスのいい緑・黒のサイクロンジョーカーで戦いを始めるＷ。戦闘員を肉弾戦で叩きのめす！そこに、釘バットやスタンガンを持ったマスカレイドが襲ってきた！

『ＨＥＡＴ』
『ＭＥＴＡＬ』

するとＷの体が変化、赤・銀のヒートメタルとなった！ロッド状のメタルシャフトを振るい、マスカレイドの集団を叩きのめす！
そこにジープに乗って特攻しようとしたマスカレイドが…！
Ｗはすぐさまシャフトにメタルメモリを挿入する！

『ＭＥＴＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

シャフトの両端に熱が纏われ…

「『メタルブランディング！』」

噴射させた高熱でジープに叩きつけた！ジープは破壊された！

『ＬＵＮＡ』

『ＴＲＩＧＧＥＲ』

今度は金・青のルナトリガーとなり、トリガーマグナムで砲撃した！マグナムからは軌道を変える弾が発射され、それは敵に向かって追尾した！

だがクズヤミー集団がフェンスによじ登り、向こうの少女たちを襲おうとしていた！

「…させるかよ！」

マグナムにトリガーメモリを挿入し…

『ＴＲＩＧＧＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「『トリガーフルバースト！』」

その一瞬、マグナムから無数のビーム弾が発射され、それはクズ

ヤミーに命中、消滅した！

『ＣＹＣＬＯＮＥ』
『ＪＯＫＥＲ』

今度は再びサイクロンジョーカーとなり、肉弾戦を演じたあと、ダブルドライバーの右側のスロットにジョーカーメモリを差し込む！

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「『ジョーカーエクストリーム！』」

緑色の竜巻を発生させ、その力で宙に浮き上がる…その瞬間、Ｗの体が分断され、その時間差でドロップキックを放った！キックされた戦闘員軍団は消滅した！

オーズもまた、タトバコンボで戦っていた！

「映司、このメダルを使え！」

「おう！」

アンクがオーズにメダルを渡す！すると緑色のメダルが３枚もあった。オーズはメダルを差し込む！

クワガタ！　カマキリ！　バッタ！

ガ～タ・ガタガタ・キリ・バ・ガタキリバ♪

するとオーズが緑色の昆虫系コンボ・ガタキリバになった！

『スキャニングチャージ！』

「せいやぁーーー！！」

「せいやぁーーー！！」

「せいやぁーーー！！」

ジャンプと同時に分身が何体も生成され、戦闘員軍団に向けて急降下キックを放った！これで戦闘員の８分の１は殲滅した。

ライオン！　トラ！　チーター！

ラタ、ラタ～♪　ラトラーター♪

次は黄色のネコ系コンボ・ラトラーターとなった。

『スキャニングチャージ！』

全身を輝やかせつつ前方に出現した黄色い３つのリングを潜り抜け急接近し、トラクローでＸ字に切り裂いた。撃破と同時に黄色い「ＯＯＯ」の文字が浮かび上がる。

サイ！　ゴリラ！　ゾウ！

サ・ゴーゾ♪　サ・ゴーゾ♪

次は白黒の重量系コンボ、サゴーゾに変身！

『スキャニングチャージ！』

その場で跳躍し、着地の衝撃と共に発生した衝撃波で標的を地面に捕縛し、手元に引き寄せて頭突きとパンチを同時に叩き込む！

シャチ！　ウナギ！　タコ！
シャッシャッシャウタ～♪　シャッシャッシャウタ～♪

次は青い水棲系コンボ、シャウタとなる！

『スキャニングチャージ！』

身体を液状化して跳躍し、ウィップで捕らえた標的をドリル状に変化した両脚でドリルキックの要領で貫く！

プテラ！　トリケラ！　ティラノ！
プ・ト・ティラーノ・ザウルス～♪

紫の恐竜コンボ・プトティラとなったオーズはティラノザウルスのような斧・メダガブリューを構える！ティラノザウルスの口にセルメダルを導入し、エネルギーを溜める…

『プ・ト・ティラーノ・ヒッサ～ツ♪』

愉快な歌とともにエネルギー刃を纏ったメダガブリューで標的を両断した！

タカ！　トラ！　バッタ！
タ・ト・バ♪　タトバ・タ・ト・バ♪

そして基本形態のタトバコンボに戻り、メダジャリバーという剣にセルメダルを投入し、スキャナーでスキャンした。

『スキャニングチャージ！』

電子音とともにメダジャリバーを振りかざし、空間ごと一刀両断！戦闘員軍団は真っ二つとなった！

フォーゼも今までのスイッチを駆使し、戦闘員を駆逐していた！

まずダスタードの刀を左腕のシールドで受け止める！そして右足のビートから発射される超音波で敵の動きを止めた後、右腕のチェーンアレイで敵を叩きつぶす！

次に右腕のロケットと左足のガトリングの連携。ロケットで飛翔しながらガトリングの一斉射撃でダスタードの軍団を葬る。

さらにに右足のスモークで煙幕を張りながら、スイッチを入れ替えし右足のチェーンソー、左足のスパイクで敵をボコボコにする！

その時ダスタードに囲まれ、鎖鎌を投げつけられるが、左腕でシザースで鎖鎌を切断！スイッチの入れ替えで左腕のウインチを展開し、崖に引っ掛けて移動することで攻撃を回避した。

左足のホッピングで動き回り、敵を踏みつけながら右腕のマジックハンドで敵をつかんで投げた！さらに上空から左腕のレーダーでサーチし、右足のランチャーで敵を一掃する！

その時ジープに乗ったマスカレイドが襲ってきたが、これを好機とばかりに上空で左足のドリルに変え、急降下キックでジープを破壊した！撃破後、ドリルのスイッチをオフにする。

ドリルスイッチオフと同時にエレキスイッチをオン！

『ＥＬＥＣ　ＯＮ』

フォーゼがエレキステイツとなり、ビリーザロッドを振るう！

「喰らえ！ライダー１００億ボルトブレェェェクッ！！」

ダスタードの集団を切り捨てた後、ファイヤースイッチをオン！

『ＦＩＲＥ　ＯＮ』

ファイヤーステイツのフォーゼはヒーハックガンを構える！

「必殺！ライダー爆熱シュートォーーーーーーー！！」

ヒーハックガンから大火力の高熱ビームが放射され、クズヤミーどもを焼き払った！

『な…！我が精鋭の戦闘員軍団が全滅…？五分も経たずに…？』

３人の仮面ライダーの戦いぶりに、ドーパントたちは唖然とせざるを得なかった。３人の仮面ライダーはそんな彼らに指を指す。

「街と学園を泣かせる奴は誰だろうと容赦はしねえ！それが仮面ライダーだ！」

「その人たちの明日をお前なんかに奪わせない！俺はそんな人たちのために戦う！」

「オレ達はダチを背負って戦ってんだ！卑劣な手しか使わないお前らとは違うんだよ！」

『そ、そんな…参ったザンス！』

『…と思ったザンスかこのマヌケが！今のは時間稼ぎなんザンスよ！』

「なに！？」

ゾディアーツはまるで嘘のように開き直った。そうしているうちにプレハブ小屋から多くのキモオタどもが出てきた！そして彼らは、まるでハイエナのようにフェンス広場にたかろうとしていた！

フォーゼたちは阻止に向かうが、フェンス広場からプレハブ小屋間ではすぐ目と鼻の先。しかしフォーゼたちが救出に向かうとその距離ははるかに遠い。しかもフェンス広場の扉は開けっ放しであり、しかもその扉口は広い。

…つまり、走ろうとしても先にキモオタどもがフェンス広場に入ってしまうのだ…

「ま、まずい！間に合わない！」

このままフェンス広場に入られると…

なのは、フェイト、ナギ、唯、美琴、奏、夜空、星奈、ハルヒ、コレット、ラクス、エステル、セイバー、アリア、まどか、桃香、箒、シャナ…彼女達が彼らの毒牙にかかってしまう！

そしてドーパントによって銅像状態から元に戻されたが最後、彼女たちは名前も顔も知らない男たちにその穢れなき心と体を食い潰されてしまうのだ！

そのときだった。

『ＰＯＷＥＲ　ＤＩＺＥＲ』

遠くから車両形態のパワーダイザーが登場し、フェンス小屋の前を封鎖！そして人型に変形すると、キモオタの数人を巨大なアームで掴んだ！

『お嬢様に…皆さんに手出しさせません！』

ダイザーのパイロットは綾崎ハヤテだった。

『な、なにぃぃぃ！？』

これにはゾディアーツ、ドーパントも驚きを隠せない。

『間に合いましたね、弦太朗さん』

「助かったぜ、ハヤテ！」

フォーゼがハヤテにピースする。

実は少し前からナギやヒナギク、咲夜と一緒にラビットハッチに行っており、ハヤテはダイザーをはじめ、アストロスイッチに興味を持っていた。ハヤテは主人・ナギをはじめとするブロンズ像と化した女子を守るためにダイザーに乗り込み、少女達を襲おうとした暴徒を食い止めたのだ。

ハヤテだけじゃない。如月ファミリーもここへ来たのだ！

ルフィ、ソロ、サンジ、ロイド、スタン、ユーリ、政宗、幸村、

慶次ら戦える男たちは戦闘員の相手をし、新八、明久、雄二、結弦、日向、当麻、アルト、キョンなどはキモオタがフェンス広場に入るのを食い止めていた！

こうなれば後はこいつらを倒すだけだ！

【ラビットハッチ】

「やった…！」

その様子を月面から見ていた賢吾は、思わず感心した。するとユウキから通信が入る。

『賢吾君の望みを叶えるために、弦ちゃんは体を張ってフォーゼになってる。ゾディアーツから人々を守る、賢吾君の願いを、みんながやってくれてる。仮面ライダー部も、如月ファミリーも、ごっこ遊びじゃない。みんな必死にやってる。弦ちゃんもハヤテ君もみんなも、賢吾君が始めた事を、みんなが実行してる。凄いと思うよ？みんなも、賢吾君も…』

賢吾は少し考えた後、語り始めた。

「…父さんは、このラビットハッチに1人残された。父さんはここで死んだ。でも、父さんは絶望しなかった。ここで1人でフォーゼシステムとアストロスイッチを作り上げた…その息子の俺がここでヤケになってちゃ、笑われるな」

『…うん！』

賢吾は、弦太朗たちの働きとユウキの説得で、どうにか希望を取り戻すのであった。

【戦場ヶ原】

ブロンズ・ドーパントと対峙していたW。

サイクロンジョーカーのWは、ドーパント相手に苦戦していた！

ドーパントの左手からマシンガンが掃射される！

「ぐ！」

『ブヒヒ、ボクチンの左手から出るのはガスだけじゃないでしゅよ。もっと頭を使うでしゅ』

「くそ！」

するとフィリップからある提案を持ちかける。

『翔太郎、あれをやろう。あのドーパントは左手と頭が弱点だ』

「あれ…？そうだな。あの武器があれば奴の武器を封じられる」

すると鳥のようなメカが上空から飛来し、フィリップの体を取り込んだ！そして鳥メカはWに接近するとダブルドライバーに装着、展開する…

『ＥＸＴＲＥＭＥ』

するとＷの体が変化した！
サイクロンジョーカーの緑・黒に、真ん中のクリスタル状のボディが輝く…

これがＷの最強形態、サイクロンジョーカーエクストリームだ！！

「『さぁ、ここからが本番だ！』」

『バ、バカな！ボクチン、聞いていないザンス！』

サイクロンジョーカーエクストリームのＷは右手にプリズムソード、左手にビッカーシールドを握った。そしてプリズムソードを振りかざし、ドーパントの左腕を切り落とした！

『あ……？アァァァァァァァァ！』

ドーパントが左腕を見る。すると左腕を切断されたことに気がつき、慌てふためくドーパント。

「もういっちょ！」

今度はソードをドーパントの顔面に向け、刺し貫いた！その瞬間ドーパントの顔面が破壊され、そこから火花が飛び出た！

『○$×♪△※□∞☆♂∀♀＆！？』

さらにパニックに陥るドーパント。フィリップが敗因を指摘する。

『君の弱点は左腕と頭部。ガスを放射する左腕を武器としカプセル投射や超音波発信源も君の頭部で行っていた。君がそれに依存していた結果だよ』

「となると、テメェはもうあの技は使えねぇな。そうなるとただのでくの坊だ」

『ひ、卑怯でしゅ！』

「カスに卑怯呼ばわりされる筋合いはねえんだよ！」

Wがシールドにメモリを装填する。

『ＣＹＣＬＯＮＥ』
『ＨＥＡＴ』
『ＬＵＮＡ』
『ＪＯＫＥＲ』

するとソードが七色に光りだす…！

「『ビッカーチャージブレイク！！』」

ソードを振りかざし、ドーパントを一刀両断！！
メモリは破壊され、肝井はボロボロの状態で倒れた。

一方、ルフィたちは戦闘員をあらかた片付けた後、少女達の救出に向かった。そこにはハヤテ、新八、明久達がキモオタの暴走を食い止めていた。
しかし上空からペガサスヤミーが出現し、破壊光線で如月ファミリーを駆逐した！
「ぐわぁぁぁぁぁぁ！！」
『邪魔はさせねえヅラ。ここでくたばるヅラ』
地上に降りて止めを刺そうとするペガサスヤミーだが、ボロボロになってもまだ立ち上がろうとする。
『何故ヅラ？これ以上は時間の無駄ヅラ。さっさと死ねヅラ』
だが、彼らは諦めなかった。
新八「無駄なんかじゃない！僕たちには友達がいる！」
ハヤテ「僕たちには、帰るべき場所があるんです！」
明久「僕たちは、明日を守るために戦ってるんだ！」
ルフィ「明日が待ってるから、おれたちは負けられねえ！」
スタン「それでも、オレたちの頑張りをまだ無駄だって言うんなら…！」

当麻「テメェらの幻想、オレたちがぶち壊す！」

「ふん、かっこつけやがって…」

彼らの勇姿を苦々しく思っていたアンクだったが、いやとも思わず、オーズに赤いメダルを渡した。

「映司、空飛ぶヤミーには空飛ぶコンボだ」

「……ああ！」

タカ！　クジャク！　コンドル！
タ～ジャ～ドル～♪

オーズの体が変化した！全身から炎が発し、ペガサスヤミーを焼いた！
そして赤い鳥の炎のコンボ・タジャドルとなる！！

「みんなの言うとおりだ！お前らに明日を壊させてたまるもんか！」

ペガサスやミーは翼を広げ空を飛ぶが、オーズも赤い翼を広げ、飛翔した！飛びながらオーズはドラーばーをスキャンする。

『スキャニングチャージ！』

「これで決める！」

両足を大きく展開して炎の爪を作り出し、必殺技「プロミネンス

ドロップ」を空中で逃げ回るペガサスヤミーに叩き込んだ！

「せいやぁぁぁぁぁぁぁ！！」

プロミネンスドロップの爪はペガサスヤミーを引きちぎった！ペガサスヤミーは爆死し、オーズが地上へ降りたときには、上空からメダルが雨のようにばら撒かれた…

アンクはボロボロになった肝井と繭に包まれた南家を掴んだ後、パワーダイザーのハヤテに引き渡す。

「おい執事！このゴミ二人をゴミ箱にでも捨てておけ！」

「え…はい、わかりました！」

ハヤテはダイザーを動かすと肝井と南家を掴み取る。そして二人をフェンス広場に投げ込んだ。運良く二人はフェンス広場のど真ん中に投入される。ハヤテから見ればそこが「ゴミ箱」と思ったのだろうか。

まわりにはキモオタどもを縄で縛っている如月ファミリーがいた。

「しばらくそこで反省してくださいね♪」

一方ゾディアーツと戦っていたフォーゼは、賢吾からの通信を受けた。フォーゼがレーダースイッチをオンにする。

『如月、聞こえるか？』

「賢吾か！連絡待ってたぞ！」

賢吾は再びフォーゼへの戦術支援に復帰した。

『ピクシスの誘導能力に手こずっているようだな』

「その通りだ！何か手はないか？」

『新しいスイッチを持って行ってるだろう？そいつを使え。１０番から２１番の連携だ』

「そうか…分かった！」

ひそかにロールアウトしていた「２１」のスイッチ。まずは「１０」でエレキステイツにチェンジする。そして右足のスイッチを「２１」に換装する。すると右足にステルス攻撃機のような装置がセットされた。

『死ねぇぇぇぇぇ！！』

その間ゾディアーツが両腕のダウジングホーンを振りかざした！

しかし…

『な！？消えた！？』

いきなりフォーゼの姿が無くなってしまったのだ！どこへ行ったのか…？

するとフォーゼがゾディアーツの背後に現れ、ロッドで片腕のホーンを折られた！

『何！？貴様〜！』

これにはゾディアーツも焦る。賢吾がステルス装置について説明する。

『ステルスモジュールは姿を見えなくできる光学迷彩だ。効果は５秒間だけだが、スイッチを起動している限り何度でも発動できる』

「すげえじゃん！」

ゾディアーツがあわてて斬りつけようとしたが、姿を消される。そして……！

「こっちだ」

やはり背後に現れ、もうひとつのホーンを折られてしまった！

『あわわ、取れちゃったザンス〜！』

「もうこれで誘導は出来ねえだろ。あとは正々堂々、タイマンで決

めてやる！」

こうなったら後はゾディアーツを倒すのみ！

フォーゼはビリーザロッドでゾディアーツを叩きまくる！そして、スイッチをロッドに挿入しとどめの一撃が始まる！

『ＬＩＭＩＴ　ＢＲＥＡＫ』

『あわわ、許してザンス！』

ゾディアーツが逃げ出そうとしたが、フォーゼはナギや唯達を酷い目にあわせた奴等を逃がさない！

「喰らえ！ライダー１００億ボルトシュートォーーーーーー！！」

ビリーザロッドに纏った電気を刃状のエネルギー弾として飛ばし、逃げたゾディアーツを両断した！！

『やったな、如月…』

一方、ラビットハッチから決着を見届けた賢吾は、おもむろに端末から離れ……

フェンス広場で南家と肝井が目を覚ますと、そこにはブロンズ像状態から戻った少女達の姿があった。幸い誰一人怪我をしていないようだが、その目には完全に生気がなく、光が灯っていなかった…

肝井と南家はあわてて逃げ出そうとするが、少女たちに囲まれる。

「ご、ごめんなさいでしゅ！」

肝井が必死に謝るが、フェイトの口からは、普段の姿から考えられないほど、身の毛もよだつとんでもないことを…

「あぁん！？今なんつったこの豚が！」

なんとフェイトがヤクザ口調に鬼の顔つきとなり、肝井の胸倉を掴んだ！

確かにフェイトは穏やかな性格だ。口調も顔つきもこんなになるはずがないのだが…

「え？えーっと、チミたちそんなに怒らないでほしいザンス。話せば分かるしお金をやるから…」

「テメェの言い分なんざどうでもいいんだよ、この虫けら野郎が！」

ラクスがそういって南家の胸倉を掴んだ！ラクスもまた鬼のような形相でヤクザ口調となっており、完全に別人だ…

「ふざけたことしやがって…テメェの性でどれだけ結弦や弦太朗くんたちに迷惑かけたのかわかってんのか、オラ！！」

「べほ！！」

奏がそう叫んだあと、南家の腹部に膝蹴りを入れた！

「ひ、ひぇぇぇー」

「こら逃げんじゃねぇ豚が！」

「ぶひ！！」

肝井が逃げ出そうとするも、ナギに顔面を蹴られる。

桃香「オラよォ！」

桃香のストレート…

コレット「死ねや！」

コレットのフック…

ナミ「殺すぞオラ！」

ナミのアッパー…

神夜「変態は消えろ！」

神夜の膝地獄…

シャナ「脳天カチ割られてぇか！？」

シャナのカカト落とし…

セイバー「調子に乗るんじゃねぇー！」

セイバーのバルカンジャブ…

王元姫「逝っとけやァ！」

王元姫の後ろ回し蹴り…

まどか「潰すぞガキが！」

まどかのボディーブロー…

ティア「オラどうした、アァっ！？」

ティアのフロントキック…

美琴、黒子「死んで詫びろゴミクズが！」

美琴のジャーマンスープレックスに黒子のＤＤＴ…

桐乃、黒猫「汚物は消毒じゃ～！」

桐乃、黒子がマウントして顔面を殴り続け…

夜空、星奈「くたばれぇぇぇぇぇぇぇ！」

夜空と星奈のマッスルドッキング…

唯、澪、律、紬、梓「死ねよ、このザコが！」

唯のブレーンバスター、澪のスクリューパイルドライバー、律のフライングパワーボム、紬のジャイアントスイング、梓のコブラツイスト…

翔子、美波、瑞希「ぶっ殺すぞテメェ！」

翔子、美波、瑞希がサブミッションで極め…

アリア、白雪、理子、レキ「このウンコ野郎！！」

レキと白雪が羽交い絞めし、アリアと理子が殴り続け…

ハルヒ、みくる、長門「死ねつってんだよ！」

ハルヒが釘バット、みくるが鉄パイプ、長門が木刀で南家と肝井を叩き…

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ「まだ生きてたのかよ！？あぁ！？」

ＩＳの少女達が手に持ったスタンガンで叩きのめし…

スバル、ティアナ「オラ寝んじゃねぇぞ！釣りはまだ１０万発あんだよ！」

スバルとティアナが失神しかけた肝井と南家を無理矢理起こし…
なのは「テメェら逝っとけよコラァ！！」
なのはがシメのラリアットで南家と肝井をボコボコにした…
その後南家と肝井は少女達に囲まれていた…
南家「許してザンスよぉ～…お母さん助けて～…うえ～ん」
肝井「うぇ～ん、ママ～！おうちに帰りたいでしゅ～」
しかし…

愛紗「ああん、何だそりゃ？謝りゃ許してもらえるとでも思ってんのかよ！」
翔子「あぁ～ん？なんだってェ？聞っこえませ～ん！！」
ほむら「今度は幼児退行にホームシックかァ！？ママでも呼べよ、ギャッハッハッ！！」
美琴「やーい野良犬にオス豚！キャンキャンぶーぶー吠えろよ～」
キャロ「ケッ！てめえみてえな素人、相手にするだけカロリーの無

駄遣いだ！」

コレット「たまんねーぜこの感覚…弱いだけのバカをぶちのめすのはよぉ！」

王元姫「結局ただの変態じゃねえか。さぞかしきん●まも小せぇんだろうなぁ？」

奏「おめえら豚どもはよ、俺様達にブッ殺されるために生きてんだよ！」

ナギ「人生ってな厳しーんだよ。詫びいれろ。有り金全部出せ。足舐めで許してやる！」

ラウラ「パシリとして生きていくなら生かしてやってもいいぜぇ」

みくる「弱いとかそれ以前にだな…ぶっ壊れる以外にテメェらの未来はねぇッ！」

梓「二人そろってあの世へスキップしな！お手つないでよぉ！」

長い間ブロンズ像にされたためか、一時的に人格まで変貌したようである…

一方、変身を解き、遠くから彼女たちを見守っていた仮面ライダーたちは…

翔太郎「酷ぇ…悪乗りしすぎだろ…」

フィリップ「ブロンズ像にされてる間、意識は続いてたみたい。興味深いね」

「どうする、弦太朗君？」

映司が弦太朗に聞いた。

「まあ、南家と肝井のことはナギたちに任せればいいか」

弦太朗も分かってそうなものだが、流石にわざわざ助けようという気にはならない様子。友達になる気もなさそうだ。こうして４人はさっさと現場を後にした…

【月面】

宇宙服を着、ラビットハッチを出ていた賢吾は、一人月の上にいた。手にはかつて自分が剥がし投げ捨てていたライダー部の旗が。それを月面に突き立てる…

「父さん、見えるかい？僕にも仲間が出来たよ。父さんの志を継いだ仲間が。これはその旗だ！」

これまで半ば忌み嫌っていた仮面ライダー部という存在は、いつ

しか賢吾にとっての誇りになっていた。

「…教えてくれよ、父さん。地球に帰る方法を。僕は帰りたいんだ、あの地球に。待ってる仲間のもとに…」

誇れる仲間は出来たものの、離れ離れで地球には帰れないままだった…

しかし…

「だったら一緒に帰ろうぜ、賢吾！」

なんと賢吾の背後からフォーゼが現れた！どうしてここに…？

「如月！？まさか…」

「まさか、じゃねえよ。ヅラとボッスンから聞いた。南家に壊されたロッカーは本物じゃなかった。銀さんにジェレミアにコーラサワーの奴等、マネキン先生のもんだと思ってすり替えたんだ。破壊されたのは、すり替えた偽物だったんだ…」

〜〜〜〜〜

【スクラップ処理場】

桂小太郎とボッスンはあのスクラップ処理場にいた。

「ヅラ、ホントに心当たりがあるのかよ？」

「ヅラじゃない桂だ！よく見てみろ、裏に俺の愛するエリザベスマークがない！」

桂が言うとおり、南家に壊されたロッカーの扉には、桂の書いたマークがなかったのだ…

【仮面ライダー部前の廃部室】

実は少し前、この廃部室では銀時、ジェレミア、コーラサワーがいた。ジェレミアがコーラサワーに聞く。

「本当にここにおいて大丈夫なのか？」

「大丈夫に決まってる！オレの大佐のロッカーを、名前も知らん廃品業者に壊させてたまるかよ！」

唯が撒いた嘘を完全に信じきっていたコーラサワーがマネキンのもの（嘘）であるラビットハッチ行き（本人たちは知らない）のロッカーを、持ち込んでいたもうひとつのロッカーとすり替えていた。

銀時はそんなコーラサワーに声をかける。

「しょうがねえ。似た者同士、俺らが手を貸してやるよ。俺ら仲間だろ？」

「あ…ありがとう！やっぱ持つべきは友達だよな！」

バカ3人は勝手に納得していた。

そして銀時たちがロッカーを運んでいるのを確認したボッスンが、ラビットハッチ行きのロッカーを元の場所に戻したら、桂の書いたマークがあった。つまりゲートが再稼働したのだ…

〜〜〜〜〜

さらに弦太朗は破壊されたディケイドのブロンズ像について語る。

「…士についてなんだが、翔太郎と映司が調べたところ、士の奴、ハワイ旅行に行ってたんだとさ。だから南家が壊したのは中庭においてあった置物だ。肝井の言ってたのは嘘だ。士は死んでねえ、安心しろ」

さらに安堵する賢吾。

「心配かけたな。悪かった、賢吾」

「いや、俺の方こそ…大した物だよ、俺の…友達は」

遂に弦太朗を友達と認めた賢吾であった…

すると背後から宇宙服を着たユウキの声が…

「賢吾君！おーい！おーい、賢吾君！」

二人が振り向くと、彼女だけではない。

ルフィ「よう！みんな！」

新八「弦太朗君！賢吾君！」

ハルヒ「来てやったわよ！」

ハヤテ「行きましょう、賢吾さん！」

なのは「一緒に帰ろう！」

奏「無事でよかった…」

美琴「ありがとう、弦太朗さん、歌星さん」

明久「（敬礼して）よっ！」

ロイド「行こうぜ、みんな！」

政宗「Ｗｅ　ａｒｅ　ｆｒｉｅｎｄｓ！」

ボッスン「ナイス、ツンデレ！」

唯「来たよ～」

宇宙服を着た如月ファミリーの面々だった。如月ファミリーの中にはブロンズ像にされた少女たちも一緒だった。彼女たちはどうや

ら元気を取り戻したらしい。

「おう！」

フォーゼが手を振った。

「如月」

「うん？賢吾、お前…」

すると賢吾は、フォーゼに手を差し出していた…

「今度君に会ったら、これをしようと決めてた…」

「…おう！」

フォーゼは快く賢吾の手を握り、拳を打ち合った。ようやく友達のサインを交わし、正式に友達になった瞬間だった。これにはみんなも歓喜した。

「よし！俺と如月とユウキで、学園と地球の自由と平和を守る仮面ライダー部、ここに正式スタートだ！」

賢吾のこの一言により、ここにライダー部は発足した…

やがてみんなが集まり、弦太朗が大声で合図した。

「仮面ライダー部！」

「イエーイ！！」

みんながジャンプし、そして…

「宇宙キターーーーーーーー！！」

親・友・奪・還（後書き）

キャストの皆さま
『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗、歌星賢吾、城島ユウキ
『仮面ライダーW』
左翔太郎、フィリップ
『仮面ライダーOOO』
火野映司、アンク
『銀魂』
志村新八、桂小太郎、坂田銀時
『スケットダンス』
ボッスン
『ハヤテのごとく！』
綾崎ハヤテ、三千院ナギ
『ワンピース』
モンキー・D・ルフィ、ロロノア・ゾロ、ナミ、サンジ
『バカとテストと召喚獣』
吉井明久、坂本雄二、姫路瑞希、島田美波、霧島翔子
『真・三國無双』
王元姫
『戦国BASARA』
伊達政宗、真田幸村、前田慶次
『とあるシリーズ』
上条当麻、御坂美琴、白井黒子
『けいおん！』
平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬、中野梓
『僕は友達が少ない』
三日月夜空、柏崎星奈

『涼宮ハルヒの憂鬱』
涼宮ハルヒ、朝比奈みくる、長門有希
『テイルズオブデスティニー』
スタン・エルロン
『テイルズオブシンフォニア』
ロイド・アーヴィング、コレット・ブルーネル
『テイルズオブレジェンディア』
セネル・クーリッジ
『テイルズオブジアビス』
ティア・グランツ
『テイルズオブエクシリア』
ミラ＝マクスウェル
『ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！』
立華奏
『魔法少女リリカルなのは』
高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、キャロ・ル・ルシエ
『魔法少女まどか☆マギカ』
鹿目まどか、暁美ほむら
『灼眼のシャナ』
シャナ
『緋弾のアリア』
神崎・Ｈ・アリア、星伽白雪、峰理子、レキ
『Ｆａｔｅ』
セイバー
『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』
ラクス・クライン
『真・恋姫無双』
愛紗、桃香
『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』

高坂桐乃、黒猫
『無限のフロンティア』
楠舞神夜
『インフィニット・ストラトス』
篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ
『コードギアス　反逆のルルーシュ』
ジェレミア・ゴットバルト
『機動戦士ガンダムＯＯ』
パトリック・コーラサワー

ここで仮面ライダー部編は終了です。ご愛読ありがとうございます。
次回から短編に入ります。次回からも応援よろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5038x/

こちらコラボレーション私立クロスオーバー学園

2011年12月24日03時49分発行